



SUPER GLOBAL HIGH SCHOOL

平成28年度指定 スーパーグローバルハイスクール

# 研究報告書

第3年次

— 平成31年 3月 —

学校法人 創価学園



創価高等学校



平成29年度指定 スーパーグローバルハイスクール

## 研究報告書・第3年次

平成31年3月

学校法人 創価学園



# 創価高等学校

# 内容

## 1. 総論

- A) はじめに..... 1
- B) 完了報告書 ..... 2

## 2. グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)

- A) 概要 ..... 10
- B) SDGsを学ぶ(1年生)..... 12
- C) 貿易ゲーム(1年生) ..... 15
- D) いのちの食べ方を問う(1年生) ..... 18
- E) 世界がもし 100 人の村だったら(1年生)..... 21
- F) 模擬教育援助会議(1年生) ..... 24
- G) 核兵器廃絶に向けて(2年生) ..... 27
- H) レイテ島決戦から戦争とは何かを知る(2年生) ..... 31
- I) 異文化理解(2年生) ..... 34
- J) ルワンダ内戦から現代紛争を考える(2年生) ..... 37
- K) 人権すごろく..... 40
- L) 人権ディベート..... 43
- M) SDGs Card Game を通して地球規模課題を学ぶ(1・3年生) ..... 46
- N) 模擬国連① COP21 (3年生) ..... 49
- O) ファイナル・プロジェクト (3年生) ..... 52
- P) UNESCO教養文化講座研究発表(3年生物選択) ..... 60

## 3. グローバル・リーダーズ・プログラム(GLP)

- A) 概要・年間スケジュール ..... 61
- B) クリティカル・イシューズ・フォーラム(CIF) ..... 63
- C) 広島・長崎フィールドワーク ..... 65
- D) ゲスト講義および都内フィールドワーク ..... 69
- E) プレゼンスキル(学園祭ポスターセッション・英語プレゼン) ..... 71
- F) 出前授業..... 72
- G) 評価と分析 ..... 76

## 4. 言語技術

- A) 概要・年間スケジュール ..... 78
- B) 学習・トレーニング内容 ..... 81
- C) 評価 ..... 97
- D) 成果および今後の課題 ..... 100

## 5. フィールドワーク

- A) カリフォルニア ..... 104
- B) 岩手 ..... 107
- C) 沖縄 ..... 109

D) JICA 地球ひろば(市ヶ谷) .....	111
E) 国際連合大学(渋谷区) .....	112
F) 国立ハンセン病資料館(東村山) .....	113
6. グローバルセミナー .....	115
7. 語学活動 .....	
A) 英字新聞(GCP) .....	119
B) イングリッシュキャンプ .....	120
8. 時間管理手帳 .....	122
9. 評価と分析 .....	
A) アンケートと分析 .....	124
B) 中間報告会・活動報告会・評価(声) .....	129
C) 運営指導委員会 .....	132
10. 関係資料 140 .....	
① 2018年度カリキュラム表 .....	140
② 目標設定シート .....	141
③ 英字新聞(GCP) .....	143

## 1. 総論

### A) はじめに

創価高等学校 校長 塩田誠一郎

本校は「日本の未来を担い、世界の文化に貢献する有為の人材を輩出すること」を目的として、池田大作先生により創立されました。「健康な英才主義」「人間性豊かな実力主義」の教育方針のもと、生命尊厳の理念に立脚しながら、生徒一人ひとりに内在している優れた能力を引き出し、限りなく豊かな人間性の開発を行い、生徒たちが自信を持って社会の指導者に成長していけるように教育活動をおこなっております。

2016年度には、グローバル人材像を「創価の精神の根本である『生命尊厳の思想』をもって、世界平和に貢献する『地球規模課題の解決』に寄与できる人材」と定め、SGH研究開発構想を「言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム」と掲げて、SGH校としての認定を受けました。

本校が開発したカリキュラムは、1年から3年まで言語技術を磨きながら、SDGsをもとに地球規模課題の探究学習を行うものです。週1回の言語技術の授業では、日本語と英語でのコミュニケーション能力、文章や情報を正確に読み解き対話する力、論理的な文章を書く力などを身につけさせ、探究学習の土台を作っています。その上で、二つの学習プログラムを開発しました。一つは、全校生徒を対象にした探究学習プログラム「GCP」(Global Citizenship Project)であり、もう一つは、希望者から選抜した数十名を対象とする探究学習プログラムで、全校に展開する学習のパイロットケースにもなっている「GLP」(Global Leaders Program)です。

こうした取り組みによりカリキュラム・マネジメントが進み、3年の3学期には探究学習の成果を小論文にまとめ、日本語と英語によるポスターセッションを行うまでになりました。生徒には着実に変化が生まれています。3年次の活動報告会にお越しの来賓が数人の生徒に「この授業で何か変わった？」と質問されていました。どの生徒も「主体的になりました」「社会や世界で起きていることが他人事ではなくなりました」と応えており、来賓の方は感嘆されていました。また、生徒は自信を持って海外の大学に挑戦し、進学後も活躍しています。フランス政治学院に合格した生徒や海外大学に進学してすぐにエッセイコンテストで優勝した生徒、GLPでの探究学習の成果を報告して東京大学に推薦入試で合格をする生徒が出るなど目覚ましい成果となっています。

これからのSGHの取り組みとして、日本語と英語の言語技術を深化させるための「言語科」を、探究学習をさらに充実させるための「探究科」を設置し、地球規模課題を学習するカリキュラムの開発をさらに進めてまいります。

これからも、創価高校は創立精神に則り「誰も置き去りにしない」社会を建設する世界市民を育成することを目的として、学校建設、SGH校としてのカリキュラム開発にとしっかりと取り組んでまいります。

最後になりますが、ご指導いただいている運営指導委員の無藤隆先生(白梅学園大学子ども学部教授兼子ども学研究科長・文部科学省中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会部会長)、遠藤誠治先生(成蹊大学教授・日本国際政治学会監事・日本平和学会理事)、村上清先生(岩手大学学長特別補佐・陸前高田市参与)をはじめ、提携していただいているカリフォルニア大学アーバイン校、アメリカ創価大学をはじめとする国内外の大学、国際連合大学、ミドルベリー国際大学院モントレー校、Dr. オルガ・モハン高校、ジェームズ マーティン不拡散研究所などの国際機関、研究機関や各企業、さらに交流いただいている那覇国際高等学校、広島女学院高等学校、長崎・活水高等学校、関西創価高等学校などのSGH校や各学校の皆様に深く感謝申し上げますとともに、引き続きのご指導をよろしくお願い申し上げます。

## B) 完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所 東京都小平市たかの台2番1号  
管理機関名 学校法人 創価学園  
代表者名 理事長 原田 光治 印

平成30年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

### 記

#### 1 事業の実施期間

平成30年 6月 1日（契約締結日）～平成31年 3月30日

#### 2 指定校名

学校名 創価高等学校

学校長名 塩田 誠一郎

#### 3 研究開発名

言語技術を磨き、地球規模課題解決に取り組む能力育成プログラム

#### 4 研究開発概要

##### ○【言語技術】

日本語と英語を往還させ、言語技術に裏打ちされた論理的・批判的思考力の育成

##### ○【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)】

全校生徒を対象に、探究型学習による地球規模課題の理解力の育成

##### ○【グローバル・リーダーズ・プログラム(GLP)】

選抜生徒を対象に、英語を中心とした高度な批判的思考力、協調的問題解決力を有したリーダーの育成

#### 5 管理機関の取組・支援実績

##### (1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
		○	○				○	○		○	○	

##### (2) 実績の説明

○昨年までの課題であった普及に関する対応として、公開回数を全校生徒対象のGCP企画の一



※課題作文に関しては、1年間で日本語が15本ほど、英語で5本ほど書かせ、教員が一人ひとり丁寧に添削・コメントし、フィードバックした。

〈2年生〉

以下の3つの技術を日本語と英語でトレーニングした。

- ①「情報分析」の技術…対象物としての絵やテキストに書かれた情報を証拠として取り上げ、それらを総合して解釈を示す方法。
- ②「認知」の技術…絵・テキストを用い、1つの対象物に対して複数の視点に立つ方法。
- ③「議論」の技術…論理の組み立て方・立論の立て方・反論の方法・ディベートの実践。  
※「議論」の技術をもとに、GCP企画「人権ディベート」を3学期に行った。  
※校内の進路指導部と連携し、大学の志望理由書作成の指導を行った。  
※修学旅行先の青森県について研究し、ポスターセッションを行った。

〈その他〉

- ①生徒に毎時間、授業で学んだことを記入・ファイリングさせ、ポートフォリオを作成させた。
  - ②担任教員が「言語技術」の授業に毎回一緒に参加し、教員自身の言語運用能力の向上に努めた。
  - ③12年一貫を見据え、創価中学校、東京創価小学校においても「言語技術」の授業を開始した。
  - ④校外の方を対象とした教育公開講座、オープンキャンパスにて、模擬授業を実施した。
- 【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】（全校生徒対象のSGHプロジェクト）
- ①1年生は「SDGs、環境、貧困」を、2年生は「戦争、冷戦後の紛争、人権」を、3年生は「国際パートナーシップ（模擬国連）」をテーマに設定し地球規模課題に対する探究学習を進めた。
  - ②学期に2回（5月、6月、10月、11月、1月、2月）、GCP企画の時間を設け、運営は各クラスの希望者で構成されたGCPリーダーによって実施された。
  - ③3年生は、GCP企画の総括として各自がSDGsからテーマを設定して課題研究を行う「ファイナル・プロジェクト（Final Project）」に取り組んだ。また、その成果を日本語・英語の二言語のポスターと論文にまとめ、ポスターセッションを実施した。
  - ④GCP企画はすべて一般公開し、多くの学校関係者・企業関係者・保護者に見学いただいた。
  - ⑤7月のオープンキャンパスでGCP企画「貿易ゲーム」を、学外の来校者対象に実施した。
- 【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】（選抜生徒16人対象のSGHプログラム）
- 毎火金の18時～19時30分に、SGDsのテーマと関連づけながら、各グループが設定した仮説をもとに、地球規模課題に関する探究型学習を行った。
- ①地球規模課題に関する議論と講義に加え、アクティブラーニングやプレゼンテーションスキルを活用した探究型学習を実施し、問題の理解と論理的な議論を展開した。
  - ②広島と長崎で実施されたフィールドワークでは平和教育の実態調査を目的とし、インタビューを中心に情報収集の技術力を向上させた。またアンケート調査を実施し、その分析においては論理的・批判的思考力を高めた。
  - ③報告会は英語での実施を基本とし、SkypeやYouTubeなどのSNSを利用して海外との交流や情報発信を行った。
  - ④GLPを通じて学んだことを広げるため、創価中学校1年生（220名）に対して、「核廃絶問題」に関する出前授業を実施した。
  - ⑤研究成果として核とSDGsをはじめとした問題についての英語小論文を作成させた。



## ○【その他】

①国内外フィールドワーク（全校生徒より希望者）：GCP、GLP で定めた各テーマに則り、カリフォルニア、沖縄、広島、岩手、東京（国連大学、国立ハンセン病資料館、JICA 等）で行った。特に、都内のフィールドワークにおいては、各学年の GCP 企画と、より連動した内容になるよう「JICA 地球ひろば」は1年生、「国立ハンセン病資料館」は2年生、「国連大学」は3年生対象へと組み換えた。また海外フィールドワークは時期を夏季より秋季に変更し、現地高校生との意見交換および識者との交流、プレゼンテーションを行う。そこで学んだ内容を、10月に行われた学園祭等において、ポスターセッションにて発表した。また、カリフォルニア・モントレイで行われた CIF（Critical Issues Forum）に参加した。

②グローバルセミナー（全校生徒対象のセミナー）：国内外から著名な識者を招聘し希望者を対象としたセミナーを開催した。

4月：オタゴ大学国立平和紛争研究所の李成鏞准教授、5月：聖エジディオ共同体クアットルツチ事務総長、6月：フィリピン共和国カガヤン大学ウルドゥ・テハダ学長、9月：ベネズエラ・ボリバル共和国のイシカワ特命全権大使、10月：東京大学・先端科学技術研究所マルチネス博士、12月：ルースキー・ミール基金ウラジーミル・コーチン専務理事、ニコライ・セルゲイチェフ局長、1月：国連児童基金（UNICEF）公的パートナーシップの正木絵理氏（本校卒）、3月：国連常駐調整事務所（Resident Coordinator Office）ボリビア官民連携専門官坂本敬子氏（本校卒）とほぼ毎月行った。

③・イングリッシュ・キャンプ(全校生徒より希望者23名)：創価大学にて1泊2日で実施した。留学生と3, 4人ずつのグループを構成し、日本文化に関する英語によるポスターセッションを行った。

・サイエンス・イングリッシュ・キャンプ(全校生徒に啓蒙、10名参加)：東京工科大学にて3日間で実施。実験結果を英語にてポスタープレゼンテーションを行った。

## 7 目標の進捗状況、成果、評価

### 【言語技術】

①昨年度末と同じ項目で、今年度末も1、2年生全員にアンケートをとった。対話・作文・情報伝達の各技術を学んだ1年生は、95%以上の生徒がそれらの技術の重要性を実感しており、昨年度より5%近く上昇した。これは、昨年度の反省を活かして授業内容をブラッシュアップした成果と思われる。情報分析・認知・議論の各技術を学んだ2年生は、90%以上の生徒が、それらの技術の重要性を実感しており、こちらも昨年度から10%以上上昇した。

②上記①の同アンケートにおいて「言語技術で学んだことを英語で活用できた」と回答した生徒は1年生で83%、2年生で88%おり、1年生より2年生の割合の方が高くなっている。また、同項目に関しては、1年前の1年生（現2年生）は79%であった。今年度のカリキュラムと学習内容が昨年度以上に洗練されたことの証左と言える。

③上記②の「英語で活用できた」という回答が上昇したアンケート結果は、実際の外部試験でも成果を出している。昨年度より年度第3回目の英検2級を、高校2年次の総合クラス（「言語技術」の授業を受けているクラス）のほぼ全員が受検することになっているが、リーディング・リスニング・ライティングの3技能のCSEスコアの平均は、昨年度は1497.7だったが、今年度は1501.1と微増した。ライティングのみで見ると、昨年度は491.8だったが、今年度は505.9と大幅に上昇しており、「言語技術」教育の成果と言える。

- ④ 3年次で行うGCPファイナル・プロジェクトの最終レポート作成において、国語科と連携し、パラグラフ・ライティングの指導を週1時間実施した。文章の質は昨年までより格段に上がり、文章を書くことが得意でない生徒も、相応の文章を書けるようになった。
- ⑤ 創価中学校・東京創価小学校において「言語技術」の取り組みが本格的に始まり、小中高それぞれの「言語技術」の授業担当者会議も実施され、12年一貫の「言語技術」教育のカリキュラム作成が推進された。
- ⑥ つくば言語技術教育研究所（三森ゆりか所長）の研修に教員を派遣し、指導教員の増強をさらに図ることができ、よりきめ細かい指導をすることができるようになった。
- ⑦ 「言語技術」の授業で行っている内容をホームページで発信・紹介し、校外にも広く知ってもらうことができた。
- ⑧ 生徒には昨年同様、毎回の授業で「学んだこと」等の振り返りをさせ、記録・ファイリングさせた。このファイルを見返しながら、身につけた技術を活かそうとする生徒の姿が見られた。実際に活かせるポートフォリオの作成ができた。
- ⑨ 昨年に引き続き、「言語技術」の授業に担任教員が毎回参加した。各担任教員が担当する教科やLHRで「言語技術」を活用する流れがいつそう強くなった。
- ⑩ 学校の取り組みである「パーソナル・エッセイ」（高校生活のキャリアデザインを文章化するもの）の作成と、授業で学んだ作文の技術を連動させながら、効果的な指導を実施できた。
- ⑪ 各教科の授業やクラスでの話し合いの場面において、生徒たちが「言語技術」を用いることにより、議論の進行がさらにスムーズになり内容も濃いものになっている。
- ⑫ 英会話の授業や英作文の課題において、発言する際や文章を書く際の「型」を学んだ結果、これまでの生徒たちに比べ、より積極的に話し書いている姿が見られる。

#### 【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ① SGHの3年目となった本年は、昨年度の取り組みをベースに各学年の企画を、より発展・充実させることができた。1年生の企画においては、刻一刻と変わる社会情勢に合わせて、古くなった映像教材の視聴を取りやめ、別の企画を行うなどした。
- ② 本年度は、SGHの取り組みを1年次から受けてきた生徒が3年目を迎えることもあり、「言語技術」やGCPの取り組みの総決算としての意味合いを込めて高校3年生の課題研究「ファイナル・プロジェクト」を昨年までの2回の先行実施の実績も踏まえて実施した。本年度は、「現代社会」「現代文」「英語表現」の3科目が連携し、分析・探究・執筆・英訳等を教科横断型に指導する体制をつくり、指導の充実を図った。
- ③ 協働的な学びを通して、「他者との協働性」が向上したことがアンケート結果を通して伺える。SGH初年度の2016年5月と2019年2月のアンケート結果を比べると、他者との協働性を問う質問に対して「できた」と答えた生徒が18%から30-40%前後に増加した。また、現3年生を見ると、85%を超える生徒が協働能力に自信をつけている。
- ④ GCPの運営を担ったGCPリーダー（生徒の希望者で構成）は半年交代制をとり、前期は164名、後期は167名の生徒（全校生徒の約15%）が活動した。GCPリーダーに実施したアンケートでは、GCPリーダーの活動を通して「情報を伝達する力」「チームワーク」「コミュニケーション力」が身についたという生徒が6割を超え、生徒主体に運営を行う体制が一定の成果をあげていることがわかる。

### 【グローバル・リーダーズ・プログラム (GLP)】

- ①課題研究方法を指導において、「より分析的で高度な取り組みをサポートするために、啓林館の「課題研究メソッド」をテキストとして導入した。これにより、より分析的な研究アプローチを取り入れることができた。
- ②年間の研究テーマを「核廃絶問題」に設定。核の問題を軸に設定した。これにより、理科学的分野と社会科学分野を横断しながらの研究が深く行えた。
- ③年間学習の集大成として、姉妹校である創価中学1年生(220名)にたいして「核廃絶問題に関する出前授業」を100分間実施した。これにより、これまで学んできた内容から最も大切な要素を選び、探究の内容をふまえての普及活動とすることができた。
- ④フィールドワークは広島と長崎で実施した。ここでの最大の目標は、出前授業実施に向け、被爆地でどのような平和教育が行われているかを調査することに設定した。これによりインタビューの技法なども活用することができた。
- ⑤核廃絶問題の内容と、SDGsをはじめとした様々なテーマと複合させて、企画書に関してのチュートリアルのもと、英語で500語以上の小論文を書かせた。仮説を立てて進めることで、論理的かつ分析的な探究型学習を実施することができた。また英語と日本語で思考させることで、言語の論理的な運用能力を育てることもできた。この実施により、英語力の向上と、活動の集約のために活用していた英字新聞プロジェクトへの参加は取りやめた。ただし、GCP企画英字新聞プロジェクトに、GLP生徒代表が参加し、GLPの活動報告の記事作成にあたった。
- ⑥2019年3月に実施される核廃絶に関する高校生による国際会議・クリティカル・イシューズ・フォーラム(カリフォルニア・ミドルベリー国際問題研究所主催)に向けて、英語によるプロジェクト作品を製作した。ここで発表する中学模擬授業の内容も英語で報告した。
- ⑦アメリカの核廃絶問題の専門家によるシンポジウムに参加し、解決困難な地球規模課題の最前線に触れることができた。
- ⑧評価方法として、年に3回「あなたにとっての地球市民とはなにか」を記述させ、各人が自分自身の意識の変容を確認しながら、1年間に及ぶプログラムを終わらせることができた。また資質・能力の基準について、事前に提示しており、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させることで、変容を測ることができた。

### 【その他】

上記に加えて、SGHの活動を通して、本年度は以下のような成果が見られた。

- 生徒の活動：第23回全国中学・高校ディベート選手権(ディベート甲子園)準優勝。第7回手帳甲子園本大会<(株)NOLTY プランナーズ主催>に全国大会2年連続出場。英字新聞作成プロジェクト「YLP」の交流会(ジャパン・タイムズ社主催)出場。第13回「全国高校生英語ディベート大会」出場。「学び舎ユネスコ教養文化講座」にて玉川上水の生態調査研究のプレゼンを行い、同会場で行われた「学び舎ユネスコギャラリー展2019」に報告内容を展示。武蔵野大学孔子学院での「第3回中国語スピーチコンテスト」にて1位、2位を独占し日本高校生交流訪中団へ参加。第3回サステナブル・ブランド国際会議2019東京に13名参加。2018ジュニア・グローバルリーダーズ・プログラムに1名参加。筑波・香港大学グローバル・リーダーズ・プログラムに1名参加。トビタテ!留学JAPAN第4期生アカデミック・テイクオフ(新高校1年生)に参加。TOKYO GLOBAL GATEWAYに6名が参加。

- 本年度より、東京外国語大学の世界展開力強化事業（ロシア）「T U F S 日露ビジネス人材育成プログラム」と連携し、学校設定科目国際理解のロシア語選択者との交流が開始された。
- 教員の活動：日本キャリア教育学会第40回研究大会（12月9日、早稲田大学）にてクリティカル・ライティングセンターの取り組みを報告。第5回 Conference on Global Higher Education at Lakeland University Japan（6月9日、東京）にて報告。1<sup>st</sup> International Conference on Ikeda, Soka Studies in Education (Depaul University / Chicago, Illinois)（8月9～11日、アメリカ）にて報告。

<添付資料>目標設定シート

## 8 次年度以降の課題及び改善点

### 【言語技術】

- ①生徒の論理的思考力・批判的思考力の伸長を評価するために、客観的に測るアセスメントテストを導入する。
- ②「言語技術」がすべての学びの土台となるよう、学校全体、また各教科との連携を密にして生徒が活用する機会を増やし、活用事例を蓄積させていく。
- ③3年次G C Pファイナル・プロジェクトの、最終レポート作成指導において、国語科・英語科・地歴公民科が連携した合教科型の取り組みを行ったが、今年度の反省をもとに役割分担を見直し、より効果的な指導体制を検討する。
- ④東京創価小学校・創価中学校・創価高校の12年間を通した、効果的な「言語技術」教育カリキュラムを作成する。
- ⑤「言語技術」の授業で行っている内容を、校外にも広く知ってもらうため、ホームページでの発信を強化する。
- ⑥作文の評価ルーブリックや、自己・相互による評価法の開発を推進する。

### 【グローバル・シチズンシップ・プロジェクト（GCP）】

- ①来年度のファイナル・プロジェクトは、「現代社会」の授業をティームティーチング(TT)の体制で実施し、通常の授業に加え、テーマの設定やレポートの添削など、より細かな指導が行き届くために人員の増強を図る。
- ②ファイナル・プロジェクトはこれまで1人1テーマで実施してきたが、同種テーマの生徒同士をグルーピングし、外部からの指導や外部への発信をグループ単位で行えるようにする。
- ③GCP企画で実績を重ねた各種教材を、他の学校でも実施できるように整理し、発信する。また、近隣の小中学校を対象に行う出前授業などの実施を検討する。
- ④生徒の学びをポートフォリオとして残して、個人の探究学習の成果として保管させる。Japan e ポートフォリオと連動させていく。
- ⑤新カリキュラムの「探究」に対応するように GCP を発展的に解消しながら、新しく組み替える準備を行う。

### 【グローバル・リーダーズ・プログラム（GLP）】

- ①S G Hプログラム終了後も、核廃絶問題をテーマとしながら探究学習が行える取り組みを継続するため、G L Pの一部を3年次学校設定科目として取り入れることとする。これにより、これまでの火曜・金曜日の18時から19時半までの時間帯から、3年生のみ火曜日5、6限目、2・3年生

ともに金曜日の18時から実施することになる。授業の内容の差は、3年生の授業内容を講義中継アプリ Zoom で録画し、金曜日授業までに視聴の上、課題を行ってくる事とする。

- ②昨年度より、より分析的で高度な取り組みをサポートするために、啓林館の「課題研究メソッド」をテキストとして導入してきた。しかし、内容に理系的要素が強いことと、授業時数に対してボリュームが多すぎることをふまえ、おなじ啓林館の「課題研究メソッド Start book」を活用する。ここでは仮説を立てるために必要な資質・能力を育成する事を目指す。
- ③2022年度の本格的な開始を目指し、「総合的な探究」の核となるカリキュラムの開発を目指す。先述した啓林館の課題研究メソッドを中心教材として、各種シンキングツールや、IBで活用される「知の理論(TOK)」の技術をバランスよく取り組んでいく。また、2018年度には実施しなかったが、映像の分析の技術をカリキュラムの一部に取り入れる。これにより、映像も含めた多様な情報から適切な情報を取捨選択するリテラシー能力を向上させる。
- ④引き続き、資質・能力についての客観的な評価アセスメントを取り入れていくことを検討する。
- ⑤GLP卒業生のFacebookグループサイト「GLP Alumni」を開設し、GLP卒業生の活動について追跡調査を行っていく。また、GLP卒業生として情報の共有を行い、生涯にわたっての友情とつながりの開発に役立てる。

【担当者】

担当課	経理募金課	TEL	042-342-2611 (代)
氏名	山下 英一	FAX	042-342-2617
職名	副課長	e-mail	yamashita@soka.ed.jp

## 2. グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)

### A) 概要

#### ■ 概要

グローバル・シチズンシップ・プロジェクト(GCP)は、全校生徒対象のSGH企画です。国連が提示する地球規模課題や「持続可能な開発のための2030アジェンダ」の17のゴール(SDGs)からテーマを設定し、協働的な学びの手法を取り入れることで、現代社会に対する幅広い教養と協調的問題解決能力の育成を目指します。

企画は学期に2回ずつ実施しました。1年生は「SDGs」を学ぶ企画や、「格差」をテーマに「貿易ゲーム」や「模擬教育援助会議」などを行い、学びを深めてきました。2年生は、「戦争」や「現代の紛争」をテーマに、日米両国の核兵器をめぐる考え方の比較や、ルワンダ内戦の歴史的背景などについて学びました。3年生は、「国際パートナーシップ」をテーマとして、「COP21」を舞台に模擬国連を実施し、全員が一国の大使となって交渉を重ねることで、国際協調の重要さと難しさを学びました。また3年生は、GCP企画の総括として課題研究「ファイナルプロジェクト(Final Project)」に取り組みました。これは各自がSDGsからテーマを設定して課題研究を行い、その成果をポスターセッションの形で日本語・英語の2言語で発表するもので、最後には2000字以上の論文にまとめました。また、Final Projectの準備として、「現代社会」と「英語表現」と「現代文」の授業において、プレゼンテーションスキルや情報収集能力を習得するための教科横断的プログラムも実施しました。

本年は、すべてのGCP企画を一般公開し、多くの学校関係者・企業関係者・保護者にご見学いただきました。また、7月のオープンキャンパスで「貿易ゲーム」を、学外の来校者対象に実施したりと普及にも取り組みました。

#### ■ GCPリーダー

GCP企画の運営は、教員ではなく希望生徒で構成されたGCPリーダーが担っています。本年度は前期に164人、後期150人の希望者が各クラスからリーダーとして選出されました。GCPリーダーは、各企画の前にリーダーズミーティングを行い、テーマについての学習や当日の企画のリハーサルをします。当日は試行錯誤しながらクラスでの企画を運営し、その中で、企画力やリーダーシップなどの育成を図っています。

#### ■ 昨年度との相違点

- ①SGHの3年目となった本年は、昨年度の取り組みをベースに各学年の企画を、より発展・充実させることができました。1年生の企画においては、刻一刻と変わる社会情勢に合わせて、古くなった映像教材の視聴を取りやめ、別の企画を行うなどしました。
- ②本年度は、SGHの取り組みを1年次から受けてきた生徒が3年目を迎えることもあり、「言語技術」やGCPの取り組みの総決算としての意味合いを込めて高校3年生の課題研究「ファイナル・プロジェクト」を昨年までの2回の先行実施の実績も踏まえて実施しました。本年度は、「現代社会」「現代文」「英語表現」の3科目が連携し、分析・探究・執筆・英訳等を教科横断型に指導する体制をつくり、指導の充実を図りました。

## ■ 年間スケジュール

テーマ		1年生 貧困	2年生 戦争	3年生 模擬国連(1)
1 学期	5 月 12 日	グループ学習(ジグソー法) 国連が定めた「2030アジェンダ」について、ジグソー法を用いて理解を深め、地球規模課題への関心を高める。	グループ学習(ジグソー法) 原爆投下による被害の事実を知り、アメリカと日本の核兵器へのスタンスを整理しながら、核兵器廃絶への可能性を探る。	SDGs Card Game 本校が開発したSDGsを体験的に学ぶためのカードゲームを実施。先進国・新興国・途上国の9カ国にわかれ、自国の課題や地球規模課題を連携・協力して解決していくゲームを通して、SDGsについて学ぶ。
	6 月 16 日	貿易ゲーム 「先進国」「新興国」「発展途上国」の3つの立場から世界の貿易や格差を疑似体験し、協調して課題解決に取り組む。	VTR学習 第二次世界大戦時のフィリピン・レイテ島決戦をめぐる日本兵・アメリカ兵・フィリピン人の戦争証言を通して戦争の実態を学ぶ。	模擬国連レクチャー・準備 模擬国連のやり方を学び、議題について学習したり、国別にスタンスペーパーやスピーチなどの準備を行う。
テーマ		環境	異文化理解・ 現代の紛争	模擬国連(2)
2 学期	10 月 24 日	いのちの食べ方を問う 食肉の加工過程を振り返りながら、身近な食品ロスの現状からバーチャルウォーター、フードマイレージなどの環境問題を考える。	グループ学習(ロールプレイ) 仮想の国の国民になるロールプレイを通して、異文化交流のあり方を考える。	模擬国連 6人1組のチームをつくり、「気候変動枠組み条約(COP)」を議題に15カ国の担当に分かれて模擬国連をクラスごとに開催する。
	11 月 24 日	ロールプレイ 「世界がもし100人の村だったら」をテーマにロールプレイを行い、国際社会が抱える格差について体験的に学ぶ。	グループ学習(フィッシュボーン) 第二次世界大戦後の世界の紛争についての実態(ルワンダ内戦における“大量虐殺”)を知りなぜ過ちは繰り返されてしまうのかを考える。	模擬国連 「核軍縮」をテーマに模擬国連をクラスごとに開催する。
テーマ		格差・ 国際パートナーシップ	人権	Final Project
3 学期	1 月 19 日	模擬教育援助会議 途上国側と援助国側に分かれて、模擬教育援助会議をクラスごとに実施。途上国の教育の現状と教育援助のありかたを考える。	グループ学習(人権すごろく) 「人権すごろく」「世界人権宣言」を通して、長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきた人権への理解を深める。	Final Project ポスターセッション アジェンダ2030・SDGsの中からテーマを選び、「現代社会」と「英語表現」と「現代文」の協同で日本語・英語によるポスターセッションと論文作成に取り組む。
	2 月 16 日	SDGs Card Game 本校が開発したSDGsを体験的に学ぶためのカードゲームを実施。先進国・新興国・途上国の9カ国にわかれ、自国の課題や地球規模課題を連携・協力して解決していくゲームを通して、SDGsについて学ぶ。	ディベート ディベートを通して身近な人権について考える。また創立者の人権闘争を学び、生活の中で他人の人権を尊重するための方途を探る。	

### ◆ GCP リーダーズ生徒感想

「GCP リーダーズを通して、特にみんなが分かりやすいように授業をするためによりわかりやすい説明の仕方やグループ分けで授業をより楽しめるように工夫したりできてよかった。また、普通に授業を受けるよりも GCP リーダーズのほうが SDGs についてより意見を深めることができたと思う」

「私は1年生の前期から3年生の後期までずっと GCP リーダーズを担当させていただきました。企画の内容がどうこうではなく説明する側である私たちが工夫をすればいくらかでもクラスの雰囲気を変えることができると思いました。私は GCP リーダーズの活動で1番自分の力になったことはわかりやすく端的に伝える能力です。また、私はクラスや、学年、学校に1番貢献した活動も GCP リーダーズの活動だと実感しています」



## B) SDGsを学ぶ(1年生)

### ■ 概要

5月12日に行われた第1回目は、1年生の最初の企画となるので「SDGsを学ぶ」をテーマに、3年間のGCP企画を貫く「SDGs」について学びました。世界が抱える諸問題についての関心を高め、2030年を目指して国連が採択した「2030アジェンダ」の概要と「SDGs」の17のゴールについて、その意義や内容を理解することを目標として行いました。

導入として、「平和とは？」や「世界が抱える課題」など、生徒が中学卒業までに得てきたイメージや知識を確認するためにブレインストーミングを行いました。その後、SDGsについての資料をもとにグループごとに学習し、関心をより高めるために17のアイコンを線で結ぶアクティビティを行いました。更に、国連広報センターが作成した4分程度のSDGsの広報映像を視聴し理解を深めました。

続いて、ジグソー法を用いてSDGsに関する世界の現状を学びました。まず、エキスパート班に分かれ、担当するゴールを選択し、iPadと資料を用いて「A:ゴールに対する世界の現状」「B:どの地域で特に課題となっているか」をポイントに理解を深めました。その際に用いた資料は、国連広報センターが発表している「SDGs進捗状況報告」をもとに作成したものです。エキスパート班で学習を進めた後、エキスパート班から一人ずつが集まったジグソー班に分かれ、各エキスパート班で得た情報を持ち寄り、それぞれのゴールがどのように関係し合っているのかリンクマップを作成しながら探っていきました。環境問題、貧困問題、教育格差など、それぞれ別の問題のように見えていたものが、リンクマップを作成することで、関係し合っていること、また特にサハラ以南アフリカなどで共通して課題になっていることなどがはっきりと浮き彫りになりました。最後に、SDGsの中から自身が最も関心のあるテーマを選ぶとともに、「2030アジェンダ」の前文を読み合わせし、「貧困が最大の課題である」とされていること、また「誰一人取り残さないこと」が理念であることを確認しました。

### ◆ 生徒感想

「政府に不満をもった人が集まり、内戦や紛争が起き、そのことで国の産業が泊まり、経済が不安定になって貧困者が増える。貧困者は学校にいけずに医療もいけられず、そういう人たちが大人になっても子供に教育を受けさせられない。というように全ての要素が連鎖していて、まず基礎を正していくことが大切だとわかった」

「世界には私のまだ知らない様々な困難な状況があまりにもたくさんあって私たちにできることは何かを考えなければいけないと思った。しかし、現実の問題を知れば知るほど解決は難しいこともわかった。でも、今も苦しみに涙を流している人がいると思うと『私たちが力を合わせて考えるよ。いつかみんなが学校に行けて、きれいな水を飲めるようにするからね』と会いに行って伝えたい」





● ワークシート(例)

ワークシートC Global Citizenship Project (2018.5.12)

**Work④ 世界の現状を知ろう**

◇ エキスパート班のメンバー


担当するゴールは **1** 番の **貧困をなくそう**

◇ エキスパート班Workの手順

①資料をすべて読み、検索キーワードやヒントをもとに、担当するゴールの現状について理解しよう。ゴールの説明ではあみだくし。理解・説明するポイントは、A:ゴールに対する世界の現状、B:どの地域で特に課題となっているのか、です。

②シグソー班に分かれた時、説明の時間は一人1分半です。1分半でまとめられるように、情報を絞ります。また、一人で説明できるようなしっかりと理解&メモをしましょう。その中で、自分なりのキーワードをプリント下の欄に書き出していきましょう。

③最後に、班間で共通のキーワードを各自決め、付箋に書きます。そのキーワードをもとにシグソー班で説明します。説明は、相手に伝わるように、簡潔にポイントを押さえて、目を見て説明しましょう！

◇ メモ

エキスパート班で話したり調べたりした内容をアイコンの周囲にメモしよう

◇ キーワード (8個以上記入しよう)


**エキスパート班で、よく読み合わせるとともに、スマホ等を用いて分からない用語は調べておこう。**  
黄色のマーカー部分は検索キーワードです。

**目標 1 : あらゆる場所、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ**

【ゴールの説明】

目標 1 は、今後 15 年間に、極度の貧困を含め、あらゆる形態の貧困に終止符を打つことを求めています。最貧層、最も脆弱な立場にある人々を含め、世界各地の人々が、基本的な生活水準と社会的保護の恩恵を受けられるようにすべきです。

【ゴールに対する世界の現状】

- 世界人口のうち、極度の貧困ライン未満で暮らす人々の割合は、2002 年から 2012 年にかけて 26%から 13%へと半減しました。つまり、2012 年の時点で、全世界の 8 人に 1 人が極度の貧困の中で暮らしていたこととなります。貧困が蔓延している**サハラ以南アフリカ**では、2012 年になっても、1 日 1.90 米ドル未満で暮らす人々が全人口の 40%を超えています。
- 2015 年の時点で、世界の労働者とその家族の 10%は、1 人当たり 1.90 米ドル未満で暮らしていますが、2000 年にはこの割合が 28%に達していました。
- ワーキングプアとなる可能性が最も高いのは、15 歳から 24 歳の若年層です。2015 年の時点において貧困ライン未満で暮らす若年被雇用者の割合は、成人の 9%に対し、16%と高くなっています。
- 低所得国で何らかの社会扶助または社会的保護を受けている人々の割合は 5 人に 1 人と、上位所得国の 3 人に 2 人と比べて低くなっています。

【ヒント】

- なぜサハラ以南アフリカで貧困が蔓延しているのか？
- 貧困ラインの生活とはどのようなものか？
- 低所得国ではどのような社会扶助が受けられないのか？

2012年には**8人に1人**が極度の貧困状態に

社会扶助または社会的保護の受益者

低所得国では **5人に1人**

上位所得国では **3人に2人**

● 貧困をなくそう

● 飢餓をゼロに

● すべての人に健康と福祉を

● 質の高い教育をみんなに

● ジェンダー平等を実現しよう

● 安全な水とトイレを世界中に

● エネルギーをみんなにそしてクリーンに

● 働きがいも経済成長も

● 産業と技術革新の基盤をつくろう

● 人や国の不平等をなくそう

● 住み続けられるまちづくりを

● つくる責任 つかう責任

● 気候変動に具体的な対策を

● 海の豊かさを守ろう

● 陸の豊かさも守ろう

● 平和と公正をすべての人に

● パートナーシップで目標を達成しよう

■ 企画書

## GCP 企画(1年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2018年5月12日(土) ①8:55~9:45 ②10:00~10:50		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	SDGs	本時の題目	SDGs とは何かを知る	
本時の目標	第一回目の GCP 企画となる本時では、現在世界が抱える諸問題についての関心を高め、2030年を目指して国連が定めた「2030 アジェンダ」と、その中で示された SDGs について学ぶ。			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
導 入	①今日の目標を確認。 ※配布物あり	ファイル等を配布する。 GCP ファイル・表紙・「ワークシートA」	3	開始前に、8グループに分かれ、机を移動。
展 開	②個人 Work	「Work①平和とは？」に取り組む。	1.5	グループ活動を始める前に進行と書記を必ず決めさせる
	③グループ Work	「Work①」に記入したことを共有し、3人以上が同じものには○をつける。	3	
	④個人 Work	「Work②世界が抱える課題」に取り組む。	1.5	
	⑤グループ Work	「Work②」に記入したことを共有し、3人以上が同じものには○をつける。	3	
	⑥SDGs について説明	PPT を使い、SDGs とは何かを説明する。	10	
	⑦グループ Work	「Work③SDGs とは？」①~③グループで取り組む。	3	
	※配布物あり	「ワークシートB」を配布		
	⑧答え合わせ	PPT でもアイコンを表示する。	4	
	⑨VTR 視聴	国連広報センターの SDGs の VTR を観るそれぞれのゴールについて理解を深める。		
	⑩マップ作成までの流れ説明 ※配布物あり	エキスパート班とジグソー班の説明。グループの代表者を呼び、担当するゴールを選ぶ。封筒(ワークシートC、付箋)		
⑪エキスパート班 Work	資料と各自のスマホを活用し、キーワードの抽出を進める	25		
10分休憩(10:10~後半スタート)				
	⑫ジグソー班 Work ※配布物あり	⑫ジグソー班に分かれる A2 の用紙、のり、各アイコン、中心アイコン 各ゴール 1分半で説明する。説明後、マップを作成。	30	
ま と め	⑬学んだことを Work に記入	各自、「関心のあるテーマ」、感想を Work⑥に記入 ※ワークシートB の裏面	5	10:40 までには必ずスタートする
	⑭「2030 アジェンダ」前文を読みあわせ	「貧困が最大の課題であること」、また「誰一人取り残さないこと」が世界の目的であることを確認する。	5	※時間が足りなくなった場合は担任と相談して帰りの SHR 等を活用してください
	⑮ワークシートの回収と GCP の年間予告と次回予告	GCP リーダーズがワークシートB を回収し、51 期生の一年間の企画について簡単に説明をする。また次回(6月16日)の GCP 企画の予告を行なう	3	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ GCP リーダーは事前のミーティングで企画内容を理解しておく。</li> <li>・ グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。</li> <li>・ 担任には、初めての GCP 企画のため GCP リーダーズの進行のサポートをしていただく。</li> </ul>			

## C) 貿易ゲーム(1年生)

### ■ 概要

「格差」や「貧困」について体験的に学ぶために「貿易ゲーム」を行いました。この貿易ゲームは、5～6人の班で1つの国になり、紙やハサミなどの与えられた材料を用いて、力を合わせて、“マーケット”で売ることができる製品を作り、できるだけたくさんの「お金を稼ぐこと」を競うゲームです。「暴力以外は何でもしてよい」というルールの下、生徒の自発的な発想を大事にしました。このゲームの最大のポイントは、各国に与えられる道具と材料には大きな格差があり、それが、先進工業国・開発途上国・発展途上国の格差を表しているということです。生徒は、他の国がどれだけの道具と材料を与えられているか、お互い知らない状態で始め、徐々に理解していきます。作った製品をいつどのタイミングでお金と交換するのも全て各国に任せられており、突然に製品の値段が変わるという「市場価格の変化」を起こすことで、世界で起きている理不尽な貿易の現状も体験的に理解することができました。最後に、このゲームの終了も突然、司会から言われます。そして、最終集計を行い、どこの国が一番お金を儲けたのか発表します。同じルールの下でも、あらかじめ不平等な条件を設定しておくことで、豊かな国はより豊かに、貧しい国はより貧しくなるというように、経済格差が拡大していく仕組みを、現実の自由貿易システムと対比しつつ体験的、共感的に理解することができました。



### ◆ 生徒感想

「数少ない資源をどう使っていくか、また技術をどう利用するかを頭を使ってたくさん考えることができた」

「資源があっても技術がなければ活用できないということをつきつけられたゲームだった。今回はゲームだが、国際社会で実際に起こっていて、もっと不利な状況にある国もあり、難しいが早急に解決しなければならないと思った」

「ももとの条件が違ったり、途中で市場価格が変わったりとこれが現実の国際社会でも起こっていると考えます。ゲームであれば『あぁ残念』と終了後にわりきれぬが、現実ならそうはいかない。環境問題とも絡めてとてもわかりやすく学べた」

「今の国際社会がすごくわかりやすく表現されていて、地球の問題をより身近に感じる事ができた。資源や技術の差はとても重要な要素なのだと実感した」

**Work 振り返り**

2018.6.16  
SOKA Senior High School GCP

1年	組	氏名	国

① 渡された袋の中には、何が入っていましたか？

② ゲーム終了時、いくらのお金がありましたか？ (                      ) ドル

③ 次のものは、それぞれ何を表していたと思いますか？

鉛筆、定規、ハサミ、コンパスなど→  
紙→

④ このゲームの勝因・敗因はなんでしたか？

④ ゲームで起こった出来事を選んで○をつけましょう。

出来事	起こった	現実の国際社会
A : 袋の中が国によって違った		
B : ゲームのルールは全ての国で同じだった		
C : 製品の規格(形)は全ての国で同じだった		
D : 途中で製品の価格が変わった		
E : 他の国と協力して製品を作った		
F : 他の国に働きに行き、資金をもらった		
G : 正当な資金ではなく、強い国によって働かされた		
H : 紙の切れ端がたんさん出た		
I : 他の国や国連から資金や道具を支援してもらった		




**GCP  
貿易ゲーム  
ルール**

グループが決まったら  
以下のように着席してください


① 国連



② ゲーム




③ D




④ C




⑤ B




⑥ A



⑦ H



⑧ G



⑨ F



⑩ E



このゲームの勝利条件

8 グループの中で一番お金を稼ぐこと

以下のルールに従えない場合、ゲーム失格となります。

- 個人の私物(筆記用具など)はすべてしまう。
- GCPリーダーズから与えられた道具のみを使用する。
- 道具は壊したり、折ったりしてはならない。
- 製品は決められた大きさ以外のものは受け付けない。
- 製品を切る際は「はさみ」以外のものを使ってはならない。  
(紙を手でちぎる・定規を使って切るなどは禁止)
- 道具や紙、お金の貸し借りは自由にやってよい。ただし、交渉条件はゲーム終了時までには完結するものとし、GCPリーダーズから与えられたもの以外のものを使って交渉してはならない。(ゲーム終了後にジュースをおごる約束をして道具を借りるなどは禁止)
- 暴言や暴力で相手を威嚇したり脅迫してはならない。
- 「ゲーム終了」が告げられた後は作業してはならない。

■ 企画書

## GCP 企画(1年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2018年6月18日(土) 10:00~11:55 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	格差・貧困	本時の題目	貿易ゲームの実施	
本時の目標	「貿易」を中心とした世界経済の基本的な仕組みを理解するとともに、自由貿易や経済のグローバル化が引き起こす諸問題に気づく。また、南北格差や環境問題の解決に向けて、国際協力や一人一人の行動について考える。			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
開 始 前	①グループ分け	座席を班の形にし、グループのキャプテンにくじを引いてもらい、グループごとにごとに着席		前日までにグループ分けをし、グループを発表しておく
	②GCP ファイルの配布	全員に GCP ファイルを配布する		
導 入	①本日の GCP 企画の説明	前回の振り返り(SDGs の復習)と本時の内容について説明する	5	パワーポイント使用
	②ルール説明	貿易ゲームの進め方などをリーダーズが説明し、道具を配布する	5	道具の入った袋(紙、はさみなど)
展 開	③作戦会議	袋の中身を確認し、「ルール」を読んで作戦会議を行う	5	司会は巡回し、各Gの相談に乗ってもよい。
	③ゲーム開始 ※4人1グループ	与えられた道具などで製品を作成する	20	司会からマーケットの変化をアナウンスする。
	④貿易の状況変化1	長方形の値段が暴落。	5	国連から5分と時間を限定して貸し出す。
	⑤支援	途上国(E~H)班に追加の道具を配布する	5	
	⑥新資源の発見	途上国G・H班に追加の紙を渡す	5	
	⑦貿易の状況変化2	正三角形の値段が暴落。新たな製品(正六角形)の規格を加える	15	司会からマーケットの変化をアナウンスする。
	⑧ゲーム終了 集計・結果発表	ゲームの終了を伝える 金額を数え、順位を決める ゲームの感想を優勝班、最下位班のリーダーが発表する	7	スタート時の中身、金額が何倍に増えたか共有
	10分休み	各クラスで10分間の休憩をとる		休憩終了時間をホワイトボードに記入する。
ま と め	⑨振り返り1	班ごとに振り返りを行う Workの①~⑤に班ごとに取り組む	15	ワークシート配布
	⑩振り返り2	パワーポイントを用いて「南北格差・南南問題」について、解説を加える	5	
	⑪ワークシートの回収	次回の予告	2	ワークシート回収
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GCPリーダーは説明会の時に先に貿易ゲームを体験し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。</li> <li>・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。</li> <li>・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。</li> </ul>			
講 評				

## D) いのちの食べ方を問う(1年生)

### ■ 概要

10月24日に行われた第3回目の企画では、「いのちの食べ方を問う」をテーマに、SDGsのゴールの中の1つの、つくる責任・つかう責任について学びました。

プログラムは、①お肉はどこからやってくる？②ここにも牛がいる？③食肉センターで働くということ④牛肉が地球を食べると設定し、「いのちを食べることに関わる、地球規模課題について考える」ことを目標としました。

グループで話し合いながら、牛肉の生産過程について学び、その過程の中で、食品以外にも身近に牛を利用した製品が、数多くあることを学び、いのちを大切にに使わせていただいている現実を学びました。また、動画鑑賞を通して食肉センターで働く人たちの思いに迫り、いのちをいただくことの有り難さを学びました。そのうえで、牛肉1kgを得るためには、11kgの穀物や15トンの水が必要であるという現実を学び、“牛肉を食べる”という行為が地球規模課題を引き起こしている事実について考えを深めました。最後に、“フードマイレージ”や“バイオ燃料・穀物不足”、“バーチャルウォーター”などについて、代表生徒が事前に調べてきたことについて発表を行い、地球規模課題についての理解を深めました。



### ◆ 生徒感想


「全世界が肉を多く食べ過ぎていることが、貧困の国の食糧不足につながっていることを知りました。海外でお肉を食べずに生活をしている人々の気持ちに触れることが出来たような気がします。一人ひとりが意識を高めていくことで、この問題を解決していきたいと強く思いました。」

「今回は、牛肉を例に1つの食べ物をつくるのにどれくらいのものが必要であり、また、無駄が出てしまうかを学ぶことができましたが、牛肉だけではなく、他の製品をつくる際にも同様に多くの無駄が発生していると考え、本当に大きな問題であると思いました。国内の貧富の差だけではなく、先進国と発展途上国との世界での貧富の差をなくすことを願い、できることから行動を起こしていきたいと思います。牛肉はもちろん、すべての食品・製品に感謝の思いを強く持って利用していきたいです。」

ワークシート (例)

GCP 企画 第3回 いのちの食べ方を問う

ワークシート





年 組 番 名前


①お肉はどこからやってくる？


1. あなたの好きな牛肉の料理は何ですか？


2. お肉ができるまで (牛肉の生産過程) について、以下のアからエを正しい順番に並べ替えます。


ア 

イ 

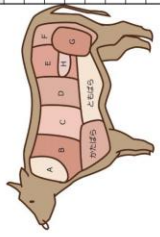
ウ 

エ 

オ 

カ 

3. 私たちが食べている、牛肉 (精肉) の部位を確認しましょう。



部位	名称	使われる料理
A	シチュー、挽き肉	
B	カレー、シチュー	
C	すき焼き、ローストビーフ	
D	ステーキ、しゃぶしゃぶ	
E	ステーキ、ローストビーフ	
F	ビーフストロガノフ	
G	ステーキ、たたき	
H	ステーキ	

<選択肢>  
ヒレ、ランプ、そともも、うちもも、サーロイン、リアブロス、肩、ネック

②ここにも牛がいる！？

1. 身の回りにある、牛の各部分を用いて製造されている製品を挙げてみよう。

2. 食肉センターで働く人たちの思い ※ ( ) の中に適する語を入れてみよう。

仕事をするとときには、  
「 ( ) 以外は無駄にしない! 」  
と一言ながら、牛の命への感謝の思いを確認している。

③食肉センターで働くということ

※以下に、動画を見て学んだことや、考えたことを記入しよう。

④牛肉が地球を食べる ※以下の地球規模課題について、学んだことを記入しましょう。

○フードマイレージ (環境)

○穀物価格 (貧困)

○バイオ燃料・穀物不足 (経済・貧困)

○バーチャルウォーター (貿易・環境)

☆☆ まとめ ☆☆☆

①今日のGCP企画で学んだこと、考えたことを記入しよう。

②関心があると思った地球規模課題を1つ選び、理由とともに記入しよう。

関心を持った地球規模課題 : \_\_\_\_\_

関心を持った理由 : \_\_\_\_\_

■ 企画書

## GCP 企画(1年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2018年10月24日(水) 14:45~15:50 (65分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	持続可能な生産・消費	本時の題目	いのちの食べ方を問う	
本時の目標	私たちの生活が多くのいのちの上に成り立っている事実と向き合い、そこに関わる人々の思いやいのちを失う動物たちの実態を学ぶ。牛肉を育てる飼料は途上国の人々が食べる穀物を圧迫し、穀物を育てる水は各地で水不足を引き起こしている。牛肉をめぐる起こっている地球規模課題について学ぶ。			
項目	項目	授業の進行内容（発問も）	時間（分）	留意点・準備・その他
導入	目標の確認(2分)	本時の目標「いのちを食べるに関わる、地球規模課題を考える」を確認	2	開始前に、グループに分かれ、机を向かい合わせにする。
展開	①お肉はどこからやってくる？ (16分)	好きな牛肉料理を記入する 牛肉の生産過程を考える 650kgの牛から、精肉が何kg取れるかを考える お肉の部位を確認する 精肉以外の部位について確認する	1 6 2 5 2	パワーポイント使用
	②ここにも牛がいる！？ (10分)	共通するものは何か？（牛を原料とした製品の確認） 牛の各部分を用いて製造されている製品を挙げてみよう 食肉センターで働く人たちの思いを学ぶ 牛を無駄にしない気持ちを学ぶ	2 5 2 1	
	③食肉センターで働くということ (3分)	食肉センターで働いている人たちのインタビュー動画を鑑賞 動画から学ぶべき思いを確認 (いただきます。ごちそうさまへの思い)	2 1	
	④牛肉が地球を食べる (26分)	牛肉の生産地を確認（国内生産・輸入率） 牛肉クイズ（全5問） 牛肉を食べることによって起こっている地球規模課題について説明する (フードマイレージ、穀物飼料、バイオ燃料・穀物不足、バーチャルウォーター)	1 15 10	
まとめ	⑥学んだことを振り返る (3分)	学んだこと、考えたことをワークシートに記入	3	
	⑦地球規模課題についての関心を深める (2分)	関心があったと思った地球規模課題を1つ選び、理由とともに記入	2	
	⑨ワークシートの回収			ワークシート回収
事前準備	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ GCPリーダーは説明会において、企画内容を理解し、役割分担を決める。</li> <li>・ 地球規模課題（4項目）の担当者は、課題について調査してスライド作成し、発表練習をしておく。</li> <li>・ 前日までにクラスを8グループに分け、教室に掲示する。</li> <li>・ 授業開始前に、グループ毎に机を向かい合わせにし、ワークシートを配布する。</li> <li>・ 担任は GCPリーダーズの進行のサポートをする。</li> </ul>			



## E) 世界がもし 100 人の村だったら(1 年生)

### ■ 概要

11/24(土)に合計 70 分をつかって実施した「世界がもし100人の村だったら」は、人口 73 億人の世界を「100 人の村」に見立てて、世界の現状を分かりやすく描いた「世界がもし 100 人の村だったら」を題材に、世界の現実をシミュレーション(疑似体験)という参加型の方法で体験する企画です。目的は、世界の現状を理解し、自分との関係に気づくことである為、問題の原因追及や、解決は深く掘り下げず、生徒自身の興味・関心を高めることを目標としました。

「人口」「性別」「年齢」「大陸」「言語」「識字」「格差」の 7 つのテーマについて、ワークシートを用いて学び合いを行いました。

まず始めに、役割カードを全員に配布し、一人一人の役割を決めます。この時に、他人に自分の役割カードを見せないことを徹底させ、これから行うシミュレーションに対して、新鮮な驚きを得られるように配慮しました。

「人口」では、世界の人口をクイズ形式で学び、なぜ人口増加が起きているのかを班で話し合いながら考えました。「性別」では、男性と女性、どちらが多いのか、役割カードに従って窓側と廊下側に分かれ、男女が同じ割合であることを確認しました。同様に、「年齢」では、世界は今、高齢化なのか若年化なのか、「大陸」では、大陸別の人口分布、「言語」では少数言語について、「識字」では文字が読めないということ、「格差」では所得が多いのは誰か、をそれぞれ役割カードに従って体験的に学びました。実際に体を動かしながらの学びであったこと、クラスを世界に見立てたため、身近に感じる事ができたことなど、生徒の理解を深めることができました。



### ◆ 生徒感想

「これまでで 1 番わかりやすく『差』というものを実感することが出来ました。人口の差と資源の差が大きく不平等が広がっていると思いました。実際に、自分が体験してみるからこそ理解が深まっていくことが分かりました。自分がどれだけ恵まれているのかと深く考えさせられました。」

「人口の増減と貧困の関係性を学びました。また、女性差別が起こることで、十分な教育を受けられなかったり、女性の人口が減っていたりすることがわかりました。文字が読めないといのちを失うことになるプロセスを知り、とても恐ろしいと思いました。人口が多くなればなるほど、教育を受けられない人も多くなることを知り、改めて自分が恵まれていることを実感しました。」

「貧困・男女差別・食糧問題について改めて学び、世界の人々がひとりも残らず平等になるのは限りなく難しい課題であることが分かりました。しかし、一人ひとりがこの問題を理解し、考えるということで、世界が分裂するのを防ぐことができるということも学びました。」

ワークシート(例)

2018.11.24 SOKA Senior High School GCP	
<p><b>②</b>なぜ1位~4位の言語は、言語人口が多いのだろうか？ 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>[Work 6]</b>文字が読めないということ</p>	
<p><b>①</b>文字が読めない、どんな不便があるだろうか？ 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>②</b>どのような国で識字率が低いのか？ 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>③</b>②について、それはなぜなのか？ 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>[Work 7]</b>所得が多いのは誰？ なぜ、世界にはこのような不公平があるのか？ 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>[振返り]</b>今日のGCP企画で最も印象に残ったものは何でしょう？学んだこと、考えたことを記入しよう。</p>	
<p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p> <p>_____</p>	
<p>高校1年 組 番 氏名</p>	

2018.11.24 SOKA Senior High School GCP	
<p><b>Work「世界がもし100人の村だったら」</b></p>	
<p><b>[Work 1]</b>世界の人口</p> <p><b>①</b>日本では、人口増加が起きているか？ ( Yes No )</p>	解説&ME
<p><b>②</b>世界の人口増加の原因は何だろうか？ 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>③</b>世界の人口増加の結果、どんなことが起こるだろうか？ 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>[Work 2]</b>女性と男性、どっちが多い？ 世界の国で、インドでは4000万人、中国では5000万人、女性の人口が男性よりも少ないと言われていますが、なぜだと思いますか？ 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>[Work 3]</b>世界は今、高齢化？若年化？ なぜ、アメリカでは子どもの割合が高く、日本では大人の割合が高いのか考えてみよう。 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>[Work 4]</b>大陸の人口 ( ) で人口密度が高いどのような問題があるのか考えてみよう。 自分たちの考え</p>	解説&ME
<p><b>[Work 5]</b>世界の言葉で「こんにちは」</p> <p><b>①</b>1位 ( ) 語、2位 ( ) 語、3位 ( ) 語、4位 ( ) 語</p>	解説&ME

■ 企画書

## GCP 企画(1年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2018年11月24日(土) 10:00~11:55 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	国際理解	本時の題目	世界がもし100人の村だったら	
本時の目標	世界の多様性と格差の現状について、体験型ワークショップを通して体感的に理解する			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
22日(木) 放課後	生徒リハーサル	GCPリーダーズでリハーサルを行う。	60	
導 入	① 企画の説明	本日の内容について説明する。	3	司会生徒あり
展 開 ①	②世界の人口	役割カードを配布 3人1グループになる クイズ。「Work1」に取組む。	5	他の人に見せないように伝える。偶数にする。 スライドに映す
	③女性と男性、どっちが多い?	役割カードの情報に従って、男性と女性に分かれる。それぞれの人数を数え、同じであることを確認する。「Work2」に取組む。	5	
	④世界は今、高齢化?若年化?	役割カードの指示に従って動いてもらう。 日本の場合もやってみる。 世界と日本の違いについて考えてみる。 「Work3」に取組む。	10	
展 開 ②	⑤大陸ごとの人口	大陸ごとにグループに分かれ、ひもを使って床に大陸の形を作り、グループごとに、ひもで作った大陸の中に入る。「Work4」に取組む。	10	ひもはあらかじめ、表(本)を参考に、大陸ごとの長さで輪にしておく。
	⑥世界の言葉で「こんにちは」	役割カードに書いてある挨拶の言葉を、声を出して言いながら、同じ挨拶をしている人を探す。「Work5」に取組む。	10	挨拶の言葉が同じでも言語が異なることを説明する。
	⑦文字が読めないということ	ネパール語で書いた紙を全員に見せる。文字が読めなかった人に、司会から指示を出し、透明のペットボトルから「薬」を一つ選んで持ってくるというシミュレーションを行う。 「Work6」に取組む。	15	病人役の人には、飲んだ後に態度で示してもらう。(臨場感が出る)
ま と め	⑧所得が多いのは誰?	役割カードの記号△、□、○、☆、▽に従って、グループに分かれる。各グループにお札を配布し感想を聞く。「Work7」に取組む。	15	お札は事前に割合ごとに枚数を数えて準備しておく。
	⑨振り返り	「世界がもし100人の村だったら」を読む 今回行ったシミュレーションの中から最も印象に残ったものは何か。感想などを記入。	10	
	⑩(時間があれば)共有		5	
	⑪ワークシートの回収と次回予告		2	

## F) 模擬教育援助会議(1年生)

### ■ 概要

今回行った模擬教育援助会議は、①導入②会議③質疑応答④被援助国の主張⑤班での振り返り⑥全体のまとめ、以上の6段階で構成されています。最初の導入部分では、マララ・ユスフザイさんの映像を視聴し、さらに世界を取り巻く教育の現状について図から読み取る作業等を通して学習をし、先進国と発展途上国には圧倒的な教育各差があることを生徒全員で確認しました。会議開始前に進行役のGCPリーダーズの指示もと、事前に指定された、会議参加者の役(6名)、被援助国の市民役(8名)、オブザーバー(そのほかの会議を見守る生徒)にそれぞれ分かれて着席しました。会議は教育援助をするA国・B国の政府役と市民役、援助される側のC国政府役とその小学校長役、NGO職員役の計6名で行われます。事前に用意された台本に沿ってロールプレイ形式で会議を行い、質疑応答を行った後、援助をするA国・B国側の「したい援助」と援助をされる側C国の「してほしい援助」は必ずしも一致していないことを全員で学びました。



次に、被援助国であるC国市民役の8名の生徒が、役割カードに沿ってそれぞれの主張

を展開し、教育各差に悩む声を発信しました。生徒は、C国の現地のニーズが援助会議に直接反映されることは難しいことを学びました。続いて各班に分かれ、ワークシートに沿って振り返りをおこないました。最後にまとめとして、国連広報センターが作成した「持続可能な開発は教育から」を視聴しました。

### ◆ 生徒感想

「必要とされているのは教育援助の規模を大きくするというだけではなく、支援される側が必要としている事は何かを、支援する側が正しく認識した上で教育援助を行っていくことも重要だということを知ることができました。」



「GCPの最初の企画から貧困が一番の問題だとされてきました。しかし、正直違和感があり、それは『貧困が起きるのは個人の能力を引き出すための基礎知識がない』からと思っていたことが、今回わかりました。その上でSDGsの中で一番重要な課題は、質の高い教育をということだと思います。その上で、発展国でも教育の転換を図っていく必要があるのだと思います。」

「今回のGCP企画で知ったことは二つあります。一つ目は、教育援助といっても分野に分かれていて、支援する国とされる国でのニーズが違うことです。支援する国に利益があることは必要だけれど、基礎から教育していかないと全員に広まっていけないと感じました。二つ目は、学校の先生自体が教育されていないということです。このままだと、いつまでもたっても負の連鎖から抜け出せないなど感じ、私は教員の育成が一番必要だと感じました。今、私たちにできることは、しっかりと勉強し世界の現状を知ろうとすることだと感じました。」

# ロールプレイ資料 (抜粋)

役割カード B-① ㊦

**役割カード① 援助する側・A国の政府の担当者**

**【自己紹介】**  
 ●あなたが最初に発言してください。  
 ●文中の指示にしたがって、**援助カード①**を提示してください。  
 ●太字の部分はあなたの主張したい部分なので、強く発言してください。

ごほん。みなさん、はじめまして。A国の政府を代表して来ました〇〇(あなたの名前)です。  
 我が国は、戦後の工業発展を遂げて急成長し、先進国の仲間入りを果たした国です。発展した私たちがA国はODAというお金を使って開発途上国に多大な支援をしてきました。今年からはC国へも教育分野の援助を行うことになりました。内容としては、**高等教育\*を特に重視した援助を行いたい**と計画しております、そのための予算を用意しているのです。(→援助カード①「高等教育」を机の上に提示してください)  
 具体的な援助内容に関しては、後で質問があればお答えします。私たちの援助でより多くの若者が我が国の大学で学べるようになるでしょう！

●後に質問する時間があるので、以下の質問例を参考に質問してください。

**【質問例】** ほかの質問をしてもかまいません  
 ㊦ B国政府へ：これまでC国へは、どのような教育援助をしてきたのですか？

**【A国の情報】**  
 質問に回答する時などに参照してください。答えられない時は「調べておきます」と回答してください。  
 文中の指示にしたがって、**援助カード②**を提示してください。  
 ✓ A国の市民のODAに対する意識や関心は低い。  
 ✓ これまで、低所得国ではなく、主に中所得国に高等教育分野で援助をしてきた。  
 ✓ 昨年はアフリカの基礎教育に25億円、東アジア・太平洋の高等教育に400億円の教育援助を行った。  
 ✓ C国への具体的な援助内容：C国から留学生を毎年100人大学に受け入れる。奨学金と渡航費、生活費などの学生が留学に必要な費用を賄う。  
 (→援助カード②「留学生100人受け入れ」を机の上に提示してください)  
 \*高等教育とは、大学・大学院、海外からの留学生への奨学金などのことをいいます。

**【援助カード (したい援助)】**

援助カード① 高等教育	援助カード② 留学生100人受け入れ
----------------	-----------------------

<p><b>役割カード⑦ C国の市民 父親</b></p> <p>子どもには教育を受けさせる必要はないと思っていますよ、だって女の子2人だしね。どうせ何年かしたら嫁に出すので、息子が生まれたら学校に通わせるつもりなんですけどね。</p>	<p><b>役割カード⑧ C国の市民 母親</b></p> <p>私自身は学校に行っていない。3人の子もたちは、読み書きができるように学校に通わせたいと思っていますが、家畜の世話や家事、きょうだいの子守を手伝ってやらなくては行けないので、子どもたち全員を学校に通わせる余裕はありません。</p>
<p><b>役割カード⑨ C国の市民 教師</b></p> <p>私は〇〇校長先生(前出)の学校で働いています。実は、私は、教員訓練を受けたことはありません。それどころか高校卒業資格もありません。いつも、どうやって生徒に教えるのか分からず悩んでいます。C国の政府にはもっと教育分野へ予算を割いてもらい、教員養成や給料に充ててほしいです。(→援助カード⑨を机の上に提示してください)</p>	<p><b>役割カード⑩ C国の市民 15歳男子</b></p> <p>僕がもっと小さかった頃、村に小学校ができました。もちろん毎日通いました。友だちもできたし、何より楽しかった。でも、勉強は得意じゃなくて、さっぱり先生の言っていたことが分からなくて、結局、簡単な文章を理解することすらできなかった。「先生の教え方がもっとよくなれば…」って外国の人たちが言ってた。もう15歳だけど、中学校へは通ってません。(→援助カード⑩を机の上に提示してください)</p>
<p><b>役割カード⑪ C国の市民 13歳女子</b></p> <p>家は貧乏で、おばあちゃんも病気で私が働いて家計を助けないといけない。通っていた学校を中途退学して、今は工場毎日洋服をミシンで縫ってます。働いてるときは私は17歳って嘘をついています。だって、「児童労働」になっちゃうから。私の作った洋服はどこ誰が着るんだろう？(→援助カード⑪を机の上に提示してください)</p>	<p><b>役割カード⑫ C国の市民 11歳男子</b></p> <p>学校は楽しい。字が読めるようになったし、計算だってできる。将来の夢はお医者さんになること。けど今は、戦争で軍が校舎をつかっている、学校へ行けなくなっちゃったんだ。友だちから軍に入らないかと誘われてるんだけど、どうしよう…。(→援助カード⑫を机の上に提示してください)</p>
<p><b>役割カード⑬ C国の市民 9歳女子</b></p> <p>私の村は学校から遠くて、毎日歩いて2時間かかるんです。学校には女子用トイレがなく、生徒の数が多くて教室はいつもぎゅうぎゅう。座るところも足りないし、黒板も小さくて、よく見えない。せつかく学校に着いても、先生が来ない日もあるから悲しい。先生が増えたらもっと質問できるし、勉強できるのにな。(→援助カード⑬を机の上に提示してください)</p>	<p><b>役割カード⑭ C国の市民 8歳男子</b></p> <p>僕は歩くのが生まれつき苦手。椅子に車輪が付いたら学校へもいけるのになあ。学校には一度も行ったことがないけど、僕は頭が良いからクラスで一番になれるはずだよ！でも、近所の小学校には入学を断られてしまったんだ。友だちはみんな学校に行っているのに…。(→援助カード⑭を机の上に提示してください)</p>

# ワークシート (例)

2018.2.17  
SOKA Senior High School GCP

**Work③ 振り返り・まとめ**

**【振り返り①-1】**  
 留さんは、教育援助会議をみてどのような気持ちになりましたか？また、気がついたことを書き出してみよう。  
 気持ち \_\_\_\_\_  
 気がついたこと \_\_\_\_\_

**【振り返り①-2】**  
 会議の中で話し合われた援助内容とその援助を受ける側のニーズは合っていましたか？どちらかに○をつけ、合っていなかった場合は具体例を記入してください。  
 合っている ○ 合っていない ○ \_\_\_\_\_  
 合っていなかった具体例を書いてみよう \_\_\_\_\_

**【振り返り①-3】**  
 援助国Aはこの国の政府を象徴していると思いますか？  
 ※ヒント「我が国は、戦後の工業発展を遂げて急成長し、先進国の仲間入りを果たした国です…」  
 \_\_\_\_\_

**【振り返り①-4】**  
 どうしたら本当に必要とされる教育援助が実現できると思いますか？会議を通して考えたことを記入してください。  
 \_\_\_\_\_

1年組 番氏名 \_\_\_\_\_

2018.2.17  
SOKA Senior High School GCP

**【振り返り②-1】**  
 日本の教育援助の特徴  
 <図1>  

地域	割合
サブハラ以南のアフリカ	52%
東アジア	22%
中東	20%
ラテンアメリカ	6%
その他	0%

左の図1.2から読み取れることは何でしょうか？ \_\_\_\_\_

<図2>  
 教育分野の援助の内訳  

分野	割合
基礎教育	48%
高等教育	25%
職業訓練	39%
その他	8%

**【振り返り②-2】**  
 C国 (低所得国) の現状  
 \_\_\_\_\_

**【振り返り②-3】**  
 「全ての子どもが教育を受けるために」の中で大切なことをMEMOしよう。  
 \_\_\_\_\_

**【まとめ】** 今日のGCP企画で学んだこと、私たちに何ができるか考えたことを記入しよう。  
 \_\_\_\_\_

■ 企画書

## GCP 企画(1年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年1月19日(土) 9:00~10:50 (110分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	国際理解	本時の題目	模擬教育援助会議	
本時の目標	教育に関して、援助する側と援助される側のニーズの違いやギャップに気づき、本当に必要とされる援助は何か考える。日本政府の教育援助の内容や傾向を知る。NGOの日本政府への提言を知る。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
15日(木) 放課後	生徒リハーサル	GCPリーダーズでリハーサルを行う。	90	13日(火)にリーダーズのリーダーを集め打合せ
はじめに	① SDGs について ② 企画の説明	1学期の振り返りを行う 本日の内容について説明する。	3	司会生徒あり
導 入	映像視聴	マララ・ユスフザイさんの映像を視聴する	3	班で話合いながら行う  メモを取りながら聞くように促す
	Work①を班で話合いながら行う	世界で、小学校に通えない子どもの数やその要因について考える 図からの読み取り…サハラ以南のアフリカの現状を知る	7	
	Work1の答え合わせ	メモをしながら答え合わせ	3	
展 開 ①	模擬教育援助会議についての説明	C国の現状を説明	30	オーディエンスの生徒たちはWork②にメモを取りながら会議を見守る
	会議開始	事前に選ばれた6人と8人の市民に演じてもらう。セリフは全て決められている通り読む(アドリブあり:配役が大切) シナリオ通りに会議を進めていく		
	質疑応答	質疑応答を司会の進行で進めていく(質疑応答の内容もシナリオ通り)		
	C国校長の話	質疑応答が煮詰まった所で、司会の合図でC国の校長が発言をして会議は終了		
休 憩		トイレ休憩	10	
ま と め	机とイスを元に戻す	リーダーズの指示で、机とイスを班ごとに並べ直す	3	メモを取るように促す
	Work③を班で話合いながら行う	振り返り①-1 ~ ①-4を行う	5	
	リーダーズが振り返り②~を行う	パワーポイントで振り返りを行いながら、随時メモを取っていく	7	
	まとめ	各自でまとめを記入	3	

## G) 核兵器廃絶に向けて(2年生)

### ■ 概要

5月12日に行われた第1回目の企画は、「核兵器」をテーマに行いました。まず進行役の生徒が、核兵器を巡る世界の情勢について調べた内容をプレゼンしました。この話題を軸に、ジグソー法を用い、核兵器を絶対悪とする立場であるAカードと、核抑止論を信奉する立場を示すBカードを分析しながら、核兵器に対する両者の意見や立場を、総合的に整理しました。付箋を使って主張のポイントを整理しながら、共通点と相違点を導き出し、核兵器廃絶への可能性を探りました。

2017年1月20日に第45代アメリカ大統領に就任したドナルド・トランプ氏が、核兵器を巡る米国のスタンスで議論を呼び起こしていたため、本企画ではトランプ大統領の主張をカードに反映させました。また、同年7月7日に採択された「核兵器禁止条約」の立役者であるICANの立場もカードに反映させました。カードは、両者の立場が対比できるように構成され、例えば、トランプ大統領と日本の河野外相(日本の立場)を同じカードにすることで、原爆投下された日本がアメリカの核抑止論と同じ立場を取っていることを意識させました。また原爆投下を指示したトルーマン大統領の孫のインタビューに対して、広島で長らくボランティアガイドをしている人のインタビュー、あるいは、日米それぞれの核兵器に対するアンケート結果などを用意し、今までは日本人からの視点で捉えてきた核兵器に対して、敢えて核抑止論という視点を取り入れることで、核兵器の問題を客観的に捉えられるように工夫を凝らしました。

### ◆ 生徒感想

「核兵器の恐ろしさが改めて分かった。あまりアメリカのことを知らず、アメリカが悪でしかないという考えが自分の中にあっただのですが、議論を重ねる中で、日本にも真珠湾攻撃のような非があり、アメリカだけが悪ではないということがわかった。全ての立場における共通点として戦争は良くないという考えがあり、当たり前のように感じるこの考えを、世界の共有すべき共通点として頭の中に置き、戦争をできる限り全てなくしていけるようにしていくことが必要だと感じた。」

「日本は世界で唯一核による被害を受けた国ではあるけれど、70年という時を経て、「使用も保有も禁止すべきだ」という考え方から、「核の使用は正しかった。抑止力で守られている」という真逆の考えを持ちつつあることに驚きました。確かに今、日本はアメリカの傘下で、核抑止力という名の下、核によって守られているが、今後その脅威を伝える世代がいなくなったとき、必ずまた同じことが起きると思います。核の非人道性を、日本だけでなく、世界の人々が学び続けることが大事だと思います。」



(ワークシート例)

A-1

### 「核抑止、崩れれば破滅的結果」 I C A N 事務局長が警鐘

ノーベル平和賞の受賞が決まった国際NGO「核兵器廃絶国際キャンペーン」( I (7イ) C A N (キャ)) のベアトリス・フィン事務局長は朝日新聞のインタビューで日本などが信奉する「核抑止」に強い疑問を投げかけた。

フィン氏は、核抑止力を強調しても「誤解やサイバー攻撃、非理性的な指導者などによって、偶発的な核使用は防げない」と語った。「核抑止は完璧ではない。ある程度機能しているとしても、崩れる可能性は残り、破滅的な結果をもたらす」と警鐘を鳴らした。

(中略)

フィン氏は、「核抑止」が想定する「核兵器の恐怖による平和と安定」が機能せず、逆に不安定な状況を生んでいると分析。「紛争地に核兵器が持ち込まれれば緊張はさらに高まり、偶発的な使用の懸念も増す」とした。

出典：朝日新聞(2018/4/25)



### 核兵器廃絶国際キャンペーン ( I C A N ) 2017年ノーベル平和賞受賞講演 ( 抜粋 )

2017年12月10日・ノルウェー・オスロ・ベアトリス・フィン氏による

(中略)

私たちの陸地の中に埋設されたミサイル発射台や、私たちの海の中を潜行する潜水艦や、私たちの空を高く飛ぶ航空機など、世界中の数十カ所に、人類を破壊する1万5000個もの物体が置かれています。

おそらく、この事実があまりに非道であり、それがもたらす結末が想像を超えるほどの規模のものであるがゆえに、多くの人々はこの残酷な現実をただ受け入れてしまっているようです。私たち全員を取り巻くこの異常な道具について考えることなく、日々の暮らしをおくるためにです。

このような兵器に私たちが支配されることを許していることこそ、異常です。私たちの運動を批判する人たちは、私たちは非理性的で、現実に基づかない理想主義者であると言います。核武装国は決して彼らの兵器を手放さないと。

しかし私たちは、唯一の理性的な選択を示しています。私たちは、核兵器をこの世界の定着物として受け入れることを拒否し、自分たちの運命が数行の発射コードによって束縛されていることを拒否する人々を代表しています。

私たちの選択こそが、唯一、可能な現実です。他の選択は、考慮に値するものではありません。

核兵器の物語には、終わりがあります。どのような終わりを迎えるかは、私たち次第です。

核兵器の終わりか、それとも、私たちの終わりか。

そのどちらかが起こります。

唯一の理性的な行動は、突発的なかんしゃくによって私たちが相互に破壊されてしまうような状況の下で生きを止めることです。(以下省略)



## ① トランプ政府・国連一反核兵器条約に調印の意思なし

【PRESSTV 2017/10/07】(訳文・抜粋)

B-1

アメリカ大統領であるトランプ政権は、本年のノーベル平和賞受賞者によって支持された、国連の核兵器禁止条約への調印をする予定はないと表明した。「本日の発表は、条約に対するアメリカの立場を変えるものではない。つまり、アメリカは核兵器禁止条約を支持することも、調印することもないということである。」と米州政府の報道官は金曜、AFPに語った。(中略)

・・・ワシントンは、その条約は「国際的な核拡散と安全保障問題へ対する現存の努力を侵害する危険を有している。」と述べた。「この条約は世界をより平和にもせず、たった一つの核兵器廃絶にもつながらず、国の安全保障を強化することもない。」と報道官は言う。



## ② 「核禁条約、一発も減らせない」米政権が改めて反対強調

【朝日新聞 2017年10月7日付】 抜粋

「大統領は、世界と人々をより平和で安全にする真に効果的な手段をつくり出すことについて、善意ある核軍縮を願う人々と建設的に協力できることを期待している」と述べた。



## 核兵器禁止条約【河野太郎外相公式ブログ 2017.11.21】(抜粋)

核兵器は、いったん使われると広い範囲で多大な惨禍をもたらします。核兵器の使用に人道的なものはありません。唯一の被爆国として誰よりもそれを知る我が国が核兵器の廃絶を目指すのは当然ですし、今後もそれは変わりません。

一方で、核兵器の脅威が未だ現実存在する状況において、あらゆる手段を講じて国民の生命・財産を守ることは、政府として当然の責務です。核軍縮に取り組む上では、この人道と安全保障の二つの観点が常に重要です。

(中略)

核兵器の使用をほのめかす北朝鮮のような存在にその使用を思いとどまらせるには、もし核を使えば自らも同様の、あるいは、それ以上の堪え難い報復にあうと認識させることが必要です。こうした考え方を抑止といいます。北朝鮮のように、実際に核兵器の使用をほのめかし、多数のミサイルの発射すら行いかねない相手に対しては、通常兵器だけで抑止を効かせることは困難であり、核兵器による抑止がどうしても必要となります。

さりとて、非核三原則を国是として掲げる日本が、自ら核抑止力を保有する選択肢はありません。国民の生命と財産を守るためには、日米同盟の下で核兵器を有する米国の抑止力に頼る以外ないのが現実です。核兵器禁止条約は、こうした厳しい安全保障環境を十分考慮することなく、核兵器の存在自体を直ちに違法化するものです。

したがって、この条約がいかに核兵器廃絶という崇高な目的を掲げているものであっても、核兵器を直ちに違法なものとする核兵器禁止条約に参加すれば米国による抑止力の正当性を損うことになり、結果として、日本国民の生命や財産が危険にさらされても構わないと言っているのと同じこととなります。

■ 企画書

## GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任・副担任
実施年月日	2018年5月12日(土) 9:00~10:55(約100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	核 兵 器	本時の題目	核兵器禁止条約をめぐる思い	
本時の目標	原爆投下(広島)による被害の事実を知り、核兵器禁止条約をめぐるA側とB側のスタンスを整理しながら、核兵器廃絶への可能性を探る			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	備考
導 入	① GCP 企画の説明	昨年度やった内容を簡単に振り返る 本時の内容について説明する GCP ファイルの説明をする ※2017年7月7日に「核兵器禁止条約」が採択され、その採択に大きく貢献しノーベル平和賞を受賞した CAN について学ぶと共に、今、原爆(核兵器)について考えることの意義に触れる	5  10	個人WS 配布 GCP ファイル&表紙 配布
	② 個人作業	【個人WS】に取り組む ※広島原爆投下の簡単なクイズを通して事実を確認する	3	ヒロシマ・ナガサキ資料 配付
展 開	③ VTR 視聴	「学ぼう広島 DVD」ダイジェスト映像を視聴する	10	VTR 準備
	④ グループ作業説明	この後の流れを説明する 机を動かしてもらおう	5	
	⑤ グループ作業1	4人1組のグループ(G)を作り、A側、B側に分かれる。ABのそれぞれ視点で書かれた①~④の4枚のカード配布し、G内で担当者を決め、分析する。	5	ワーク用カード、 付箋配布 ※ABで色を分ける あらかじめAをまとめる
	⑥ グループ作業2	①~④で同じカードをもつ人で集まり、カード内容を分析。その際、大きな付箋にカードの要約を記入する(自分のG用と2枚)	10	GとBをまとめるGに分ける
	⑦ グループ作業3	ABの同じ数字のカードをもつ人が集まり、作業1で記入した付箋を交換し、両者の相違点と共通点を考える	10	
	⑧ グループ作業4	もとのGに戻りAB8枚の付箋とカードを【グループWS】に整理しながら、ABのそれぞれの立場の相違点と共通点を整理する	20	グループWS 配布
ま と め	⑨ クラス発表	各グループでまとめたものをクラスに発表 発表内容は【個人WS】に各自でまとめる	10	
	⑩ 横浜研修に向けて	戸田先生の原水爆禁止宣言、SGI 提言の抜粋を学び、横浜研修に繋げていく	1	SGI 提言配布
	⑪ 個人作業	今回のGCP 企画の自己評価と感想を【個人WS】に記入する	5	個人・グループWS 回収→担任へ
	⑫ ワークシートの回収	GCP リーダーズがワークシートを回収。	1	GCP ファイル回収 →GCP ロッカーへ
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GCP リーダーは説明会の時に先に企画を体験し、企画内容や流れを事前に理解しておく。</li> <li>・GCP リーダーはG分けを前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。</li> </ul>			

## H) レイテ島決戦から戦争とは何かを知る(2年生)

### ■ 概要

高校 2 年生の 1 学期は、「戦争」をテーマとし、特に第二次世界大戦を中心にその実像を見つめていきました。6 月 16 日に行われた第 2 回目は、フィリピン・レイテ島の決戦の戦争証言の映像を通して、戦争とは何かについて学び合いました。映像では、レイテ決戦を戦った兵士たちの証言映像を特別に編集し、その際に、日本兵、アメリカ兵、そして、現地のフィリピン人など、戦争に関与した全ての当事者の証言を順番に視聴することで、偏った見方をせず、戦争について客観的に考えることを目的としました。

レイテ島は第二次世界大戦中、日本軍とアメリカ軍が最も激しい地上戦を繰り広げた舞台の一つです。その地上戦の経験者の証言は、授業で学んだ机上のものとは異なり、生々しいものでした。そして、戦争の勝敗に関係なく、戦争に関わった全ての人が悲惨な思いをし、深く傷ついていることを知ることができました。生徒は大きな衝撃を受けると共に、二度と戦争を起こさない、起こさせないという不戦の誓いを新たにしました。

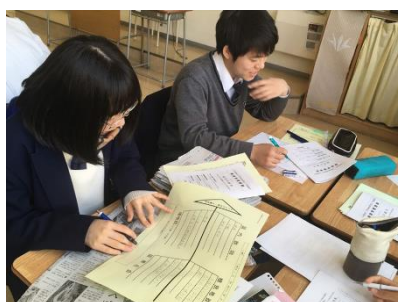
最後に、映像を通して学び合ったことを、「戦争とは」とのテーマでマインドマップを作成しました。「あなたが一番『かわいそうだ』『ひどい』と感じたのはどの国の人か」との質問を投げかけることで、より深く考えることができたのではないかと思います。そして、「戦争とは人の命を奪うことである」、「戦争には加害者も被害者もない」ということを一人一人が理解することができました。

### ◆ 生徒感想

「戦争に対する感情を改めて考え直すことができました。実際に経験した人達の一言一句には、すごい力があり、観ることができて本当に良かったと思いました。世界市民、世界平和を実現するためにも、自分から挑戦していこうと思いました。」

「映像の『戦争とは?』との質問に対して証言を聞く部分では、個人それぞれの戦争に対する思いを聞くことができ、とても印象に残りました。特にアメリカ人の『何かを止めるには戦争以外にも道があったのに、戦争を選んでしまう。それが人間だから』という発言には、はっとさせられました。また、クラスの皆と真剣に戦争について意見を交換することができたことは非常に良い機会だったと思いました。次の時代を担う私たちであるから、更に平和への意識を高めていきたいです。」

「一番心に残ったのはフィリピン人の『日本軍のことをもうとっくに許している』との証言です。戦争からは何も生まれない、憎んでも何にもならないということ、身をもって体験しないとできない言葉だと思いました。アメリカ人の『話したくない』という言葉に、本当に辛い経験であったことが伝わってきました。」



ワークシート(例)

**レイテ島の戦い** とは…

- フィリピンのレイテ島とは、日本軍が「太平洋の天王山」と呼び、米軍のマッカーサー元帥が「アイ・シャル・リターン（私は戻ってくる）」の約束を果たす地と決めた太平洋戦争の決戦場。
- 太平洋戦争中の1942年、日本軍はフィリピンを占領。当時、米軍大将だったマッカーサーは「戻ってくる」と言い残してフィリピンを脱出。1944年10月20日、マッカーサー率いる米軍約20万人がフィリピン奪還のためにレイテ島に上陸。
- 約2カ月に渡る日本軍とアメリカ軍の地上戦で、日本側はほぼ全滅した。
- 同島の太平洋戦争中の死者（推計）は日本軍約8万人、米軍約3500人。
- 日米両軍の間で翻弄され、レイテ島の島民約5万4千人も犠牲になった。
- また、米軍に協力したフィリピン人のゲリラ部隊と日本軍との戦闘も激化した。



〈レイテ島に上陸するアメリカ軍〉



〈米軍の猛烈な艦砲射撃で炎上する日本軍陣地〉

〈フィリピンと日本の戦後〉

太平洋戦争末期、日本軍が抗日ゲリラとの関係を疑って無実の人を虐殺する事件が相次ぎ、遺族らの反日感情はいまも強い。元従軍慰安婦が日本政府に補償を求めている問題や、米軍や住民の追及を恐れて日本人であることを証明する書類を捨てたために日本国籍が認められない残留日本人の問題も残る。

〈日米両軍による激しい戦闘で壁に無数の砲弾の穴が今も残る建物〉



(出展：朝日新聞 2010年9月18日朝刊)

GCP 企画【グループワークシート②】

# 「戦争」とは

である

～なぜなら～

班	メンバー：	進行	書記				
---	-------	----	----	--	--	--	--

■ 企画書

## GCP 企画(2年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2018年6月16日(土) ②10:05~10:55 ③11:05~11:55		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	戦争	本時の題目	戦争証言を通して「戦争」とは何かを知る	
本時の目標	戦争証言を通して、「戦争とは人の命を奪うことである」、「戦争には加害者も被害者もない」ということを一人一人が理解し、二度と戦争を起こさない・起こさせないという不戦の誓いを新たにする			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
導入	①今回の企画についての説明 ※配布物あり	今回の企画について簡単に説明をする GCPファイル・「個人WS①」「前回のWS」	2	
展開	②個人作業  ※配布物あり	「個人WS①」①～③に取り組む。 ⇒全体で②③の答え合わせをする	4	
	④グループディスカッションA  ※配布物あり	「グループWS①」 グループで机を合わせ、 「個人WS①」①に記入したことを共有し、 「グループWS①」マインドマップに取り組む	10	グループ活動を始める前に進行と書記を必ず決めさせる。
	⑥レイテ島の戦いの説明  ※配布物あり	「レイテ島決戦解説プリント」「個人WS②」 これから上映する映像について説明する。	5	・リーダーズから例と等についての説明をする。 ・VTR鑑賞後にどのようなディスカッションをするのかを確認する。 ・「個人WS②」に適宜メモをとるように指示する。
	⑦VTR上映A 0:00~ (1.銃撃戦と消耗戦)  →グループディスカッションB	NHK戦争証言アーカイブよりフィリピン・レイテ島での決戦を語った戦争証言をまとめたVTRを鑑賞する。 ⇒印象に残った人(発言内容)をグループで共有する	13	
	⑧VTR上映B 12:18~ (2.斬り込み隊)  →グループディスカッションC	映像の続きを鑑賞する ⇒印象に残った人(発言内容)をグループで共有する	12	
	15分休憩			
	⑨VTR上映C 22:52~ (3.フィリピン現地民との戦い 4.戦争とは?)  ※配布物あり	映像の続きを鑑賞する VTR終了後、メモをまとめる時間をとる	12 3	
	⑩グループディスカッションD  ※配布物あり	「グループWS②」 感想をグループで共有し、「個人WS①」⑤、⑥の内容をディスカッション。「戦争」とは何かを「グループWS②」にまとめる	15~20	グループの様子をみながら弾力的に時間配分する。
まとめ	⑪クラス発表	各グループでまとめたものをクラスに発表	10	10:30までには必ずスタートする。
	⑫個人作業	今回のGCP企画を通して感じたことや学んだことを「個人WS①」⑦に記入する	3	※時間が足りなくなった場合は担任と相談して帰りのSHR等を活用する。
	⑬ワークシートの回収	GCPリーダーズがワークシートを回収し、職員室の高松先生の机上へ提出する	5	
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。</li> <li>・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。</li> </ul>			

## I) 異文化理解(2年生)

### ■ 概要

10月24日に行われた第3回目は、「国際交流～世界の中のわたし～」をテーマに、外国の文化や考え方を知り、日本とは違う文化を受け入れ、共生していくための方途を学ぶことを目標に、創価大学に通う別科生(留学生)38名を創価高校にお迎えし、別科生との交流を行いました。高大接続の取り組みの一環として、初めてGCP企画として別科生との交流を実施することができました。

事前学習として、別科生には自己紹介を考えてもらい(ワークシート左参照)、各クラスの生徒には、9～11人のグループを作り、グループの中で別科生への質問を考えさせました。交流会当日に向けて、個人で考えた質問を共有し選び、グループで聞く内容を絞りました。

交流会では、まず別科生の自己紹介をしていただき、その後グループごとに別科生と懇談をしました。生徒は自ら考えた質問をしながら、日本との文化や習慣の違いを感じながら、有意義に交流会を進めていきました。

### ◆ 生徒感想

「他国の文化を、その国の人から教わることができ、貴重な経験をさせていただきました。他の国から見ると、日本と違うところが生活のいたるところに存在し、違和感を憶えることを知りました。自分も将来、海外に行くことがあると思うので、いろんな情報を知ってから行くべきだと思いました。」

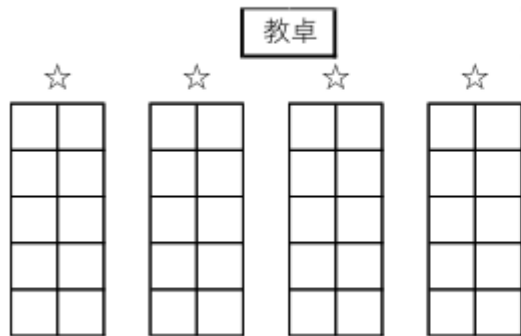
「日本と母国との違いを聞いて、相手の方の国のことも知り、日本のことも新しく知ることができた。留学する大学に創価大学を選んでくれたことや日本語を学ぼうと思ってくれたことが嬉しいと思い、自分も留学してみたいと思った。あまり海外の方と話をする機会がないので、すごく楽しく、学ぶこともたくさんあり、もっとこういう機会があれば良いと思った。また、こういう経験を高校生のうちしておくことで、これからの生活で国際理解をより深めることができると思った。」

「質問をするときに、友達と会話をする時のくせで主語を抜いてしまったときに、理解してもらえなかったので、日本語の文章の不完全さを感じ、主語って大事だと思いました。文法に気をつけて話せるようになりたいです。」

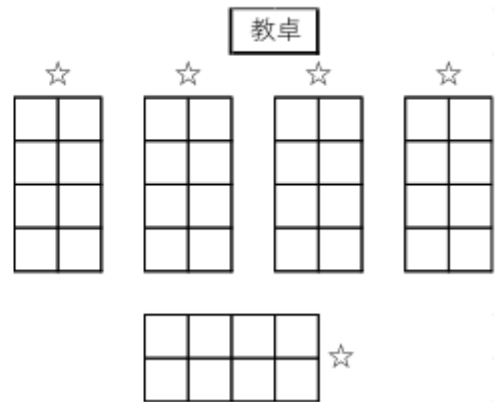


■ 教室配置

<別科生が4人の場合> ☆：別科生



<別科生が5人の場合>



※別科生の座る場所は各クラスで工夫してください

● ワークシート(例)

別科生のみなさんへ

自己紹介 (Introduce yourself) (1人3分) (3minutes per 1person)

④と⑤はどちらか一つ選ぶ(choose either ④or⑤)

各グループに入って、生徒の質問に答える → 7分で次のグループへ移動  
(Answer questions from students in a group → Change a group in 7minutes)

①名前 (Name)

\_\_\_\_\_

②国 (Country)

\_\_\_\_\_

③日本在住期間 (Duration in Japan)

\_\_\_\_\_

④ 学国生に知っておいて欲しい自国の文化 (Your own culture that you want Gakuensei to know)

⑤ここが変だよ！日本人/ここがすごいよ！日本人 (Strange or Great points that Japanese have)

\_\_\_\_\_

⑥日本と共通する文化 (Common culture between your country and Japan)

\_\_\_\_\_

本日は大変にありがとうございました。

GCP 企画 司会原稿(2018/10/24)

項目	司会原稿	時間(分)	備考
①企画の説明	みなさん、こんにちは。今回の GCP 企画では、日本語を勉強しに来ている別科生の方たちとの交流です。普段は中々知る事の出来ない、日本以外の文化を学ぶことの出来るチャンスです。言語技術を活用して、考えた質問を更に掘り下げ、有意義な時間にしていきましょう。では、別科生の皆さんが到着したら、拍手で迎えましょう。	3	リーダーズが別科生を呼びに行く 司会あり
②別科生紹介	本日私たちと交流する創価大学の別科生のみなさんです。よろしくお願います。	1	名前と国の紹介
③自己紹介	それでは、ひとりひとりに自己紹介をして頂きます。学国生のみなさんは、留学生のみなさんの自己紹介を聞きながら、個人ワークシートの①にメモをとってください。 話して頂く内容は、①名前、②国、③日本在住期間、④学国生に知っておいて欲しい自国の文化、⑤ここが変だよ！日本人、⑥日本との共通する文化についてです。④と⑤は選択で答えてもらいます。それではよろしくお願います。	15	事前に自己紹介の内容を伝えてあり、準備した内容の自己紹介(一人3分)
④各グループに別科生1人が入り、質疑応答	ありがとうございます。それでは別科生のみなさんとの交流に移っていきます。各グループにつき一人の別科生に入って頂き、準備した質問しながら、その回答をワークシートの②に記入しましょう。時間は1G7分、時間がきたら別科生に次のグループに移動してもらいます。前の電子黒板に時間が表示されますので、リーダーズの皆さんは時間のチェックをお願いします。それでは、始めてください。	30	
⑤備礼	ありがとうございます。代表して、( )くんさんに挨拶をしてももらいます。( )くんさん、よろしくお願います。	5	リーダーズが代表で挨拶をして、
⑥別科生送場	ありがとうございます。最後に、感謝の気持ちを込めて、全員で負けじ魂ここにありを歌いましょう。起立してください。(よ負けじ魂ここにあり♪)  以上で留学生との交流を終わります。ありがとうございます。 留学生のみなさんが控え室に戻ります。拍手で送りましょう。		全員で歌う ⇒留学生に歌詞カードを渡す  リーダーズが控え室まで案内する
⑦個人作業	最後にワークシートの③に、本日の感想や気がついたこと学んだこと、決意したことを書きましょう。時間は10分です。それでは始めてください。	10	
⑧ワークシートの回収	時間になりました。これからリーダーズがワークシートを回収します。これで本日の企画は終了です。これで本日の企画は終了です。これからの準備をお願いします。		個人・グループWS回収→担任へ GCP ファイル回収 →GCP ロッカーへ

■ 企画書

## GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任・副担任
実施年月日	2018年10月24日(水)6限目14:45~15:55(70分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	国際理解	本時の題目	留学生交流~世界の中のわたし~	
本時の目標	創価大学より、別科生38名をお迎えし、外国の文化や考え方を知り、日本とは違う文化を受け入れ、共生していくための方途を考える機会とする。			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	備考
導 入	①企画の説明	(GCPファイルの配布、WSの返却) 本日の内容について説明する。	3	リーダーズが別科生を呼びに行く 司会生徒あり
	②別科生紹介 ③自己紹介	各クラスに5名前後  一人ずつ自己紹介をしてもらう(3分/1名) ①名前 ②国 ③日本在住期間 ④学園生に知っておいて欲しい自国の文化 ⑤ここが変だよ! /ここがすごいよ! 日本人 ⑥日本との共通する文化	1  15	名前と国の紹介  事前に自己紹介の内容を伝えてあり、準備した内容の自己紹介(簡潔に紹介してもらう) (④⑤は選択)
展 開	④各グループに別科生1人が入り、質疑応答	別科生に対して、事前に準備した質問をする 1グループ7分。時間が来たら別科生に次ぎのグループに移動してもらう	30	
	⑤御礼	各クラスで御礼 愛唱歌「負けじ魂ここにあり」 ※歌詞カードあり	5	リーダーズが代表で挨拶をして、全員で歌う
	⑥別科生退場			リーダーズが控え室まで案内する
ま と め	⑦個人作業	【WS】振り返りを行う  今回のGCP企画の自己評価と感想を【個人WS】に記入する	10	
	⑧ワークシートの回収	GCPリーダーズがワークシートを回収。		個人・グループWS回収→担任へ GCPファイル回収→GCPロッカーへ
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GCPリーダーは説明会の時に先に企画を体験し、企画内容や流れを事前に理解しておく。</li> <li>・GCPリーダーはG分けを前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。</li> </ul>			

※別科生は、12:20に学園に到着し、昼食後、事前に質問事項(自己紹介)を記入、ネームプレートの作成なども行う



## J) ルワンダ内戦から現代紛争を考える(2年生)

### ■ 概要

11月24日に行われた第4回目は「現代の紛争」をテーマに、1994年にアフリカのルワンダで起きたジェノサイドー大量虐殺について学びました。

11月21日の帰りのHRで、GCPリーダーより、現代の紛争からルワンダの大量虐殺(ジェノサイド)から学ぶ～という事前学習冊子を配布。資料の内容は、「なぜ世界で紛争が無くならないのか」増田弘著、「隣人が殺人者になる時 ルワンダ・ジェノサイド生存者達の証言」「隣人が殺人者になると時 加害者編」ジャン・ハッツフェルド著、「NHK未来への提言 戦渦無き時代を築く」ロメオ・ダレール著 より特に学んで欲しい部分を抜粋し作成したものです。

当日は、海外ドキュメント『ルワンダ(1)』の視聴を行い、その後4名で構成する分れて、ツチ族・フツ族・国連軍兵士・TV記者に分かれたロールプレイを行ないました。これは、ルワンダ内戦の様子を模擬体験する、企画です。休憩後、海外ドキュメント『ルワンダ(2)』を視聴した後、ルワンダ内戦がおきた原因について学びました。学んだ内容は、①国内政治②植民地支配③現地民(フツ族・ツチ族)④国際社会の4点からみた内戦の原因を「フィッシュボーン」と呼ばれるチャートにまとめていきました。最後に“二度とこのようなジェノサイドを起こさないために必要なことは何か”をテーマに話し合ったことをグループごとに発表し合いました。

### ◆ 生徒感想

「今回ルワンダ内戦を勉強してジェノサイドの怖さを改めて知ることができました。殺害する人のリストを作成し、都合の悪い人を殺していく、ものすごく怖いことです。でも一番怖いのは、自分は直接には手を下さずに操っているだけの周りの国々です。何百万人もの命を無駄にしてしまったことは、絶対に忘れてはならないし、この世界に住んでいる人はこの事実をしっかりと知っていくべきです。」

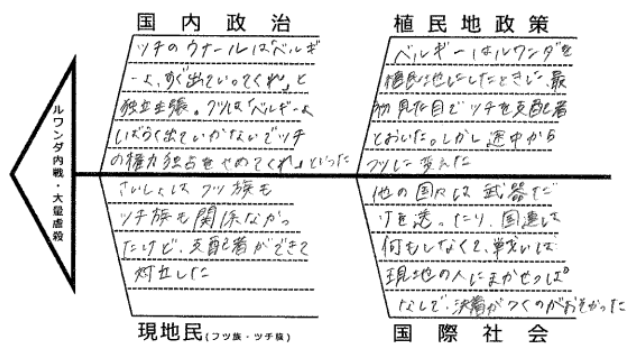


#### グループ内作業 A

VTRと『事前学習資料』を通して、ルワンダ・ジェノサイドがおきた原因を

①国内政治 ②植民地政策 ③現地民(フツ・ツチ族) ④国際社会

の4つのトピックごとに整理しながら、各自のグループワークシートにまとめてください。



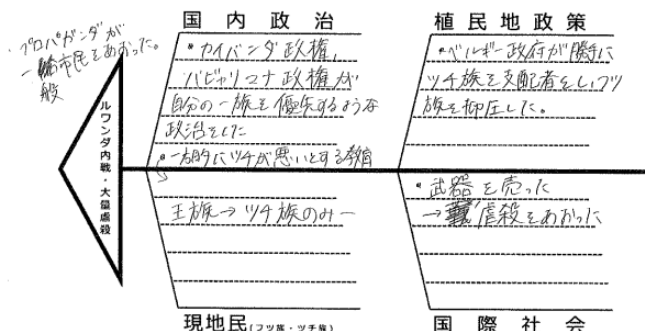
グループワークシートにまとめたものを記録しておこう!

#### グループ内作業 A

VTRと『事前学習資料』を通して、ルワンダ・ジェノサイドがおきた原因を

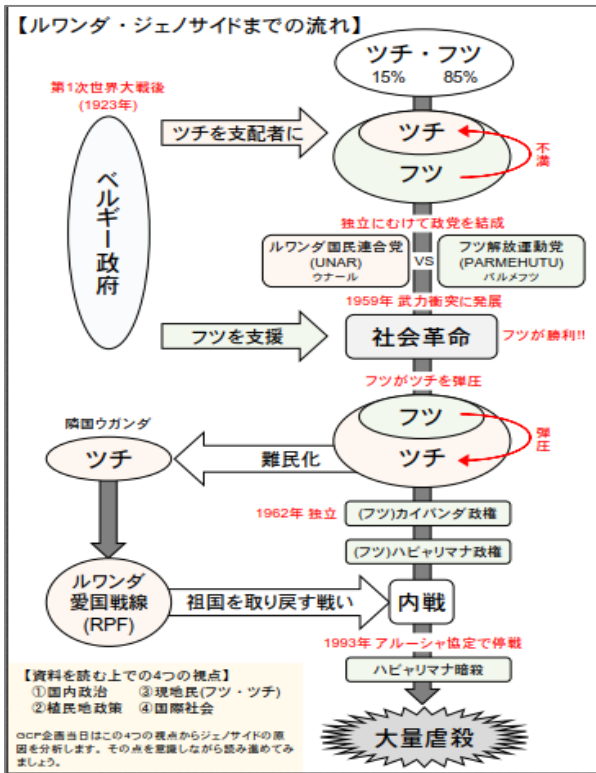
①国内政治 ②植民地政策 ③現地民(フツ・ツチ族) ④国際社会

の4つのトピックごとに整理しながら、各自のグループワークシートにまとめてください。



グループワークシートにまとめたものを記録しておこう!

内戦の起こるしくみ(まとめの図)



当日課題(ワークシート)

本日の企画を振り返り、自己評価をしましょう。該当する項目に○をつけてください。

項目	自分の考え	相手の意見	チームで協力して作業することができた	ルワンダ・ジェノサイドの背景を理解することができた	ルワンダ・ジェノサイドが起こる過程と原因を理解することができた	ジェノサイドを防ぐための方法を考え、深めることができた
GOP企画に主体的・積極的に参加することができた						
自分の意見を主張することが出来た						
相手の意見を耳を傾けることが出来た						
チームで協力して作業することができた						
ルワンダ・ジェノサイドの背景を理解することができた						
ルワンダ・ジェノサイドが起こる過程と原因を理解することができた						
ジェノサイドを防ぐための方法を考え、深めることができた						

本日の企画を通しての感想を書きましょう。

2年 組 番 氏名: \_\_\_\_\_ 捺印 \_\_\_\_\_

ロールプレイング用 立場を記述したカード(例)

Global Citizenship Project

ロールプレイング用 役割カード

役割カード① **ツチ族の少女**

【自己紹介】  
 人種: ツチ族  
 性別: 女性  
 年齢: 14歳  
 宗教: カトリック  
 好きなこと: マラソン

私は今学校に通っています。マラソンが好きで、走り方を先生に教められたことが嬉しかったです。

インタビュー① 国内の状況  
 ■ ツチ族との関係について  
 学校の周りでランニングの練習をしていると、フツ族の男子から「ゴキブリだ」といわれ、石を投げられました。  
 お父さんはフツ族は危ないから近づくなと言います。ラジオでは「おまえたちツチ族のようなゴキブリはルワンダ人ではない、駆除されるべきだ。」と言っています。  
 私にはなぜツチ族だからといっていじめられるのか、よくわかりません。でも怖いのでフツ族の子たちには近づかないようにしています。

インタビュー② 大統領暗殺後の様子  
 ■ 大統領暗殺後の様子  
 今は家族と一緒に学校に通っています。  
 学校は狭いですが、制服だけと、同様の軍服の人が守っているところ安心しています。学校の敷地の外には銃(なた)をもちた何十人もの人たちがたむろしています。お父さんはあの人たちをインテラハムエ (Interahamwe) と言っていました。学校の外からは「ゴキブリを駆除しろ!」と物騒な声が聞こえます。このまま私たちがどうなってしまうのか、少し心配ですが、ミサ(カトリックの儀式)に参加して、心が少し落ち着きました。

Global Citizenship Project

ロールプレイング用 役割カード

役割カード④ **SOKA TVの報道記者**

【自己紹介】  
 人種: 日本人  
 性別: 男性  
 年齢: 25歳  
 宗教: 仏教

私は日本から取材に来ました。南にルワンダでは内戦が起きており、街中では派手な銃撃戦が行なっています。現地の様子を知りたいのでインタビューをしたいと思います。

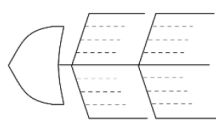
インタビュー① 国内の状況  
 それでは皆さんにインタビューをしていきます。  
 ■ ツチ族との関係について ① ツチ族の少年へ  
 ■ フツ族との関係について ② ツチ族の少女へ  
 ■ フツ族、ツチ族の関係について ③ 国連軍の兵士へ  
 ※好きな順番で、インタビューをしてください。

インタビュー② 大統領暗殺後の様子  
 それでは皆さんにインタビューをしていきます。  
 ■ 大統領暗殺後についてどう思うか ① ツチ族の少女へ  
 ■ 大統領暗殺後の様子 ② ツチ族の少女へ  
 ※最後に④国連軍の兵士にインタビューしてください。  
 ■ 大統領暗殺後の国内の状況 ③ 国連軍の兵士へ  
 ※続けて、④国連軍の兵士に次のインタビューをしてください。  
 ■ 内戦の争いを止められないのですか? ④ 国連軍の兵士へ

(ロールプレイングの終了)

■ 企画書

## GCP 企画(2年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2018年11月24日(土) 9:55~11:50 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	現代の紛争	本時の題目	現代紛争の実態と原因を探る	
本時の目標	ルワンダ内戦・大量虐殺(ジェノサイド)について国内政治・植民地支配・民族の違い・マスメディア・人権思想・国際社会等について着目しながら原因を整理し、二度とジェノサイドを起こさないために必要なことは何かを考える			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
21日(火) 帰りのSHR	GCP企画の説明	GCPリーダーズより企画の概略と当日までの課題(『学習資料の読了』)の説明	3	『事前学習資料』の配布
1時限目 (導入・展開Ⅰ)	①GCP企画の説明	本時の内容について説明する	3	『事前学習資料』持参
	②VTR学習 vol.1	ルワンダの大虐殺(ジェノサイド)がおこるまでの過程についてVTR学習	24	映像: NHK 海外ドキュメント「ルワンダ(1)」
	③ロールプレイ	4人1班のグループに分かれ、1人1役のロールプレイを行い、ルワンダ内戦の様子を模擬体験する。	15	理解してロールプレイできているかクラスの様子を確認する※リーダーズがアドバイス
休憩 10分				
2時限目 (展開Ⅱ)	④VTR学習 vol.2	ルワンダ・ジェノサイドについてまとめた映像を学ぶ	10	映像: NHK 海外ドキュメント「ルワンダ(2)」
	⑤グループ内作業A ※4人1グループ	『事前学習資料』を読み解きながら、内戦の「原因」を①国内政治②植民地化政策③現地民(ツチ族・フツ族)④国際社会の4つのトピックにグループで整理しながら、グループワークシート(フィッシュボーン)にまとめていく	20	※フィッシュボーン 
	⑥グループ内作業B ※4人1グループ	二度とこのようなジェノサイドをおこさないために必要なことは何か、グループで話し合いグループワークシートにまとめる。	10	発言や感想をフィッシュボーン周囲の余白に書いていく。
	⑦グループ発表	いくつかのグループに発表してもらう	5	
	⑧まとめ	ルワンダ内戦以外のジェノサイドについて紹介	2	リーダーズが事前に読み、どこまで紹介するか決めておくこと
	⑨個人作業	個人ワークシートに本時の感想を記入する。	5	
	⑩ワークシートの回収と次回予告		1	
課題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・グループ分けは前日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。</li> <li>・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。</li> </ul>			

## K) 人権すごろく

### ■ 概要

1月19日に行われた第5回目は、「人権」をテーマに、人権というものが、人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解すると共に、身近な生活の中から人権尊重の必要性、重要性を感じることを目標として行いました。

導入として、オリジナル教材である“人権スゴロク”を使って、楽しみながら身近な自由が、「人権」として保障されているものであることを知りました。最初に、自身の出身国や性別といった人物像が設定され、設定によって異なる結果がでるようにし、理不尽な人権侵害を体感できるようにしました。各マスには、「突然逮捕される。2マス戻る」や「テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み」など、人権に関わる内容が書いてあり、それを読み上げながら進めることで、理解を深めていけるようにしました。

続いて、人権団体：ユース・フォー・ヒューマンライツが作成した映像『人権の歴史』を視聴しました。短時間で分かりやすく人権の歴史がまとめてあり、生徒の理解が進みました。次にグループごとに、世界で実際に起きている人権問題に関するニュースを配布し、それが世界人権宣言のどの項目に抵触するかを検討しながら学びを深めました。各グループには全て異なるニュースが配られ、最後に自分たちが担当したニュースの簡単な発表を行い、他グループの学習成果についても共有できるようにしました。

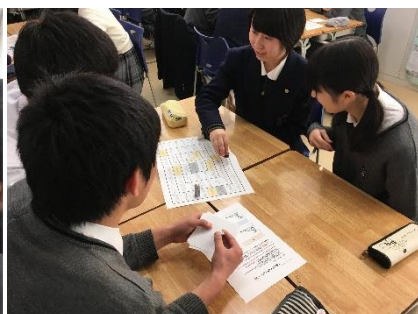
この企画を通して、平和な日常で暮らしていると意識できていなかった「人権」というものを少し身近に感じることができました。

### ◆ 生徒感想

「まだまだ国連が発表した『世界人権宣言』が全世界共通の認識として広まっていない現状を知り、今回、人権について学ぶことができ良かったです。すごろくを通して、自分がもしも黒人でキリスト教徒であったらと想像した時、肌が黒いというだけで差別を受けると思うとゾッとしました。『もしも自分が』と、その人の立場になって考えてみることの大切さに気づくことができました。」

「人権というものが世界で認められてきたのは最近のことだと分かりました。世界の指導者が、人権獲得の為に戦い抜いたことで、世界が少しずつ変わっていったのだと知りました。人が人権を獲得することは簡単ではないこと、人権がどれだけ大切なのか、映像を通し学ぶことができました。長い歴史をかけて作りあげてきた人権を二度となくさないように、私たちが守り続けていきたいと決意できました。」

「今回の企画を通して、人権すごろくで出たマスを面白おかしく楽しんでいただけ、実際にそのような理不尽な仕打ちを受けている人が世界にいるということを知り衝撃だった。また、世界人権宣言の中身に初めて触れることができ、とても貴重な機会となった。もっと学び、力をつけ、より多くの人が幸せを感じる世界を築いていきたい。」



ワークシート(例)

GCP企画【人権すごろくゲーム】

START	紛争が勃発し、住居を失う。以後2回は出た目のマイナス1	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	好きな人と結婚する。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む
右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	紛争が勃発し、難民となる。以後2回は出た目のマイナス1	好きな人と結婚する。1マス進む	Challenge③	脱税の容疑で財産をすべて没収される。1マス戻る	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む
長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	好きな人と結婚する。1マス進む	政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	長期休暇を取得し、リフレッシュする。2マス進む	Challenge⑤	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。
次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	右隣の人の奴隷となる。右隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	Challenge⑥	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	国教が定められる。以後2回は出た目のマイナス1	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	Challenge①
仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	開発したシステムで特許を取得する。1マス進む	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	GOAL	殺人容疑で裁判を受けずに死刑になる。スタートに戻る。	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み	大ケガをしたが、近くに病院がなく治療を受けられなかった。1回休み
政府を批判したとして逮捕される。2マス戻る	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	強制的に結婚させられる。1マス戻る	外国に移住する。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	失業をしたが、失業手当を上げる。1マス進む	労働組合に加入していることを理由に解雇される。2マス戻る
外国に移住する。1マス進む	仕事を辞めて大学に入る。1マス進む	テロ首謀の容疑で拷問を受ける。1回休み	大きな病気になったが保険が適用され安く治療を受ける。1マス進む	Challenge④	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る	公務員に転職し、給料が上がる。2マス進む
挙動不審を理由に1ヶ月拘束される。1回休み	Challenge②	殺人の容疑で拷問を受ける。1回休み	強制的に結婚させられる。1マス戻る	子どもを公立小学校に入学させる。1マス進む	次の自分のターンが来るまで一言も話してはいけない	ミュージカルを鑑賞し、リフレッシュする。1マス進む	左隣の人の奴隷となる。左隣の人がサイコロをふり、出た目の分戻る

(1) エジプト

### デモ隊と治安部隊の衝突 撮影しようとして死刑の危機に

2013年夏、エジプト全土でモルシ前大統領の支持者と治安部隊の間で大規模な衝突があり、約1,000人が命を落としました。最も犠牲者が出たのはカイロ近郊ナセルシティのラバア広場でした。盛り込みでモルシ復権を訴える親モルシ派を排除しようとする治安部隊が実弾や催涙ガスを使用し、数百人が亡くなったのです。

この事件では、デモ参加者が大勢逮捕されました。事件の様子をカメラに撮りようとしていたフリーの報道カメラマン、マフムード・アブセイドマンも、逮捕されてしまいます。現場にいたフランスと米国のカメラマンも同様の目に遭いました。

2人の外国人カメラマンはその日のうちに釈放されました。しかし、マフムードさんは拘束され続け、今に至ります。C型肝炎にかかっているのですが、治療を受けさせてもらえませんでした。

2年半後ようやく始まった裁判

マフムードさんは他のデモ参加者など738人とともに起訴され、2016年3月、逮捕されてから2年半以上経って、ようやく裁判が始まりました。マフムードさんが問われたのは「禁止団体(ムスリム同胞団)に所属」「殺人」「殺人未遂」「武力と暴力で体制転覆」など9つの罪でした。マフムードさんはすべてを否認。彼はただ、写真を撮るためにそこにいただけなのです。しかし、裁判で有罪になれば、死刑を科される恐れがあります。

エジプトでは2011年、30年以上続いた独裁政権が民主化運動によって倒れ、翌年、選挙でモルシ氏が大統領に選ばれました。ところが景気低迷と治安悪化で退陣を求めた声が高まり、1年もたたないうちに、軍によって解任されます。治安部隊との衝突事件では、多くのモルシ派が死刑判決を受けています。

(2) イラン

### クルド人女性のために活動して終身刑 拷問で失明の危機に

ゼイナブ・ジャラリアンさんは、イランでクルド人の権利、特にクルド人女性の地位向上に取り組んでいました。ゼイナブさん自身もクルド人です。

2008年3月、彼女は諜報機関によって突然、逮捕されてしまいます。弁護士や家族にも連絡をとらせてもらえず、8か月も独房に閉じ込められ、その間、壁に頭を何度も打ちつけられるなどの拷問を受けたと言います。そのせいで頭蓋骨にひびが入り、脳内出血を起こしました。拷問の後遺症で今も目に問題を抱え、家族の費用負担で刑務所外で手術を受けましたが、失明の危険性は消えていません。しかし治療は拒否されています。

武力闘争に関わったと疑われ

逮捕はクルディスタン自由生活党(PJAK)の武装派メンバーだと疑われたためでした。PJAKはイラン政府と戦闘を繰り返しており、イランや米軍などではテロ組織に指定されています。ゼイナブさんはPJAKの政治部門と連携することはありましたが、武装闘争との関わりは否定し続けています。

わずかで数分で終わった裁判では、神への敬意を持った罪で有罪になり、死刑を言い渡されました。その根拠は拷問で強要された自白で、PJAKの武力行動との関係を証明する証拠は示されませんでした。その後2011年12月に、最高指導者の指示により終身刑に減刑されました。

2016年4月、国連の恣意的拘禁に関する作業部会は、ゼイナブさんがクルド人の権利のために活動し、PJAKの非戦闘部門と関ったために拘束されたとする見解を採択しました。そして彼女を直ちに釈放し拘禁を受ける権利を法的に認めるよう、イラン当局に求めています。

(3) イタリア

### ロマの家族が強制立ち退き 危険な場所からまた危険な場所へ

2016年6月21日、75家族・約300人のロマの人たちが、イタリア・ナポリ近郊にある居住キャンプから強制的に立ち退かされました。

このキャンプはジュリアーノ・イン・カンパニア市が2013年に設置したもので、それまで何度も強制退去を受けてきたロマの人たちは、このキャンプに移されて3年の間暮らしていました。キャンプは有毒廃棄物の埋積場の近くで、閉鎖は健康・安全上の理由による裁判所の命令でした。そもそも居住地にするには、危険な場所だったのです。

建物のない代替地

ジュリアーノ市は新たな居住地を作ることになりましたが、完成まで住む場所として市が急ぎよ用意した所は、ひどいものでした。テニスコート4面分ほどの狭さの花火工場跡地で、周りは雑草だらけ。トイレは二つしかなく、一つはぼろぼろ、一つは壊れていました。排遺物を化学処理するトイレと貯水槽が設置される予定ですが、あまりに劣悪な環境です。

家屋もなく、住民たちはトレーラーを持ち込むことを許可されましたが、トレーラーを持っていない家族は外で寝泊まりするしかありません。がれきりやさびた釘、「自然発火物」「粉」と書かれた怪しげな容器などが転がったままで、健康面でも安全面でも適切な場所とは言えません。

少数民族ロマの人たちの強制立ち退きは、イタリア各地で行われています。EUが社会統合に向けて資金援助しているにもかかわらず、ロマに対する差別と偏見がまん延し、へんびな場所に居住区を作るなど、イタリア政府は隔離政策を改める様子はありません。

■ 企画書

## GCP 企画(2年)

教科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年1月19日(土) 8:55~10:45 (100分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	人権	本時の題目	「世界人権宣言」を学ぶ	
本時の目標	「人権」とは何かを知り、人権が人類の長い歴史の中で民衆が勝ち取ってきたものであることを理解する。また、『世界人権宣言』を通して、世界の人権問題を考える。			
項目	項目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
1 時 限 目	SDGsの振り返り	SDGs についての振り返りを行う	3	時間になった時点で全グループ終了  ユース・フォー・ヒューマンライツ作成
	①GCP企画の説明	本時の内容について説明する	2	
	②人権すごろくゲーム	ルール説明 4人1組になり、A~Dを割り当てる ルールに従い、すごろくゲームを行う	5 15	
	→ゲーム振り返り	個人ワークシート配布。①に取り組む	3	
	③VTR学習	「人権の歴史(10分)」を視聴する	12	
	④世界人権宣言を学ぶ	世界人権宣言配布。グループで簡易文を読み合わせ、ゲーム中に自分が制限された人権とは何かを考え、ワークシート④に取り組む。	10	
2 時 限 目	⑤世界の人権問題を学ぶ	ワークシート「世界の人権問題を知ろう」配布。グループごとに異なる人権に関するニュースを読み、世界人権宣言に照らしてどの人権が制限されているかを考える	20	
	⑥他のグループと共有	「世界の人権問題を知ろう(一覧)」を配布。グループを組み替え、新たな4人1グループで作業の内容を共有する。	15	
	⑧振り返り・まとめ	本時の振り返りとまとめを個人ワークシートに行う	10	
	⑨ワークシートの回収と次回予告		2	
課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。</li> <li>・グループ分けは前々日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。</li> <li>・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。</li> </ul>			
講 評				

## L) 人権 ディベート

### ■ 概要

第5回のGCP企画(世界人権宣言に学ぶ)に引き続き、「人権」への理解を深めることを目的として、2月9日、16日の2日間にわたり人権ディベートを実施しました。これは、ディベートの手法を用いて少年犯罪の実名報道について知り、そこから、「個人の基本的人権」と「公共の福祉」がぶつかる例について考え、さらに他者の人権を尊重するための方途を探るものです。

人権ディベートを行う「基礎体力」は、言語技術の授業でトレーニングしました。週1回行われるこの授業では、「創価高校は定期考査を廃止すべきである」「創価高校は制服を廃止すべきである」など、身近で、背景知識の必要でない論題でディベートを実施。創立者がかつて「互いの討論を通し、問題の核心に迫り、より優れた解決法を見つけていく『創造的議論』がディベートなのである」と語られたことを、実感を持って学ぶ事ができました。

9日の準備の日には、ディベートについての講義を受け、言語技術の授業で学んだ知識を再確認するところから始めました。そして、この企画では時間がないため、事前に肯定側と否定側に分かれ、立論、質疑、アタック、ブロックを考えました。また、個人ワークシートに従って進めていくと、そのまま試合ができるようにしました。16日の本番までに1週間あったため、それぞれ準備を進め、当日の1限目に最終準備の時間を取り、本番に臨むことができました。第1試合は経験者を含む4グループが試合を行い、残りの8グループはジャッジをしました。第2試合で、ジャッジをしていた8グループが試合を行い、4グループがジャッジを行いました。少年犯罪をめぐる本番の論題は、生徒たちには少し難しく、その場で相手のアタックに切り返し、効果的にまとめを行うことができない部分もありましたが、言語技術の授業で学んだ技術を活かして、論題について、複眼的に考えることができました。

### ◆ 生徒感想

「自分の意見の中に一貫した主張を一つ決めておくことが必要だった。今回の議題を通して、様々な社会問題が本当に難しいということを改めて学んだ。」

「言語技術でディベートを行って今日の本番に臨んだが、自分の番になると焦りが出てしまい思うようにできなかった。その中で、相手の意見にすぐ反論するなどディベートでしか鍛えられないことも鍛えられた。また、ディベートはただの言い争いではなく、審判を納得させなければならないものだとして改めて気付かされた。将来、グローバル化が進み、自分の意見をしっかり持つことが重要になると思うので、こういった経験は大切なものだと感じる。」

「少年犯罪の実名報道が今回の論題であったが、ディベートをすることは一概に良い悪いが言えないからこそ、面白いものだと感じた。こういう論題を研究する上で日本と世界の違いを知ることができ、また、集団的価値観がどうなっているのかを知ることができ、とても面白かった。」



## GCP 企画「人権」ディベートワークシート【準備② メリット・デメリットを考える】



### ● 少年犯罪の「実名報道」ってなに？

2015年2月に神奈川県川崎市で少年が殺害され、容疑者として3人の少年が逮捕されました。そんな中、ある週刊誌が、逮捕された少年のうち一名を実名と写真付きで公表したことで、少年法第61条が注目されています。この条文は、犯罪等を犯した少年の氏名・写真など、少年を特定できるような情報の報道（推知報道）を禁止しています。

#### <少年法 第61条>

家庭裁判所の審判の審判に付された少年又は少年のとき犯した罪により公訴を提起された者については、氏名、年齢、職業、住居、容ぼう等によりその者が当該事件の本人であること推知することができるような記事又は写真を新聞紙その他の出版物に掲載してはならない。

その主な目的は、少年の社会復帰のためと一般に説明されます。犯罪事実が実名・顔写真等とともに公開されると、たとえば少年が少年院等で反省して出所し、新たな人生を歩もうとしている時に、世間の偏見（ラベリング）等により人生をやり直すことの妨げになるため、人格生成過程にある少年の将来を考慮し、実名報道を禁止する必要がありますのだといわれます。少年法は、20歳未満の者を「少年」と定義し、その少年の立ち回り（社会復帰・更生）のためのさまざまな措置を定めているわけです。

### ● メリットとして想定されること

#### 少年犯罪の抑止効果

現状では、罪を犯しても実名が公開されないため、あたかもそれが、社会や世間から「守られている」という意識を生み、犯罪行為へ走らせてしまう危険性があります。実名報道が行われるようになれば、罪を犯した際に、成人と同じ社会的制裁を受けることになり、このような、犯人として世間に知れ渡ってしまうというプレッシャーが、少年犯罪の抑止効果につながることが期待できます。また、社会的制裁を受けたことで、再犯を起こさにくくなることも考えられます。

#### ネットによる不正確な情報拡散の防止

現状では、実名報道が行われていないために、凶悪な少年犯罪が起こった場合、一部ユーザーによってインターネットの掲示板等で犯人を特定するため書き込みが行われることがあります。その際に誤った情報によって無実の少年がつかまわたり、挙げられてしまう危険性もあります。匿名報道では内容の正しさを確かめることができず、誤った報道が見過されたままになってしまいうからです。

実名報道が行われるようになれば、無責任なうわさや臆測の独り歩きを是正し、透明性を確保することができ、無実の少年が犯罪者扱いされる危険性を防ぐことができます。

#### メディアの「報道の自由」の確保

新聞やテレビなどのメディアには、国に左右されず重要と思われれることを国民に伝える「報道の自由」があるとされています。しかし、現状の少年法（第61条）では罰則規定はないものの、少年犯罪の加害者の実名報道は禁止されています。実名報道が行われるようになれば、メディアの「報道の自由」を確保することができます。

#### 被害者・市民の「知る権利」の保障

日本は民主主義国家であり、主権者である国民には国のあり方を考えるのに必要な情報を「知る権利」があるといわれています。

現状では、少年犯罪の加害者が誰なのか、どのような人間なのかを知るべきではありません。これは、被害者であっても同じです。

実名報道が行われるようになれば、こうした被害者や市民の「知る権利」を保障することが可能になります。犯罪の原因や今後の防止策などについて、国民全体で議論していくためには、その犯罪事実について、事件の背景なども含め、できるだけ正確で、わかりやすい情報が必要になるといえます。

### ● デメリットとして想定されること

#### 加害者の人権侵害・更生の阻害

現状の少年法は、処罰することよりも少年の更生に重きを置いているため、実名報道には消極的立場をとっています。少年には社会復帰のために犯罪事実を匿名で公表されない権利があると捉えるのです。実名報道が行われるようになれば、加害者のプライバシーを著しく侵害したり、心を傷つけてしまったりする危険性があります。報道が過熱し、犯罪と直接関係の無いような情報まで日本中に報道されてしまい、社会復帰そのものや、就職が困難になる可能性も考えられます。その場合、再犯につながる危険性もあります。

#### 模倣犯の増加

現状では、加害少年は「少年A」といったような匿名で報道されています。実名報道が行われるようになれば、犯人が有名化・偶像化され、犯行の口吻や犯人の性格・趣味などの詳細が合わせて報道されることで、同年代の少年たちの中から加害少年をヒーロー視した模倣犯が出てくるおそれがあります。一部には重大事件を真似することによって社会的な注目を集めたことが「模倣犯」を誘発してしまう危険性があります。

#### 保護者・親族の報道被害

少年犯罪は、監督責任をもつ保護者が批判の対象になることもしばしばです。しかし、環境は家庭によって様々ですし、一概に保護者の責任を追究することが正しいとは限りません。実名報道が行われるようになれば、そうした保護者にも直接波及の目が向けられ、また、関係のない親族までもが批判の対象になることも考えられます。その場合、平穏な日常生活が阻害され、とすれば職を失う事態にもなりかねません。少年の健全な更生のためにも、生活が経済的に安定していることは重要な要素とも言えます。

#### えん罪被害

誤認逮捕やえん罪はあってはならないことではありませんが、万が一そのようなことが起こった場合であっても、実名報道がなされなければ被害をある程度食い止めることができます。実名報道が行われるようになれば、本来無実であった少年が裁判前からあたかも犯罪者のように実名が報道され、名誉を著しく傷つけられてしまうことがあり、一度広がった情報を修正することは大変困難です。無実の少年が犯罪者扱いされ、社会的制裁を受ける危険性は避けるべきです。

#### 【アタックのポイント】

「少年」は、将来において社会を担っていく大人になるための生育途上にあるものです。そのような生育途上にある少年が過ちを犯したからといって、これを成人と同じように社会的制裁を加えることは、少年をきちんと教育していない親を含めた大人が負うべき責任を少年に押し付けることになりかねません。

しかし、現状のままでは、少年の更生や社会復帰にはプラスにもなりません。どちらかといえば重要な権利であり、「報道の自由」「知る権利」を考えるとマイナスになります。少年の更生や社会復帰にはプラスにも見えます。憲法の観点からみても、少年の更生や社会復帰の利益のほうを優先させる立場をとっているようにも見えます。憲法の観点からみれば、これに十分な理由があるかどうか、表現の自由への過剰な制約ではないか、という問題も提起され得ます。しかし、必ずしもメディアが節度ある報道をするとは限りません。視聴者の興味関心をかき立てるだけの悪質なメディアも存在します。また、インターネットによりメディアで報道されなくても、ネット上で露かしてしまいうケースもあります。一部週刊誌が罰則規定のないことを理由に実名報道をしても、ネット上で露かしてしまいう場合、メリットやデメリットがどの程度の規模で発生するのか、よく注意する必要があります。

★この他に思いついたらメリット・デメリットを挙げてみよう!!



■ 企画書

## GCP 企画(2年)

教 科	GCP		担当教員	各担任	
実施年月日	2019年2月9日(土) 10:35~11:45 (70分) 2019年2月16日(土) 10:00~11:55 (115分)		生徒在籍数	各クラス在籍数	
単 元 名	人 権	本時の題目	身近な人権・創業者の人権闘争を学ぶ		
本時の目標	ディベートを通して身近な人権について考え、創業者の人権闘争を学ぶ中で、生活の中で他の人権を尊重するための方途を探る。				
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他	
9日 (土)	導 入	①TV中継 ・ディベートの方法についてレクチャーする ・今後の流れについて説明する	15 3	リーダーズが各教室で流す	
	展 開	②グループ作業 論題「メディアは、積極的に少年犯罪の実名報道をすべきである。是か非か」 (1)ブレンストーミングを行い、論題導入によるメリットとデメリットを考える (2)グループごとに肯定側・否定側にわかれ立論・反駁作成を行う	50	携帯を使用可にするか検討	
16日 (土)	8:55~	③グループ作業 事前準備の詰め、原稿読みあげ練習	50		
	展 開 10:00~ 11:55	④ディベート(第1試合)	第1試合のグループがディベートを行う 肯定側立論(2分) 否定側質疑(2分) 否定側立論(2分) 肯定側質疑(2分) 否定側アタック(2分) 肯定側アタック(2分) 否定側ブロック(2分) 肯定側ブロック(2分) ジャッジ・講評(3分) 移動	25 3	
		⑤ディベート(第2試合)	第2試合のグループがディベートを行う 肯定側立論(2分) 否定側質疑(2分) 否定側立論(2分) 肯定側質疑(2分) 否定側アタック(2分) 肯定側アタック(2分) 否定側ブロック(2分) 肯定側ブロック(2分) ジャッジ・講評(3分)	25	
	休憩		15		
	⑥振り返り	ディベートの反省・改善点を挙げ、議論を通して感じたこと、学んだことを振り返る	5		
	⑦VTR鑑賞	VOD『人権の夜明けのために~ローザ・パークスと池田大作~』を視聴する	17	リーダーズが各教室で流す	
	⑧振り返り・まとめ	個人ワークシートに本時の感想を記入する	10		
	⑨ワークシート回収		3		
	課 題	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GCPリーダーは説明会の時に先にVTRを鑑賞し、企画内容を担任と共に事前に理解しておく。</li> <li>・グループ分けは前々日までに決めておき、当日教室のホワイトボードに座席割り振りを記入する。</li> <li>・担任はGCPリーダーズの進行のサポートをする。</li> </ul>			
講 評					

## M) SDGs Card Game を通して地球規模課題を学ぶ(1・3年生)

### ■ 概要

昨年度、担当教員と GCP リーダーで企画立案し、新たに開発したカードゲーム型の教材を使用し、企画を実施しました。2015 年に国連で採択された「2030 アジェンダ・持続可能な開発目標 = SDGs」を体験的に学ぶことを目的に行われ、3～4 人グループで 9 カ国にわかれ、各国が抱える課題が SDGs のターゲットとしてカードにしたものを配布。各国はそれらの課題を「アイテム」を使って解決していきます。解決することで「ポイント」を得ることができ、最終的に一番ポイントを獲得した国の勝利となります。

教室前方の画面には、SDGs の世界全体の達成状況がわかるバロメーターが表示されており、自国の課題解決とともに、自国がすべてクリアしても、他国がクリアできなかった場合はポイントが減点されてしまうため、世界で SDGs の達成を目指し、道具の貸し借りや、融資など、互いに協力しあって交渉を進めていきます。

「アイテム」には「お金」と「アイデア」があり、「お金」は貿易ゲームの容量で、道具と紙をつかって製品をつくり、マーケットで換金することで得られます。「アイデア」は自国の教育水準や知的活動の指数をあらわしており、さまざまな課題を解決していく中で得ることができます。

各国の課題やそれを解決するための経済力や教育力の必要性、国際社会における援助のあり方、協力関係の構築など様々なことをカードゲームを通して体験的に学びました。


### ◆ 生徒感想

「今回の企画を通して、自分の事を考えているだけでは、世界全体の幸福は実現できないということを学んだ。資源やお金があって豊かな国でも、他の国と協力しないと SDGs を達成できず、自分たちも損をするルールだったため、周りの国のことも気かけながら進めなければならず、難しかった」

「頭をたくさん使わないといけなくて大変だったが、世界の問題の大変さを知れてよかった。とても楽しかったし、友人とも協力しながらできてよかった。たくさんのことを学べた」

「他国との協力がなければ、SDGs 全てを達成することは絶対に不可能だと強く感じた。特に今回自分が貧困国の立場になってゲームをして、国を発展させることは難しいし、自力ではほとんど何もできないことわかった」





**SDGs Card Game**  
Designed by SOKA Gakuen

**1 ゲームの流れ**

参加者(学習者)は、9カ国のグループにわかれ、はさみや鉛筆などの道具と紙を使って「製品」を作り、「マーケット」で売って「お金」を得たり、自国の教育力を証明することで「アイデア」を得たりする。それら「お金」「アイデア」のアイテムを使って、自国の課題が示された「ターゲットカード」を実行(国連)提出し、2030アジェンダ・SDGsの達成を目指す。

**「ターゲットカード」を実行することで得たポイントの合計数をグループごとに競うゲーム。**

アメリカ

インド

リベリア

日本

ブラジル

ハイチ

イギリス

中国

カンボジア

**2 ルールの詳細**

SDGsの17項目169ターゲットを各項目1~3ターゲットにし、35種類のターゲットカードが用意されている


「共同提出国数」には、同じ種類のカードをもっている国の数が表示されている。それらの国でターゲットカードと「必要なアイテム」を分担して提出しなればならない。どの国がどの種類のターゲットカードを持っているかは「国連」が情報をもっている。

ターゲットカードを実行するにはアイテムが必要になる。共同提出国数が増減の場合、それらの国でまとめて用意する必要がある。(カードに書かれている枚数は共同提出国で合算した数)


ターゲットカードを実行するとリターンとして指定された「ポイント」とカードによって製品を作るための道具を受け取ることができる。「共同提出」で提出した場合、得られるポイントカードは提出国で山分けする。

「実行条件」に書かれているターゲットカードが既に提出済みでない、ターゲットカードは実行できない。提出状況は「国連」で確認することができる。

**ターゲットカード**



**アイテムカード**



**1 ゲーム進行のルール**

- ・グループの中から「国連大使役」と「労働者役」を1名ずつ決める。
- ・交渉や作業はゲームで提供されているもののみを使用する。
- ・「ターゲットカード」と「教育水準評価書」の交換を除けば、交渉内容は原則自由。道具やアイテム、ポイントの交換したり、譲渡したりすることは各国ごとの条件次第で自由に行うことができる。

**2 取り引きのルール**

**国連・国際機関**

**ターゲットカードの処理**

- ①必要なアイテムをそろえ提出する。共同提出が必要な場合は、代表者のグループがアイテムをそろえてターゲットカードを提出する。提出の際は、**カードの文章(ターゲット)を読み上げる。**
- ②指定されたポイント、道具などを受け取る。
- ③ターゲットカードは自国に持ち帰る。ただし、再利用はできない。

**「アイデア」カードの交換**

「教育水準証明書」の問題に正解していれば提出するレベルごとに指定された枚数の「アイデア」カードを受け取ることができる。

**開発交換**

国際機関はさまざまな道具をもっている。各国は国際機関に相談することで、必要な支援を受けられる場合がある。ただ、道具そのものを借りることはできない。

**国連開発援助会議**

国連が「国連開発援助会議」を開催する場合、各グループの国連大使は参加しなければならぬ。

**「製品」と「お金」の交換**

「労働者」が生産した「製品」を「お金」に換金できる。**道具は労働者しか使えない。**

13cm×8cmの長方形	3枚1組 = 1G
直径 9cmの半円(ゆげ器の形)	3枚1組 = 3G

**開発援助のための融資**

開発銀行より1口3Gから融資を受けられる。ただし、「**ポイントカード**」を所持していないと融資が受けられない。また、**定規をもっていない国限定。**

融資：1口3G ~ 金利：1口+1G

**資源獲得のための投資**

資源獲得のための投資をすることができる。

赤コース：1回1G → 青コース：1回3G

赤いサイコロを振る → 青いサイコロを振る

サイコロを振り、出た目の枚数の紙をもらう。

**ポイントと「お金」の交換**

1ポイントにつき1Gを交換することができる。**ただし、その逆はできない。**

**3 ターゲットカードの交換**

・ターゲットカードを全てクリアすることを指し、獲得したポイントの数を各グループごとに競う。

・全ターゲットを達成した順番でポイントを獲得できる。1位：?P、2位：?P、3位：?P、4位以下：?P

・自国のターゲットカードが提出できていない場合、未提出の枚数×マイナス?P。

・全て提出できた国でも、他国でクリアできていない国が1つでもあった場合はマイナス?P。

※これらのポイント数はゲーム終了後に発表する

■ 企画書

## GCP 企画(1年) SDGs Card Game

教 科	GCP		担当教員	各担任
実施年月日	2019年2月16日(土) 10:00~11:55 (110分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	国際理解	本時の題目	「持続可能な開発目標 (SDGs)」	
本時の目標	「持続可能な開発目標 (SDGs)」をテーマに、「SDGs Card Game」に取り組み、SDGsの意義や働き、世界が抱える諸問題の連動性や世界が協働することの重要性を学ぶ。			
時 刻	項 目	授業の進行内容 (発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
事前準備 (前日まで)	グループを決める グループ担当国を決める	クラスの生徒を9国に振り分ける。 「ファシリテーター」「国連」「マーケット」 の担当生徒を決める		
(当日) 休み時間	配席準備・座席移動	机を「配席図」の通りに並べ 着席してもらう		
授業開始	①ゲームのルール・意図の 説明	「ファシリテーター」よりゲームの主旨と手 順を説明する。	5	ルールブック配布
	②作戦会議	「国連」より道具やカードを渡す。 グループは席について道具を確認し、ル ールをよく確認して作戦会議をする。	15	道具の配布
	③SDGs Card Game	前半戦 (前半戦終了時刻を板書する)	25	※ターゲットカードを実 行させるときは、必 ず項目を音読して もらう。
		休憩 ※状況に応じていれなくても良い	5	
前半戦の振り返り 「ファシリテーター」より前半戦のゲームの 様子を振り返り、後半戦に向けての状況整 理やアドバイスをを行う。		3		
後半戦 (後半戦終了時刻を板書する)	25			
④振り返り・感想記入	ワークシートを配布し、グループごとに振り 返り、感想を記入する	10	ワークシート配布	
⑥片付け	説明に従ってグッズを片付ける	10		
課 題				
講 評				

## N) 模擬国連① COP21 (3年生)

### ■ 概要

模擬国連とは、実際に国連で行われている国際会議をモデルにして、一人一人が世界各国の大使となって会議・交渉を行うものです。今回は、気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラスを15の国に分け模擬国連を実施しました。

2020年以降の新たな枠組みの創設を目指し、論点①「2020年以降の温室効果ガスの新しい削減目標」、論点②「先進国と途上国の扱いをどのように区別するのか」という二つの論点に沿って、それぞれの国の立場で交渉を重ねました。会議の最後には、決議案を全会一致で採択することを目指しました。

### ■ 前年度との変更点

前年度では、準備1回の後に本番1回の形を取っておりましたが、本年度は準備2回の後に本番1回の形をとりました。準備の1回目ではPosition Sheetというワークシートを使って、与えられた各国のことを自分で調べました。準備の2回目ではクラスを超えて自分の与えられた国の情報交換を行い、準備を重ねて本番を迎えることができました。

### ◆ 生徒感想

「実際の会議の疑似体験と言う貴重な経験をして国際協力の難しさを学びました。思ったのは国によって前提となる状況が違いため、全員が決議案の選択肢に当てはまるわけではないので、より慎重に“責任”や“柔軟な解釈”といった言葉の定義などを確認しあいながら、中国など複雑な状態の国に配慮し、友好関係にある国が適切に支援できたらいいのかな、と考えました。」

「今日私は議長とインドネシアの大使として国連に参加しました。全体を限られた時間で回すのも大変でしたが、各国が似たようで違う意見を持っている中で、いかに1つの意見にまとめることが難しいか、身をもって思い知りました。これが国同士と言う話になると、クラスの人同士と異なり、価値観も文化も違う知らない人がお互いの意見をぶつけ合わないといけないので、こう簡単にはまとまらないだろうな、と感じました。世界のこうした問題に対して、それぞれの国がお互いのことを考えながら、利己的にならずちょうど良いところを目指して深いところで話し合わないといけないと感じました。全体を動かす全体を動かす側と動く側の両側面からこの企画を体験できてよかったです。」



### GCP 企画(3年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実 施 年 月 日	2018年6月16日(土)10:00~11:55(50分×2)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	地球環境問題	本時の題目	模擬国連の開催(気候変動枠組み条約)	
本 時 の 目 標	気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラス15の国に分かれて模擬国連を実施し、地球環境問題を取り巻く各国の主張や、国際関係を体験的に学ぶ。また、交渉の過程を通して、スピーチ力、プレゼン力、論理的思考力の育成を目指す。			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
展 開	GCP企画の説明(模擬国連とは何か)	パワーポイントをつかい模擬国連の概観と趣意の説明。今日の課題(Position Sheet)の作成の説明。	2.5	「模擬国連とは」のppt資料配布
	事前学習①:「COP21」とは何か	模擬国連のテーマとなる「COP21」とは何か、気候変動枠組み条約の基礎知識を学ぶ	2.5	「事前学習資料①」配布
	事前学習②、③: 国別に分かれて事前準備	各組ごとに分かれ、準備を行う。 ①会議での議決の意思 ②自国の状況を理解し、Position Sheetを作成する ③スタンスペーパーを読み込む ④決議案の作成 実施は2を中心に行う。	5.0	「事前学習資料②」「Position Sheet」「スタンスペーパー」の配布  Position Sheetの作成にはスマホを用いて良い
課 題	・2学期(9月中)にGCPリーダースで実際にプレ模擬国連を開催する。			
講 評				

日本模擬国連主催  
模擬国連プログラム  
2018年6月16日(土)  
@創行高等学校

f Japan Model United Nations(日本模擬国連)  
@JMUNOffice

### 実際に使用したスライド

Model United Nations  
・国連や安全保障理事会、経済社会理事会などの国際会議を「模擬」する活動

→一人一人が**世界各国の大使**になりきる！  
自国に有利なように他国と交渉していく

### GCP 企画(3年)

教 科	GCP		担当教員	各担任
実 施 年 月 日	2018年10月24日(水)14:45~15:50(65分)		生徒在籍数	各クラス在籍数
単 元 名	地球環境問題	本時の題目	模擬国連の準備(気候変動枠組み条約)	
本 時 の 目 標	気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラス15の国に分かれて模擬国連を実施し、地球環境問題を取り巻く各国の主張や、国際関係を体験的に学ぶ。また、交渉の過程を通して、スピーチ力、プレゼン力、論理的思考力の育成を目指す。			
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他
展 開	GCP企画の説明(概要・本日の流れ)	パワーポイントをつかい模擬のGCP企画を思い出す。本日の流れを確認する。	5	「事前学習資料①」配布
	事前学習 クラス毎に各国に分かれる	国毎に集まり、以下の作業をする。 ① Position Sheet の確認 ② 決議案の作成 ③ スピーチの原稿を考える	2.5分	資料を紛失している人には、S411に取りに行く。
	移動	クラスを超えて国別に集まる。 (1クラスに2ヶ国が集まる) ※全15ヶ国	5分	
	事前学習 国別に分かれる	GCPリーダースが進行役になり、同国同士で、準備共有を行う。 ① Position Sheet の確認 ② 決議案の共有 ③ スピーチ内容の共有	2.5分	
	移動・まとめ	自クラスに戻り、決意の確認。本時までに国別に情報を立てる様に促す。	5分	
課 題	・2学期(11月中)にGCPリーダースで実際にプレ模擬国連を開催する。			
講 評				

### GCP 企画(3年)

教 科	GCP		担当教員	各担任	
実 施 年 月 日	2018年11月24日(土)10:00~11:55(115分)		生徒在籍数	各クラス在籍数	
単 元 名	地球環境問題	本時の題目	模擬国連の開催(気候変動枠組み条約)		
本 時 の 目 標	気候変動枠組み条約の締約国会議「COP21」をテーマに、各クラス15の国に分かれて模擬国連を実施し、地球環境問題を取り巻く各国の主張や、国際関係を体験的に学ぶ。また、交渉の過程を通して、スピーチ力、プレゼン力、論理的思考力の育成を目指す。				
項 目	項 目	授業の進行内容(発問も)	時間(分)	留意点・準備・その他	
展 開	11月2日(?)	事前学習 模擬国連の流れの説明	GCPリーダースが、模擬国連の当日の流れを説明し、国別に最後の準備を行う。	2.0	「模擬国連の流れ」のppt資料配布
	11月24日(土)準備	① 国名を覚える、国名プレートを設定 ② 国名カード・出席国の確認	会議開始のための準備を終え、国別に最後の確認を行う 議長の国名宣言と出席国確認を行う ・「Yes/Yes present」と答える	1.5 2	配布・会議設置
		③ スピーチ(前半8カ国)	スピーチをしたい国を募る ・希望する国はプレートを挙げる	2	「スタンス Memo」1分をタイマー表示
		④ スピーチ(後半7カ国)	各国、一分でスピーチを行う。参加国は各国の主張をメモにとる	9	30分をタイマー表示。議長、総司官は各国の議決に動く。
		⑤ アンモデ(自由交渉)	議長室に9カ国以上の署名を集めるために自由に行き回って交渉を行う	3.2	
		⑥ スピーチ(後半7カ国)	各国、一分でスピーチを行う。参加国は各国の主張をメモにとる	8	1分をタイマー表示
		⑦ アンモデ(自由交渉)	9カ国以上の署名を集めるために交渉を行い、署名が集まった議長に提出する。採択の際に反対する国が出ないように、非署名国にも交渉を勧める	4.2	40分をタイマー表示
		⑧ 決議案の読み上げ	提出された決議案を議長が読み上げる	5	決議案を受け取ったら伊青書は電子版に書き込む
		⑨ 投票	コンセンサス採決を採用し、反対が1カ国でもあれば採決とする	1	反対する国はプレートを受け取る
		⑩ 閉会宣言	議長の開会宣言と委員の前時で閉会	1	
ま と め	⑪ 振り返りの記入	「Reflection Sheet」に振り返りを記入する	1.0	「Reflection Sheet」配布	
課 題					
講 評					



## 0) ファイナル・プロジェクト (3年生)

### ■ 概要

2016年度に、これまで各教科で個別に展開されてきた探求学習を統合し、教科横断型のプログラムを組めないかというアイデアが生まれ、全校対象企画のGCPで進めている探求学習の集大成として、「現代社会」と「英語表現」がコラボレーションした「Final Project」という企画が着想されました。

「Final Project」は1・2年生でのGCP(Global Citizenship Project)の取り組みを通して興味・関心をもった分野をSDGsの17のゴールの中から一つ選び、探究活動を進めるものです。

GCPでは、「2030アジェンダ・SDGs」を活動の中心に据え、環境・教育・人権・紛争解決・核軍縮などをテーマに、1年次より様々な企画に取り組んでいます。リンクマップ作りや貿易ゲーム、模擬国連や独自の教材などを用いて、地球規模課題やSDGsへの関心を高めてきました。そして、3年次に「現代社会」の授業内容とも関連させ、これまで学んできたSDGsの17のゴールの中から、自分をもっとも興味をもった分野からテーマを設定し、日本語と英語の二言語でポスターセッションを行う「Final Project」を進めています。

そして今年度は、本校がSGHとしての出発を切ると同じタイミングに入学し、言語技術の授業を受けてきた生徒が3年目となり、「現代社会」と「英語表現Ⅱ」に加えて「現代文B」の3教科横断型の取り組みに力を入れて実施しました。

### ■ 企画の流れ

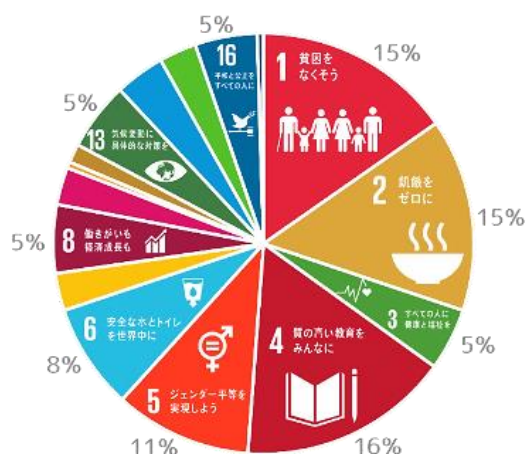
#### 【現代社会】

この企画の準備は、主に週2時間の「現代社会」の授業を中心にを行いました。

生徒たちは一学期の5月からテーマの選定に着手しました。SDGsの17の目標から大テーマの一つを選び、さらにそれを分析するための「リサーチクエスト」を設定していきます。

さらに自分が掘り進めたいと思う小テーマを設定します。テーマ設定においては玉川学園発刊の『学びの技』を使用し、調査対象が広すぎるテーマ、専門的すぎて狭すぎるテーマ、調べたらすぐに結論が得られてしまいそうなテーマなど、さまざまなケースを学び、検証させました。生徒が選んだテーマの内容と内訳を見てみると、「1 貧困をなくそう」「4 質の高い教育をみんなに」「5 ジェンダー平等を実現しよう」が特に関心の高い分野であることがわかります。

教員からもフィードバックを与え、一学期に確定させた小テーマをもとに、夏休みには素材集めのための徹底的なリサーチを行います。その際には、インターネットの文献は控え、本や雑誌などの書籍を調べることを。図書館に必ず1回以上行くこと。必要に応じて資料館などのフィールドワークを行うことを課題として課しました。







そして、2学期になり、現代文で執筆したレポートをもとに11月にポスター制作に入りました。ポスターを作成する際には、「見せるポスター」「読ませるポスター」を意識させ、レイアウトや文字の大きさやフォント、色使いなどの最低限のデザインについて学習を進めました。また、発表の際の声や姿勢、アイコンタクト、ボディランゲージ、ナンバリングなどの基本的な方法についてもレクチャーを行いました。これらのことを一度11月中にポスターセッションを行った際に、生徒同士で相互チェックさせることでブラッシュアップを行いました。冬休みには、ポスターの修正を行いクラス内でも発表に向けて最終調整を行いました。発表自体は6分前後で組み立てていたため、本番では質疑応答も含めて10分という時間をどうデザインするのかを生徒たちに考えさせました。



いよいよ迎えた本番では、体育館全面を利用し、盛大にポスターセッションが行われました。1・2年生もオーディエンスとして参加し、前後半2回にわけた発表のうち、1回は決められた場所に、もう1回は自分の聞いてみたい先輩のところに行くという形をとりました。また、本年度はこのポスターセッションを保護者や一般の方にも公開しました。さらに、過去2年間の反省をいかし、発表のブースの間隔を広げるために体育館中央にもパネルを設置し、発表スペースを増やしました。全体として過去と比較して、活気溢れる発表の場となりました。



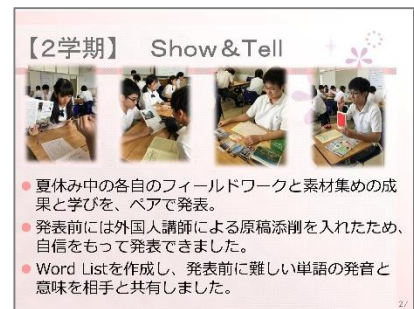
## 【英語表現Ⅱ】

今年度の3年生の授業は週3回あり、日本人1人と外国人1人の体制でファイナルプロジェクトへの取り組みを行いました。

目標として、「地球規模課題について、英語で知識を深めるとともに、自信をもって英語で発信する力を養うこと。また、そのために不可欠な力として、英文法・会話・クリティカルシンキング・ライティング等の力を培う」ことを掲げ、最終成果として、現代社会で行ったポスターセッションを、紙面やスピーチも含めてオールイングリッシュで行いました。

1学期は、5W1Hを意識させるようなアクティビティーや「事実と意見」を区別するクリティカルシンキングを主に会話ベースで行いました。また、最終的な発表の原稿を英語化していく上で必要となる、英文法についても復習と同時に毎週80～100wordsのライティングを1本行い、その都度、外国人講師に添削をしてもらいました。

夏休みには、現代社会の課題と併行し、各自で実施したフィールドワークで集めた素材をもとに、5W1Hを意識して200～300wordsの原稿を作成しました。そして、2学期の始めには、夏のフィールドワークと素材集めの成果と学びを原稿にし、ネイティブのチェックを入れて発表しあいました。その際、事前にWORD LISTを作成させて、聞き手には難しいと思われる英単語の発音と意味を最初に確認してから発表しました。その後、発展的な力をつけることを目指して、「グラフの種類や説明の仕方、出典・引用を明示する英語表現」を学びました。



また、SDGsに関する知識を英語で深めるとともに、4技能を鍛えることを目的とした授業も展開しました。具体的には、GOAL14 Life Below Waterを取り上げて、昨年7月までに、シアトルでのプラスチック製使い捨てストローの食料店での提供を禁止する法律についての英字新聞の記事を読み(Reading)、見えそうな英語表現を学んだ後に、関連する英語の映像を見て(Listening)、関連するデータを読んで友達と意見を交わし(Speaking)、感想を書く(Writing)といった授業です。また、12月には、昨年9月にオープンしたばかりの東京都英語村 Tokyo Global Gateway に希望者で、一日研修を実施しました。そして、「SDGs 地球の17の目標を考えよう」のレッスンを受講し、世界の国々や日本が抱えている課題を全て英語で学習し、自分の意見を英語で伝えることができました。



3学期は、ファイナル・プロジェクトの完成をめざして、現代社会で既に完成させた原稿とポスターを英語化していったほか、研究成果をまとめる Abstract(要旨)の作成も行いました。授業内のネイティブチェックの他、放課後のCWC(Critical Writing Center)では、平日放課後に、3人の英語科の教員が、一人20分かけて、添削や構成チェック等のアドバイスの場を設けたところ、85人(35%)の生徒が予約を取り、授業時間外に添削を受けました。また、プレゼンテーション原稿が完成してからは、外国人講師による Presentation Workshop やオンライン英会話では、フィリピンの講師の先生にプレゼンテーションの原稿を聞



いてもらい、質疑応答を行いながら、当日の発表に向けた準備も進めてきました。

そして、2クラスずつで行ったポスターセッション本番ではグループごとに、英語による Presentation、質疑応答 (Q&A)、ルーブリックをもとに友達同士で評価をしい (Peer Evaluation)、audience は英語で Comments を述べました。さらに後日、日本語のポスターセッションの時と同様に、体育館を貸し切って学年内でポスターセッションを行いました。学年ポスターセッションには、保護者や SGH の関係者も見学に来られました。



49 期 3 年英語表現 II

**Presentation Rubric & Peer Evaluation**

	4—Excellent	3—Good	2—Fair	1—Needs Improvement
話し方/音量/ 抑揚	あまりノートを見ないで、観衆全体にアイコンタクトをしながら注意を向けている	観衆にアイコンタクトをしているが、まだノートに目をやって発表しているところがある	ノートを見て読んでおり、アイコンタクトは最小限である	アイコンタクトはほぼない。原稿を読んでいる。
	適した抑揚で説明でき、観衆の関心を引き出している。キーポイントで強弱をつけて話している	音量や抑揚にバリエーションをもって話している	不規則で、抑揚のない話し方である	音量が低いまたは抑揚がなく、聞く人の興味を引くことができない
熱意/観衆の 理解度	プレゼン全体を通じてトピックに対する関心・意欲・態度を強く示している	トピックに対してある程度関心・意欲・態度を示している	トピックに対する関心・意欲・態度が若干感じられる	トピックに対しての関心・意欲・態度が感じられない
	観衆のトピックに対する知識や理解を深めさせた; デザインの持つ特性や重要性を観衆に訴えることができた	観衆の理解と認識をほとんどの点で向上させることができた	観衆の知識と理解をある程度の点で向上させた	観衆の知識と理解の向上にはつながらなかった

ポスターセッションでは、日本語・英語の両方において、大学受験の生徒や当日の体調不良などの欠席を除けば、200名以上の生徒全員が課題に取り組み、ポスターセッションをすることができました。多くの生徒が、最初は受け身だったものの最終的には意欲的に取り組むことができたことと述べていると同時に、その過程で大学や社会で必要とされる様々な力が身についたと振り返ってくれました。今後は、ポスターは情報科、その他細かな指導は担任などと協力しながら、全校をあげての指導体制の構築を模索して参ります。また、2年間の言語技術で身についた基礎力を生かし、さらに充実の、そして生徒の成長につながるファイナル・プロジェクトを目指します。

■ 生徒が作成したポスター(日本語/英語)

**4 質の高い教育をみんなに**  
**アフリカの持続可能な学校教育のために**  
 3年4組42番 宮本 茜

**アフリカの教育現状**

学校に入れない子どもの割合 (2016年)

必要最低限の学力を身につけていない子どもの割合 (2016年)

**教育を受けられない理由**

- 学校数の不足
- 学費や教材費が払えない
- 家族のために働かざるを得ない
- 学業や部活動が忙しすぎる
- IT機器不足
- 保護者/地域住民の教育の重要性の理解不足
- 授業の質

**負の連鎖**

収入が少ない → 学費が払えない → 学校に行けない → 学力が身につかない → 収入が少ない

**教育の重要性**

経済	貧困	出生率
教育を受ける期間 1年延長 → 将来の収入 約10%増加	学校教育履修期間の平均 1年伸びる → 貧困率 9%低下	女性が教育を受ける → 5歳未満死亡率の低下 出生率の低下に効果

**持続可能な学校運営**

@エチオピア国オロミア州

学校運営委員会 → 企画を実施するための資金づくり

学校農園

- 共同で耕作した作物の売り上げ
- 土地を貸した賃料

学校運営委員会などコミュニティが企画  
= 外部からの支援のみに頼らない **自立的な運営**

**保護者/住民主体の学校運営**

@ニジェール

学校に対し **不信感**を抱いていた

**“みんなの学校プロジェクト”**

- ✓ 学校運営委員会メンバー → 選挙
- ✓ 年に数回、**全住民+教員**で会議 → 状況 問題 解決策

⇒ 保護者らの学校に対する意識変化

ニジェール全体の小学校入学率

2007年 **60%** → 2010年 **ほぼ100%**

**結論**

アフリカの一部の国々の学校教育において、JICAなどの支援と共に保護者、地域住民の学校教育の理解を促すことが主体性を生み自立的、持続可能な発展の第一歩となる。

**参考文献一覧**

- \* World 2016 4.8巻
- \* JICA 青年力向上事業 調査報告書 持続可能な社会
- \* JICA 学校に学びたい子供たち
- \* UNICEF HP

**4 QUALITY EDUCATION**  
**For Sustainable School Education in Africa**  
 3-4-42 Akane MIYAMOTO

**The situation of education in Africa**

The ratio of children who cannot go to school (2016)

The ratio of children who don't acquire minimum academic abilities (Elementary school and junior high school)

**The reasons why they cannot go to school**

- Lack of **UNDERSTANDING** importance of education
- QUALITY** of class

The revolution of **AWARENESS** of the school education by **THE PARENTS** and **THE COMMUNITIES**

**The importance of education**

Economy	Poverty	The rate of BIRTH
Receiving education +1 year → <b>INCOME</b> in the future About <b>10% UP</b>	The average of receiving education +1 year → The rate of poverty <b>9% DOWN</b>	<b>FEMALE</b> receive education → <b>DOWN</b> Under 5 Mortality Rate <b>EFFECT</b> on a declining birth rate

**The school management by parents and communities**

@Niger

They had **DISTRUST** of the school

**“School of All Project”**

- ✓ The members of **SMC** → **ELECTION**
- ✓ conference with **LOCAL INHABITANTS + THE TEACHERS** → Situation / Problems / Solutions

⇒ The awareness of them to school was gradually changed.

The elementary school entrance rate in Niger

2007 **60%** → 2010 **About 100%**

**The sustainable school management**

@Oromia region, Ethiopia

**SMC FINANCING**

**School Farm**

- Selling crops
- Rent of the land

**= Autonomous management**

**Conclusions**

**Joining management** of school education voluntary and financing sustainably by the parents and the communities will be the first step to develop the sustainable school education in Africa.

**A list of references**

- World 2016 April
- Shiroo Yamashita, causal factor to determine "teachers participation"
- JICA, "The children who cannot go to school"
- UNICEF HP

【現代文 B】

高校3年生の現代文では、週3時間あるうちの1時間を1・2年生で受けてきた言語技術の授業を発展させた、文章表現の授業にあて、現代社会で選択したターゲットに関する小論文を執筆するためのトレーニングを行いました。

現代社会での夏休みのリサーチを経て、2学期に入ってからそれぞれが決めたテーマに対する自分の主張が決まるため、1学期から2学期前半までは、論理的文章を執筆するための基本技術や、パラグラフライティングの“型”を学習しました。そして、2学期後半から3学期にかけてエッセイ(小論文)を執筆する、という計画で進んできました。ここでは、エッセイ執筆に直結するパラグラフの“型”以降の学習について取り上げます。

まず授業では、FPのエッセイを執筆する際に応用できる“型”として、描写型・例示型・経

**(2)-② 様々なパラグラフの“型”**

- a) 描写型パラグラフ ➡ 写真・図等の分析
- b) 例示型パラグラフ ➡ 事例の分類
- c) 経過型パラグラフ ➡ 問題発生過程の提示
- d) 意見型パラグラフ ➡ 解決策の主張
- e) 物語型パラグラフ ➡ 具体例の紹介

**(2)-③ パラグラフの練習**

下記のテーマで400字程度のパラグラフを執筆し、相互添削

- b) 例示型パラグラフ  
「創価高校のクラブ活動の特徴」
- c) 経過型パラグラフ  
「〇〇の課程」(ウォーミングアップ・レシピなど)
- d) 意見型パラグラフ  
「日本の高校の図書館に漫画雑誌を置くべきか」

経過型・意見型・物語型パラグラフ構成を紹介し、次の段階では、例示型・経過型・意見型の3種類のパラグラフを使用して実際に400字程度でTS(トピックセンテンス)・SS(サポーティングセンテンス)・CS(コンクルーディングセンテンス)の揃ったパラグラフを執筆し、相互添削しました。

相互添削の際には、各課題毎にルーブリックを示し、これに基づいてお互いに添削しました。この相互添削によって、書いた文章の推敲ができるばかりではなく、友達の文章を添削することで、次に自分自身が文章を書く際に、ルーブリックで示されたポイントを意識して文章を書くようになり、徐々に文章レベルの底上げができました。1年次から何回も400字程度の文章を執筆してきたため、生徒たちは文章を書くことそのものに対する抵抗感が薄れていました。その結果、初めの頃は、「最低何文字書かなきゃだめですか?」という質問が多かったのが、今では「400字超えちゃだめですか?」という質問をするようになってきました。

【意見型パラグラフ】「日本の高校の図書館は漫画雑誌を置くべきか否か」 (400字程度)		5点	4点	3点	2点	1点
A	パラ グ ラ フ 構 成	下記 a) ~ b) の両方において優れている	a) ~ b) の両方がほぼできているが、更に工夫が必要である。	a) ~ b) のどちらか1つができていない。	a) ~ b) の両方ができていない。	下記のどれかに当てはまる。
		a) TS・SS・CSの形式が整っている。 b) CSをTSと別の表現でまとめている。	〈例〉 TSの内容がわかりづらい。 TSとSS、SSとCSのつながりがわかりづらい。 TSとSSの表現がほとんど同じ。など			TS・CSが「私は…と思う」となっている。 途中で改行している。
B	内 容	下記 Ⅰ) ~ Ⅱ) の全てにおいて優れている	Ⅰ) ~ Ⅱ) のどれか1つが不十分である。	Ⅰ) ~ Ⅱ) のどれか2つが不十分である。	Ⅰ) ~ Ⅱ) のどれか3つが不十分である。	Ⅰ) ~ Ⅱ) が4つとも不十分である。
		Ⅰ) TSの意見の理由として、SSの内容が適切である。 Ⅱ) SSの配列が「大から小へ」の原則に従っている。 Ⅲ) 必要に応じて適切な事例や体験が挙げられている。 Ⅳ) SSの配列において、ナンバリングや適切な接続語を用いている。				
C	記 述 の ル ー ル	下記のルールを全て守っている	ルールのうち1つに不備がある	ルールのうち2つに不備がある	ルールのうち3つに不備がある	ルールのうち4つ以上に不備がある
		Ⅰ 文体(常体)の統一 Ⅱ 主語の挿入 Ⅲ 句読点が適切 Ⅳ 用語が適切 Ⅴ 誤字・脱字がない Ⅵ 原稿用紙の使い方が正しい				

続いて、現代社会で、リサーチが終わり、各自の課題に対する主張ができてきたところで、その主張を1パラグラフで書くことに取り組みました。ここでは、主張型パラグラフの型に則り、自分の主張を根拠を示しながら論理的に主張できるようにしました。このパラグラフが、現代社会のポスターセッションや、英語での作文へと展開していきます。

そして、現代社会でのポスターセッションをとおして、自らの主張をさらにブラッシュアップした物を元に、2学期末頃から最終のエッセイ(小論文)執筆に取り組みました。ここでは、これまでトレーニングしてきたパラグラフをエッセイに拡大する方法を学びました。トピックセンテンスがエッセイ全体の序論となり、サポーターセンテンスが3つあるとするとそれぞれが本論の1段落に、コンクルーディングセンテンスがエッセイ全体の結論となります。

例えば、序論では、誰もがよく知る有名な言葉を引用して読者の関心を引き、その背後にある問題点を指摘、中継を経て筆者の主張を簡潔に述べました。続いて本論は、まず現状を紹介し、続いて現状分析から課題を抽出することで主張の根拠を示し、筆者の考える解決策を、具体例を挙げながら説明しました。

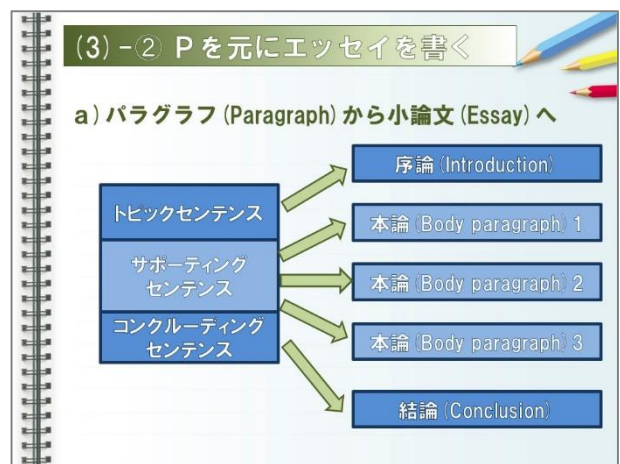
最後に結論部分では、序論で述べた主張の表現を変えて再述し、中継を経て問題の広がりについて述べて終わる、という構成を取りました。

最後に現代社会でのポスターセッションをとおして、自らの主張をさらにブラッシュアップした物を元に、2学期末頃から最終のエッセイ(小論文)執筆に取り組み、データ化することで現代文におけるファイナル・プロジェクトは完了となりました。

### (3)-① 主張を1Pで書く

F Pのアウトラインの基本型(長さは400字程度)

**TS:** {目的}のためには、{主体}が{方法}すべきだ。  
**SS①:** なぜ{主体}がやらねばならないか。  
**SS②:** なぜ{方法}が適切といえるのか。  
**SS③:** {方法}の抽象的説明。  
**CS:** TSの内容を言い換えて再主張。  
 ※TSはSDGsの課題に対する解決策を主張する。現状や原因を述べただけではTSとして不適切。  
 ※「私は……と思う。」は禁止! 小論文は自分の意見を客観的に述べるもの。



### (3)-② Pを元にエッセイを書く

**【小論文のアウトライン】**

- ① 序論 (Introduction)
  - 一般: 象徴的格言の引用
  - 背景: 問題点の指摘
  - 中継: 論題との関連
  - 論題: 筆者の主張
- ② 本論 (Body paragraphs)
  - 本論1: 現状
  - 本論2: 現状分析
  - 本論3: 解決策
- ③ 結論 (Conclusion)
  - 論題: 再主張
  - 中継: 論題との関連
  - 一般: 論題の広がり

## ■ 生徒が作成した論文



### アフリカの持続可能な学校教育のために

3年組番

#### 1. はじめに

『サラさんは、起きている時間の半分が家の手伝いを、残りの時間の2/3で妹の世話をし、6時間寝るとき、勉強は何時間できますか？学校へは、歩いて往復3時間かかるものとして。』（セーブ・ザ・チルドレンHP・2018）これは最近話題になっているOMの一部である。この問題のような状況は発展途上国、特にアフリカで実際に起こっており、多くの子供たちが学校で教育を享受できていない。そこで主張したいのは、アフリカの学校教育を持続可能なものにするには、保護者や地域住民が主体となることが必要であるということである。

#### 2. アフリカにおける教育の重要性

まず、この主張について詳しく述べる前に、様々な問題を抱えるアフリカ諸国における、重要な教育の役割について説明する。現在、「世界には、教育を受けられない子どもたちが6,100万人いると言われており、その半数以上がアフリカのサハラ砂漠より南の地域で暮らして」（国際協力NGO ワールド・ビジョン・ジャパンHP） とも言われる。また、初等教育純就学率を見ると、日本が男女ともに100%であるのに対し、サブサハラアフリカでは男子82%、女子78%と世界平均と比べても低い値を示している。（ユニセフ・世界子供白書2017・統計データ 表5教育指標） こうした教育現状が改善されることは、それ自体に留まらず、他の諸問題の改善にも効果がある。例えば、教育において言えば、子供たちが教育を受ける期間が1年延びると、彼らの将来の収入は約10%増加し、国の若者による学校教育履修期間の平均が1年延びれば、その国の貧困率は9%低下するとも言われている。更に、女性が教育を受けることは5歳未満児死亡率の低下や出生率の低下に効果をもたらすとも言われる。このように教育の発展はその他様々な分野にまで良い効果を波及させることができるという大きなメリットを持つのである。では、なぜサブサハラアフリカでは、先述したように学校で教育を受けられない子供が数多く存在するのか。その理由は、学校数の不足、学費や教育費が払えないこと、家計のために働かざるを得ない、自然災害、紛争などの影響、保護者や地域住民の教育の重要性の理解不足、授業の質と複雑多岐である。以上のような理由もあり、学校に行けず教育を受けられないと、子供たちは技術・能力を身につけられないために、高収入であったり、就きたいと思う職に就けず、収入の低い職に就かざるを得なくなる。すると、食料の購入、そして栄養を摂取することが困難になり免疫力低下によって病気になるやすくなる。そして、仕事ができなくなれば収入も減り、最終的には自分の子供も学校に通えず同じ過程を辿ってしまうことになる。このことから分かるように、教育を受けられないことは「負の連鎖」を起し、貧困を加速させてしまっているのだ。従って、世界で最も貧困に苦しむサブサハラアフリカの地域において、それが抱える様々な問題を解決するために、教育こそが非常に重要な役割を担うと言えよう。その教育の発展のために、ここでは、特に保護者、地域住民に注目し、彼らが主体的に学校を運営していくことでサブサハラアフリカの教育現状の解決が図れるのか二つの事例を紹介しつつ探っていくことにする。

#### 3. 保護者/住民主体の学校運営 ニジェールでの『みんなの学校プロジェクト』

まず、保護者や地域住民主体の「学校づくり」が質の良い学校教育を実現したニジェールの例を挙げたい。ニジェールは西アフリカに位置する世界で最も貧しい国の一つだ。当初、ニジェールでは保護者や地域住民は学校に対し不信感を抱いていた。というのも、同国では、学校や教員数が不足していたり授業内容が目標レベル以下であったり、そもそも学校では家庭で使う言葉とは違う公用語のフランス語を使うため授業の内容理解が難しくなったりと、子供を学校に通わせても子供が学べないという状況だったからだ。また、同国では他のアフリカの多くの国と同じ様に、地方分権の下、学校運営委員会(School Management Committee・SMC)が設置されていた。しかし、その委員会は学校が委員リストを作成し提出するだけで認定されてしまったため、その地域の有力者が委員になることが多く、保護者や地域住民は学校の運営に関わりなく他人事のように感じていた。そこでJICAが発足したのが「みんなの学校プロジェクト」である。特に同プロジェクトで展開された2つの取り組みを紹介する。1つは学校運営委員を住民による直接選挙によって選

ということである。そして、もう1つは年に数回、住民全員と教員とで会議を設け、学校を取り巻く現状や問題を共有し、解決するなど、あくまで保護者や地域住民主体の取り組みが展開された。それにより、保護者らの学校に対する意識も変化していった。このプロジェクトの成果として、ニジェール全体の小学校入学率がプロジェクト開始当初の2007年、60%から2010年にはほぼ100%まで上昇する(JICA mundi 2018年4月号)など、保護者や地域住民主体の運営が学校教育の進展に大きな効果をもたらしたと言える。

#### 4. 学校運営委員会による持続可能な学校運営 エチオピア オロミア州の例

続いて、保護者や地域住民が主体となって資金作りをすることが、持続可能な学校教育を実現する可能性を持つことについて、エチオピアのオロミア州の学校の例を挙げて説明する。まず、持続可能な学校教育というのは、他に頼りすぎることなく、自律的に運営し発展していくことのできる学校教育のことだと言えるだろう。外部からの支援は途切れた時に、それを続けられないのならば持続可能とはいえないし、それは、その地域にとって本当の発展とはいえないからである。そして、持続可能な学校教育を実現するには持続可能な資金づくりが必要不可欠である。実際に、学校運営委員会ははじめ保護者や地域住民などが資金づくりをしていたエチオピアのオロミア州の学校がある。山田 肖子氏によれば、その「資金づくりの手段として最も多いのは、学校農園をつくることで耕作し、売上げを学校資金に充てるというものである。(中略)学校によっては、土地を耕して作物を売るのではなく、土地を貸した賃料を収入としているケースもある」(山田 肖子氏『住民参加』を決定づける社会要因-エチオピア国オロミア州における住民の教育関与の伝統と学校運営委員会・国際開発研究・2011年)のようだ。このような学校農園などによる自主的、自律的な資金づくりは外部の支援のみに頼らない学校運営を実現するのではないだろうか。

#### 5. 持続可能な教育と世界の実現のために

以上のように、保護者や地域住民が中心となって持続可能な資金づくりをしながら学校運営に参加することが、現在、そして未来のアフリカの子供達が学び続けられる持続可能な学校教育の発展の大きな第一歩となるのだ。そして、ここで紹介した二つの例からも明らかのように、外部からの金銭などの一方的な支援のみでは、現場での根本的な解決には繋がらないと言える。従って、持続可能な世界の実現のためには、国際支援のありかを再度見つめ直す必要があるだろう。

#### 参考資料

##### 【図書】

○『アフリカの生活世界と学校教育』・明石出版・第5章 135-141ページ

##### 【雑誌・新聞】

○JICA mundi 2018年4月号

(<https://www.jica.go.jp/publication/mundi/1804/ku57pq000027/02n-att/04.pdf>)

○JICA monthly

Jica 2006年5月号 30-33ページ

(<https://www.jica.go.jp/publication/monthly/0605/pdf/06.pdf>)

○山田 肖子氏『住民参加』を決定づける社会要因-エチオピア国オロミア州における住民の教育関与の伝統と学校運営委員会・国際開発研究・2011年([https://www.usid.nagoya-u.ac.jp/syamadada/linkpages/publication/jasidjournal\\_20-2.pdf](https://www.usid.nagoya-u.ac.jp/syamadada/linkpages/publication/jasidjournal_20-2.pdf))

○JICA・アフリカにおけるJICAの基礎教育協力 すべての子どもに、学ぶ喜びを-2013年5月

(<https://www.worldvision.jp/children/education.html>)

○川口 純 「家族生活と学校の関係-児童の就学記録分析を中心に-マラウイの初等学校を事例に」

##### 【オンラインデータベース】

○セーブ・ザ・チルドレン ホームページ 2018年(<http://www.savechildren.or.jp/apc2018/>)

○ユニセフ・世界子供白書2017・統計データ

(<https://www.unicef.or.jp/sowc/pdf/05.pdf>)

○JICA・学校に行けない子供たち

([https://www.jica.go.jp/mobile/hiroba/program/practice/education/ku57pq00006c9k3-att\\_2\\_1.pdf](https://www.jica.go.jp/mobile/hiroba/program/practice/education/ku57pq00006c9k3-att_2_1.pdf))

○ユニセフ・アフリカに教育支援が必要な理由(<https://www.unicef.or.jp/fa/report/reason.html>)

○World Vision ホームページ(<https://www.worldvision.jp/children/education.html>)

- 1 -

- 2 -

### ◆ 生徒感想 (ファイナルプロジェクト全体)

「夏休み中から、自分の選んだゴールに関する本や資料を読み、それによってリサーチクエスチョンが変わることもありましたが、自分の興味のある分野を研究することができました。課題に対しての解決策も自分で考えるというゼロからの作業でしたが、問題と真剣に向き合うことができました」

「結論をしっかり立て、その根拠もしっかり説明するという国語力が身につきました。人に見てもらうことを意識し、どうしたら分かりやすく伝わるのかをひたすら考え、実践したので伝える力が身につきました」

「情報を正確に収集する力や論理的に説明する力、また相手が理解しやすいようなポスターを作るなど、大学や社会において必要不可欠な能力を鍛えることができた実感しました」

## P) UNESCO教養文化講座研究発表(3年生物選択)

- 期間 2/24(日)
- 参加者 高校3年生4名(研究に参加した生徒は5名)

### ■ 概要

創価高等学校の3年生の生物の授業では、3学期には受験の終わった生徒を対象に、これまで14年間にわたって身近な環境である玉川上水の生態調査を行ってきました。特に、玉川上水駅近くの小平監視所を境に、上流側は多摩川からの自然水が流れ、下流には比較的高温の高度処理水が流れています。この高度処理水は微生物の働きを利用して、下水を処理したものです。そこで微生物の活動を活性化させるために、比較的高温の水が玉川上水に放流されています。冬には特に上流の自然水との水温差が大きくなると考えられます。この水温の違いが玉川上水の樹上生物にも影響を与えているのではと考え、生徒たちの卒業研究として調査を続けてきました。

その中で、本年は、2月20日(水)から24日(日)までの5日間に小平中央公民館1階「ふれあいギャラリー」で行われた、学び舎江戸東京ユネスコクラブ主催、日本ユネスコ協会と小平市教育委員会後援の「学び舎ユネスコギャラリー展 2019」への展示と、最終日の2月24日(日)には、小平中央公民館の視聴覚教室で開催された「第14回学び舎ユネスコ教養文化講座」にて、研究発表をさせていただく機会をいただきました。当日は、玉川上水に興味を抱く地域の方々や市役所の課長が集まる中、調査のデータから分析した水温の違いが生態系にもたらす影響についてのプレゼンを行いました。研究と発表を通して、生徒たちは理系のデータの取り扱いや分析方法を学ぶとともに、答えのない問いに対して試行錯誤繰り返しながら挑戦をしていくことや、自分たちの思考の過程を他人にわかりやすく伝えることの難しさや大切さを実感することができました。また、自然と向き合う中で環境を守るといふことの難しさや普段生きていると周りの自然に目を向けていなかった自分自身に気づくことができました。



### ◆ 生徒感想

「生物の研究を通して、仮説を検証する実験や調査を行うことの大変さや標準偏差などを含めたデータの分析の難しさを実感しました。また、生態系は多くの要因の影響を受けるため、いろいろな視点で環境を見ることが大切だと実感しました。」

「身近な玉川上水の生物の個体数の調査を行い、安全で環境を破壊することはないと思っていた高度処理水が、生態系に影響を与えている可能性が高いことがわかり、常識や偏見にとらわれずに、実際に調べ行動していくことで学びが深まったと思います。この経験を大学での研究などに生かしていきます。」





### 3. グローバル・リーダース・プログラム (GLP)

#### A) 概要・年間スケジュール

##### ■ 概要

グローバル・リーダース・プログラム (GLP) はその成果を、GCP はじめ全校のSGHの取り組みに還元していく事が最大の使命です。これまでに全校対象で行われている GCP 沖縄・カリフォルニアのフィールドワークは、GLP フィールドワークがベースとなっています。またフィリピン講師とのスカイプ英会話は、現在全校生徒が取り組んでおり、英語の4技能の中でも課題となっているリスニング・スピーキング力の向上に貢献してきました。言語技術授業の英語と日本語往還の実験も、当初は GLP で行われました。

本年度の取り組みは16名で行いました。毎週火曜日・金曜日のクラブ終了後18時から19時30分過ぎまで、CALL教室で行います。また必要に応じて合宿などの集中プログラムを実施します。

##### ■ 昨年度との相違点

①年間の研究テーマを「核廃絶問題」に設定。核の問題を軸に、SDGsをはじめとした様々なテーマと複合させ、企画書に関してのチュートリアルのもと、英語で500語以上の小論文を書かせました。これによりそれまでの探究学習の内容を確認し、振り返ることができました。もちろん、英語と日本語で思考させることで、言語の論理的な運用能力を育てることもできました。そのため、英語力の向上と、活動の集約のために活用していた英字新聞プロジェクトへの参加は取りやめました。ただし、全校GCP企画英字新聞プロジェクトに、GLP生徒代表が参加し、GLPの活動報告の記事作成にあたりました。

②年間学習の集大成として、姉妹校である創価中学1年生(220名)に対して「核廃絶問題に関する模擬授業」を100分間実施しました。これにより、これまで学んできた内容から最も大切な要素を選び、探究の内容をふまえての普及活動とすることができました。

③フィールドワークは広島と長崎で実施。ここでの最大の目標は、出前授業実施に向け、被爆地でどのような平和教育が行われているかを調査することに設定しました。これによりインタビューの技法なども活用することができました。

##### ■ プログラム内容

「課題研究メソッド」を教科書として、論理的・批判的思考や情報収集・分析力など探究型学習の基礎を育てます。その研究手法を活用し、広島と長崎で実施されるフィールドワークを行います。さらに、フィリピン人講師によるオンライン英会話ではインタビュースキルなどの英語力を磨きます。また地球規模課題への理解と知識を深めるために、国連大学訪問や、平和学者、外交官、国際機関職員による懇談会を行なっていただいています。最終的に中学生に対して、「核廃絶問題に関する出前授業」を100分間実施しました。

##### ■ 年間のプログラムの流れ

まず核兵器に関する基礎的な知識を深めるため、政治学、近代史、国際関係論、科学の視点から講義を行いました。この時に使用するプレゼンの資料は、英語の講義で使われたものをそのまま活用し、今後英語で核問題を発表する際に、用語など自然に取り組みめるよう

に工夫を行いました。5月には「問いの立て方」の導入を行った後、全校対象のアンケートとサンプリングとしての生徒インタビューを実施しました。この結果は、SGH甲子園や夏季フィールドワークにて発表されました。6月には、国連大学を訪問し、『人間の安全保障』について学び、SDGsの観点から見た核廃絶の問題点について考察するきっかけとなりました。夏休み期間に、長崎・広島にて平和教育に関するフィールドワークを行いました。9月の学園祭には、これまでの活動をポスタープレゼンテーション形式で発表。授業計画の基本を学んだ後、出前授業の計画と実践を行いました。ここまでの活動をとりまとめ、活動報告会を英語で行いました。また4月にカリフォルニアで開催されるクリティカルイシューズフォーラム(CIF)に向けて、核不拡散についての研究をとりまとめたミニプロジェクトを全員で作成しました。この内容は2年生が活動報告会にて、英語で発表しました。

#### ■ GLP 年間スケジュール

日程	プログラム内容	探究・発表等の手法など
春期休業	集中講義:アイスブレイク、年間計画の確認、ワールドカフェ	Chromebook 配布(貸与)
4月	Critical issues forum(CIF)参加 (3/28~4/2、代表2名)	カリフォルニア・モントレレー
	授業「国家の安全保障・人間の安全保障とは」	グループワーク
	連続講座「核廃絶問題の基礎」	英語資料活用
	言語技術「質問の仕方・報告書の書き方」	グループワーク
	講義・懇談「平和構築」 講師:オタゴ大学准教授 李成鏞先生	
5月	授業「国際条約と Regime」	
	授業「研究手法:問いの立て方・アンケート調査」	グループワーク
	ラウンドディスカッション「核廃絶問題を意識するのに必要なこと」	ディスカッション
6月	国連大学研修 講演「SDGsと人間の安全保障」 講師:国連大学サステイナビリティ高等研究所 プログラムアソシエイト 今井夏子氏	
	授業「研究手法:文献調査とインタビュー」	グループワーク
	ディスカッション「核兵器禁止条約とNPT」	ディスカッション
	授業「研究手法:アンケート結果の分析」	グループワーク
7月	ディスカッション「夏季フィールドワーク準備(アンケート項目・インタビュー項目検討)」	ディスカッション
夏季休業	フィールドワーク 広島(8/6~8/8) 長崎(8/20~22)	
9月	授業「ポスターの作り方」	

	ディスカッション「中学生へのアンケート作成」	
	講演「核兵器は私たちの大切なものを守るのか？人道とジェンダーの観点から」	
	ポスター発表準備	
	ポスター発表「フィールドワーク報告」(一般公開)	ポスターセッション
10月	作業「CIF ミニプロジェクト作成」	
	授業「模擬授業に向けて:授業案とは」	
	授業「模擬授業に向けて:授業案作成」	グループワーク
	論文テーマ作成・ディスカッション	ディスカッション
11月	中間報告会「フィールドワーク報告」(一般公開)	プレゼンテーション
	SGH 全国高校生フォーラム参加(英語)	ポスターセッション
	高校生へ模擬授業	
12月	創価中学校での出前授業実施	
冬季休業	論文骨子作成	教員とディスカッション
1月	2019年度 CIF 準備	
	小論文作成・提出	
2月	GLP 最終発表会	プレゼンテーション
	活動の振り返り・評価	自己評価・相互評価

## B) クリティカル・イシューズ・フォーラム(CIF)

- 実施 3月28日(水)～4月2日(月)
- 参加者 代表生徒2名(3年生男女1名ずつ)
- 場所 アメリカ・カリフォルニア州 モントレーミドルベリー国際問題研究所
- 主催 ミドルベリー国際問題研究所 ジェームズ・マーティン不拡散研究センター(MIIS)
- 内容 日米露の高校生による核軍縮に関する提案の発表会で、会議には、ロシアから4校、アメリカからハワイも含め6校、日本から7校の代表生徒約2名ずつが参加し、核兵器の不拡散をテーマにプレゼンテーションやディスカッションを通して意見を交換しました。2018年の Student Conference のテーマは「核兵器禁止条約～成果、展望、今後の挑戦～」でした。

また、4月の開催に向け、2年生のGLPのメンバーが核問題についての包括的な理解をまとめ、オンラインプレゼンテーションアプリpreziでmini-projectを作成。事前に提出し、MIISの研究者からフィードバックを受けました。



MIIS 研究者からのコメント: “Awesome work guys! I really like your presentation, I just have a few suggestions. On your slide with the number of nuclear weapons you spelled England as “ingrand” (proper term for this situation would be “United Kingdom”), and you are missing N. Korea and Israel. On your timeline, you may wish to move the Peace of Westphalia slide to the next timeline and the Cuban missile crisis to the previous slide and rename the first as a “history of nuclear weapons”, and the second and third as a “history of nuclear peace treaties.” There is an unneeded semicolon on the Pakistan info bubble. The human security bubble also has an unneeded period. Overall very well done! I really like how you have each of your sections written on the top in clear sections. That will help your audience follow along as you present.”

## ■ 行程

アメリカ有数の美しい街・モンレーに到着。モンレー研究所のトキ先生によるオリエンテーションの後、簡単な市内散策をしました。現地の観光スポットであるラバース・ポイントで、それぞれの滞在先となるホストファミリーと初対面。当初は緊張していましたが、子どもたちや、ホストファミリーの温かい人柄に触れて、皆すぐに打ち解けていきました。

2日目はロシアの高校生とともに、モンレー研究所で、同研究所についての講義を受けた後、美しいペブルビーチ沿いにある、寮生のプライベートスクール・スティーブソン高校を見学しました。午後は明日に向けての練習をしっかりと行った後、全17校によるリハーサルが行われました。リハーサル中もみな、初めて会ったにも関わらず、まるで旧知の仲のように話しかけていました。夜は食事とゲームを通しての懇親会が行われました。

3日目はフォーラム初日となり、日・米・露の各校がそれぞれの研究成果を発表しました。本校代表生徒が「日本の核兵器禁止条約参加の壁」と題して、識者へのインタビューの分析を通して、日本の安全保障と核抑止論の矛盾点を発表してくれました。基調講演では、オバマ政権の軍縮政策に深く関わった、ニュークリア・クライシス・グループのウォルフサル所長による基調講演や、高校生による内容の濃いパネルディスカッションなどが行われました。

実質的な最終日となるフォーラム2日目(4日目)は生徒による発表の後、2016年のデイトナ文学平和賞作品「ナガサキ:核戦争後の人生」の著者、スーザン・サウザードさんによる基調講演があり、核の引き起こす人道的な問題が、原爆投下後70年経った今も続いている事実が、日本以外の地域ではきちんと伝えられていないことを教えていただきました。

## ◆ 生徒感想

「今回 CIF のプロジェクトで、核兵器の存在を当化しようとする核抑止論は、現代世界の安全を保障するものとしては全く不完全な考え方であることがわかりました。核兵器が存在するという事実に疑問を投げかけ深く掘り下げて考えていくことは、私たちが高校生として、また市民社会の一員として現状が正当かどうかを見極める上で非常に重要であると感じました。このような機会をいただけたこと、私たちをサポートしてくださった方々への感謝を忘れずに、今後も積極的に学ぶ姿勢を大切にしていきます。」

「核兵器について学びを深め、世界レベルのフォーラムに参加し、学園を越えた世界の高校生との対話を通して得たこの貴重な経験を、まわりの友に語っていかねばならないと感じました。

自分の使命と原点を見失わずに一生涯勉学に挑戦し抜いていきます。」

Critical Issues Forum の2018年生徒発表の様子 参考サイト

<http://sites.miis.edu/criticalissuesforum/2017-2018-conference-report/>

Critical Issues Forum 2018- Student Conference Presentations Rubric						
Name of School: Presentation 5: Soka Senior High School, Tokyo						
	1 (-)	2	3	4	5 (+)	
Introductions					5	Great question about why Japan hasn't joined the Ban Treaty.
Audience attention					5	You engaged well with your audience.
Statement of purpose or thesis					5	You had a clear focus and specific questions.
Clear point of view on nuclear disarmament					5	You identified a clear position.
Clear and concise language; points are clear; message is clear					5	Excellent articulation in English.
Concrete support or rationale for positions, points of view, etc.					5	You offered good explanations of nuclear deterrence & human security.
Creativity of Project Idea				4		You could tell us more about solutions.
Challenge level of content					5	You underscored the importance of "soft power."
Organization					5	Well organized and presented.
Content Mastery					5	Excellent job at research and interviews.
Presentation Style					5	Well delivered.
PPT slides or other visual aids				4		Clear slides, but you could add a few more slides for additional support.
Citation of Sources					5	Sources are evident.
Formulate their own ideas/solutions on how humanitarian approach will contribute to nuclear disarmament and eventually, a world free of nuclear weapons.					5	You have shown great initiative to conduct interviews with experts. Great critical thinking.
Overall assessment: 97% Average score: 4.8	You offered a great quote by Hobbes and explanation of national security. Your critical thinking was evident from your questions and reflections. Your personal interviews brought a lot of strength to your presentation. You answered questions well during the Q & A.					



## C) 広島・長崎フィールドワーク

### ■ GLP のフィールドワーク要旨

本年度より、GLP のフィールドワークは、12月に創価中学校で実施される出前授業実施に向け、被爆地・広島／長崎で、どのような平和教育が行われているかを調査することを目標に設定しました。これによりインタビューの技法なども活用することができました。

平和教育の実態調査を目的とし、インタビューを中心に情報収集の技術力を向上させました。またアンケート調査を実施し、その分析においては論理的・批判的思考力を高めました。

## 広島

- 期間 8月6日～8日の3日間
- 参加者 高校2年生4名 高校3年生4名 計8名
- 事前学習・準備

・広島女学院高校主催のピース・フォーラムの事前課題として、日本やその他の核保有国が核兵器禁止条約に参加するために必要なことをプレゼンテーションできるようにまとめました。

- ・核兵器廃絶について、大学教授へ聞きたい質問項目を作成しました。

### ■ 行程・感想

#### <1日目>

原爆投下から73年目を迎えた6日の午後、新幹線で広島入りをしました。まずは広島大学にて ICAN の川崎代表の講演を拝聴し、核兵器禁止条約の成立とその意義について、市民社会の観点から学びました。夕方からは姉妹校である関西創価高校と合流して、生々しい被爆の記憶を知る広島市の被爆体験朗読会に参加しました。その後、翌日の広島女学院で開催されるピースフォーラムに向けて、関西創価高校生と英語と日本語のグループに分かれての発表と意見の交換会を行いました。また地元広島のみなさんにも講評を頂き、被爆の語り継ぎと継承についての貴重なお話も頂きました。

#### ◆ 生徒感想

「多くの被爆体験を聞く中で、原爆投下は現実の出来事であり、すべての人の幸福を奪う魔物であると再確認することができました。私達がすべきことは、今日学んだことや、自分たちの核兵器に対する考え方を正しく伝えることであると感じました。創価の平和の思想を胸に、平和な世界のために今自分たちができることに取り組んでまいります。」

「8月6日という日に広島を訪れたことは自分にとって大変意義深い出来事となりました。核廃絶に関わる貴重なお話を聞いて、平和への思いを自分から他の人に繋いでいこうと思いました。また、同世代の生徒と交流したことも良い思い出となり、友情が平和への一歩となるのだと感じました。」

#### <2日目>

2日目は、広島女学院で開催されるピースフォーラムに参加しました。日本各地とハワイから平和を希求する高校生が集まり、「核兵器禁止条約を非締結国が参加するための課題と方法」について事前学習したことをもとに7つの国に分かれて討論し、考えた解決策を英語と日本語で発表しました。核問題の理解に加えて、語学力とチームワークが必要とされる高度な企画でも、生徒たちは持てる力を精一杯発揮して交渉していました。フォーラム終了後には、GLP の年間学



習テーマである核廃絶教育プログラム開発のため、平和教育プログラムの先駆け・広島女学院の生徒と先生にインタビューし、緻密に計算された平和学の深さに皆感心しました。終了後に広島平和祈念資料館を見学し、貴重な資料と目を覆いたくなるような写真や展示を通して、「核兵器は絶対悪である」との思いをさらに強くしました。

#### ◆ 生徒感想

「午後に訪問した広島平和祈念資料館は、今まで勉強してきた何よりも衝撃的でした。またピースフォーラムでも周りの高校生の英語の實力が高く、たくさん刺激を受けたので、これからより精を出して核廃絶のために勉強し、他の人との意見交換を活発にしていきたいと思います。」

「今回のピースフォーラムでは、自分にはなかったユニークな意見などを聞くことができました。レベルの違いを感じ戸惑いましたが、さらなる高みを目指さきっかけとします。また広島平和祈念資料館では見たことがなかった胸が痛くなるような写真や展示品をみて、自分たちの今の生活ができていることに感謝すると同時に二度とこのような被害を出さないため、平和に貢献していきます。」

#### <3日目>

最終日の3日目は、広島大学平和学研究所の友次准教授と小倉助教による「核廃絶に向けて何が必要か」とのセミナーを行って頂きました。2時間半に渡って、全員の質問を丁寧に受けていただき、専門家の方の意見からこれまでの不明点を、実例をおって丁寧に答えて頂きました。



#### ◆ 生徒感想

「この3日間を通して、被爆地広島で起きた事実と、ヒパクシャの方々の痛みや苦しみについて知ることができました。また同級生たちとの議論や講義を通じて核兵器禁止条約について知り、深く考えたことで核廃絶への過程と必要性を確認することができました。さらに思索を深めていき、今回学んだことを身近な友人や家族に伝えていきます。」

「初めての広島はすべてが新鮮な体験でした。フォーラムでは他県の高校生に刺激を受け、語学と調査能力を身に着ける決意をしました。また広島を苦しめてくれた朗読会の方、運営をしてくださった広島女学院の皆さんに感謝を伝えたいです。広島を全てから平和の美しさと、平和を求めていかななくてはならないことを、教えてもらいました。」

## 長崎

- 期間： 8月20日～22日の3日間
- 参加者： 高校2年生7名 高校3年生1名 計8名
- 主な訪問場所： 長崎大学核兵器廃絶研究センターRECNA、長崎原爆資料館、平和公園、活水高校、城山小学校
- 事前学習・準備
  - ・現地で言うインタビューに備え、英語、日本語で質問項目を作成しました。
  - ・6月に創価高校生対象に実施した「平和意識調査」の結果を分析し、準備しました。

## ■ 行程

### ● 1日目

長崎空港到着後、長崎大学へ向かいました。長崎大学核兵器廃絶研究センターRECNAでは、全教授から長崎における平和教育の現状についての報告のプレゼンテーションを行っていただきました。平和教育の性質が大きく変容しつつある現在、最後の被爆地・長崎でどのような取り組みがなされているのかを実例を通してお話して頂きました。質疑応答では、RECNAの鈴木所長もご参加いただき、学園生の質問にもユーモアを混ぜつつ、真正面から答えて頂きました。

平和祈念像と平和公園を訪問したのち、二重被爆者の山口さんのお孫さん・原田小鈴さんから被爆継承の現状を教えて頂き、今後東京に戻りどのように継承するのかを真剣に考察しました。

### ◆ 生徒感想

「長崎大学では、平和教育の転換期にあたる今、どのように平和教育を深化させていくべきなのか考えることができました。戸田先生のご遺命である核廃絶を、長崎でしっかり学んでいきます。」

「被爆体験の継承者である原田さんのお話の中で、「実際に被爆していない私達だからこそ伝えられることがある」という言葉が印象的でした。私達だからこそ、次世代に近い視点で語ることができる、その使命の大きさを感じました。」

### ● 2日目

長崎原爆資料館を見学し、貴重な写真や展示物を通し、長崎に投下された原爆の被害を目の当たりにしました。その後、原爆投下当時、12歳で被爆した山田一美さんから、生々しい被爆体験をうかがいました。普段の生活の中では感じることのできない、核兵器の恐ろしさ、非人道性を命の底で感じました。

午後は活水高校を訪問し、交流会を開催しました。「創価高校生の核廃絶への意識」と題し、創価高校生を対象に行った核廃絶問題意識アンケート、インタビューの分析結果を報告しました。また、GLPの年間学習テーマである核廃絶教育プログラム開発のため、長崎で行われている平和教育について、先進的な取り組みをされている生徒と先生にインタビューをさせて頂きました。高校生1万人署名などの実践的な取り組みについて聞くことができ、皆熱心に意見交換を行いました。



### ◆ 生徒感想

「被爆体験で「当時、何に対して怒りを覚えたか」という質問に対して、「核兵器を使ったことに、人類の情けなさを感じる」と語られた言葉が印象に残りました。今日聞いた経験を今後の活動に活かしていきます。」

「活水高校との交流を通し、対話などの創価の価値観は世界に通用することを実感しました。私たちの巻き起こす潮流に全青年を巻き込み、創立者の大願である核廃絶を成し遂げます。」



### 3日目

最終日には長崎県最大の被爆遺構である城山小学校を訪問。子供たちの学びの場が一瞬にして奪われる恐怖と、今学べることへの感謝を確認しました。その後、平和記念公園では、原爆に関する街頭意識調査アンケートを日本語と英語で実施しました。

#### ◆ 生徒感想

「城山小学校の児童たちが、被爆の後、雨の日も寒い日も、懸命に学校に通っていた姿に心を動かされました。こうした子供達は世界中にたくさんいます。将来は何らかの形で教育を受けられる子供を一人でも多くしていきます。」

「平和公園でインタビューを行い、多くの方に答えていただきました。海外の方も、資料館見学を通して核廃絶への思いを持ったこと、福岡などでも核について学んでいることなどを聞くことができ、有意義な時間となりました。」



## D) ゲスト講義および都内フィールドワーク

■ 講義 オタゴ大学准教授 李成鏞先生(2018年4月24日)

#### ■ 概要

「Environment, conflict and peacebuilding」をテーマに、過去の紛争から平和構築が行われてきた様々な事例を通し、平和構築の困難さについてわかりやすく講義をしていただきました。また、今後の世界で青年が果たす役割についても語って下さり、創価高校生に期待を寄せて下さいました。

#### ◆ 生徒感想

「今回の講演会では平和構築についての講義でとても勉強になりました。特に、僕が感じたことは平和という大きな目標に対しては、本当にたくさんのアプローチの仕方があると感じたことでした。また、自分たちが日々受けさせていただいている創価教育というのは世界に出たときにも必ず通用するものだと確信しました。」



## ■ フィールドワーク 国連大学訪問(2018年5月20日)

### ■ 概要

国連大学サステナビリティ高等研究所(UNU-IAS)プログラムアソシエイトの今井夏子さんの講義を受講しました。

今井さんの講義では、国連大学の使命、UNU-IASの活動、人間の安全保障についてお話しして頂きました。

その後、1945年から国際連合のオリジナルの文書が保存されている国連大学内の図書館と、安倍首相やアンジェリーナ・ジョリーが訪問したウ・タント会議場を見学しました。



### ◆ 生徒感想

「僕は人間の安全保障の定義そしてその実現に向けた取り組みは学園が目指している部分と重なるのではないかと感じた。日本の外務省の定義付けによると、人間の安全保障とは、人間一人ひとりに着目し、生存・生活・尊厳に対する広範かつ深刻な脅威から人々を守り、それぞれの持つ豊かな可能性を実現するために、保護と能力強化を通じて持続可能な個人の自立と社会づくりを促す考え方となっている。生存・生活・尊厳に対する広範かつ深刻な脅威から人々を守るという点は生命尊厳の理念と合致する部分があると思うし、一人ひとりに着目するという点は対話に通じる部分があると感じた。やはり創価学園がやっていることは今の世界の問題の中心の縮図であると思ったし、ここで力をつけることが将来につながるという確信を持った。」

## ■ シンポジウム「核兵器は私たちの大切なものを守るのか？人道とジェンダーの観点から」

### ■ 概要

日本青年館で行われたシンポジウム「核兵器は私たちの大切なものを守るのか？人道とジェンダーの観点から」に参加しました。これは9/26「核兵器の全面的廃絶のための国際デー」5周年に際し、核兵器禁止条約に対する社会的な関心を高めることを趣旨に開催されたものです。駐日コスタリカ共和国特命全権大使であるラウラ・エスキベル・モラ氏の基調講演のあと、川崎哲氏(ICAN国際運営委員)、朝長万左男氏(日赤長崎原爆病院名誉院長)、土岐雅子氏(米国ミドルベリー不拡散研究所)、栗原淑江(東洋哲学研究所主任研究員)が登壇しプレゼンテーションとパネルディスカッションが行われました。核兵器による被害の性差や、平和教育、核廃絶運動での女性の役割の重要性など、様々な角度で議論が交わされました。



## ◆ 生徒感想

「女性が受けた核被害の男性との差に驚きを感じたが、その差に着目するよりも最終的には同じ人間が受けた被害と捉え、互いに尊重しあうことが核なき世界の実現に必要なのだと感じた。また、平和教育にも論点が触れられ、広島、長崎の事実を学ぶショックの必要性やアプローチのしかたなど、12月に行う創価中学校生への平和教育において参考になる意見を得られた。」

## E) プレゼンスキル(学園祭ポスターセッション・英語プレゼン)

### ■ プレゼンスキル(学園祭ポスターセッション)

#### ■ 概要

学園祭において、これまでの取り組みをまとめたポスターセッションを実施しました。内容としては、創価高校生対象に実施した「平和意識調査」分析結果、長崎と広島での夏季フィールドワークなどについて、ポスター形式でまとめました。1日目は学園生を対象に、2日目は一般の来場者に発表を行いました。声の大きさや速さなどの話し方、身振り、目線などの発表態度を意識しながら、学園生だけでなく一般の方々に向けてポスターセッションをすることができました。

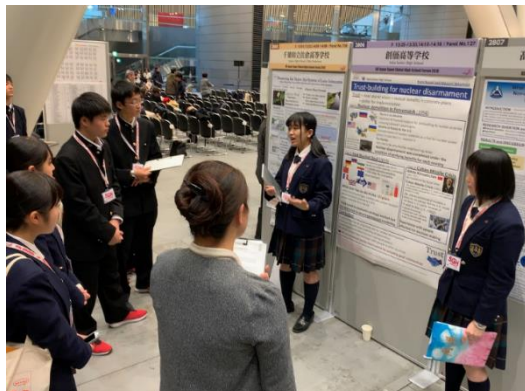


### ■ プレゼンスキル(英語プレゼン)

#### ■ 概要

12月15日、SGH全国高校生フォーラムが東京都千代田区の東京国際フォーラムで開催され、GLP代表2名がポスターセッションに参加しました。

当日のフォーラムにはSGH指定校123校、アソシエイト校27校の生徒代表が参加。日頃学んできた社会問題などの概要や提案などを英語でポスターにまとめて発表しました。本校生徒は「Trust-building for nuclear disarmament」と題して、非核化した国の事例を挙げ、各国が信頼を結ぶことで核軍縮の潮流は生み出せると訴えました。多くの方が足を止め、活発な質疑応答が行われました。



### 生徒の作成した発表ポスター

2806 Soka Senior High School Yumi Suzuki and Mayumi Sakamoto

## Trust-building for nuclear disarmament

**Trust** = clear shared vision + mutual benefits + concrete plans + ability for implementation

**Case 1: Nuclear demolition in Pervomaisk (1994)**

**The U.S. to Ukraine**

- technical & financial support for dismantling its nuclear arsenals
- ensuring Ukraine's sovereignty

**Ukraine to Russia to the U.S.**

- transportation of nuclear materials as a fuel for nuclear power plants in case the U.S. required it

**For Russia**

- less risk to be attacked by neighbouring states

**Nuclear disarmament was completed under the condition of verifying benefits for each country**

**Case 2: Iran Nuclear Deal (2015)**

framework to partially stop Iran to develop its nuclear arsenals in exchange for mitigating economic sanctions = first step for complete disarmament

**What Iran has to do in the 15 years**

- retire most of centrifuges, facilities and nuclear stockpile
- be able to enrich Uranium to 3.67%
- accept inspectors from the UN

**Trust based on economic strategy worked but the deal failed to ensure permanent credibility**

**Case 3: Cuban Missile Crisis**

**Nikita Khrushchev** (1894-1971) / 1st President of the Soviet Union

**Cuban Missile Crisis (1962)**

The Soviet Union and the U.S. were on the edge of nuclear warfare because the Soviet Union deployed missiles in Cuba.

He offered withdrawal of missiles in return for the pledge that the U.S. would not attack it. It's partly because of...

**A visit to the U.S. (1952)**

**Cultural Exchange**

- Interaction with citizens
- Visiting dance halls and local supermarkets

**Experience with people affected his decision making**

**Conclusion**

- Trust-building plays an important role for nuclear disarmament
- Economical benefits raise credibility of relationships
- Cultural experiences affect decision making of leaders
- We should actively have exchanges with people in other countries

▶ We can accelerate nuclear disarmament by spreading good relationships

**Trust**

## F) 出前授業

### ■ 要旨

年間学習の集大成として、「核廃絶問題に関する出前授業」を、中学 1 年生対象に100分間実施しました。これまで学んできた核兵器廃絶問題の内容から最も大切な要素を選び、探究の内容をふまえて、核廃絶問題の普及活動とする事がその第一義であります。GLP 生にとっても、主体的・対話的な学びの手法の中で最も学習効果が高い「人に教える」ことを、異学年の生徒たちに行うことによって、授業者自身の理解をさらに深める機会となります。

■ 実施日：2018 年 12 月 20 日（木）

■ 対象：創価中学1年生（220 名）

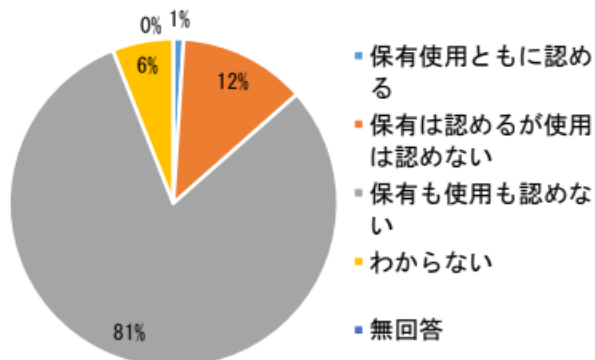
■ 会場：創価中学校 1年生教室（1～5組）各クラスに 3 または 4 人の GLP メンバーが訪問。5 クラスに展開し、指導案は同じものを実施。

### ■ 実施までの流れ

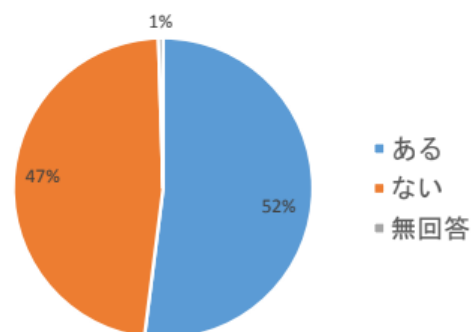
FW 調査「平和教育がどのように実施されているか」（広島・長崎）	夏季休業
中学校1年生アンケート	10月11日
アンケート分析 今野文枝教諭	10月16日
「本時の目標」ディスカッション	10月9日
教育学「授業展開のメソッドと授業案作成」 落合謙一郎教諭	10月23日
授業項目企画グループ対抗 プレゼンテーションコンペ	10月30日
授業案模擬授業（高校 SGH 委員教員・管理職） フィードバック	11月29日
授業案修正	
高校1年生 GCP リーダース（約 30 名）模擬授業 フィードバック	12月17日
授業案修正	
出前授業実施	12月20日
振り返り	1月16日
内容まとめ・英語化	1月18日

### 中学1年生事前アンケート（抜粋）

#### あなたの核兵器に対する考え



#### 小学校で核問題についての授業や活動をしたことはありますか



## ■ 教員フィードバック

「目標に従って、それぞれの活動がよく練られている」「映像の使用が効果的だった」「ロールプレイは大切だと思う」「グループコミュニケーションを多くしていることはいい」「核兵器の非人道性の部分で説明が多いので、中学生に配慮が必要」

## ■ GCP リーダース フィードバック

授業でよかったこと 「授業自体が楽しくて説明もわかりやすかった。とてもイイ体験をさせてもらった。」「ゲームはいいなと思った」「核兵器に着いてひとり一人が深く考えることが重要だという事がわかる内容だった」

授業でわからなかったこと 「時々出てくる歴史的な背景を中学 1 年生がもう少しわかりやすく説明が必要。ゲームの映像に説明が必要。」「もう少し話し言葉にした方が良い」

## ◆ 中学校生徒感想

「とてもとてもためになる、素晴らしい授業でした。核の恐ろしさは知っていたけれど、それがどのような影響を及ぼすかまではよく知らなかったので、今回よく知ることができて本当によかったです。私たちが核のことを風化させないことの大切さを教えてください、本当にありがとうございました。」

「核は危ない。でも核が無いと日本は沈んでしまう。。。難しいですね。核廃絶を叫ぶ国民と、核に頼る国。これからも平和について考えたいです。」

## ◆ 高校生徒感想

「授業の準備をしていく中で、今までの学びが整理されていき、深まっていっていると感じました。また、中学生のディスカッションの意見がとても新鮮で純粋に面白かったです。そして、感想で『動画の説明がわかりやすかった』と何人かの子が書いてくれたことが一番嬉しかったです。」

「自分の知識をわかりやすく共有することの難しさを学んだが、大事なことだと思った。このようなことを次代に継いでいくことも継承の一つとしてあるのだと感じた。今回 GLP で出前授業をやったことで、自分の学んだ知識をわかりやすくかつ正確に伝えることが大切で、それが共通した授業だとわかった。」



■ 授業指導案

## 創価中学校 出前授業案

教科	GLP 出前授業		担当教員	GLP
実施年月日	2018年12月20日(木) 10:00~11:50		生徒在籍数	各クラス在籍数
単元名	核兵器	本時の題目		
本時の目標	核抑止論の限界と核兵器の非人道性について体験的に学び、核兵器が絶対悪であること、核兵器を保有・使用ともにはいけない理由を論理的に説明できるようになる。			
	項目	授業の進行内容	時間(分)	備考
導入	自己紹介 アンケートの振り返り	親しみ、打ち解けてもらう 事前アンケートの結果を示し、手を挙げてもらう	3分	一斉授業
展開	核をめぐる国際情勢	<ul style="list-style-type: none"> <li>・GLPが作成した動画の視聴</li> <li>・ロールプレイ「グーとパーしか出せないじゃんけんで一発芸」を実施。皆がパーを出してしまふ核を持ちたくなる気持ちを体感する</li> <li>・核兵器をめぐる世界情勢について解説</li> <li>・GLPが作成した動画の再視聴</li> </ul>	8分	一斉授業 グループ（生活班） ロールプレイルール パーとパー→10回一発芸 パーとグー→グーだけ 20回一発芸
	ディスカッション 「国家の役割」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「国に一番やってほしいこと」を、表示されたリストから班で相談し選ぶ</li> <li>・国の役割として最も重要なのは「安全保障」であることを確認する</li> </ul>	10分	グー→1回一発芸 グループ（生活班）
	ディスカッション 「なぜ北朝鮮は核を持つのか」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・北朝鮮の概要（核兵器を持った国であることなど）を説明する</li> <li>・北朝鮮に関するファクトシートを見ながら、「なぜ北朝鮮は核を持つのか」を班ごとに考え、ふせんに書く(3分程度)</li> <li>・共通している内容のふせんをまとめる。その後、項目数を数える。いくつかの項目を発表し共有する</li> <li>・様々な理由から、核兵器が簡単にはなくなること簡単に解説する</li> </ul>	15分	まなぼーどを渡す 配布物：ファクトシート、ふせん
	核抑止の限界	<ul style="list-style-type: none"> <li>・実際には北朝鮮が核弾頭を打っていることを説明し、現状の核抑止論では北朝鮮を抑えられていないことを説明する</li> <li>・クイックQ「もしロシアが〇発打ってきたら、アメリカ国防代表のあなたはどうする？」を10秒で班に考えてもらい、米露間で実際起きた核兵器発射の誤報を紹介する。人為的なミスが起こりうる、危うい世界になっていることを説明する</li> </ul>	6分	配布物：赤い紙と青い紙
	BREAK TIME	BREAK TIME	5分	
	クイズ「核兵器の非人道性」	・クイズ&解説 thinking time 各30秒 →4分×5問	20分	グループ（生活班）
まとめ	授業の総括と 本時の目標の達成・確認	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ワークシート配布</li> <li>・授業内容を振り返られる質問に答える。</li> <li>・核兵器の保有・使用ともにはいけない理由を非人道性の観点から説明してもらう。（日能研改題）</li> <li>・個人の答えの共有</li> </ul>	10分	個人作業数分
	終わりに	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「核兵器は本当になくなるか?」「私たちに何ができるのか」をGLPから問いかける</li> <li>・答えは一つではない。</li> </ul>	2分	グループ（生活班）
課題	中学生の輪の中に入って楽しむこと。こちらが緊張しないこと。熱意をもって説明すること。			



## 授業後アンケート

1年 1組 2班 名前

### ループリック

あてはまる番号の枠内に丸をお書きください。

観点	項目	4	3	2	1
核抑止	じゃんけん	じゃんけんを通して国が核兵器をもつ心理を理解した	バーを出したくなる心理を理解できた	じゃんけんのルールは理解できた	じゃんけんのルールが理解できなかった
核抑止	動画	動画の内容と核をめぐる国際情勢を合致させて理解することができた	核をめぐる国際情勢について理解することができた	動画の内容は理解できた	動画の内容が理解できなかった
核抑止	安全保障	「わたしたちが国に一番求めるものは安全保障の確保だ」という説明を理解することができた	わたしたちが国に求めることは何かについて、論理的に比べ替えることができた	わたしたちが国に求めることは何か、画面に提示された選択肢の内容を理解することができた	わたしたちが国に求めることは何か考える示すことができなかった
核抑止	北朝鮮の核保有	自らが北朝鮮のリーダーとして考え、北朝鮮(非核保有国)が安全保障の観点から核を保有しようとする心理を理解することができた	ファクトシートに基づいて、北朝鮮が核を保有しようとする理由を考えることができた	ファクトシートの内容がわかった	ファクトシートの内容がわからなかった
核抑止	クイッククイズ	クイッククイズを通して機械や人為による核兵器誤発射の危機があり、現在のわたしたちは核戦争が勃発する危機下にあるということがわかった	クイッククイズを通して機械や人為による核兵器誤発射の危機があり、核抑止は不完全だと理解することができた	クイッククイズを通して核発射の危険性を感じることができた	クイッククイズの内容がよくわからなかった
非人道性	核兵器 QUIZ	振り返りワークシートの2個人ワークで、1.核兵器が及ぼす影響の観点から自分の意見を書くことができた	核兵器の及ぼす3つの影響を理解し、非人道的な立場から核兵器の廃絶の必要性を感じた	核兵器の及ぼす3つの影響を理解することができた	核兵器の及ぼす3つの影響を理解することができなかった
主体性		核廃絶問題の解決のために今後自ら何らかの行動を起こしたいと感じた	核廃絶問題の解決のためには自分たちの行動が必要であると理解することができた	核廃絶問題は自分たちも関わる問題だと理解することができた	核廃絶問題と自分との関わりを感じることができなかった
世界情勢		核をめぐる世界情勢について複数の国の立場から考え、核廃絶の難しさを理解することができた	核をめぐる世界情勢について複数の国の立場から考えることができた	核をめぐる各国の考えのうちどれか一つの国の立場から考えることができた	核をめぐる国際情勢について理解することができなかった
取り組みの姿勢		授業中に友人と意見を交わす中で核兵器に関する自分の考えが深まった	授業中の話し合いで自ら考え、友人と意見を交わすことができた	授業中の説明を聞き、理解することができた	授業をよく理解することができなかった



### GLP出前授業 振り返りワークシート

1年 1組 2班 名前

#### 1. グループワーク

Q1. 核兵器を持つことによって、相手の核兵器を使われれることを防いでいる考え方を「核抑止」という  
ヒント：漢字3文字

Q2. 核兵器不拡散条約(NPT)によって、核保有国と非核保有国に分けられている。  
ヒント：漢字とアルファベットのどちらでも良い。

Q3. 核兵器は「非人道的」な兵器である。  
ヒント：人間が行うとは思えないひどい様子のこと。

Q4. 核兵器がもたらす被害は、熱線、放射線、爆風である。  
ヒント：これによって体を構成する細胞が壊される。

#### 2. 個人ワーク

核兵器の保有・使用ともにはいけない理由について、以下の2点を参考に記述してください。

- 核兵器が及ぼす影響
- 核抑止は成り立っていないのか

非人道的で人間に害はあまりにも  
危ないし、核抑止は人のミスやシステムエラーなど  
でわざとじゃなくても相手国は間ちがってしまし、お互い  
の国にひ害が出る事によって「つだけじゃなく2つを  
書かなくてはならない」関係のない国にもひ害  
が出るため、成り立たず保有・使用はしてはいけない  
から。

## G) 評価と分析

GLPの活動の評価方法として、プログラム終了後に、本校の考えるグローバル人材の資質・能力の個別能力の成長を自己評価および他人に評価させた。本校のSGH構想調書において定義された「グローバル人材」の要件をもとに、以下のような資質と能力を具体的に取り上げ、これをGLPの生徒に自己評価させた(表1)。この自己評価表については、以下の手順で進められた(表2, 3)。

1、3月オリエンテーション: 1年間の活動を通じて自分が伸ばしたいと考えている能力に○をつけること。その中でもとりわけ向上させたいと考えているものに◎をつけること。

2、2月終了時点: 自分がこの1年間で向上したと考えられる能力に◎を、まあまあ伸びた物に○を、あまり伸びなかったものに△をつけること。どちらでもないものはそのまま無記入とすること。

3、但し、記入した場合は、その根拠となる具体的な例を記入すること(GLPの活動に関わらなくてもよい)。

4、終了後に無作為抽出で3人ずつのグループに分かれて、他のメンバーが見た評価を別の色のペンで記入すること。

	項目	分野		項目	分野	
世界市民の能力	問題解決能力	ロジカルフレームワーク	世界市民の資質	多面的・多角的な視点と寛容の精神	多様性の理解	
		分析力			異文化共生	
		論理的思考力			フィールドワーク	
	協働的能力	プロジェクトマネジメント			新たな視座	
		ファシリテーション		遂行力		
		フォロワーシップ		専門性		
	対話力・コミュニケーション能力	現場力		教養と理解		マインドマップ・設計のプロセス
		英語運用能力				創造的課題解決策の考察と実践
		プレゼンテーション能力				
		質問力				

表 1. 獲得させたいグローバル人材の資質・能力一覧

4月の事前調査により、GLP 生徒は「論理的思考」「現場力」「遂行力」に高い関心を示しているのは昨年と同様である。一方、「分析力」「フィールドワーク」が低いのは、本年度のGLP生の特徴である(表4)。

事後調査では全員が「ロジカルフレームワーク」の向上したのは昨年同様である。また「新たな視座」が高くなったのには、年間テーマを「核廃絶」に絞り込むことで、多角的な分析力が付いた結果と思われる。これは事前においても獲得したいスキルとして数値の低かった「分析力」「フィールドワーク」が向上したことに、アンケートやインタビューの分析、広島・長崎のフィールドワークの位置づけがはっきりしたことにも関与していると思われる。

一方で、昨年度に引き続き、伸ばしたい力の上位に上がっていた、「創造的課題解決策の考察と実践」では、伸びなかったもしくは評価しない(無印)の解答が5割以上を示した。育てる事が大変に難しい資質ではあるが、この部分でのプログラムの改善が引き続き必要と考える。



表 2

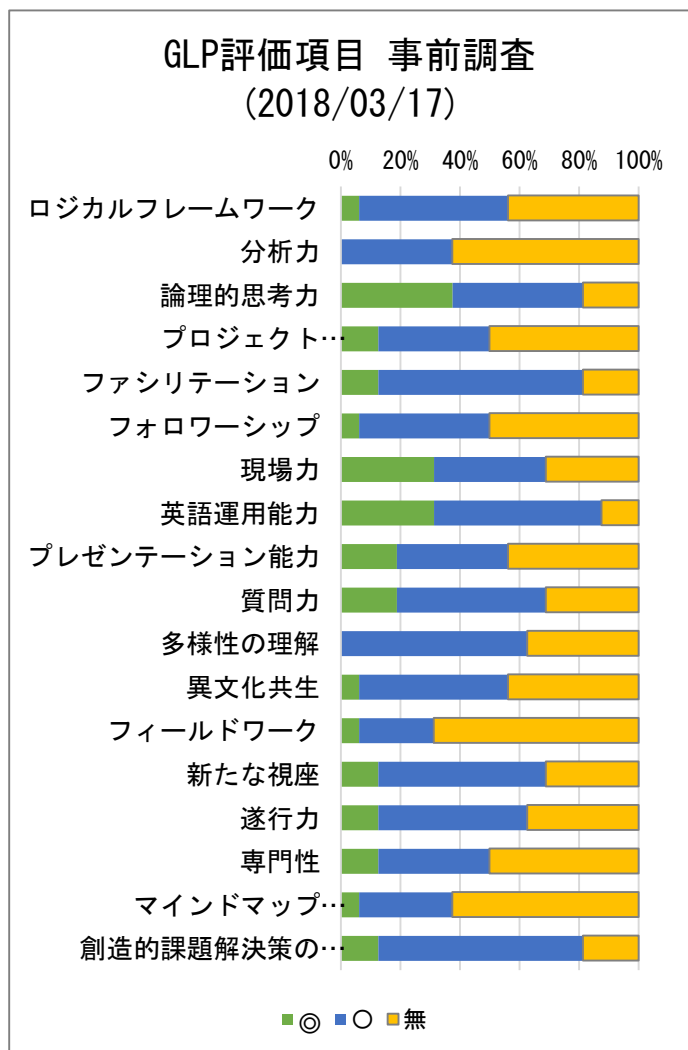


表 3

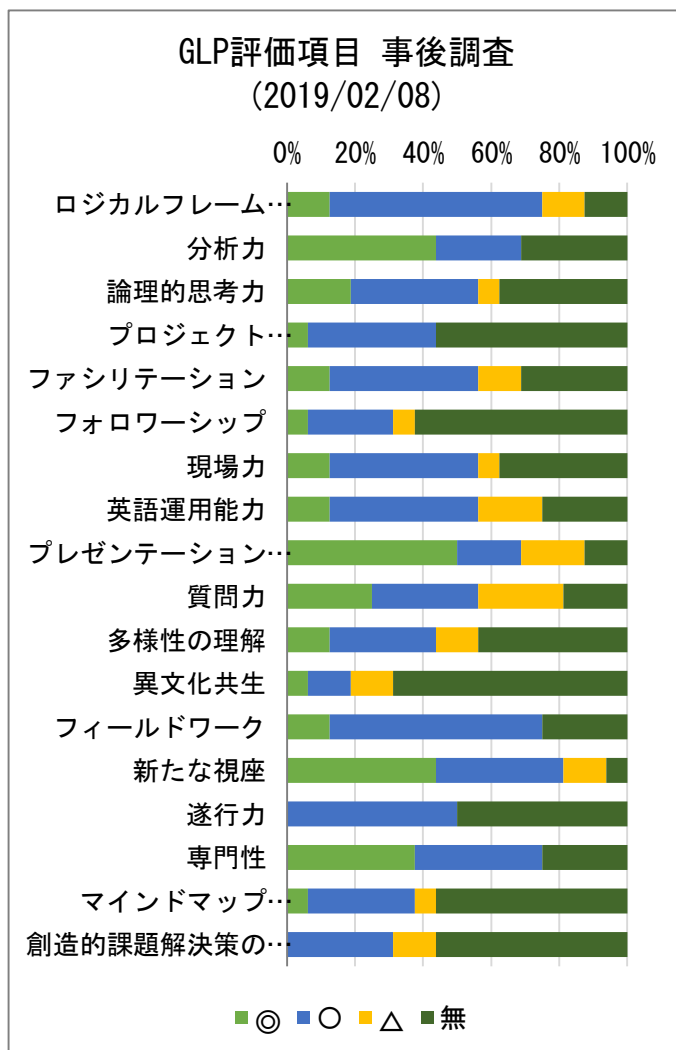


表 4. 期待していた変化の見られた項目一覧

項目名	事前		事後
ロジカルフレームワーク	58%	→	77%
分析力	38%	→	64%
フィールドワーク	36%	→	67%
新たな視座	64%	→	81%

## 4. 言語技術

### A) 概要・年間スケジュール

#### ■ 概要

「言語技術」とは、「議論する(話す・聞く)技術」「読解する(読む)技術」「作文する(書く)技術」「思考する(論理的思考・批判的思考の)技術」といった、言語をより有効に運用するための技術のことです。世界の多くの国々では、この「言語技術」が、各言語の「母語教育」として、小学校から高校まで体系的に教えられています。つまり、世界には発想・表現方法に共通の基盤があり、議論や交渉などは、それらに基づいて行われているということです。まさに「言語技術」は、言語を運用する上での「世界標準」であり、世界の多様な人々と議論を交わし、グローバルに活躍するための必須の能力だと言えます。本校では、グローバル人材像の資質として、「地球規模課題(Global Challenges)の解決に貢献する能力」を有することを定めていますが、この能力の基盤には、コミュニケーション能力や論理的・批判的思考力が欠かせないとしています。「言語技術」の導入は、まさにそれらの力を鍛えていくことを目的としています。本校では、つくば言語技術教育研究所所長の三森ゆりか氏が開発した「言語技術」教育のプログラムをもとにし、同氏から指導・支援を受けながら、「言語技術」教育を実施していきます。

「言語技術」の授業では、まず日本語でトレーニングを行い、同じ内容のトレーニングを英語でも行うという往還学習を実施します。この往還学習は、言語間の共通点や相違点を認識することで、「言語技術」習得の効率性を高めるという本校独自の取り組みです。この取り組みによって、日本語の言語能力の向上はもちろんのこと、各言語共通の「言語技術」の獲得は、外国語習得の効率化、及びその運用能力の向上を促進すると思われます。このようにして鍛えられた言語運用能力は、全教科における生徒一人ひとりの学習理解を促進し、実社会・実生活の営みも、より充実したものにしてくれるはずです。この「言語技術」の授業を通し、世界に通用する言語運用能力を備えた人材を、本校は育成していきます。

#### ■ 昨年度との相違点

①今年度から新たに、3年生の現代文の授業と連携して、小論文の書き方をトレーニングしました。これは GCP のファイナルプロジェクトにおいて、一人ひとりが小論文を書くためのカリキュラムです。詳細は GCP のページでご紹介します。

②高校1年生では、自分の応答を客観的に確認するための「紙上問答ゲーム」、記述力・集中力・聴き取る力などを鍛える「再話」、文章を書くうえで自身の思考を広げ、まとめるための「マッピング」の実践を行いました。

③創価中学校、東京創価小学校でも今年度から「言語技術」の授業を本格的開始しました。そして、小中高の授業担当者が集まり、12年一貫の「言語技術」教育のカリキュラム作成について検討会議を行いました。

④「言語技術」の授業で行っている内容をホームページで発信・紹介し、校外にも広く知ってもらおうようにしました

■ 年間スケジュール

2018年度 高校1年生 言語技術計画	
1学期	
1	・言語技術とは何か ・問答ゲーム(好き嫌い、立場限定、ナンバーリング)
2	・母語の重要性 ・言語技術の必要性 ・英語問答(好き嫌い、立場限定、ナンバーリング)
3	・問答ゲーム(どちらを選ぶか、賛成か反対か) ・英語問答(どちらを選ぶか、賛成か反対か)
4	・紙上問答ゲーム ・5W1Hを意識した例文添削①
5	・5W1Hを意識した例文添削② ・問答ゲーム(5W1Hで質問を返す)
6	・英語問答(5W1Hを使った質問の作り方・5W1Hで質問を返す)
7	・問答ゲーム(相手の応答の正しい掘り下げ方、3往復の問答)
8	・事実と意見の区別 ・論拠(Warrant)の確認
9	・英語で事実と意見の区別 ・問答ゲーム
2学期	
1	・問答ゲーム ・パラグラフとは何か ・パラグラフの構成要素(TS、SS、CS) ・作文課題(学校の宿題賛成反対)
2	・作文課題(コンビニ24時間営業) ・TSを支えるSSの作り方 ・作文課題をリライトする
3	・英文パラグラフの実践 ・文と文をつなぐ表現(linking words)
4	・作文内容の素材集め ・SSの掘り下げ ・課題作文(自分で自由にテーマ設定)
5	・マッピング ・作文課題(自分の性格・特徴を紹介)
6	・再話とは ・再話の効果 ・再話①(火消しのカラス)
7	・英語再話
8	・文章の添削方法について ・再話②(農夫とワシ) ・相互添削
9	・主語、述語、目的語の補完 ・TSの性質を確認 ・TS作成の実践
10	・英語TS作成の実践
11	・パーソナルエッセイの書き方(複数のパラグラフで文章を書く・素材集め・TS作成)
3学期	
1	・説明の技術①(情報の整理分類、ラベリング)
2	・説明の技術②(空間配列の原則)
3	・説明の技術③(概要から詳細の順で説明する)
4	・英語で物の作り方を説明する
5	・説明の技術④(時間配列の原則)
6	・1年間の振り返り

## 2018年度 高校2年生 言語技術計画

### 1学期

1	ガイダンス
2	描写①
3	描写②
4	イラストの分析
5	絵画の分析①
6	絵画の分析②
7	詩の分析
8	詩の分析②
9	小説の分析①
10	小説の分析②

### 2学期

1	マンガによる視点変更1(赤ずきん)
2	マンガによる視点変更2(赤ずきん)
3	テキストの視点変更1(動詞の変化・英語)
4	テキストの視点変更2(振返り・事実整理)
5	テキストの視点変更3(年表作成)
6	テキストの視点変更4(歴史執筆)
7	テキストの視点変更4(歴史執筆)
8	論理1(三段論法の練習問題)
9	論理1(答え合わせ)
10	論理2(論理の飛躍・隠された前提)/英語
11	反論の方法

### 3学期

1	ディベートのルール確認、ブレイクストーミング
2	ディベート練習①【日本語】
3	ディベート練習②【日本語】
4	ディベート練習③【英語】
5	ディベート練習④【英語】
6	立論(小論)執筆【「型」の解説・執筆】

## B) 学習・トレーニング内容

### 1年生

1年生の「言語技術」の授業では、以下の3つを学習・トレーニングしました。

- ①「対話」のトレーニング
- ②「作文」のトレーニング
- ③「情報伝達」のトレーニング

以下にそれぞれの実施内容を説明します。教材は、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン」を使用しました。

#### ①「対話」のトレーニング

「対話」のトレーニングでは、(1)「問答ゲーム」、(2)ナンバーリング、(3)質問の分解、(4)論拠の確認、(5)「事実」と「意見」の区別 の5項目を行いました。

##### (1)「問答ゲーム」

「対話」のトレーニングでは「問答ゲーム」を中心に行います。「問答ゲーム」は「対話」の技術のトレーニングの基本であり、「言語技術」全体の最も基本となるものです。2人1組となり、簡単な質問と応答をゲーム形式で繰り返します。「好きか嫌いか」という簡単な質問から始まり、「どちらが好きか」「どちらになりたいか」という選択を迫る質問、最後は「賛成か反対か」といった高度な質問まで行います。応答の際に「好き」や「賛成」など、あらかじめ立場を限定して答えさせ、自分の考えとは逆の立場に立って考えさせることも行いました。日本語で「問答ゲーム」を行った後には、中学導入レベルでの簡単な英語による「問答ゲーム」を行います。

## 対話のトレーニングの実践

### 例題(理由は1つ)

- 1、あなたは晴れの日が好きですか？
- 2、あなたは冬が好きですか？
- 3、あなたはテストが好きですか？(好き)
- 4、あなたはゲームをすることが好きですか？(嫌い)
- 5、あなたは魚になりたいですか？
- 6、あなたは大人になりたいですか？

## Training on Dialogue

### Example

1. Do you like watching TV?
2. Do you like cats?
3. Do you like baseball?
4. Do you like reading *manga*?

発言の際は、以下のルールを必ず守って行います。

- ・結論をまず先に述べ、その後必ず根拠をセットにして言う。
- ・発言の最後に結論を繰り返す。
- ・主語・目的語を省略しないで話す。
- ・質問に対して直接的・具体的に答える。

上記のルールに則ったものを「応答の型」として、繰り返しトレーニングし、体に染み込ませていきます。また、英語の「応答の型」も同様にトレーニングしていきます。

## 応答の型

「私は〇〇が好き(嫌い)です。 ←結論を先に  
なぜなら、…だからです。 ←理由を必ずつける  
だから、  
私は〇〇が好き(嫌い)です」 ←結論を繰り返す

※ 対話の時は相手の目を見ること！

## Training on Dialogue

英語の問答ゲームの「型」

“Yes, I like ○○, because ..... That’s why(so) I like ○○.”

“No, I don’t like ○○, because ..... That’s why(So) I don’t like ○○.”

「問答ゲーム」は、「対話」のトレーニングの一環ですが、自分の応答がルールを守れているかどうか客観的に確認するために、「紙上問答ゲーム」も行いました。高校生ともなれば、このように文章化した方が、自分の応答の型をチェックできるので、トレーニングするうえで効果的です。

### (2) ナンバーリング

理由が複数個ある場合は、ナンバーリングの技術を用います。ナンバーリングの型を日本語・英語それぞれで覚え、「問答ゲーム」で繰り返しトレーニングをします。

## 応答（ナンバーリング）の型

☆ナンバーリング

初めに理由がいくつあるかを示し、数字を使って順番に意見や理由を述べること。

「私は〇〇が好き(嫌い)です。  
理由は2つあります。1つめは・・・だから  
です。2つめは・・・だからです。  
だから、私は〇〇が好き(嫌い)です」

## ナンバーリングの実践(English)

☆英語問答の「型」

Yes, (No,)I (don't) like ○○.  
I have TWO reasons (why I like ○○).  
Firstly, .... Secondly, ....  
That's why(So) I like ○○.

## 対話のトレーニング

例題(理由は2つ)

☆即座に立場を決める！理由はできるだけ具体的に！

- 1、子ども部屋にテレビがあることにあなたは賛成ですか、反対ですか？
- 2、スマートフォンを見ながら歩くことにあなたは賛成ですか、反対ですか？

## Training on Dialogue

Watching  
your  
Friend's  
eyes!!

- 1、 Do you like Disneyland?
- 2、 Do you like jogging?
- 3、 Do you agree that all high school students should belong to club activities?
- 4、 Do you agree that all high school students should do volunteer activities?

### (3) 質問の分解

内容の濃い対話のために、相手に情報を伝える時は5W1Hをもとに、落ちている情報がないかどうか常に意識して話を組み立てます。また、相手の話を理解するために5W1Hを軸に、不足している情報がないかどうか常に意識して聴き、質問を分解(ブレイク・ダウン)して聞き返します。「質問→応答」の1セットで終わっていた「問答ゲーム」を、「質問→応答→質問→応答」と2セット、3セットと往復して行うようにします。このとき、話題を掘り下げていくような質問をすることを意識し、話題が拡散しないようにさせます。

複数回の往復の「問答ゲーム」をする前に、下に示した5W1H が抜けている例文をもとに、5W1H を補うトレーニングもしました。

### 対話のトレーニング

☆コミュニケーションの基本

- ①自分の考えをより正確に伝える。
- ②相手の考えをより正確に理解する。

①②のためには、より具体的に話す・聞くこと  
→ 5W1Hを意識して話す・聞くようにする!  
→ 誤解を生じさせないコミュニケーションが生まれる

### 5W1Hを意識した対話のトレーニング

次の文で不足な情報を5W1Hを使って質問しよう。

この前、買い物に行って、うっかり置き忘れてしまったらしいのです。不便だから取りに行こうとしているようなので、一緒に行ってあげようとしているみたいです。

### 5W1Hを意識した対話のトレーニング

SVOCMを意識して、次の文を英語化してみましょう  
そのとき足りない情報は何でしょうか？またそれを尋ねる5W1Hは？

この前、買い物に行って、うっかり置き忘れてしまったらしいのです。

When? Who? Where? Who?

Last ○○, ●● went shopping to △△, and said ◎◎ forgot ■■ うっかり.

What?

### 5W1H in ENGLISH

- 問題文を英語で考えた方が、欠落している情報がよく見えるので、5W1Hは意識しやすい。
- 5W1Hのうち、HOW? は、日本語のWHATと混ざることが多い。HOW? は形容詞・副詞を尋ねる文になる。

### (4) 論拠の確認

対話をしている時、相手の発言が、ある「常識」を前提としてなされる場合があります。この「常識」が共有されていないと、対話がかみ合わなかったり、後に問題を引き起こしたりします。よって、対話をしている際には、相手の発言の陰に潜んでいる「常識」に注意していく必要があります。そして、潜んでいるとしたらどのような「常識」が隠れているのか気づけるようにトレーニングをします。

### かみ合わない対話

問: マリアが太郎の話を理解できなかった理由は何か考えてみましょう。

太郎: 朝の7時台の電車には、僕は乗りたくないね。

マリア: なんで?

太郎: だって、朝の7時台の電車はとて混むじゃないか。

マリア: (どういこと????)

### 論拠の確認・・・常識・根拠の再確認

自分が話している時、相手も当然理解をしていると思って話をしていたら、相手はまったく理解をしていなかったという場合がある。

→対話・議論の前提=「Warrant」(常識・根拠の正当性)が共有されていない。・・・結果として対話がかみ合わない。

(5)「事実」と「意見」の区別

話したり聞いたりするとき、「事実」と「意見」を区別することができれば、中身に振り回されることなく情報を得ることができ、正確な情報を発信できるようになります。まず、短文を「事実」か「意見」か区別するトレーニングを行いました。その後、「事実」と「意見」が混ざった文を区別するトレーニングを行いました。

**事実と意見を区別できるようになると・・・**

「事実」・・・本当にあること、本当にあったこと  
 「意見」・・・人の考え、人の思い、人の判断

①内容に惑わされずに受信  
 →どこまで本当でどこから意見か、人の言葉や文章を冷静に客観的に検討できるようになる。

②事実に基づく正確な発信  
 →より説得力のある話や文章になる。 (黄色のテキスト13ページ)

**根拠を示さず意見だけ述べても説得力はない。そして、一般に、意見の根拠となるものは(正しい)事実である。**

例(意見)

『クリスティアーノ・ロナウドは優れたサッカープレイヤーだ』  
 (根拠)

×『彼は観客を魅了するような華麗なドリブルをする』  
 ○『彼はこれまで欧州最優秀選手に3回選出された』  
 ○『彼はこれまでFIFA最優秀選手賞を4度受賞した』  
 ×『彼はこれまでFIFA最優秀選手賞を10度受賞した』

**事実と意見の区別**

A.これは、建設から30年経ったビルだ。  
 B.これは、建設から30年経った古いビルだ。  
 C.これは、隣のビルよりも古いビルだ。  
 D.リチャード・ニクソンはアメリカの優れた大統領であった。  
 E.彼は、リチャード・ニクソンはアメリカの優れた大統領であったと言っている。  
 F:アブラハム・リンカーンは、リチャードニクソンより実績が多い。

Fact and Opinion in English

1. Blue is the prettiest color.	F / O
2. Sarah went to the store on Monday.	F / O
3. A camel is a mammal.	F / O
4. Spinach tastes great.	F / O
5. Everyone should go to the movies on Friday.	F / O
6. Theresa's dog is a poodle.	F / O
7. Bears are very interesting.	F / O
8. Jake is the best baseball player.	F / O
9. George Washington was the first president of the United States.	F / O
10. Picnics are better in the summer.	F / O
11. Soccer is a dumb game.	F / O
12. The earth has a north and south pole.	F / O
13. Cheetahs can run faster than horses.	F / O
14. George Washington was the greatest president of the United States.	F / O
15. Red shoes are better than white shoes.	F / O
16. Tuesday comes after Monday.	F / O
17. Spiders are creepy.	F / O
18. January is the worst month of the year.	F / O
19. Dogs have a better sense of smell than humans.	F / O
20. Halloween is in October.	F / O

②「作文」のトレーニング

「作文」のトレーニングでは、(1)パラグラフの構成と作り方、(2)説得力のあるサポーティング・センテンスの作り方、(3)トピック・センテンスの作り方、(4)再話 の4項目を行いました。

(1)パラグラフの構成と作り方

パラグラフと、日本でいうところの「段落」との違いに着目させ、パラグラフの構成要素を学びます。社会に出て求められる意見文や報告文の文章は、パラグラフ形式で書かれた文章であることを教えます。また、英語をはじめ欧米の言語は、基本的に文章をパラグラフで書くことが決まっており、外国語の文章を読み書きする時にとても重要になることを伝えます。

パラグラフの構成要素と作り方

- トピック・センテンス(TS) →主張・話題を述べる。基本的に第1文目に置かれます。
- サポーティング・センテンス(SS) →TSに対し根拠・例示などを付け加える複数の文です。
- コンクルーディング・センテンス(CS) →再主張して締めくくる文。基本はTSを繰り返します。
- TS、SS、CSを改行せずにひとつなぎで書く(=パラグラフ)  
 →「対話」の技術における、発言の際のルールに従った「応答の型」をひとつなぎで書けばパラグラフになります。



## (2) 説得力のあるサポーターティング・センテンスの作り方

トピック・センテンスの内容が説得力を持つよう、サポーターティング・センテンスでは定義・説明・事例・根拠などを記述してトピック・センテンスを支えます。まず大前提として、サポーターティング・センテンスがトピック・センテンスの内容から絶対に逸脱しないようにしなければなりません。また、サポーターティング・センテンスを事実や自身の経験をもとに書くと説得力が増すことを学びます。さらに、自分の主張を支える理由・根拠が、相手からしてみると不十分で納得できない場合がありますので、挙げた理由・根拠を5W1Hで掘り下げるトレーニングをします。理由・根拠を5W1Hで掘り下げるトレーニングでは、以前に自分が書いた意見文を掘り下げさせ、書き直しをさせることで、説得力のつけ方を実感してもらいます。

### 本日のトレーニングの内容

#### 《説得力のある文章を書く》

↓ そのためには・・・

主張(TS)を支える「理由」(SS)が大事

↓ つまり

事実や筆者の経験をもとに、説得力のある理由・根拠・例を書けるかどうか

### こういう理由の文はダメ！

問：以下の(理由)は何がいけないでしょうか？

#### ●24時間営業のコンビニエンスストアの存在に反対

(理由)コンビニエンスストアが24時間開いていると、深夜に働かなくてはいけ  
ない人が必要となり雇用が生まれるから。

#### ●24時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成

(理由)24時間開いていると、いつでも買い物ができる、深夜でも店員がいて  
安全だから。

(理由)1つ目は、24時間開いていると、いつでも買い物ができる便利だから。  
2つ目は、他の店が閉店していても自分が欲しいものが手に入るから。

### 理由をもう一段階掘り下げる！

#### ●小学校への英語の導入に反対

1つ目は、英語が授業に入ると、国語の学習時間が減る結果になるから。  
→国語の学習時間が減ると、思考力や表現力といった、母語の使い方を  
学ぶ時間が減り、学力低下につながる。

2つ目は、小学校で英語を教えると、英語嫌いの子供を増やす可能性がある  
から。

→小学生が英語で自分の考えを話すことは難しく、うまく話せない経験が、  
彼らに英語への苦手意識を植え付けてしまうと思われる。

### サポーターティング・センテンスの悪い例

A項目：根拠になっていない例

- ▼コンビニエンスストアはたくさんの商品が置いてあるから。
- ▼私はコンビニエンスストアの商品が好きだから。
- ▼コンビニエンスストアは近くにたくさんあって便利だから。
- ▼1つめはいつでも買えるから。2つめはお腹がすいたときすぐ食べ物を買えるから。

B項目：掘り下げになっていない内容の例

- ▼電力の消費が莫大 → 24時間営業をやめれば節電ができる
- ▼電力の消費が莫大 → 冷暖房が強く電力もかなり使っている
- ▼いつでも物が買えて便利 → 店がやってなければいつでも買えず不便
- ▼いつでも物が買えて便利 → 店舗がたくさんあってすぐに買いに行ける
- ▼明るさが防犯対策になる → 私は明るいところによく行く

文章を書く前に、サポーターティング・センテンスの素材となりうるものをできるかぎり挙げてから、どの素材が最も読み手を納得させるかを考え、選択し、アウトラインを作成することは、一貫した文章を書くうえで大切なことです。いきなり文章を書き始めることは禁止とし、発想を広げ、文字に起こし、テーマに応じた素材の良し悪しを比較検討する練習もしました。その1つの思考ツールとして、「マッピング」を用いました。

## 本日のトレーニングの内容

### 《論理的な文章を書く》

↓そのためには・・・

文章を書く前に、主張・話題につながる素材(根拠)をたくさん挙げる。

↓そして

たくさん挙げた素材の中から、どれが根拠として一番いいか(読者を納得させられるか)をよく吟味をして取捨選択する。

### 《本日の課題》

「〇〇に賛成(〇〇に反対)」の意見文を1つのパラグラフで書きましょう。〇〇の内容は自分で自由に決めてください。

## 文章を書く前に、主張・話題につながる素材(根拠)をたくさん挙げる。(10分間)

①自分の主張を決める。

「私は〇〇に賛成／反対である」の〇〇の内容を決める

②自分の主張を支える理由・根拠を3個以上挙げる。

③3個以上挙げた理由・根拠の、さらに掘り下げた説明を、それぞれ2個ずつ挙げる。

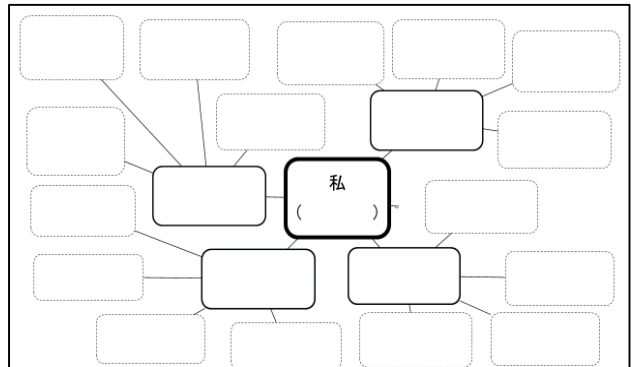
☆10分間、手を止めずに書き続ける！思いついたものをそのまま書く。書く前に、その内容がいいか悪いか自分で判断してない！

### 《本日の課題》

「私、〇〇〇〇は、△△△で□□□な人間である」というトピックセンテンスの文章を1つのパラグラフで書きましょう。

【手順】① プrintのマッピングを完成させる。

- (1)真ん中の枠の「私」の下に自分の名前を書く。
- (2)真ん中の枠から伸びている4つの枠に、自分の性格・性質や特徴・特性を表す内容をより具体的に書く。
- (3)4つの枠それぞれから伸びている枠の3つ以上に、掘り下げた内容(裏付ける例やエピソード)を書く。



### (3)トピック・センテンスの作り方

トピック・センテンスの2つの構成要素を知り、より良いトピック・センテンスを作る練習をします。トピック・センテンスを読んだときに、読み手が、その続きのサポーター・センテンスに興味を持ち、「おおよそこんな内容なのだろうか?」「このトピック・センテンスを支えるのはどのような内容なのだろうか?」「この続きを読みたい!」と考えるような文を作ります。逆に、単なる事実を示す文や、具体的に詳細を語りすぎる文は良いトピック・センテンスとは言えません。

トピック・センテンスで言及されていない内容は、サポーター・センテンスで述べてはいけません。逆の言い方をすれば、サポーター・センテンスで述べた内容を包含したトピック・センテンスにしなければなりません。いくつかの例題について考えながら、トピック・センテンスの作り方を身につけていきます。

## パラグラフの復習

例題: 次のパラグラフの悪いところは何でしょうか。

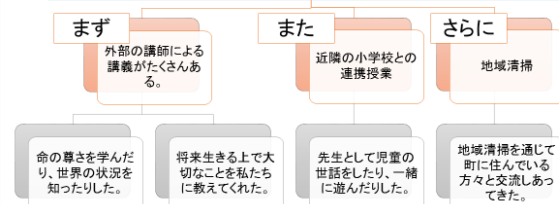
伊藤家の長女の薫は、気丈で面倒見がよい。一方、次女の渚は、常に自分のことが優先で、周囲の状況にあまり関心を示さない。また、三女の華は、すぐに甘えて人に頼ろうとする。

- ★パラグラフでは、1つのトピック(話題)しか言ってはいけない!
- ★TSは、そのパラグラフで何を話題にするのかを示す一文! だからTSの内容から外れた事を、そのパラグラフ中で言うてはいけない!

課題A: 上のパラグラフでは、どのようなTSを作ればよいでしょうか? 隣の人と考えて見ましょう。

## 課題B

山田中学校は、多くの人と触れ合い、貴重な経験をする  
ことができる学校である。



以上、学んだ3項目をもとに、日本語と英語でパラグラフ・ライティングの実践をします。

SOKA Gakuen

Cats are nicer pets than dogs in some ways. **TS**

First, cats are cleaner. They love to be very clean. **FE**

Cats are also quieter than dogs. **SS1**

Cats are safer, too. **SS2**

Dogs sometimes bite people, but cats almost never do. **SS3**

Cats have many advantages to keep as pets. **FE**

**CS**

Paragraph Reading in English

### 文と文をつなぐ表現(LINKING WORDS)

列挙	firstly (第一に), secondly (第二に), thirdly (第三に), finally (最後に)
順序	before (～の前に), after (～の後で), earlier (以前に), later (後で)
追加	also (～もまた), besides / moreover (その上), in addition (加えて)
例示	for example / for instance (例えば), such as (～のような)
逆接	but (しかし), however (しかしながら), on the contrary (それどころか)
譲歩	though / although (～だけれども)
対比	meanwhile / on the other hand (一方では), while (～の一方で)
原因・理由	because (～なので), because of (～の理由で), since (～なので)
結果	so (だから), therefore (それゆえ), thus (したがって), as a result (結果として)
言い換え	in other words (言い換えると), that is (to say) (つまり)
要約	in short (要するに), in a word (一言で言うと), in summary (要約すると)
結論	in conclusion (結論として)

課題文のテーマとしたものは以下の通りです。

#### 課題例

- 1、あなたは、学校で宿題がまったく出ないことに賛成か、反対か？
- 2、あなたは24時間営業のコンビニエンスストアの存在に賛成か、反対か？
- 3、2の課題で書いた文章について、サポーター・センテンスを掘り下げて書き直す。
- 4、私は〇〇に賛成／反対である。(自分で内容を決めて意見文を書く。素材をたくさん出す)
- 5、「私は〇〇で△△な人間である」という TS の文章を書く。(マッピングを活用)

#### (4) 再話

「言語技術」教育の一項目である、「再話」を実施しました。「再話」は、物語を聞いた後に、原稿を見ない状態で、その物語の内容を書き起こして再現する活動です。何を書くかで悩む必要がなく、聞き取った物語を文章にすればよいので、まず、記述力(記述速度)の向上が期待できます。また、集中して物語の因果関係や論理展開をとらえなければならないので、集中力・大事な部分を聴きとる力・メモを取る力・因果関係をつかむ力・全体の構造を論理的に理解する力の向上も見込めます。相互添削・評価の機会も設け、文章の添削の仕方も同時に学びました。

◎「再話」の手順

- ①一度目は集中して物語を聞く。(メモはとらない)
- ②もう一度、集中して物語を聞く。「段落シート」にメモをしてよい。  
…段落分けは、「段落シート」のとおりとする。
- ③「段落シート」をもとにして物語を再現する。

◎「再話」の注意事項

- ④文字が他者に読める範囲で、なるべく速く書く。消しゴムは使わない。
- ⑤内容が正確であれば、表現は原作どおりでなくてよい。  
…登場人物名・地名・キーワード・話の筋の展開・結末は正確に。
- ⑥漢字で書けるものは漢字で書く。
- ⑦セリフの部分は「 」をつけて直接話法で書く。
- ⑧主語や述語が抜けないように注意する。

消しゴムは使わない！  
書き直している時間があったくない！  
間違いは線を引くなどして修正する！

◎主な添削記号

削除される………誤字は二重線で消し、横に正しい字を書く。  
単に削除するだけでよい場合は、二重線のみでよい。

妹の結婚に………脱字の部分に「」を書き、横に文字を補う。

それをメロスに………文字や語句を入れ替える。

だった。そして………改行すべきところ。  
………改行を取り消す。

………改行を取り消す。

………改行を取り消す。

### ③「情報伝達」のトレーニング

「情報伝達」のトレーニングでは、(1)情報の整理分類、(2)ラベリング、(3)空間的秩序の原則、(4)時間的秩序の原則 の4項目を行いました。

#### (1)情報の整理分類

同じ性質を持つ情報は共通項でくくり、整理分類をして提示するようにします。そうすることで説明は格段に分かりやすくなります。

#### (2)ラベリング

整理分類し、共通項でくくった情報に、ラベル(見出し)を貼って先に示します。「この部分は何についての情報なのか」を先に明らかにしてから説明すると、聞き手は分かりやすくなります。

上記の(1)(2)までを学び、トレーニングする例題として、「キャンプの持ち物の説明」を取り上げます。キャンプに持って行く持ち物を、ただ羅列して挙げるだけでは、聞き手は理解するのに手こずります。そこで、共通の性質を持つもの同士でカテゴリー化し、そのカテゴリーにラベルを付けます。また、同じ枚数どうしでくくると、説明はより分かりやすくなります。今回の例題では、以下に示すように、「衣服」と「洗面道具」というカテゴリーに分け、ラベルを貼ることができます。



(問題) 三郎君がキャンプの持ち物の説明を直しました。もっと分かりやすい説明には、どうしたらできますか？

これから僕はキャンプの持ち物を説明します。キャンプの持ち物は、半袖Tシャツ1枚、タオル1枚、歯磨き粉1つ、長ズボン1本、靴下1足、半袖Tシャツ1枚、長袖トレーナー2枚、それに歯ブラシ1本です。以上がキャンプの持ち物です。



情報の整理分類の実践

これから僕はキャンプの持ち物を説明します。キャンプの持ち物は、長ズボンを1本、**長袖トレーナーと半袖Tシャツを2枚ずつ**、靴下1足、そして、タオル1枚と**歯磨きセット**です。以上がキャンプの持ち物ですので、忘れずに持ってきてください。

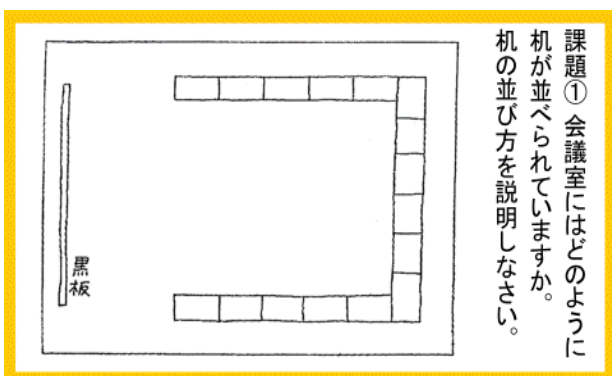


ラベリングの実践

これから僕はキャンプの持ち物を説明します。キャンプの持ち物は、まず**衣類として**、長ズボン1本、**長袖トレーナーと半袖Tシャツを2枚ずつ**、靴下1足です。また**洗面道具として**、タオル1枚と**歯磨きセット**です。以上がキャンプの持ち物ですので、忘れずに持ってきてください。

### (3)空間的秩序

空間的秩序とは、大原則として「概要から詳細へ」説明するというものです。相手に情報の全体像（見通し）を与えてから、部分の詳しい説明をします。道案内をするときや、探している物を相手に伝える時など、最初に概要を伝えてから、詳細な部分を伝えます。最初に全体像や見通しが与えられると、情報の受け手は情報の内容をイメージ（理解）しやすくなります。また、小原則として「一方向」で説明をするということがあります。例えば、「上から下、あるいは下から上」「右から左、あるいは左から右」「手前から奥、あるいは奥から手前」「外から内、あるいは内から外」というように説明するという事です。聞き手（読み手）の視点が行ったり来たりしないようにします。一方向の説明の方が、聞き手（読み手）は覚えやすく、理解しやすくなります。



#### 【今日の説明の技術】

★概要から詳細へ、全体から部分へ、  
大きい情報から小さい情報へ

課題② プリントにある地図をもとに、今日学んだ「説明の技術」を必ず使って、A駅から青空第一中学校まで相手がよく分かるように道案内をしてください。

※相手は大人で、A駅周辺に詳しくないこととします。

#### 【考えてみよう】

「道案内」における「全体の情報」  
「大きい情報」とは何でしょうか。

「道案内」における「部分の情報」  
「小さい情報」とは何でしょうか。

#### トレーニング

##### ★物の説明

今からある「物」のイラストを印刷したプリントを配付します。列ごとに違う「物」になっていますので、他の人に見られないように注意してください。

その後、席を替えて、別の列の人にその「物」について説明していただきます。その「物」を見ていない人が、その「物」と同じ物をイメージできるように、学んだ説明の技術を必ず使い、その「物」の説明を考えてください。聞いている人は、説明をもとに、その「物」の絵を描いていただきます。

### (4)時間的秩序の原則

時間的配列の秩序とは、時間の経過に従い、時間の早いことから順を追って説明していきます。物の作り方や実験の手順などを説明・報告する時には、時間が逆行しないように、この時間的配列の秩序を守ります。また、聞き手（読み手）が分かりやすいように、順序を表現する副詞（まず、最初に、はじめに、次に、それから、その後、最後に、終わりに等）を有効に使うようにします。

#### 時間的秩序に従って説明をするトレーニング

##### ★物の作り方の説明

時間的秩序の原則（時間の経過に従い、早い順から説明すること）に従った時、物の作り方において、最初に説明すべきことは何でしょうか？

#### 説明の技術のトレーニング

☆明日香さんは俊平君に自分の好きな食べ物の作り方を説明しました。



まず具を適当に切るのよ。それでパンにソースを塗ったら、具をのせて、チーズものをせて、焼いて終わりよ。

課題1：明日香さんの物の作り方の説明で分からないこと・あいまいなところに対し、5W1Hの質問をペアで10個以上書き出しましょう。

## 2年生

2年生の「言語技術」の授業では、以下の3つを学習・トレーニングしました。

- ①「情報分析」のトレーニング
- ②「認知」のトレーニング
- ③「議論」のトレーニング

以下にそれぞれの実施内容を説明します。教材は、つくば言語技術教育研究所発行の「言語技術のレッスン」を使用しました。

### ①「情報分析」のトレーニング

「情報分析」のトレーニングでは、(1)描写、(2)絵の分析、(3)テキストの分析 の3項目を行います。

#### (1)描写

最初の描写では、ごく簡単な国旗やイラストを言葉のみで伝えることを例題として、下記の3項目の必要性を確認し、グループワークで協力して行います。

- ・描写に必要な情報を列挙する
- ・挙げられた情報を分類整理する
- ・どの順序で描写すると効果的かを考える

次に個人の作業として、1年次に学習したパラグラフライティングの形式で、描写文を書くことに取り組みます。このように2年生の言語技術、特に日本語では、作文を書く機会が多いので、生徒が書いた描写文は、担当教員の1人がループリックに基づいて採点、添削して返却するようにしています。具体的なループリックと添削については、後述します。

最後に、「大きな情報から小さな情報へ一方向で説明する」という空間的秩序の原則を確認して描写の授業を終わります。

**1. -①描写** p. 38

a. 「説明」のルールの復習 = 「描写」のルール

- > 大原則
  - ◆大きな情報から小さな情報へ (Large to Small)
    - 全体→部分
    - 概要→詳細
- > 小原則 (空間配列)
  - ◆一方向で説明をする
    - 上から下、あるいは下から上
    - 右から左、あるいは左から右
    - 手前から奥、あるいは奥から手前
    - 外から内、あるいは内から外


**1. -①描写** p. 40

b. 国旗の描写

◎ルーマニア国旗を描写してみよう

◆描写の例

ルーマニア国旗は次のような様子です。旗の形は横長の長方形で、縦横ほぼ2:3の割合です。模様は縦縞で、縞の数は3本、それぞれの縞の幅はほぼ同じです。色は3色で、左から順に青・黄・赤です。以上がルーマニア国旗です。(105字)

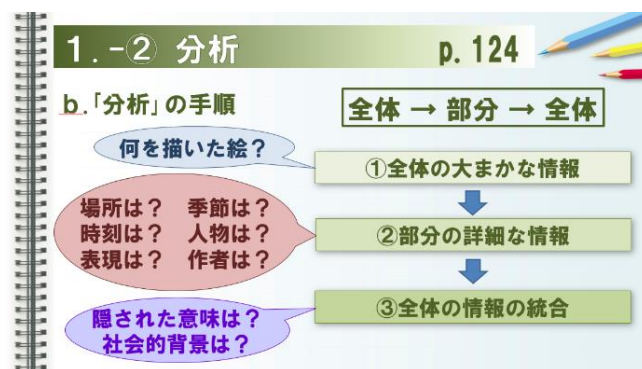
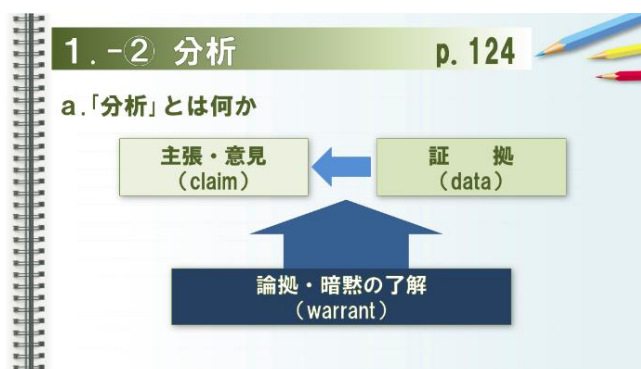


## (2) 絵の分析

私たちはある絵を見たときに、絵から得られた視覚情報を元にほとんど無意識のうちに「この絵には〇〇が描かれている」などと判断します。この授業では、そのような判断が、どのようにして成り立っているのかを意識することから始めます。

まず、絵という情報をよく観察し、そこから判断の根拠となる証拠を発見します。次にそれらの証拠を総合して解釈することで、ある判断が成り立っていることに気づかせます。

さらに、絵の中にある1つの情報が何を意味するかは、常識や慣習などの暗黙の了解を論拠としていることがある、ということも学びます。このような「暗黙の了解」は、文化を共有している者同士では何の説明もなく通用しますが、異文化とのコミュニケーションを図ろうとすると、意



識して説明する必要が出てきます。この暗黙の了解は、認知のトレーニングや、議論のトレーニングでも振り返る必要のある重要な項目です。

以上のように、絵の分析を行う目的を理解した後は、具体的な「分析」の手順を学びます。分析の手順は、基本的に前項の空間的秩序の原則と同じく「全体から部分へ」ですが、少し違うのは、最後にもう一度全体に戻るという点です。細部の観察を行った後に、これまでの情報を統合して、この絵が何を描こうとした絵なのか、どんな意味が隠されているのかなど自分の意見を持つこととなります。絵の分析ではそれほど情報量の多くないイラストの分析から始め、次のステップで、情報量の多い絵画を分析し、そこに隠されたテーマや物語を読み取ることへと進みます。

## (3) テキストの分析

テキストの分析も、絵と同じように、テキストの中から証拠を見つけ、それらを解釈することで成り立ちます。たとえば、「たき火」という童謡の歌詞を分析すると、

### 2.-① 「テキスト分析」とは何か

この詩に描かれた季節は？

「たき火」

かきねの かきねの まがりかど  
たき火だ たき火だ おちばたき  
「あたろうか」「あたろうよ」  
きたかせ「フー」ふいている  
ささんか ささんか さいたまち  
たき火だ たき火だ おちばたき  
「あたろうか」「あたろうよ」  
しもやけおててが もうかゆい  
こがらし こがらし さむいみぢ  
たき火だ たき火だ おちばたき  
「あたろうか」「あたろうよ」  
そつだんしながら あるいてる

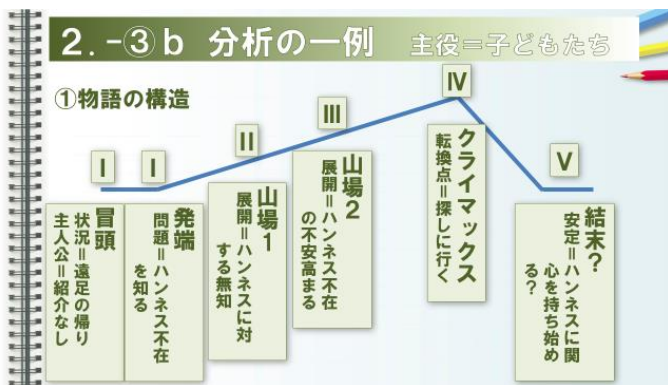


季節を示す様々な証拠が見つかります。一つの証拠だけでは季節を確定できないものもありますが、全ての証拠を総合すると、季節は「冬」とであると解釈することができます。このように、テキスト分析とは「テキストに書かれた言葉を証拠として、そこから推論して解釈や意見を示すこと」をいいます。

テキスト分析の実践では、まず詩の分析から始めます。詩は、1時間の授業で取り扱える程度の分量であり、具体的なイメージが掴みやすいからです。まず始めに日本語の詩から登場人物の境遇や、中心的に描かれている対象との関係等を読み解くことから始めます。大切なことは、絵の場合と同じように、必ず本文の中から証拠を挙げて解釈を示すことです。

このようにテキスト分析を行うことで、1年次から徹底してきた「話すとき、書くときには必ず主語をつけよう」という原則を改めて確認できる、という効果もあります。

テキスト分析は、詩に続いて短編小説の分析を行いました。短編小説では、物語の構造と、文中に描かれた太陽の象徴性を合わせながら、グループで協力して分析しました。



### 2.-③b 掌編小説の分析

③太陽は何を象徴しているか ~分析の手順~

- 本文の太陽に関する記述をマークする。
- 構造図に太陽の状態(位置・明るさなど)を図示する。
- 太陽に関する記述の前後をよく読んで、根拠を探し、何と関係しているかを考える。

### 2.-③b 掌編小説の分析

③太陽は何を象徴しているか  
根拠を示す⇒引用して説明する

根拠の示し方の例

太陽が「……」(行)ている時に、○○は「……」(行)ている。ところが、太陽が「……」(行)になると、○○は「……」(行)しており、太陽が○○○○を象徴していることを示している。

### 2.-③b 掌編小説の分析

引用の方法

必要最低限の簡潔な引用

《適切な例》

下人は、「猫のように身をちぢめて、息を殺し」(34-12)しており、緊張していることを示している。

ページと行を明示

《不適切な例》

引用には必ず「」をつける

下人は緊張している。なぜなら、「猫のように身をちぢめて、息を殺しながら、上の様子をうかがっていた。」(34-12)と書いてあるからである。

必要以上に長い引用

「なぜなら…からである」の繰り返しになり、冗長



さらに、分析結果を全員の前で発表する際には、パラグラフの形式に従って話すことと共に、必ず証拠を示しながら話すことを徹底しました。このように、分析結果を発表するという行為をとおして、分析のみならず、1年次で学習した説明の能力や、パラグラフ・ライティングの能力も繰り返しトレーニングすることになります。

さらに本年初めて絵本の分析として『手のなかのすずめ』の分析に取り組みました。

### ③-1 「絵本」の分析

1ページ目の扉絵を見て、何が描かれていますか。  
また書かれているものから、これからどんな物語が始まるかが予想されますか。

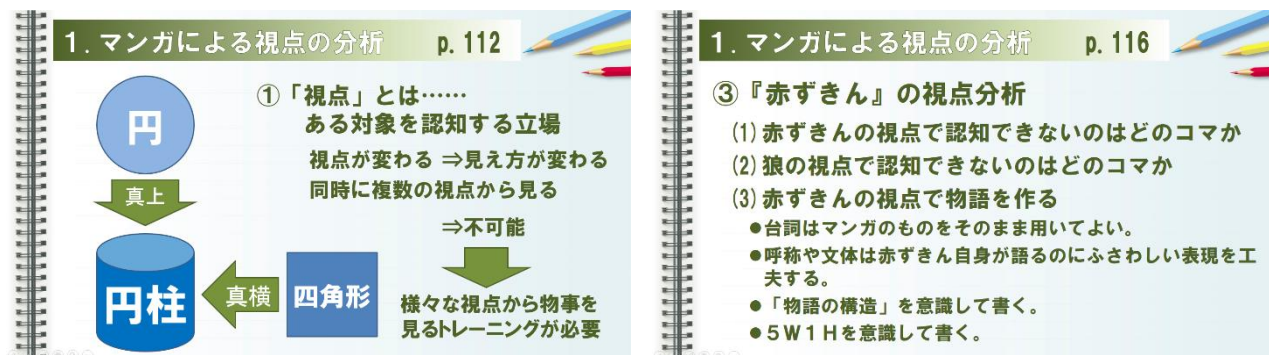


グループでのディスカッションを中心に、題名や扉絵から想像できることを話し合ったり、2人一組で絵本を音読したりして授業を進めました。既習の「物語の構造」に照らし合わせて「事件の発端」を確認した後、主人公のティムにとって小さな成長のきっかけとなった「すずめとの出会い」が絵と文章にどのように描かれているかを話し合いました。母親と買い物に出かけ、すずめと出会う前後で、ティムがどのような成長を遂げたかを分析し、その結果を作文の課題として書き上げました。ルーブリックに基づいてお互いの原稿を添削採点し、さらにその原稿を教員が採点する、という手順をとりました。

このページではすずめとの出会いで大人への  
 階段を登り始めたティムが描かれている。  
 保護の関係を強調している。以上の事から  
 リお母さん、ティム、すずめの間にある保護  
 たり、遂に何かに包まれている間にすずめ  
 じょうろなど全ての物は何かを支えたりする  
 ージに描かれている手すり、かご、植木鉢、  
 中であることも表している。さらに、このペ  
 まどお母さんに守られる立場であり成長の途  
 人への階段を登り始めた事に加え、その水でも  
 守られる立場から何かを守る立場にはなり、大  
 んに包まれている。この事は彼がお母さんに  
 段の真ん中で手にすずめを持ちながらお母さん  
 味でている。また、ここにおいてティムは階  
 いにより、ティムが様々な事を得たことを意  
 くさんの物がある。この事はすずめとの出会  
 鉢が描かれており2ページの窓と比べると  
 ている。ページ上部の窓にはじょうろと植木  
 人への一歩成長したティムが暗示的に描かれ  
 2ページにはすずめとの出会いによって大

## ② 認知のトレーニング

認知のトレーニングでは、(1) 漫画による視点の分析、(2) テキストの視点変更 の2項目を行います。



### (1) 漫画による視点の分析

授業の初めに、私たちは、物事を認知するにはどうしても特定の視点から認知せざるを得ず、視点が変わることで事実の認識が変わることに気づかせます。そこで、童話「赤ずきんちゃん」のコマ漫画を使って、赤ずきんの視点で認知できないコマがあることを確認し、まず、日本語で、赤ずきんの視点で物語を書きました。

### (2) テキストの視点変更

本年度は TOK のテキストを参考に、芸術界で物議を醸し出した「生きた金魚ブレンダーにかけるのは芸術？」の文章を読み、この芸術作品に反対する市民グループ、擁護派の美術館館長、この事件を裁定した裁判官の判事の3つの立場に立ち、それぞれの主張にどのような根拠、かかれた論拠(ワラント)があるかを議論し、浮かび上がらせました。

さらにその後、3者のなかのいずれかの立場を取り、「異なる意見にも言及しながら」自分の意見を書く、という課題を課しました。これは、独りよがりの主張に陥ることなく、明確な根拠を伴うわかりやすい主張ができるようになることを意図していました。どの生徒も達成できることを助けるため「確かに・・・しかし～」という反対意見へ言及したのち、自分の主張を行う型を明示しました。



### ③ 議論のトレーニング

議論のトレーニングは、(1)論理の学習、(2)反論の技術、(3)ディベートの3項目を実施します。

#### (1) 論理の学習

論理の学習では、日常的にもよく耳にする、「『論理』とは何か」「『論理が正しい』とはどういうことか」「『論理的』とはどのような状態か」などのことばを定義するところから始めます。更に、論理を組み立てる際の「前提」や「推論」といった用語を説明してから、具体的な練習問題に取り組みます。

練習問題としては、まず、論理の基本となる三段論法を紹介し、例示された三段論法のどこに問題点があるのか、を話し合うところから始めます。続いて20問ほどの練習問題を出題し、生徒が協力して、それぞれの論理的問題点を指摘します。それらの練習問題を考えることをとおして生徒たちは、正しい推論の条件として、

- ・理論の飛躍がないこと
- ・前提が正しいこと

の2つが必要なことを確認します。

更に、同じような文化や生活を共有している者同士では、論理の前提が隠されていること、いわゆる「暗黙の了解」があることを学びます。これは、「絵の分析」で学んだことの復習にもなります。

最後に、200字程度の文章を示して、その中に含まれる様々な論理的欠陥を指摘する課題に取り組みます。この時に問題文として示した文章は、昨年卒業した生徒たちがファイナルプロジェクトとして作成した文章を、練習用に改作したものです。これは、現2年生も、来年のファイナルプロジェクトのポスターセッションの際に質疑応答をすることを念頭に置いて、論理的に欠陥のない文章が書けるように意識させるためです。

#### (2) 反論の技術

ここでは、反論の方法として、

- ・相手の主張に直接的に反論する方法
- ・相手の主張に理解を示した上で、論理的に矛盾している部分などについて反論する方法

の2種類があること、更に、それぞれの方法を実際に用いる際の、話し方の「型」を学びました。以下がそれぞれの「型」です。

① 私は、〇〇君の意見に反対です。〇〇君は、「…(引用)…」と述べています。しかし、この主張は成立しません。第1に、……。第2に、……。以上の理由により、〇〇君の意見は成り立ちません。

② 〇〇君の意見は一理あります。確かに「…(引用)…」という点では彼の主張は正しいと言えます。しかし、その主張は次の点が矛盾しています。第1に、……。第2に、……。以上のように彼の主張には複数の矛盾点があるため成り立ちません。

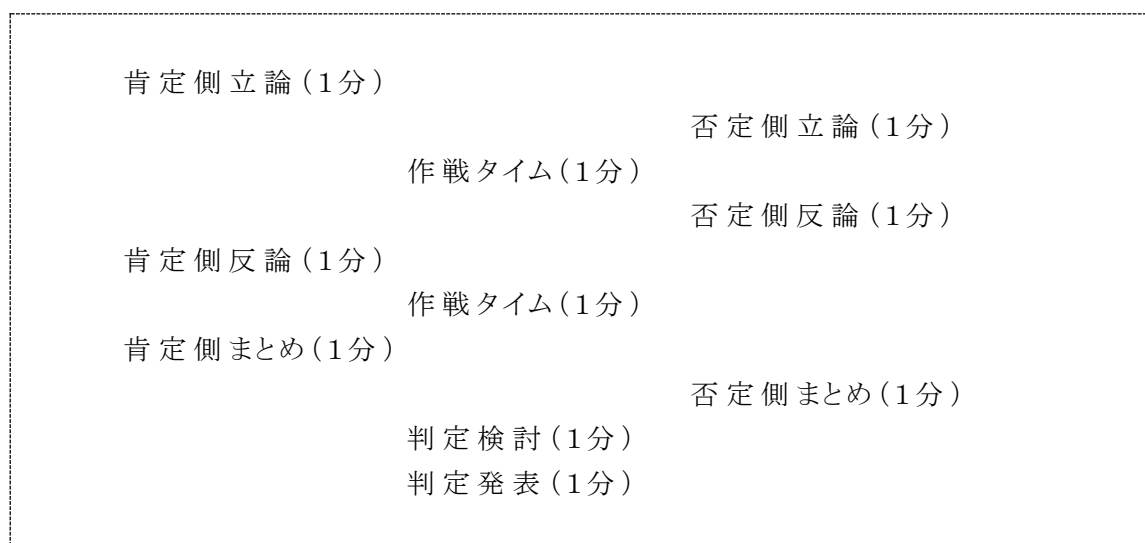
いずれも、1年次で学習した「問答ゲーム」やパラグラフ・ライティングの形式に基づいて、始めに自分の立場を明示し、続いてその根拠を示し、結びとして自分の立場を再度主張する、という形をとっています。生徒たちは、「問答ゲーム」やパラグラフ・ライティングでこの形式には慣れていますが、この後のディベートでもこの「型」を使いこなしています。

### (3) ディベート

生徒の多くは、中学校の国語でディベートを経験していましたが、ディベートそのものの定義や説明は、ごく簡単に示すにとどめ、チーム作り、役割分担、論題決めなど具体的な準備を始めます。教室で一斉に実施するために、各チームが、試合ごとにどの論題を取り上げるのかは予め決定しておき、それぞれの論題について肯定・否定両方の立論や反論を作成する形で準備を進めます。

なお、ディベートのルールや方法を説明する際には、英語表現の教科書を併用します。これは、英語表現で英語によるディベートが取り上げられていますので、日本語に続いて英語でもディベートを行うことを考慮したものです。従って、試合の方法などは原則として英語表現の教科書に合わせます。

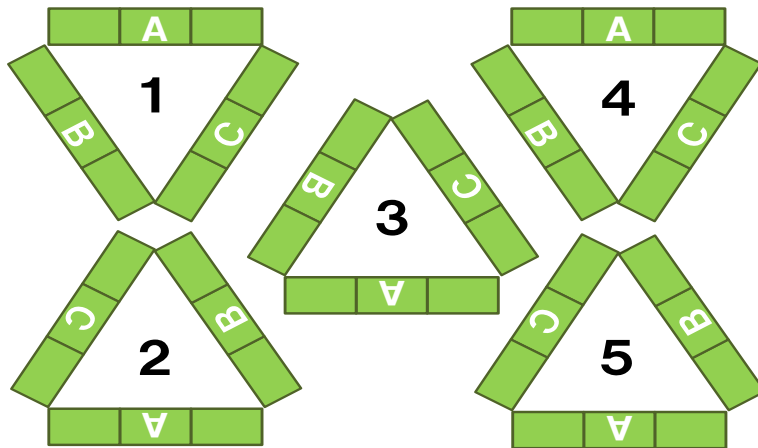
下記が試合の進行です。ディベート甲子園などの本格的ディベートとは違い、質疑応答を行わないなどかなり簡略化してありますが、これも英語表現の教科書に合わせたものです。



次ページの図が教室内の配置図です。3人1チームを原則として15チームを作り、3チームを1グループとして、グループ内で対戦します。例えば、第1試合はAチームとBチームが対戦し、Cチームがジャッジと進行を担当する、という形で、全チームが2試合行い、1試合はジャッジを行うようにしてあります。

以上のように、全員が日本語でのディベートを体験してから、英語でのディベートに取り組み、ディベートのやり方に慣れることを目指します。これは、GCPで実施する人権ディベートの準備ともなっています。

電子黒板

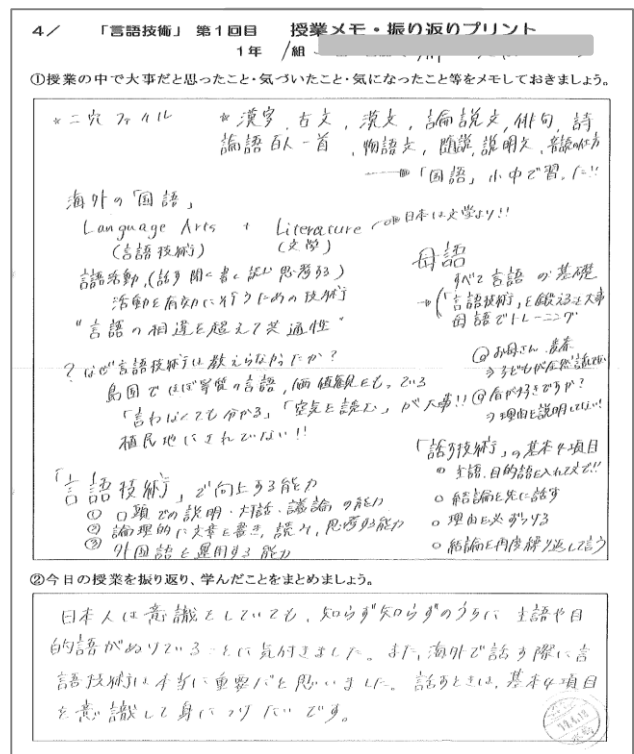
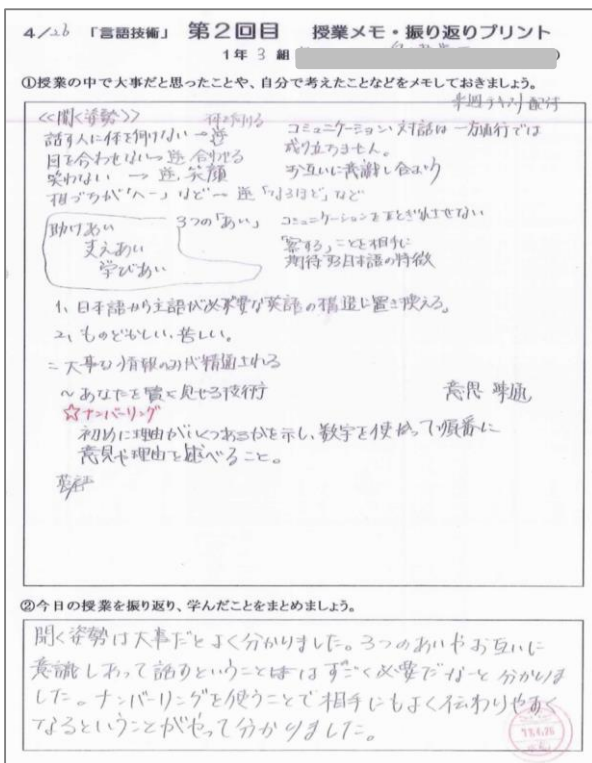


C) 評価

評価の対象は大きく分けて①「毎回の授業の記録・振り返りプリント」と②「課題作文」の2つになります。以下に生徒作品例と評価ルーブリック例を示します。

①「毎回の授業の記録・振り返りプリント」

毎回の授業で、プリントを配布し、授業でポイントとなる内容や、ペアやグループで話し合った内容、自分で考えたり気づいたりした内容をメモさせます。そして授業の最後の5分で、「今日の授業で自分が学んだこと」と「今日学んだことをどのような場面で活かせるか」を記録させます。そして、メモの充実度（授業ポイントをおさえられているか・話し合いの要点を記録できているか）や、振り返りの充実度（学んだことを自分で意識化できているか・学んだことを活かそうと意識できているか）をもとに段階評価をします。



5月1日 「言語技術」 第3回目 授業メモ・振り返りプリント  
1年2組

①授業の中で大事だと思ったことや、自分で考えたことなどをメモしておきましょう。

**対話トレーニング 応用編**

★あなたはAとBどちらが好きですか? (E=)  
①相手の質問に正確に答える。  
→ 聞かれない事を覚えない  
②Aが好きだからBが好き、以下同。  
→ 好きな理由を提示

★「賛成か反対か」  
①即座に自分の立場を決める。  
②具体的な根拠をつける。

**簡潔に語り** 説明力のあつた、事実に基づいた、意見を語り

**イテビ** agree・disagree agree.  
I agree. I have 2 reasons.  
Firstly, ... Secondly, ...  
That's why I agree that 問題文.

★親が子どもの部屋にテレビを置かすべきではない、という意見に賛成  
↓  
Do you agree that "parents should not have a TV in their children's room?"

②今日の授業を振り返り、学んだことをまとめましょう。  
また、その学んだことをどのような時・場面で生かせるかを考えて書き出しましょう。

私は今日、意見を言う時のポイントを2つ学びました。  
1つは、簡潔に言うことです。長く長い話よりも簡潔に言う方が相手も理解しやすいからです。そのため私は、自分の好きな理由を2つ挙げて、その理由を簡潔に説明することを学びました。  
2つは、事実に基づいて話すことです。説明力を高めるために、具体的な理由を挙げる必要があるからです。

5月15日 「言語技術」 第5回目 授業メモ・振り返りプリント  
1年2組

①授業の中で大事だと思ったことや、自分で考えたことなどをメモしておきましょう。

「What do you like?」「What do you do?」「What do you want to do?」 → レポートと明確に書く。

「What do you like?」「What do you do?」「What do you want to do?」 → レポートと明確に書く。

Did I go → went does not go → goes ← 合致 = E2.

in a shop? when? who? where? who?

Last 00, @ @ went shopping to Δ, and said @ @.

forget 何 @ @ する。

Because it is 不便, @ @ try to take @ @. So 00?

seems to go to Δ Δ with @ @.

「What do you want to do?」「What do you want to do?」 → レポートと明確に書く。

What country do you want to go to? 疑問文  
× How 名詞 = what, 副詞, 形容詞 = How

(How) は 疑問詞 1つ、副詞 2つを尋ねる。

課題①  
①どんなスポーツが好きですか? ②どのようにスポーツを楽しみますか?  
③なぜスポーツは楽しいのですか?

②今日の授業を振り返り、学んだことをまとめましょう。  
また、その学んだことをどのような時・場面で生かせるかを考えて書き出しましょう。

日本語が通じなくても英語にすれば全然情報が伝わることを、  
自分の相手が伝える前に(期間が短く)英語に  
してあげると情報不足がなくなると思ふ。

教員でチェックしたプリントは生徒に返却し、ファイリングさせ、いつでも学びの履歴を見返せるようにします。他の授業や行事の時に、このファイルを見返しながら文章を書いたり、説明の準備をしたりする生徒の姿も見られました。まさに実生活に活かせるポートフォリオの作成ができました。

## ②「課題作文」

毎回3～5項目の評価項目を2～5点満点で採点するようにしています。評価項目は、作文を書く度に、目的に従って変更しています。課題によっては、生徒に相互採点をさせますので、生徒が迷わず採点できるような表現になるよう、生徒からも意見を聞きながら工夫しています。ルーブリックに基づいて、お互いに評価と添削を繰り返すことで、評価のポイントが強く認識され、結果として自身の文章力の向上につながっています。特に、毎回評価される「記述のルール」については、かなり慣れてきたようです。

以下に、1年生の授業で、課題作文を書かせる前に生徒に見せる「評価のポイント」のスライドと、2年生の課題作文における評価ルーブリックを示します。

## 作文課題の評価

★A～Dの項目ごとに各2点満点

- A: パラグラフ形式で文章が書けているか。  
 ▼TS・SS・CSがある。冒頭1字下げている。途中で改行していない。
- B: 条件が守られているか  
 ▼理由が2つある。
- C: 主語・述語・目的語の抜け落ちがないか。  
 ▼主語・述語・目的語の抜け落ちがあると減点。
- D: 授業メモ・振り返りがしっかり書かれているか。  
 ※その他の注意点: 誤字脱字。文体の統一(常体・敬体)。「なので」。

## 作文課題の評価

★A～Cの項目各2点、D項目3点、合計9点満点

- A: パラグラフで書けている。CSがTSとまったく同じでない。
- B: 「まず・最初に」などの副詞を使い、1つめの性格・特徴について、読み手が納得する内容を書けている。  
 (文として意味が分かる。特徴を裏付ける例が適切である)
- C: 「次に・また」などの副詞を使い、2つめの性格・特徴について、読み手が納得する内容を書けている。  
 (文として意味が分かる。特徴を裏付ける例が適切である)
- D: マッピングがすべて埋まっている。

## 「道案内」の課題の評価

★A: 2点、B: 3点、C: 5点、D: 2点の評価

- A: ①最初に何の説明か述べている。②締め言葉がある。
- B: 全体の情報(①距離②時間③交通手段)を述べている。
- C: 部分の情報を抜け落とすことなく説明している。
- D: 左側下部の「今日学んだ中で一番大事だと思ったこと」と「その理由」がしっかり書かれている。  
 ※問いに対応していない記述(例えば「難しいと思った」等の感想)は減点。

## 「ピザトースト作り方」の課題の評価

★A: 2点、B～D: 3点の評価

- A: ①最初に何の説明か述べている。②締め言葉がある。
- B: 情報を整理分類し、ラベリングをしている。  
 ※整理分類ができていない or 分類が間違えてる - 1  
 ※「道具」「材料」「作り方」のラベリングが1つないことに - 1
- C: 副詞を活用し、時間的秩序に則って説明ができています。  
 ※手順が違う - 1、日本語としておかしい - 1
- D: 「メモ」「課題1」「課題2(1)」がしっかり書かれている。

### 【描写文】「手提げバッグの描写」 (200字程度)

		5点	4点	3点	2点	1点		
A	パラグラフ構成	下記a)～c)の全てにおいて優れている。 a)TSの内容が明快である。 b)TSとSSが論理的につながっている。 c)CSをTSと別の表現でまとめている。	a)～c)の全てが守られてはいるが、どれか1つに工夫が必要である。 〈例〉TSがやや分かりにくい。	a)～c)の全てが守られてはいるが、2つ以上に工夫が必要である。 〈例〉TSとCSが全く同じ。TSとSSのつながりにやや問題がある。	パラグラフの構成についての理解不足。 〈例〉TSとCSの内容が変わっている。TSとSSの順序が入れ替わっている。	パラグラフの構成が理解できていない。 〈例〉TS・SS・CSのどれかが欠落している。途中で改行している。		
		B	内容	下記イ)～ハ)の全てにおいて優れている。 イ)描写すべき情報が分類整理されている。 ロ)「空間配列」のルールに従って記述されている。 ハ)個々の情報の表現が適切で分かりやすい。	イ)～ハ)のどれか1つが不十分である。	イ)～ハ)のどれか2つが不十分である。	イ)～ハ)の3つとも不十分である。	課題を理解していない。
				C	記述のルール	下記のルールを全て守っている I 文体の統一 II 主語の挿入 III 接続語が適切 IV 句読点が適切 V 誤字・脱字がない VI 原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち1つに不備がある	ルールのうち2つに不備がある

【分析型パラグラフ】「手のなかのすずめ」12ページの分析 (400字程度)

		5点	4点	3点	2点	1点
A	パラグラフ構成	下記 a)～c) の全てにおいて優れている a) TS・SS・CSの形式が整っている。 b) TSとSS、SSとCSの内容が整合している。 c) CSをTSと別の表現でまとめている。	a)～c)の全てがほぼできているが、更に工夫が必要である。  (例) TSの内容がわかりづらい、TSとSS、SSとCSのつながりがわかりづらい、TSとCSの表現が同じ。 など	a)～c)のどれか1項目ができていない。	a)～c)のどれか2項目ができていない。	a)～c)が3項目ともできていない。または、下記のどれかにはまる。  (例) 途中で改行している。TS・SS・CSのどれかが欠落している。TSやCSが「私は～思う。」などとなっている。
B	内容	下記 イ)～ニ) の全てにおいて優れている イ) 解釈の根拠が明示されている。 ロ) 解釈と根拠の関係が分かりやすく書かれている。 ハ) SSの配列が「大から小へ」の原則に従っている。 ニ) SSの配列において、ナンバリングや適切な接続語を用いている。	イ)～ニ)のどれか1項目が不十分である。	イ)～ニ)のどれか2項目が不十分である。	イ)～ニ)のどれか3項目が不十分である。	イ)～ニ)の4項目全てが不十分である。
C	記述のルール	下記のルールを全て守っている I 文体の統一 II 主語の挿入 III 接続語が適切 IV 句読点が適切 V 誤字・脱字がない VI 原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち1項目に不備がある	ルールのうち2項目に不備がある	ルールのうち3項目に不備がある	ルールのうち4項目以上に不備がある

【意見型パラグラフ】ディベートのまとめ (400字程度)

		5点	4点	3点	2点	1点
A	パラグラフ構成	下記 a)～b) の両方において優れている a) TS・SS・CSの形式が整っている。 b) CSをTSと別の表現でまとめている。	a)～b)の両方がほぼできているが、更に工夫が必要である。  (例) TSの内容がわかりづらい、TSとSS、SSとCSのつながりがわかりづらい、TSとSSの表現がほとんど同じ。 など	a)～b)のどちらか1つができていない。	a)～b)の両方ができていない。	途中で改行している。
B	内容	下記 イ)～ニ) の全てにおいて優れている イ) TSの意見の理由として、SSの内容が適切である。 ロ) 各理由に対する反論が適切である。 ハ) 反論に対する反駁が適切である。 ニ) SSの配列において、ナンバリングや適切な接続語を用いている。	イ)～ニ)のどれか1つが不十分である。	イ)～ニ)のどれか2つが不十分である。	イ)～ニ)のどれか3つが不十分である。	イ)～ニ)が4つとも不十分である。
C	記述のルール	下記のルールを全て守っている I 文体(常体)の統一 II 主語の挿入 III 句読点が適切 IV 用語が適切 V 誤字・脱字がない VI 原稿用紙の使い方が正しい	ルールのうち1つに不備がある	ルールのうち2つに不備がある	ルールのうち3つに不備がある	ルールのうち4つ以上に不備がある

D) 成果および今後の課題

■ 成果

①生徒アンケート

昨年度末と同じ項目で、今年度末も1、2年生全員にアンケートをとりました。対話・作文・情報伝達の各技術を学んだ1年生は、95%以上の生徒がそれらの技術の重要性を実感しており、昨年度より5%近く上昇しました。これは、昨年度の反省を活かして授業内容を改善してきた成果と思われます。情報分析・認知・議論の各技術を学んだ2年生は、90%以上の



生徒が、それらの技術の重要性を実感しており、こちらも昨年度から10%以上上昇しました。3年間、「言語技術」の授業を実施してきた中で、授業内容や授業法も整理され、効果的な授業を実施できるようになりました。

また、「言語技術で学んだことを英語で活用できた」と回答した生徒は1年生で83%、2年生で88%おり、1年生より2年生の割合の方が高くなっています。このアンケート項目に関しては、1年前の1年生(現2年生)は79%でした。今年度のカリキュラムと学習内容が昨年度より効果的になったことの証左と言えます。結果として、生徒の「言語技術」修得が進んだと言えます。

#### ②英検スコアの上昇

上記①の生徒アンケートにおいて、「英語で活用できた」という回答が上昇したアンケート結果は、実際の外部試験でも成果を出しています。昨年度より本校では、年度第3回目の英検2級を、高校2年次の総合クラス(「言語技術」の授業を受けているクラス)のほぼ全員が受検することになっていますが、リーディング・リスニング・ライティングの3技能のCSEスコアの平均は、昨年度は1497.7でしたが、今年度は1501.1と微増しました。また、ライティングのスコアのみで見ると、昨年度は491.8でしたが、今年度は505.9と大幅に上昇しており、「言語技術」教育の成果と言えます。

#### ③ポートフォリオの作成

生徒には昨年同様、毎回の授業で「学んだこと」等の振り返りをさせ、記録・ファイリングさせました。このファイルを見返しながら、身につけた技術を活かそうとする生徒の姿が見られ、実際に活かせるポートフォリオの作成ができました。

#### ④小中高一貫プログラムの作成

創価中学校・東京創価小学校において「言語技術」の取り組みが本格的に始まりました。それにあたって、小中高それぞれの「言語技術」の授業担当者が集まり、12年一貫の「言語技術」教育のカリキュラム作成について会議を実施し、検討が進みました。

#### ⑤ファイナル・プロジェクトにおける小論文作成指導

3年次で行うGCPファイナル・プロジェクトの最終レポート作成において、国語科と連携し、パラグラフ・ライティングの指導を週1時間実施し、昨年よりも質の高い文章が多く見られました。文章を書くことが得意でない生徒も、相応の文章を書けるようになりました。

#### ⑥キャリア教育と連動した作文指導

1年次では、言語技術で学んだ「作文」の技術を応用して、自分自身の進路や学校生活についての考えをパーソナル・エッセイとして書かせました。このパーソナル・エッセイは、本校が10年以上にわたって伝統的に取り組んでいるものです。ほとんどの生徒が1000字～1200字で、形式の整ったエッセイを書きあげました。

2年次では、1年次のパーソナル・エッセイを発展させて、大学入試を意識した「志望理由書」の作成に取り組みました。生徒たちは、2年間の言語技術の学習をとおして、パラグラフ・ライティングの技術がかなり定着していますので、多くの生徒が論理的にもしっかりとした文章を書きあげました。

#### ⑦教員自身の言語技術トレーニング

昨年に引き続き、「言語技術」の授業に担任教員が毎回参加し、各担任教員が担当する教科やLHRで「言語技術」を活用する流れがますます強くなりました。

・現代文：定番教材『こころ』『永訣の朝』『小諸なる古城のほitori』の学習にテキスト分析を応用しました。『こころ』では、グループごとに「『こころ』年表」を作成することで、小説全体の構造を確認してから、教科書掲載部分のテキスト分析を行いました。全体の構造を踏まえた上で、教科書掲載部分を学んだことで、「暗いだけの小説だと思っていたが、必ずしもそうではなく、作品に対する印象が大きく変わった」などの感想が多く寄せられました。詩の分析は、グループごとに選択した作品について、時・所・視点人物・描かれた状況や心情など基本的な分析を行いました。グループ間で分析結果が異なった場合も、証拠となるテキストを示しながら議論することで、かみ合った議論ができました。その結果、現代文でよく問題になる「解釈は一つではない」という問題についても、解釈の根拠が提示され、テキスト全体と矛盾することがなければ、解釈にある程度の「幅」があることが納得できたようです。

・英語：視点を変更して教材の文章を書き換える取り組みや、教科書に書かれている客観的な事実をもとに、自分の意見をパラグラフで書く取り組みを行いました。

・地歴公民：教科書や資料集に掲載されている図表や風刺画を分析する取り組み（分析の技術）や、立場が対立する事件について視点を変えて考察する取り組み（認知の技術）を行いました。

・理科：実験の意図を説明（説明の技術）させたり、実験手順を経過型パラグラフで書かせたり（作文の技術）しました。

#### ⑧学校ホームページでの授業内容の紹介

「言語技術」の授業で行っている内容をホームページで発信・紹介し、校外にも広く知ってもらおうようにしました。

#### ⑨指導体制の増強

つくば言語技術教育研究所(三森ゆりか所長)の研修に教員を派遣し、指導教員の増強をさらに図ることができ、よりきめ細かい指導をすることができるようになりました。

#### ■ 今後の課題

①生徒のコミュニケーション能力・論理的思考力・批判的思考力の伸長を評価するために、客観的に測るアセスメントテストを導入してまいりたいと思います。

②昨年度同様、担任教員が「言語技術」の毎授業に参加し、「言語技術」をトレーニングした教員も増えました。学校全体で活用しようとする意識はこれまでより高まりましたが、さらに学校生活のあらゆる場面で「言語技術」が活用される体制を強化していきたいと思います。「言語技術」がすべての学びの土台となるよう、学校全体、また各教科との連携を密にして生徒が活用する機会を増やし、活用事例を蓄積させ、誰でも活用できるようなシステムを作っていきます。

③3年次GCPファイナル・プロジェクトの、最終レポート作成指導において、国語科・英語科・地歴公民科が連携した合教科型の取り組みを行いました。今年度の反省をもとに、役割分担を見直し、より効果的なカリキュラムを検討し、実施してまいりたいと思います。

④今年度は、創価中学校・東京創価小学校においても「言語技術」の取り組みが本格的に始まりました。各校の授業担当者の会議を定期的の実施し、「言語技術」教育の年次配列をよく考えて、効果的な12年間の「言語技術」教育カリキュラムを早い段階で完成させたいと思います。

⑤オープンキャンパスや、外部対象の教育公開講座にて、多数の来校者を相手に模擬授業を実施しました。参加者のアンケートには「社会で必ず必要とされる力であり、このようなことが学校で学べることがうらやましい」といった感想が多数ありました。「言語技術」の取り組みを、より広く知ってもらうため、ホームページでの毎回の授業内容の発信を強化してまいります。

⑥効果的な指導・効率的な評価のために、ルーブリックや、自己・相互による評価法の開発をさらに推進いたします。

## 5. フィールドワーク

### A) カリフォルニア

- 期間：11月2日（金）～11月8日（木）
- 場所：アメリカ・カリフォルニア州
- 主な訪問地：カリフォルニア大学アーバイン校、アメリカ創価大学、Dr. オルガ・モハン高校、ゲティ美術館
- 目的 核廃絶問題とSDGs、とくに貧困と人権をテーマに、カリフォルニアにてフィールドワークを実施します。現地・高校生や大学生の前でテーマごとにプレゼンテーションと意見交換をし、さらに一流識者の講義を受講しました。これらを通して創立者の核廃絶教育と平和思想をさらに深く学ぶ機会としていきたいと思いをします。

#### ■ 行程

##### ● 1日目

南カリフォルニア大学を訪問し、アメリカ創価大学卒業生のガイドでキャンパスツアーを実施。またアメリカの大学事情について、英語で懇談会を行いました。

##### ◆ 生徒感想

「今日は代表でスピーチをさせていただきましたが、英語の語彙力と吐き出しの文章力をもっとつけなければならないと思いました。明日からはもっと英語ですべて話すように挑戦してまいります。」

##### ● 2日目

ドクター・オルガ・モハン高校を訪問し、現地の高校生とピース・フォーラムを行いました。生徒同士はスカイプで前もって知り合っており、友好関係は良好で、きわめてスムーズに打ち解け合いました。核廃絶と貧困の2つの国際的な問題について、グループに分かれポスターセッションを行い、その後、ディスカッションをし、実現可能な方途を共同で作成してまとめ、再びまとめるという作業を行いました。夕方からは、ドクター・オルガ・モハンの生徒と一緒に美術館を見学、マーケットで共に食事をして、充実の一日が終了しました。

##### ◆ 生徒感想

「私は貧困についてのプレゼンとディスカッションをしました。貧困についてのプレゼンは自分の内容にも英語にも自信がなくとても不安でしたが、次の最後のプレゼンに向けてのワンステップになったと感じました。現地の生徒との交流は英語力よりもコミュニケーション力がなくて話題を出せなくて沈黙になってしまい、やはりコミュニケーション力は大切だと学びました。しかし、多くの文化の違いや面白さを知ることができました。」

##### ● 3日目

活動場所をロサンゼルス近郊からアーバインへと移動する日でした。午前中はゲティ美術館の膨大かつ貴重な美術品を見学し、入場料が無料であることに驚くと共に、人の価値観などにも思いを馳せました。また、ここに使われている大理石が SUA と同じであるなどのお話も伺いました。午後からカリフォルニア大学アーバイン校 (UCI) を訪問し、プレゼンテーションを行う教室で明日の準備をしました。夕食も UCI キャンパスで大学生に交じって楽しく食べることができ、アメリカの大学生活を体験することができました。

#### ◆ 生徒感想

「今まで見た美術館の中で一番高級で、大きいのにも関わらず、無料で入場ができるとは驚きました。柵も無く、写真も撮ることができ、歴史あるものを多くの人が見ることができるのはとても意義あることだと思いました。明日はもう一度 UCI にてポスターセッションを行うため、ドクター・オルガ・モハン高校での議論を生かし、より良いプレゼンができるよう最善を尽くします。」



#### ● 4日目

カリフォルニア大学アーバイン校 (UCI) でのセッション1日目のこの日、マシュー博士から「国連活動から見た世界情勢」とウリュウ博士から「北朝鮮の非核化」とのテーマで講義を頂きました。これは、今回のテーマである「貧困」と「核廃絶」に合わせ、特別に講義を組んで頂いたものです。その後、地元アーバインの最優秀の高校生16人が集まり、今回の最大の目的であった、海外の同年代の生徒の前で自分たちのプレゼンテーションを行い、解決策についての意見交換と内容の濃い討議を行いました。

#### ◆ 生徒感想

「一日中 UCI に滞在し、二人の教授から講義を受けました。講義はどちらも面白く、たくさんの疑問に答えてくださり、とても勉強になりました。また、現地の高校生にポスターセッションをした後、彼らの感想を聞いたのですが、全員が新しい視点をもたらしてくれて、レベルの高さに圧倒されながらもとても素晴らしい時間を過ごしました。もっと成長したいと決意しました。」

#### ● 5日目

本日は、実質の最終日となりました。午前中は UCI で、「地球的環境問題」を学ぶために最先端の燃料電池に関する講義を受け、実験室も見学しました。最後に、2日間に渡る講義の修了証が生徒一人ひとりに授与されました。午後から SUA を訪問し、最初に校内見学を行いました。次に、ウィナー教授から「人権問題」に関する特別講義をいただき、さらに羽吹学長との懇談会、SUA 生との懇談会・ポスターセッションを開催して頂きました。

#### ◆ 生徒感想

「UCI では、車や再生可能エネルギーについてなど、地球のためにとても必要な情報を得ることができました。SUA では、部落問題についての講義で、自分の国のことをアメリカで学び、その事実には驚きました。SUA の生徒との交流では、本当に楽しく有意義で、もっと時間があったらと思う濃い時間を過ごせました。」

「今日は私が一番楽しみにしていた SUA を訪問し、本当に感動しました。SUA の学生とのディスカッションの中で、3 度目のポスターセッションを行いました。一番驚いたのは SUA の学生の抜群の英語力というよりは、ディスカッション能力でした。自分たちで進んで解決しようとする姿勢に、私もそのような討論ができるようになりたいと強く思いました。」



#### フィールドワークの流れ(事前・事後指導)

日付	内 容
6 月 21 日(金)	1 次 試 験(英 語)
7 月 11 日(水)	2 次 試 験(SDGs の 希 望 テー マ に よ る 英 語 ポ ス タ ー プ レ ゼ ン)
7 月 20 日(土)	合 格 者 指 導 会
夏 季 休 業 中	オ ン ラ イ ン に て 3 つ の 課 題 提 出 <ul style="list-style-type: none"> <li>・1) 核兵器禁止条約の成立について</li> <li>・2)「SDGs 目標 1 あらゆる場所で、あらゆる形態の貧困に終止符を打つ」の現状と日本の貢献について</li> <li>・3)日本の貧困問題についての4つのネット記事を読んで(英語)</li> </ul>
9 月 10 日(火)	第 1 回 学 習 会 核兵器禁止条約の成立についての英語討議
9 月 20 日(木)	第 2 回 学 習 会 日 本 の 貧 困 に つ い て
10 月 10 日(木)	第 3 回 学 習 会 企 画 書 デ ィ ス カ ッ シ ョ ン(英 語)
10 月 22 日(火)	第 4 回 学 習 会 貧 困 ・ 核 問 題 別 発 表 練 習 会
10 月 29 日(火)	最 終 リ ハ ー サ ル
11 月 1 日(金)	壮 行 会
11 月 12 日(火)	事 後 指 導 会

## B) 岩手

- 期 間 7月24日～26日の3日間
- 主な訪問地 岩手県葛巻町・陸前高田市
- 参加者 高校1年生6名 高校2年生3名 高校3年生3名 計12名
- 目 的

「環境問題」をテーマに、環境先進自治体である岩手県葛巻町を訪れ、クリーンエネルギー諸施設の見学や循環型農業を実感的に学ぶ。また、7年前の3.11東日本大震災の際に大きな津波被害を受けた、岩手県陸前高田市を訪れ、自然と共生する復興の様子を学ぶ。

- 事前学習・準備

環境問題に関するポスターセッション(グループ毎にポスターを作成)

陸前高田市についての調査・プレゼン作成

(防災減災・危機管理、ノーマライゼーションという言葉の知らない町づくり、産業復興)

現地でのインタビューのための質問シートの作成

- 行程

- 1日目

葛巻町のくずまき高原牧場を訪問、牧場職員の方との懇談をしました。牛の飼育体験では、乳牛への餌やりを体験し、人間が経済動物の大切な命を頂いて生きている事実を体感しました。原木シイタケの栽培体験を通し、循環型農業について学びました。



- ◆ 生徒感想

「葛巻町発展の歴史を聞き、足を運ばなければ聞けない貴重な生の声を聞くことができました。目先の利害だけではなく、未来を見据えて、土壌や酪農用の牛、シイタケの原木栽培など、手間をかけ、品質の良いものにこだわっている取り組みが、町の発展に繋がっていることを学びました。」

- 2日目

葛巻町職員の方からクリーンエネルギーの取り組みについて説明をしていただき、実際に風力発電所の見学をしました。午後からは陸前高田市に移動し、東日本大震災の追悼施設や、復興まちづくり情報館、「奇跡の一本松」、防潮堤などを見学しました。陸前高田市参与の村上清さん(本校SGH指導委員)に、事前学習で準備した陸前高田市についてのプレゼンテーションの発表を聞いていただき、講評をいただきました。夜には陸前高田に住む方々との懇談会の場を頂きました。



## ◆ 生徒感想

「陸前高田市内を見学し、この穏やかな海が、震災時には甚大な被害を及ぼしたということが信じられず、衝撃を受けました。陸前高田市の方々との懇談では、身内の死やライフラインの寸断など、辛い経験もあった一方、助け合いの精神が生じたという話が印象に残りました。自分の価値観を変えるとても濃厚な1日となりました。」

### ● 3日目

箱根山展望台より、陸前高田市内を一望し、津波の脅威について学び、復興が進んでいる様子を目に焼き付けました。陸前高田市戸羽市長との懇談の場を頂き、陸前高田市についての調査内容の発表、市長との質問会を開いて頂きました。最後に村上さんと再び懇談をし、フィールドワークの振り返りと今後の学校生活への決意を固めました。



## ◆ 生徒感想

「『陸前高田の人々が他の地域に求めるものは、支援の手よりも、震災を他人事にしないでほしい』という言葉が心に響きました。陸前高田市に訪れた私たちの使命は、被災地と同じ悔しい思いをする人々が出ないように、この学びを家族や友人たちに伝え広めていくことだと感じました。」

(研修内容をまとめたポスター)

### 葛巻町

2018年7月24日・25日

**目的** 「環境問題」をテーマに、環境先進自治体である岩手県葛巻町を訪れ、クリーンエネルギー施設の見学や畜産体験を通して循環型経営を体験的に学ぶ。

**1日目: 葛巻町(くずまき高原牧場)**

『本村 元忠さんの懇談会』  
くずまき高原まきほの学校長-循環型  
総面積1,774haの牧場を、100年後、次の世代へ今の状態で託す  
→「土」が大切  
→「ふん尿処理」が「良質なエサ」  
生命産業  
牛乳=命の誕生 牛肉=命が失われる

『原木シタケの栽培体験』  
・重い原木の移動作業  
・シタケの収穫体験  
・普段は数名の婦人による作業  
原木の運搬の手伝い

様々な取り組みに見られる  
**循環型経営**  
未来を見据えた取り組み

『畜産体験・見学』  
・循環型社会の新しい命と触れ合う  
・廃材を再利用した牛舎建設

『鈴木 美知代さんとの懇談会』  
-葛巻町農林環境エネルギー推進コーディネーター  
・地域資源を最大限に生かした1次産業への取り組み  
・電力太陽光バイオマス発電等のクリーンエネルギー  
・再生可能エネルギーの活用による、「安心安全なまちづくり」

**2日目: 葛巻町(上外川風力発電所)**

『風力発電の見学』  
・支柱の高さ60m  
・羽の長さ33m、重さ4t  
・総出力 21,000kw  
発電された電力はすべて盛岡市へ送電  
日本初の標高1,000m以上に設置の風車

『鈴木 美知代さんとの懇談会』  
-葛巻町農林環境エネルギー推進コーディネーター  
・地域資源を最大限に生かした1次産業への取り組み  
・電力太陽光バイオマス発電等のクリーンエネルギー  
・再生可能エネルギーの活用による、「安心安全なまちづくり」

先進的な  
クリーンエネルギーへの取り組み  
地域資源を活かした  
取り組み

**まとめ**  
全国最先端のクリーンエネルギーへの取り組みを知り、未来を見据えた視野を広く持つ精神を学んだ。また、食に対する生産者の思いを肌で学んだ。

あの東日本大震災を経験した

### 陸前高田市

2018年7月25日・26日

**目的** 東日本大震災での津波被害に対し、自然と共生し復興が進んでいる様子を学ぶ

**○被害状況**

- 津波浸水高(最大): 17.6m
- 死者行方不明者: 約1800人
- 全壊家屋: 約3805世帯

**○復興への取り組み**

東日本大震災から7年が経過し、現在まで復興に向けて、様々な取り組みがなされてきた

**○ノーマライゼーション という言葉の知らないまちづくり**

ノーマライゼーションとは…  
障がいを持つ人、生活に不自由さを感じる人々などを始め、誰でも豊満の生活ができるように保障する活動

陸前高田市の「障がい者(障害者)の宝庫」は、障がい者雇用施設が10ヶ所もあつた。障がい者の宝庫にあり、障がいの高さが高く、障がいの高さがないなど、完全なバリアフリー

**一村 清 陸前高田市参与との懇談会の様子**  
この町の復興に携わる方々の中には、若い人はまだまだ少ない。復興をして新しいまちづくりに対しての若い人たちの考えをどんどん取り入れていきたい。

**戸羽 太 陸前高田市長との懇談会の様子**  
「ノーマライゼーション」という言葉の知らないまちづくりを推進するためには、生活に不自由さを感じている人々に対する理解を広げることが重要。復興を他人事にせず、自分ごとと考えることが被災地にとって一番の支援である。

**まとめ**  
○7年を経た今でも仮設住宅に居住している人が多数いる。復興の完了には、想像以上の時間がかかることがわかった。  
○人と人との絆が深まり、心の復興も進んでいる様子が感じられた。



## C) 沖縄

### ■ 目的

唯一の地上戦であった沖縄戦の事実について、博物館見学や壕内部の見学、戦争体験聴講を通して学ぶ。さらに、沖縄県立那覇国際高校の生徒とテーマについて意見交換し、交流を深める。

■ 期間 11月8日(木)～10日(土) 2泊3日

■ 参加者 生徒12名(男子4名、女子8名)・引率教職員3名

### ■ 行程

#### <1日目>

初日、参加した12名は、羽田空港から空路、沖縄県・那覇空港に降り立ち、ひめゆり平和祈念資料館で、沖縄県立那覇国際高等学校(SGH校)の生徒10名と合流し、ひめゆり学徒隊について学びあいました。その後、沖縄県平和祈念資料館で常設展示を見学。同館会議室にて、両校交流会(ピースフォーラム)を開催し、「平和の礎」にて思い出深い記念撮影や交流のひと時を設けることができました。



### ◆ 生徒感想

「那覇国際高校の皆さんとの交流を通して、戦後70年以上経過していることで、「生きた」証言を聞く機会自体が減少しており、私たちは、平和というゴールを目指すという明確な「意思」を持って、戦争の伝承をしていかねばならないと思いました。東京に帰ったら、学園生に対して、「語り部」として、沖縄であったことを、詳しく語れるよう勉強していきます。」

「ひめゆりの塔や資料館の見学では、戦争で失われた命の重さと、沖縄戦の悲惨さを実感しました。また、生き残った方々の証言映像を見て、すぐそばで友達が爆弾によって殺された体験など、戦争体験者の生の声を知ることができました。明日は、遺骨収集に参加させて頂くので、真剣に取り組む、学んでいきます。」

#### <2日目>

第2日目の午前中は、沖縄戦戦没者の遺骨収集事業に取り組んでいるNPO法人ガマフヤー(具志堅隆松代表)の遺骨発掘ボランティア作業を体験しました。

糸満市山城付近のガマの中にも入れてもらい実物の遺骨や遺品も拝見しました。午後には、沖縄国際平和会館を訪問し、特別展示室を見学しました。



### ◆ 生徒感想

「遺骨収集は思っていたより大変で、掘っても掘っても腐葉土でとても労力がいると思いました。ガマの中はとても暗く狭くて、この中でたくさんの方が隠れて、亡くなったかと思うと言葉になりませんでした。具志堅さんは本当に思いが強く、『大切なことは“気づき・立ち止まり・歩み寄り”の気持ちである』との言葉が心に残りました。私も“歩み寄り”までできる人間になります。」

「今日はガマで遺骨収集作業をお手伝いさせて頂き、軍人の遺骨を見て手を合わせた時に、人がこんな目に遭わなければならなかった戦争がとても憎く、辛い思いになりました。沖縄国際平和会館では、沖縄と創立者池田先生との深い関わりを学べ、いかに先生が沖縄を大切に考えていたのかと思うと、もっと創立者のされてきた事を知りたいと思いました。」

### <3日目>

最終日となった3日目は、沖縄研修道場を舞台に実施されました。沖縄の皆様の大歓迎のもと、〈世界平和の碑〉の前で記念撮影を行いました。そして付属展示室を見学し、創価学園創立者のご発案によってミサイル基地が「平和の要塞」へと生まれ変わった意義を、創価学園生へ丹念に説明してくださいました。その後「グローバルな人材になるために」とのテーマで、琉球大学講師の田中正男先生によるご講演を沖縄県立那覇国際高校の生徒代表と共に拝聴しました。その後、嘉手納基地を一望できる道の駅「かでな」に立ち寄り、沖縄と米軍基地の現状を肌で感じ、そのまま那覇空港から東京に帰京しました。



### ◆ 生徒感想

「今日のセミナーでは、ホテル経営もされている田中先生のお話を聞き、他人のことを偏見なしに深く理解していくこと、恐れず突き進むことが成功の鍵だということ学びました。これは平和を築く上でも大切なことだと思います。3日間、沖縄の方々の優しさに包まれ、素晴らしいフィールドワークとなりました。本当にありがとうございました。」

「沖縄研修道場を訪れ、「メース B 基地を平和の要塞に転換するという発想は、常に平和の

ことを考えていないと出てこない」というロートブラット博士の言葉に触れ、池田先生の平和を願うお気持ちがいかに強いかを理解しました。この3日間を通して得た貴重な体験を自分の血肉にして、成長していきます。」

「今回のフィールドワークで平和の尊さ、戦争の残酷さ、そして対話の重要性を改めて学ぶことが出来ました。体験した全てのことがとても新鮮で、充実したものになりました。その感謝を創立者、奥様、家族や友達に伝えたいと思います。そしてこれらの体験を実際に生かせるように日々努力を続けていきます。」

「今日の経験の中で、ガマフヤーの方のどんなに困難な状況でも自分たちの正義のために行動し続ける尊さに大変感銘を受けました。私も少しずつそうなれるように日々自分と対話しながら生きようと思いました。」

「今日は遺骨収集に行き、戦争の現場を肌で感じたことが特に印象に残っています。岩場の道やガマの中はとても不気味で、2ヶ月以上もこの場所で、死ぬ怖さと戦いながら生きていくことを考えるだけで恐ろしかったです。また、以前発見された遺骨に触ることができ、戦争はまだ終わっていないことを改めて感じました。」

## D) JICA 地球ひろば(市ヶ谷)

- 期間 8月31日(金)
- 参加者 23名(高校1年生23名)
- 目的

「国際理解」をテーマに、JICA 地球ひろばを訪れ、青年海外協力隊の経験者による施設案内や、レクチャーを通して、世界の実情を体験的に学び、その解決の方途を探る。また、テーマディスカッションを通して、世界の諸問題に対する関心・理解を深め、国際協力のあり方を見つめ、また将来の進路選択の一助とする。

### ■ 行程

フィールドワーク当日、市ヶ谷駅に集合し、10分程度歩いて、JICA 地球ひろばに行きました。合計3つある研修のうち、最初は、青年海外協力隊としてエチオピアで数学教師をしていた方の体験談を伺いました。体験談では、導入として、JICA そのものや、日本がなぜ開発援助をしているのか、また、青年海外協力隊の活動内容を説明して頂きました。その後、実体験を踏まえ、教育活動を通しての感想をお聞きし、途上国の教育には課題が山積みであることを深く認識しました。



その後、2つ目の研修である展示施設の見学を行いました。ここでは、青年海外協力隊等で国際経験を積んできた方のガイド付きでそれぞれのテーマに沿った内容を体験的に知ることができました。特に、世界の食をめぐる特別展示では、現代の食をめぐる現状や課題を学びました。また、昼食にエスニックビュッフェとして海外の素材を使った料理を味わいました。

昼食を挟み3つ目の研修として、SDGs への理解を深めるためのワークショップを行いました。ワークショップでは、世界各国の抱える課題の現状の写真を見ながら、それぞれがどの SDGs の課題に対応しているのか、グループで話し合いながら写真からわかる世界の現状を分析しました。実際の課題と自身の話し合った内容を比べると、各国はただ一つの課題だけでなく、

複合的に絡まった課題の難しさの中で、国際支援をしていることを学びました。また世界のさまざまな課題や SDGs の中で何を優先して取り組んでいくのかを、それぞれが考え、グループごとに発表する中で、いろいろな視野で考えることの大切さを学びました。

#### ◆ 生徒感想

「大きな課題も一つ一つの小さな目標、課題を乗り越えていくことで解決できると思いました。それには、小さな事でも一人一人が感心をもつことで多くを変えていく原動力となることを展示やワークショップでの話し合いを通して思いました。国と国同士の協力も、目の前の一人を思って行動することから始まると思います。自分にできることをやっていきたいです。」



「日本に住んでいると貧困や飢餓など気にせず快適に過ごせていますが、世界に目を向けると日本は本当に豊かで平和な国だということを再認識しました。また、自分たち日本だけが幸せに暮らせていたらそれでいい訳ではなく、他の国があってこそ日本が豊かに暮らせていると思うので、貧困や飢餓など苦しんでいる人々のために今の自分ができることを考えてこれから行動していきたいと思いました。」

### E) 国際連合大学(渋谷区)

- 期間 12/18(火)
- 参加者 19名(高校3年生)
- 目的

国際連合大学(以下、国連大学)は、SDGs の全ての分野にて高い専門性を持ち、世界各地に研究所を有する。そのため、国連大学は地域の課題を解決する上でグローバルなネットワークとして重要な役割として機能している。今回は「国際貢献・国際パートナーシップ」をテーマに、ここに訪れ SDGs 達成の鍵である 17 番目のゴール「パートナーシップで目標を達成しよう」について、実際の活動経験者や研究者から、その現状と具体的な取り組みの話の伺い理解を深める。

#### ■ 事前学習

出発前の事前学習として、国連大学と現地で講演を頂く地球環境パートナーシッププラザ(GEOC)についてまとめたプリントを、参加者に配布しました。参加者には、プリントを読み込み、また QR コードからそれぞれの HP にアクセスして、興味がある取り組みや質問事項を整理して当日に臨みました。フィールドワーク当日、渋谷駅東口周辺に集合し、徒歩 10 分程度の道のりを歩き、国連大学に行きました。国連大学では、本校の卒業生でもある今井夏子氏(国連大学サステナビリティ高



等研究所)より、国連大学の概要と「人間の安全保障」のために国連大学が行政や NGO などの機関と連携を取り組んで実施している取り組みを伺いました。その後、GEOC 職員の山口史子氏からは、地域の悩み声を拾い上げ、その解決に向けて GEOC が地域と関係機関との架け橋の役割を担っている具体的な事案を紹介して頂きました。そして、国連大学構内にある、図書館やウ・タント国際会議場、エリザベス・ローズ国際会議場を見学しました。見学の中では、国際連合工業開発機関 (UNIDO) で広報担当を務める中山綾子氏にも、貴重なお話を伺うことができました。滞在時間2時間という短い時間の中で、漠然としたイメージがあった「パートナーシップ」の在り方が、具体的な事案を聞く中でより明確になりました。



#### ◆ 生徒感想

「私も卒業後は、様々な形で SDGs 達成に関わっていきたいと思い、今回の国連大学訪問に立候補しました。国連大学内で実際に働く人の話を聞く中で、貧困や飢餓などの問題を解決していくには、パートナーシップが大切だと実感しました。特にシエラレオネの青年らが自らグループを結成して、地元の人気アーティストやコメディアンと連携を取りながら紛争の再発防止に取り組んでいた話がとても印象的でした。その話を受けて、ただじっと周囲からの支援を待つのではなく、勇気を出して自発的に様々な人々連携を取り、行動を起こしてみることも重要なのだと気付くことができました。」

「この度は、実際に国際分野で活躍する方々の貴重な話を聞くことができ、本当にありがとうございました。私は、このフィールド枠を通して、パートナーシップの本質に近づくことができました。パートナーシップとは、一方的な支援だけでなく、お互いの長所を生かしながら短所を補っていく、対等な関係をつくる中で生まれるのだと思いました。また、国や行政といったスケールの大きい繋がりも大切ですが、私たちが日常生活の中でパートナーシップの理念を持ちながら、身近な友人と接し、互いに切磋琢磨していくことが、地域の課題解決、世界平和を実現していくのだと捉えることができました。」



## F) 国立ハンセン病資料館(東村山)

- 期間 2/2(土)
- 参加者 15名 (高校2年生 15名 男子 5名 女子 10名)
- 目的

国立ハンセン病資料館並びに多摩全生園を訪れ、ハンセン病回復者の方との交流を通して、ハンセン病の歴史的背景を学ぶとともに、人権を踏みにじられてきた体験者の痛みに触れ、自身の生き方や人権について考え、深める機会とする。

## ■ 事前学習

今年から参加対象が2学年となったので、3学期最初のLHRで全員にNHKスペシャル「瀬戸内 ハンセン病の島の記憶 大島青松園」の前半部分を視聴し、今回のフィールドワークの意義を確認した。映像の後半は各自の自主性に応じて視聴するように促した。今回は、15名のエントリーがあった。参加予定者とは2回事前学習会を行なった。1回目は映画「あん」の後半部分、2回目は語り部「佐川修さん」の記録映像を視聴するとともにハンセン病の概要や日本における差別の歴史がおさめられた学習冊子を読み、ディスカッションを通して学び合った。ハンセン病に関する基礎知識を踏まえ、一人ひとりが現地でハンセン病回復者さんに伺いたいことを考えて当日を迎えた。



## ■ 行程

午前は、国立ハンセン病資料館の展示を見学し、日本におけるハンセン病の差別の歴史を学んだ。各地の療養所で実際に使われていた生活道具や患者さんがつくった詩や陶芸作品を目の当たりし、出口の見えない隔離生活の厳しさとその中で生きる希望を持ち続けた患者さんたちの力強さに心が震えた。



昼食は、多摩全生園内のお食事処「なごみ」にて頂いた。また、事前に視聴した映画「あん」の撮影で実際に使用された物やポスター、樹木希林さんのサインなど映画関連の展示があったので見学した。

午後は「ハンセン病回復者と話す会」と多摩全生園のフィールドワークに参加した。話す会でお話を伺った二人の回復者さんは、男性と女性で、女性の方は家族が差別を受けないように自分の故郷を離れ、療養所でつけた名前でも生活されていました。一人ひとりかけがえのない人生があったこと、それを踏みにじった差別が現実にここ日本で存在したのだということに大きな衝撃を受けた。差別に苦しみ続けてきた回復者さんの生の声に直接触れ、生き抜いてきた地を自分の足で歩く中で、生徒一人ひとりが人権という問題と深く向き合う時間となりました。



## ◆ 生徒感想

「私がこのFWを通して最も心に残ったことは、どんなに悲惨で過酷な状況下にあっても、自ら仕事をして、思いを表現しようと必死になっていたということです。いかに辛い環境でも希望を見出そうとしている姿に強く心を打たれ、学園の負けじ魂にも通ずるものを感じました。必ずこの経験を活かし、一人ひとりの思いに寄り添える強い看護師へと成長してまいります。」

「回復者さんとの懇談が心に響き、明るく前向きに過去と向き合っている姿に尊敬の思いが湧きました。一言一言の重さは僕たちが何気なく話している会話の何十倍にも感じられ、回復者さんの手からは生き抜いた苦勞が、顔からは今を楽しんでいる喜びが伝わってきました。桜の咲いた頃に再び訪れたいです。」

## 6. グローバルセミナー

### ■ 目的

国内外で活躍される有識者・学術者・本校卒業生をお迎えし、講演会・懇談会を開催することによって、生徒がグローバル人材へと成長するための触発の機会とする。一貫校である創価中学校にも広く公開する。

### ■ 実施

2018年度は10カ国14組のゲストスピーカーをお迎えし、グローバルセミナーを開催した。(詳細は一覧表を参照)その中から、以下3つのグローバルセミナーについて概要等を報告することとする。

No.	来校日	国名	来校者	役職等
1	2018/04/24(火)	ニュージーランド	李 成鏞 (Dr. SungYong Lee)	オタゴ大学国立平和紛争研究所・准教授
2	2018/05/10(木)	フィリピン	ゾシモ・バタッド (Mr. Zosimo M. Battad)	イースト大学カロオカノ校学長
3	2018/05/15(火)	イタリア	クアットルッチ (ALBERTO QUATTRUCCI)	聖エジディオ共同体事務総長
4	2018/06/12(火)	ザンビア	ムビータンゴマ (Catherine A. Mubita - Ngoma)	ザンビア大学看護学部長(創大看護学部客員教員)
5	2018/06/20(水)	フィリピン	ウルドゥハ・テハダ (Urdujah Alvarado Tejada)	国立カガヤン大学学長
6	2018/06/28(木)	中国	首都師範大・南開大・北京教育学院教員ご一行	
7	2018/09/10(月)	ベネズエラ	セイコウ・イシカワ (Seiko Luis Ishikawa Kobayashi)	駐日ベネズエラ大使
8	2018/09/10(月)	タイ	アヌチャート・プオンサムリー (Dr. Anuchat POUNGSOMLEE)	タマサート大学教育学部長
9	2018/10/23(火)	フィリピン	クリソル・A・ブルーザ (Dr. Crisol A. Bruza)	イースト大学人文学部長
10	2018/12/14(金)	アメリカ	ロザリンド・ドリッサ (Rosalind De Lisser)	カリフォルニア大学サンフランシスコ校臨床准教授(創大看護学部客員教員)
11	2019/01/16(水)	中国	首都師範大学初等教育学院・初等教育研究所ご一行	
12	2019/01/18(金)	日本	正木 絵理 (Eri Masaki)	UNICEF公的パートナーシップ担当官(本校卒業生)
13	2019/01/28(月)	ブラジル	ブラジル創価学園教員研修団ご一行	
14	2019/03/07(木)	日本	坂本 敬子 (Keiko sakamoto)	国連官民連携専門官(本校卒業生)

#### ◆ 李 成鏞 博士(ニュージーランド／オタゴ大学国立平和紛争研究所准教授)

■ 開催日・会場 2018年4月24日(火)・栄冠ホール

■ テーマ 紛争から平和への交渉と仲介: 難題の克服

#### ■ 概要

李博士からは、内戦や紛争に対する和平交渉について、具体例を通して貴重な話を聞くことができました。世界の複雑な問題が絡むなかで紛争・対立を解決するには、「対話こそが平和への交渉の鍵である」とともに、目の前の課題に粘り強く取り組み続ける姿勢が重要であることを学びました。

#### ◆ 生徒感想より

・「今までは新聞やニュースで見ただけだった内戦や紛争について、それらを解決するにはどうしたらよいか、とても貴重な話を聞くことができました。自分自身にこれから何ができるのかを深く考えるきっかけとなり、とても有意義な時間になりました。」

・「今日のお話を通して、自分の英語力を鍛えたい、英語を使ってディスカッションをしたいと強く思いました。ニュースで紛争のことについて報道されていても、課題が多すぎて無念に感じてしまうことまで深くは感じていませんでした。もっと多くのことを知りたい学びたいと思いました。」

・「私がびっくりしたのは、紛争解決の仲介をして成功した例が、20 ケースのうち 1 ケースほどの割合だということを知ったときです。また、『みな最初は希望を持ってくる。しかし、世界の複雑な問題に関われば関わるほど自分が無力に感じる』という李先生の言葉が印象的でした。またその一方で、創立者の SGI 提言の 5 つの大事なポイントを教えて頂き、池田先生が何よりも大切にされてきた『対話の道』を進んでいくことが大事であると思いました。」

・「私は『対話が平和への交渉の鍵である』という言葉が心に残りました。紛争の仲介というのは失敗した例が多いということを知り、簡単な問題ではないということを知り、現実を避けることなく目の前の課題に取り組む姿勢が大切だと思いました。また、李先生のお話を伺い、自身の英語力を更に高めていこうと決意しました。」

・「コミュニケーションについては、人々がどのように情報を受け取り、理解したかが大切だと思いました。創立者の平和提言の 5 つのテーマについて、素直に学びたいと思いました。身近なことでも、平和と関連性を見つけ出していきたいと思いました。」

・「国際平和や和平交渉の手順や問題点について、自分があまりにも表面的にしか考えていないことに気づかされました。一番印象に残ったことは、和平交渉では『タイミング』というものが重要であるということです。全てが人命のために行ったことでも、タイミングを間違えてしまえば、和平交渉が無駄になるということは考えたこともありませんでした。初めて参加したグローバルセミナーはとても有意義なものとなりました。」



◆セイコウ・イシカワ 氏 (ベネズエラ・ボリバル共和国 / 駐日特命全権大使)

■ 開催日・会場 2018 年 9 月 10 日(月)・栄冠ホール

■ テーマ 心の窓をもう一つ ベネズエラ

■ 概要

イシカワ大使からは、ベネズエラの豊かな自然や社会の現状を通して、「さまざまな窓(視点)があることで真実の姿が見える」とお話がありました。更に大使令夫人からは、ベネズエラで社会福祉事業として行われている無償の音楽教育「エル・システム」が紹介され、音楽を通じ、ベネズエラの子ども達が成長していく様子が紹介されました。

◆ 生徒感想より

・「私はまず『心の窓』というお話しに感動しました。窓があればあるほど真実が分かり、それが友情と平和へとつながっていくということが心に残っています。その窓は、勉学・部活・委員会活動など、



毎日の全てのことで作られます。今、私がすべきことに本当に気を抜かず、『全力』で逃げずに戦います。」

・「特に『エル・システム』について興味を持ち、すごく感動しました。音楽で世界を変えられる素晴らしさに深く共感しました。身分や立場に関係なく、全員が団結し、一体性を見出している姿に感動するとともに自分の部活への見方も変わりました。目的観を持ってしっかり取り組んでいるのがすごいなと思いました。ベネズエラにぜひ行ってみたいと思いました。」

・「大使と奥様の学園生に期待を込める目差しとあたたかい笑顔にお二人の人柄を感じました。これから自分がどのように誰を救って、自然と環境をどう守り、人々の文化を発展させていくのか。そのために自分に何ができるかを問いかけながら、より深く充実した学園生活を送り、ご期待に応えられる人材に成長していきます。」

・「本日の講演を聴かせていただき、『心の窓』をたくさん持ち、事実の中から真実を見抜く力を身につけていきたいと思いました。私の実家のある沖縄では、基地問題や環境問題など課題がたくさんあります。その問題の中から真実を読み取り、沖縄や世界の平和となる一歩を踏み出していきたいです。自分の一歩が誰かの希望となれる行動を起こしていきます。」

・「『音楽を奏でて闘え』というモットーのもと、音楽教育を大切にされていることが印象的でした。70%が貧困層であったり、障害のある人など全ての人々が混ざりあっていて、『誰も置き去りにしない』精神が根付いているのだと強く感じました。私も『他者を尊敬する心』忘れず進んでいきます。」

・「大使の『平和でない文化の成長はない』とのお言葉が印象に残りました。ベネズエラのエル・システムの目的は、社会で活躍する人を増やすこと、コミュニティを広げることだそうです。私たちはSDGsについて学び、貧困や社会福祉へのアプローチを考えてきましたが、エル・システムのような方法は考えたことがなく、物事を多角的に見る大切さを実感しました。学び続けることを忘れず視野を広げて参ります。」



◆正木 絵理 氏 (UNICEF 公的パートナーシップ担当官・本校卒業生)

■ 開催日・会場 019年1月18日(金)・グローリーホール

■ テーマ 世界を舞台に働くとは～学園での誓いを胸に UNICEF を目指す～

■ 概要

正木さんが中学3年生の時、創立者池田先生が「正義と一致した実力を持って！」との魯迅の言葉を通してご指導くださったことを励みに、自己のキャリア形成を図ってきたことを丁寧にご報告くださいました。さらには、UNICEF が子どもを守るためにグローバルに展開する支援の取り組みや国連職員になるための具体的な過程について詳しく説明してくださいました。

## ◆ 生徒感想より

- ・「自分の将来について深く考える機会になりました。自分が今、漠然と抱いている夢は、具体的にこういうことなのだというをよく考えることができました。自分の限界までやってみるということ、今から挑戦していきたいと思いました。また、本気で将来に目を向けて、今の自分にできること、そしてすべきことは何かを考え実行していきたいと思います。」
- ・「私は今まで漠然と国連などで働いてみたいなと思っていませんでした。しかし、今回のお話を伺い、国際機関で働く具体的なプロセスや、今できることは何かなどを知ることができてとても参考になりました。まずは、自分がどのようなことに興味があって、どのように働きたいのかを考えることから始めていきたいと思います。これから大変なこともあると思いますが、ぶれずに頑張れば夢に近づいていけることを正木さんのお姿から学べたので、これから頑張ります。」
- ・「Who、What、How、Where の4つの視点から自分の目標をさぐることは、とすれば抽象的になりがちな将来を考える上で、とても重要な点だと感じました。このような点から目標を明確にもち続けることがどんな状況におかれてもぶれない自分を確立するために必要だと感じました。今回、まず今の自分にできることを考えるきっかけを頂けたように思います。興味がある教育・心理学・人権・安全保障に関するセミナーやボランティアに参加してみようと思います。」
- ・「自分の将来について悩んでおり、自分が興味のある国際分野の仕事に関するセミナーだったので参加させていただきました。まず、私が驚いたのは、国連職員になるには、沢山のプロセスをふまなければならないということです。海外の大学を卒業すれば国連に就職できると思っていましたが、国連職員には専門性が必要であることを初めて知りました。今回のセミナーを通して、自分の学園生活も見直そうと思いました。」
- ・「私は将来、世界に視野を広げて働きたいと漠然と考えていたので、今回のセミナーはとても参考になりました。特に、今の私たちにできることは『学ぶ』ことだけでなく、『発信』していくこともできるという新たな気づきがありました。本日教えていただいた『何を』『何の為に』『どのように』『どの立場から』という4つのアプローチで、自分なりに将来のことについて真剣に考えていこうと思います。」
- ・「高校卒業後の大学生活の過ごし方、またその先、どれくらい仕事で自分がやりたいことを追求できるか不安を感じていたので、今回の正木さんのお話を伺えてよかったです。大学での4年間を確実に自分のキャリアにつなげていくために、私も1年ごと目標を明確にして、学業以外にもインターンシップなどに積極的に挑戦していきたいと思いました。また、学園や大学での先輩方とのつながりを大切にしていきたいと思いました。」



## 7. 語学活動

### A) 英字新聞(GCP)

■ 期間 11月中旬～3月中旬

■ 参加者 41名(1年生13名 2年生20名 3年生8名)(希望者)

■ 目的

英字新聞の作成を通し、英語力・発信力を高めるとともに、取材や新聞作成を通じ、社会や世界との関わり方、情報活用能力、チームによる計画実行能力等を涵養する。

■ 事前準備

学年が混在した4～5名ずつの8グループに編成。プロジェクト全体を統括する編集長・副編集長を定めました。第一回の講義で記事の内容をプレゼンするため、それぞれのグループで書きたい内容を検討し、発表の準備を進めました。

■ 講義内容

1回目 11月14日(水)(2時間)

初回の講義はジャパントイムズ編集局長の大門小百合氏に担当していただきました。それぞれのグループが記事の内容をプレゼンし、氏から講評を頂きました。講義では、「成田に到着したばかりの外国人に伝わるように書く」との、英字新聞の根本スタンスを教えてくださいました。

2回目 11月17日(土)(2時間)

第二回の講義では、報道部デスクエディターである、内藤陽介氏をお招きしました。英文記事を書く上で重要な、取材の仕方や英文の書き方をご講義頂きました。一人称は用いないことや、情報の出所を示すことなど、客観的に事実を記述する仕方を学びました。

3回目 12月19日(水)(2時間)

ジャパントイムズ編集企画部・部長の松谷実氏に講義を担当してもらいました。本講義までに生徒は記事の第一校を作成し、それに対する修正提案を行って頂きました。より明確に伝えたいことが伝わる文章を提示して頂き、また読者の目を引くような熟語の使い方を学びました。加えてレイアウトの作成の仕方も教わり、本格的に新聞を作成する準備が整いました。

4回目 1月24日(月)(2時間)

週刊 ST の高橋敏之編集長が「改めて考える英文ライティング」と題して講義。ライティング力の向上として、英文を大量にインプットする、語句の使い方に常に注意を払う、自然な英文かどうか確認をするという三点を確認しました。

5回目 3月9日(土)(2時間)

ジャパントイムズの大門小百合編集局長の担当で、生徒版とプロのチェックを入れて完成した版を比較し、英文・見出しなどがどのように修正されたのか解説を受けました。かなり修正されている箇所もあり、簡潔に言いたいことが伝わる英文に接し、大きな学びを得ました。

## YLP交流会 2月2日(土) 於:ジャパンタイムズ本社

本年度は、英字新聞プロジェクト(YLP)を行っている他校との交流が初めて実現しました。今回は横浜雙葉高校との交流となり、互いに完成した新聞を見せ合いながら、工夫した点や苦労した点をプレゼンし合いました。交流会後はジャパンタイムズ社の社内を見学させて頂き、メディアの最前線を見ることで、キャリアについても考える貴重な機会となりました。



\* 完成した英字新聞は、10.関係資料③参照

## B) イングリッシュキャンプ

- 期間 11/10(土)~11(日)の2日間
- 参加者 23名(高校1年生14名 高校2年生5名 高校3年生4名)(希望者)
- 目的

創価大学に1泊2日を英語のみを使いながら過ごし、最新の施設を使用しながら、英語コミュニケーション能力の向上を図る。また、留学生との交流・共同作業を体験する。

### ■ 事前学習

参加者を2~3名ずつの9グループに編成しました。「留学生から見た日本」について留学生にインタビューを行うため、その下準備としてテーマ設定とそれに基づいた質問を作成。「化粧の違い」「クリスマス」「バレンタインデー」「ゲーム」「部活動」「民間療法」「祭り」など、生徒は多様なテーマを設定していました。

### ■ 研修内容

#### 1日目

午前10時に創価大学中央教育棟に集合し、使用するSPACEやワールドランゲージセンター(WLC)内の施設を見学。その後、開講式を行い、創価大学のサミュエル・ブルース先生より、ポスターを作る際のポイントや、プレゼンテーションのスキルについて、アクティビティを交えながら講義していただきました。



午後からは6カ国・9名の交換留学生と交流をスタート。2~3名を1グループとし、各留学生の自己紹介や出身国の文化についての話を聴きました。また、生徒は準備をしてきた質問リストにそって留学生にインタビューを行い、「留学生から見た日本」をについて情報を集めました。

その後留学生には、ポスタープレゼンテーションについてのアドバイスをする「チューター」として、各グループ1名ずつ担当してもらいました。夕方からのセッションは、発見・考察したことをA2サイズのポスターにまとめる時間とし、担当留学生と活発に意見を交換しながら、マーカーで記入したり、色紙を使って視覚情報を工夫して盛り込んだりして、ポスターを作り上げていきました。

## 2日目

朝食をとった後、作業教室へ集合し、ポスターの仕上げや発表練習をしました。何人かの留学生も集合時間より早く来て、学園生をサポートしてくれました。

グループ内でのリハーサルを経て、午後、SPACEに集合。広い空間にホワイトボードを配置し、ポスターを掲示しました。本校卒業生で国際教養学部で学んでいる先輩方も駆けつけてくれました。

本番では、これまでの練習の成果を発揮し、生徒全員が5分程度のポスターセッションと質疑応答を英語でやり切ることができました。生徒は発表ごとに自信をつけ、最後はどの生徒も堂々とプレゼンテーションを行っていました。

閉講式では代表生徒の感謝の言葉の後、留学生からも、生徒の積極的な姿勢や生きた英語を学べる取り組みが素晴らしい、と感想を話してもらいました。最後は留学生とともに記念撮影し、充実の2日間の行程を終了しました。

### ◆ 生徒感想

「先輩方や仲間と一緒にオールイングリッシュで過ごす中で築いた友情や、夢を語り合ったこと、多くの留学生から学んだことは、私の宝の思い出になりました。私は参加するにあたり、英語を話すことに対しての殻を破ろうと決意しましたが、この2日間で英語を話す力を大きく伸ばすことができたと確信します。」

「1日目の反省を生かし、2日目の今日は積極的に留学生とコミュニケーションを取ることができ、自分の英語が伝わったときは本当に嬉しかったです。1つの言語を使えるようになることで、自分の心の中の世界が広がり、より多様な人々と友情を築けることを改めて学びました。この2日間で学んだ多くのことを、日々の勉学に反映していきます。」

「プレゼンテーションの準備は直前までかかりましたが、本番では自分のある限りの英語力を出し切ることができたと思います。特に、原稿として書いたこと以外にも、追加の説明を自分の言葉で言えたことや、質問に答えられたことは大きな収穫でした。しかし、自分の力はまだまだなので、これからも、自分の可能性を信じて英語力の向上に励んでいきます。」



## 8. 時間管理手帳

### ■ 目的

時間管理能力育成(タイムマネジメントの指導法開発)

### ■ 実施

SGH の取り組みの一つとして、生徒の時間管理能力を育成し、PDCA サイクルを習得させるため、時間管理手帳(以下、〈スコラ〉)を全生徒に配付して活用しています。キャリア教育推進委員会(月 1 回程度開催)での協議をもとに、学年ごとに計画的に生徒への指導・激励を行っています。

今年度入学した1年生(本校 51 期生)については、3年次の大学入学者選抜試験の際に、「大学入試共通テスト」が開始されるとともに、「主体性等を評価する」ことを目的として、各生徒のポートフォリオの記録を、高大接続ポータルサイト「JAPAN e-Portfolio」経由で受験大学に提出することが本格化すると想定されています。

そこで1年生については、例年通り、入学前に〈スコラ〉を配付し各人で試行させ、入学後には手帳教室を開催し PDCA の概念や手帳の利用方法などを学ぶとともに、新たに〈Portfolio Note〉を併用して、高校生活の学びと活動の記録をとらせるように発展的な活用を研究しました。毎週末(金曜日もしくは土曜日)の帰りの SHR で〈スコラ〉の振り返りを記入、毎月第一週の金曜日の朝の SHR で〈Portfolio Note〉を記入するというリズムで、記録と振り返りを図り高校生活の PDCA 化を推進しました。そして、3学期には1年生全員に「JAPAN e-Portfolio」への入力を行わせました。

学園祭では校内手帳甲子園を実施し、第7回手帳甲子園東京大会(主催:NOLTY プランナーズ)に本校より 25 名を出展。東京大会(2018 年 12 月 22 日/於:中央大学高等学校)では、荒井花菜さん(2 年)が「手帳活用部門」において優秀賞を受賞し東京大会代表に選出されました。その結果、荒井さんは第 7 回手帳甲子園本大会(2019 年 2 月 2 日/於:ルミネゼロ)に出場し、「毎日 PDCA 化できる見える化された BOX 型手帳」と題してプレゼンテーションを行い、好評を博しました。荒井さんは昨年度に引き続き 2 年連続の全国大会出場となりました。



## ■〈スコラ〉効果測定

NOLTY プランナーズが〈スコラ〉を活用している全国の生徒に実施した効果測定（2018年7月に実施・153,180名が回答）から、本校の傾向として以下のような点がみえてきました。効果測定では、「手帳の使い方で参考になったものはありますか？（複数回答可）」との質問項目について以下のようなデータが測定されました。各学年の経年変化を分析してみると、本校では学年が上がるに従って、同級生同士の時間管理の学び合いが進んでいることがわかりました。特に、今年度の1年生は、これまで以上に、〈スコラ〉を活用させる機会を増やしたことにより、他者から時間管理の工夫を学ぼうとする意識が高まったと考えられます。次年度は、〈スコラ〉活用事例をTV放送や掲示物などを利用して、さらに効果的に生徒に伝えることができるように工夫をしていきたいと思えます。

「手帳の使い方で参考になったものはありますか？（複数回答可）」												
	先輩の手帳（上段：本校／下段：全国平均）						同級生の手帳（上段：本校／下段：全国平均）					
	1年次		2年次		3年次		1年次		2年次		3年次	
〈51期生〉	2018年度	34.06% (6.04%)	—	—	—	—	2018年度	30.96% (16.85%)	—	—	—	—
〈50期生〉	2017年度	18.34% (5.43%)	2018年度	13.68% (3.39%)	—	—	2017年度	25.50% (15.50%)	2018年度	48.02% (17.94%)	—	—
〈49期生〉	2016年度	11.0% (3.3%)	2017年度	14.60% (3.46%)	2018年度	11.34% (3.28%)	2016年度	29.6% (16.85%)	2017年度	36.02% (17.28%)	2018年度	42.39% (16.16%)

## 9. 評価と分析

### A) アンケートと分析

#### ■ 生徒対象のアンケート

2018年5月と2019年2月、SGH活動に関するアンケートを全校対象に行ったところ、以下のような結果が得られました。

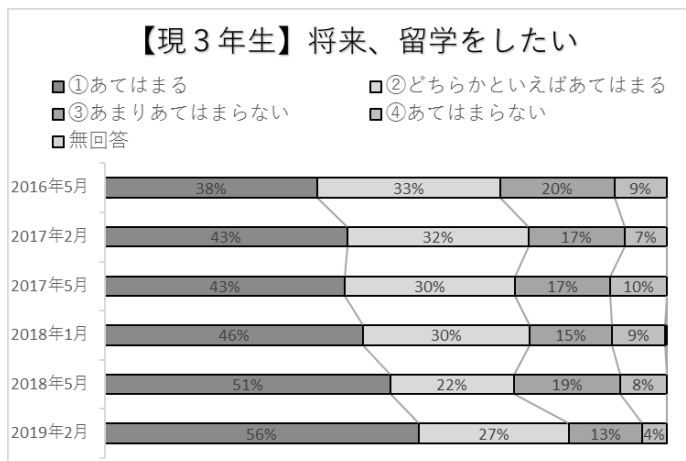
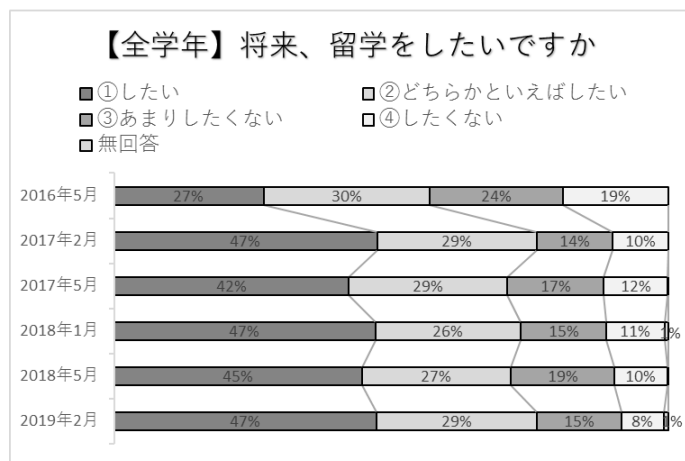
現在の高校3年生は、高校1年次からSGH活動が始まり、高校3年間を通してSGH活動を行った初めての学年になります。そして今回は現3年生の入学年からのアンケート結果との比較を行いました。

海外への志向性、語学への意欲の変化、協働能力、寛容性を問う質問については、SGHに認定されて以降過去行ったアンケート結果との比較を行っています。

#### ● 海外への志向性、語学への意欲の変化

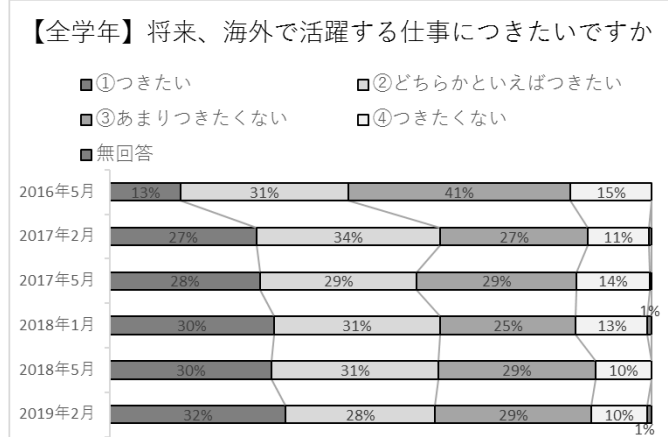
SGH1年次から3年次にかけて、留学を希望する生徒が全校の7割以上を高い割合で推移しています。

また、SGH活動に3年間取り組んだ現3年生の入学時からの結果をみると「留学をしたいですか」との問いに対し、「あてはまる」と答えた生徒がSGH活動を始めた高校1年次の5月から2019年2月にかけて18ポイントも増加しています。SGHの活動の中で、留学がより身近に現実的に感じられるようになってきたことがわかります。



また将来、海外で活躍する仕事につきたいと考える生徒の割合も、SGHの活動を始めてから15%程度増加しています。

さらに語学試験に積極的な生徒が、全体の8割を超えるようになってきました。2015年度にSGHアソシエイト校に指定され、英検の受験料の助成が行われるようになったことが2014年から2015年へかけての増加の一因としてあげられます。また2015年から2016

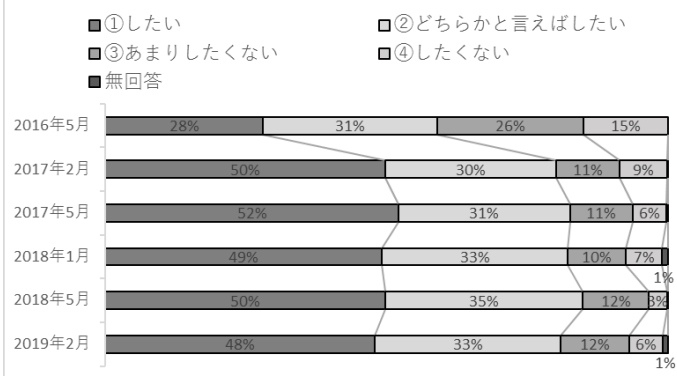




年への増加の一因は SGH の活動が始まり、語学力の重要性の認識が高まったことによると考えられます。

ここ 5 年間の英検 1 級、準 1 級の受験者数の伸びが、明確に生徒たちの積極性の向上をあらわしています。SGH アソシエイトになったのが 2015 年ですので、SGH になったことで、生徒たちが世界に羽ばたく力をつけたいと意欲的に取り組んでいることがよくわかります。

【全学年】英検をはじめ外部の語学試験に挑戦したいですか



	2014年度	2015年度	2016年度	2017年度	2018年度
準1級	67(6)	127(13)	204(23)	272(32)	258(25)
1級	1(0)	6(1)	18(4)	16(1)	15(0)

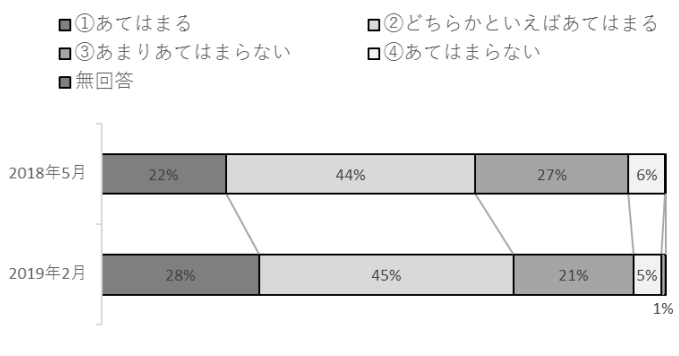
※カッコ内は合格者数

以上の結果から、3年間の SGH としての活動を通し、生徒たちが世界をより身近に感じ、世界を舞台に活躍する意欲が高まっているとわかります。また、高校生として、今は語学を身につけようと強く動機付けされていると言えます。

●身につけてほしい能力や資質の定着

学校全体で地球的問題・課題への興味や理解は確実に浸透しています。下のグラフの通り、2018年5月と比べ2019年2月にはすべての学年で70%を超える生徒が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えており、SGH での活動が生徒たちの興味や関心を引き出し、具体的な学びにつながっていることがわかります。

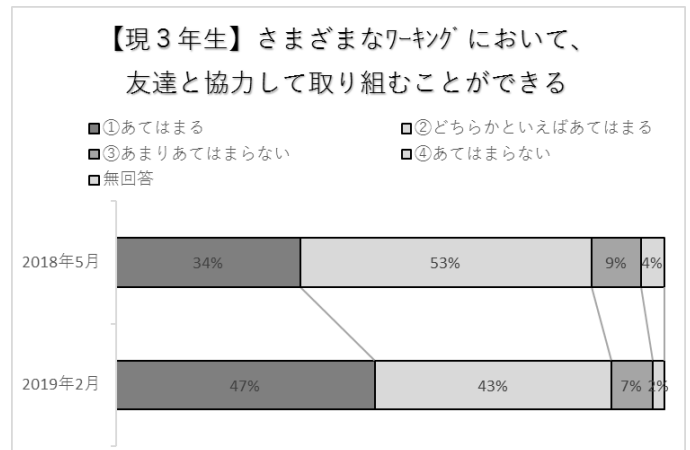
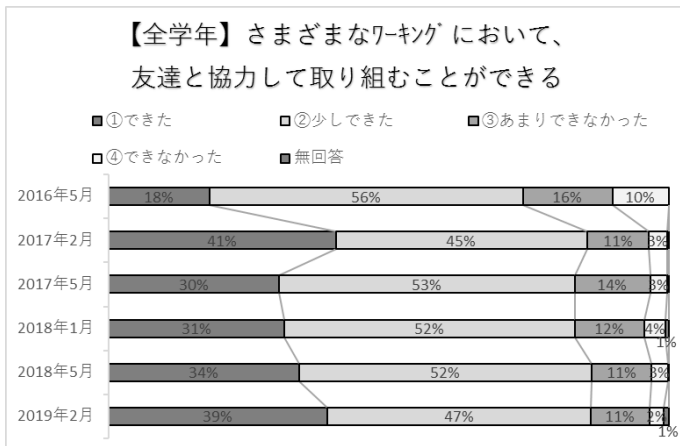
【全学年】地球的問題・課題（紛争・人権・環境・貧困等）についてのニュースに興味があり、学んでいる



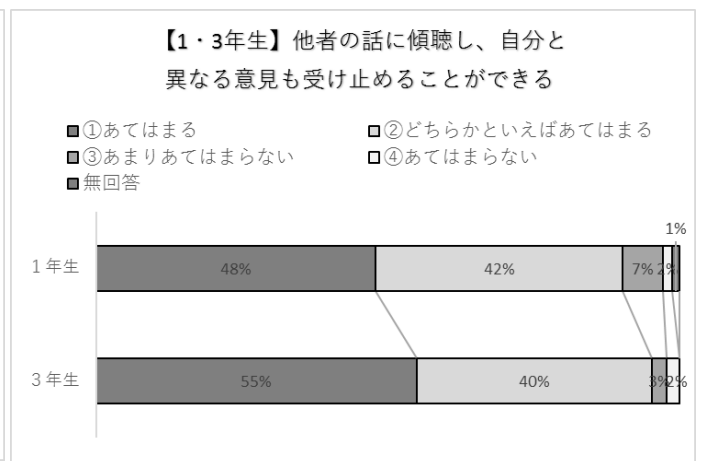
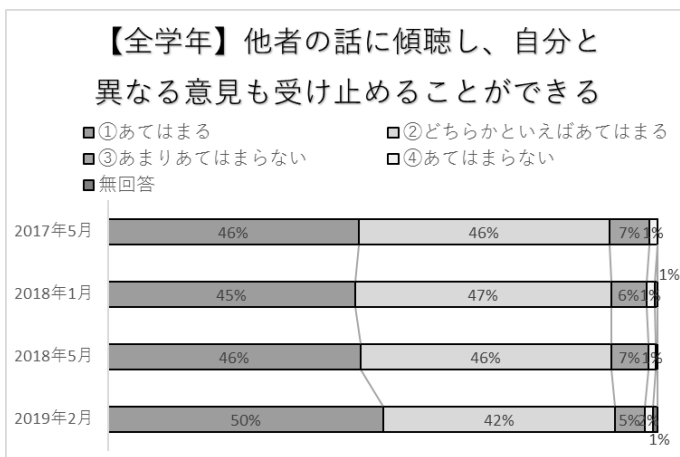
他者との協働性を問う質問について

は、SGH の活動が始まったばかりの 2016 年 5 月とそれ以降を比べると、「できた」と答えた生徒が 18%から 30-40%前後に増加したことがわかります。また「どちらかといえばできた」を合わせると 8 割を超えたまま推移しています。創価高校生は SGH の活動を通してこうした能力を醸成できたと考えられます。

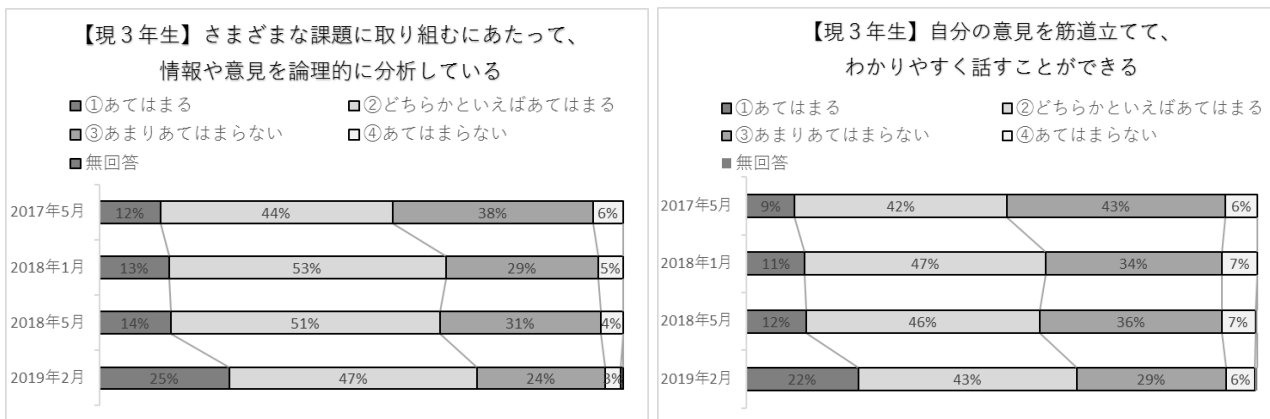
また、現 3 年生を見ると、85%を超える生徒が協働能力に自信をつけています。仲間との協力無くしては成り立たない、SGH の活動の中で伸ばした力です。



以下の質問への回答も、対話文化を基調とした本校らしい寛容性を反映して比較的高い傾向にあります。一方学年別にみると、1年生のうち傾聴や他者への理解に難しさを感じる生徒もいますが、3年生では95%の生徒が「あてはまる」「どちらかといえばあてはまる」と答えています。3年間のSGHプログラムを通し、GCPやグローバルセミナーなどで多様な意見に触れたことが増加の一因と考えられます。



次のグラフは、1年次からSGHの活動に取り組んできた現3年生の対話力・コミュニケーション能力と問題解決能力の2年間の推移です。特に3年次の「Final Project」に取り組んだあとの2019年2月のアンケート結果では、「自分の意見を筋道立てて、わかりやすく話すことができる」「さまざまな課題に取り組むにあたって、情報や意見を論理的に分析している」の問いで「あてはまる」と答えた生徒が10ポイント以上も増え、「Final Project」を通して3年間学んできた言語技術のスキルを更に高めることができたと考えられます。



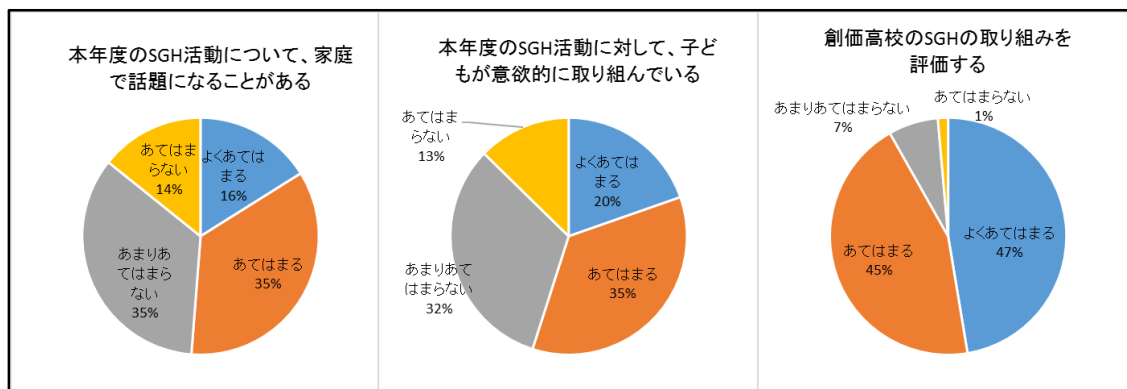
以上の結果から、「言語技術を磨き、地球規模課題の解決に取り組む能力を育成する」という本校のSGHプログラムへ取り組むことで、生徒たちは自身の成長を実感していると言えます。

以上のように3年間の取り組みを通して、海外への志向性と語学への意欲が向上し、論理性、協働性、寛容性を高めることができました。来年度以降も継続して取り組むと共に新カリキュラムへの導入を検討して参ります。

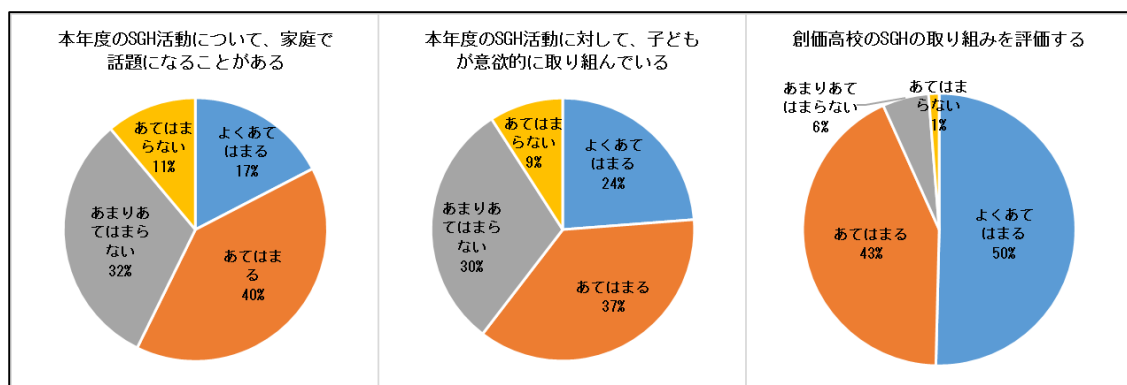
■ 保護者対象アンケート

2018年2月(回答者数 665名)、2019年2月(回答者数 639名)の保護者から得られたアンケートの回答をまとめ、以下のような結果が得られました。

【2018年2月結果】

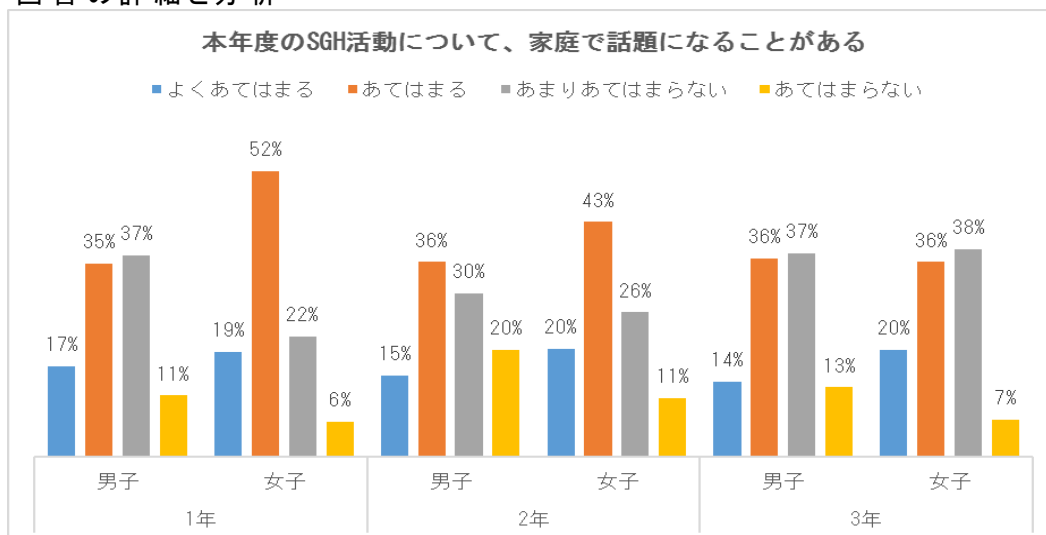


【2019年2月結果】

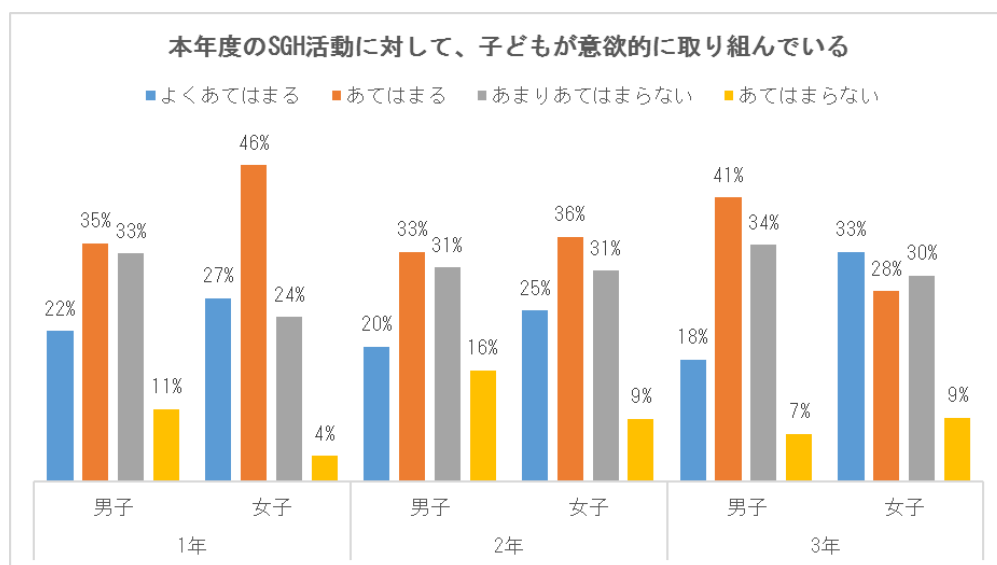


いずれの問いについても、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた保護者の割合が、2019年度にかけて増加する傾向がみられました。

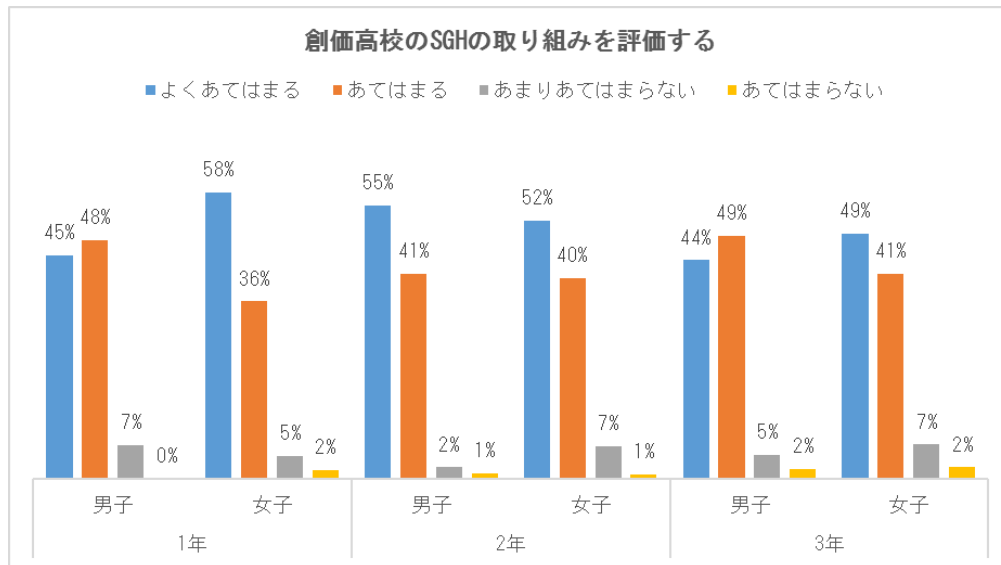
### ● 回答の詳細と分析



「SGH活動について、家庭で話題になることがある」との問いに対し、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた割合は、男女共に半数を超えました。学校生活についてあまり家で話さなくなる年齢ではありますが、半数を超える生徒が家庭でSGHのことを話題にしています。



「SGH活動について、子どもが意欲的に取り組んでいる」という問いに対し、もっとも良い評価となったのは1年生の女子です。73%の保護者が意欲的な取り組みを実感しています。1、2年生では男女での意欲の差があり、SGH活動を全校としてより活発にするカギが、男子生徒の取り組みにあると感じさせます。一方3年生では、「よくあてはまる」「あてはまる」と答えた割合は男女でほとんど変わりませんでした。3年生はファイナルプロジェクトに全員が取り組んでおり、その様子を参観した保護者が生徒の意欲を強く感じたのではないかと考えられます。



「SGH の取り組みを評価する」という問いに対しては、いずれの学年も 90%以上の保護者が「よくあてはまる」「あてはまる」と回答しました。保護者から見て、SGH の取り組みは総じて高く評価されています。今年度は GCP 企画を、保護者にも公開したことで、多くの保護者の理解が得られたことも一因と考えられます。

## B) 中間報告会・活動報告会・評価(声)

### SGH 中間報告会

■ 11月24日(土)13時30分 会場:創価高校 CALL 教室

#### 【式次第】

- |                      |                |
|----------------------|----------------|
| 一、校長挨拶               | 塩田校長           |
| 一、言語技術報告             | 恒岡教諭・永嶋教諭      |
| 一、GCP 報告             | 江添教諭           |
| 一、GLP 活動報告           | 生徒代表           |
| 一、ポスターセッション ※FW 実施報告 | 生徒代表           |
| 一、講評                 | 飯田順三 創価大学法学部教授 |
| 一、閉会宣言               | 中川学園長          |

#### ◆ 【講評】 飯田順三 創価大学法学部教授

大学で国際法を専門として教えている関係から、今日のポスターセッション、発表は大変興味深くきかせていただきました。

最近大学で、法学部だけでなく、経済学部の IP、国際教養学部など、いろんな学部の学生さんと、英語でやり取りする場面が多くなりました。振り返れば 5 年前、SGHA の時に私が出前授業したメンバーが、今大きく成長している姿をみるにつけて、我が子を見るような気持ちで感動しています。今日の報告を拝見しても、着実に地力をつけてきているなと感じます。外部の評価、結果もあるでしょうが、まず持って申し上げたいのは、自信をもってこのプログラムを推進していただきたいと思います。先生方、大変な時間を使われているかと思いますが、その分生徒たちの力は確実についてきていると確信していただきたいと思います。また、みなさんがテーマとしている、核廃絶問題や戦争といったものは、現

在直面している、かつ今後取り組まなければいけない重要な課題、地球規模課題であると同時に、自分の身近な問題であることを忘れないでください。みなさんが活躍する10年後、20年後に課題に確実に課題となる、今後の日本で避けられないのは、外国人の受け入れです。日本国内在住の外国人はここ数年で急速に増えてきていますし、今後も増加傾向になることが予想されます。このような時代にあって、グローバルな人材とはどのようなものか、改めて問い直したいと思います。

文科省でも、グローバル人材の定義は述べられていますが、時代によって変化する、定義しづらいものとされています。それは、時代、地域のバックグラウンドによって変わるものであるからだと思います。

その中で、地域のグローバル人材、人のグローバル人材というものがあると思います。例えばある地域では、団地の半数以上が外国人という状況です。団地で集まっても半数以上の方が外国人です。そういった中でどうコンセンサスをとるのか、そのような人たちとどのように交流するかが大きな課題となっています。これと同様の問題全国に広がる可能性があります。さらに、受け入れた外国人が定着し、日本人と婚姻する可能性もあります。両親が外国人でありながら、外国人でない人が増えていく。この問題は、皆さんの取り組みの延長線上に必ずある。このような時代に、先んじてこういったテーマについて議論していることは大変素晴らしいですし、高校生活で、落ち着いた学びをできるのは素晴らしいことだと思います。

言語技術の授業も、SDGsカードゲームも、大学で実施して広めたい気持ちでいっぱいです。アカデミックにクリアに伝えたいというのが、言語技術の重要なところですが、次に必要な部分は、自分の言いたいことをわかってもらう技術だろうと思います。はっきりと伝えているつもりだが、意味が不明。「言語明瞭、意味不明」と、大学のアンケートで書かれたことがありました。こういった部分は、言語技術の先にある、レトリックな部分ではないかと思います。そのベースとなる言語技術を高校時代に行なっているのは素晴らしいことです。

日本が急速にグローバル化している。国内での外国人交流においては、自分の意思を明瞭に伝えないといけないし、他者を思うマインドを持っていかないと感じます。創価高校のSGHの取り組みは、客観的な評価に落とし込んで、外部の方にもみていただく工夫があれば、さらに広まっていくでしょう。また、こういった教育を受けた人材を、創価大学に送り込んでいただいていることに心から感謝したいと思います。今日はありがとうございました。

#### ◆ アンケートより

##### 1 , 言語技術の取り組みについて

- ・他教科との連携もきっちりとされていて、学校全体としての取り組みはすばらしかった
- ・日本語と英語の往還トレーニングは、従来の国語教育と英語教育の課題をカバーする教育方法であると感じた

##### 2 , GCPの取り組み、生徒発表について

- ・SDGsカードゲームについて、大変興味深く感じた。本校でも取り入れられたらと思った
- ・SDGsカードゲームを他校の生徒と一緒にこなったり、また国連を通じて世界各国で共有したりすることも考えられるのではないか

##### 3 , GLPの取り組み、生徒発表について

- ・堂々と発表する姿に、学びに自身をもっている様子を感じ取った
- ・おのおのの取り組みをよくコンパクトにまとめていてとてもわかりやすかった

##### 4 , ポスターセッションについて

- ・ポスターが大変見やすく、発表の姿勢も素晴らしかった
- ・質問に対する返答が誠実で、よく熟考していることがわかった

## 5 , ファイナルプロジェクトと高大接続

- ・自分が何を体験し、何を考えたのかがよく伝わってきた。それだけ、内容について自発的に取り組んできたのだと感じた
- ・あれだけの内容について英語で堂々と発表する生徒のレベルの高さに驚いた

## SGH(最終)活動報告会

■ 2月16日(土)13時30分 会場:創価高校 栄冠ホール

### 【式次第】

- |                          |                |
|--------------------------|----------------|
| 一、校長挨拶                   | 塩田校長           |
| 一、2年生GCP報告               | 生徒代表・小松教諭      |
| 一、GCP・言語技術FP報告           | 恒岡教諭・宮尾教諭・江添教諭 |
| 一、GLP 活動報告               | 生徒代表・石野教諭      |
| ※GLP の取り組みと学校設定科目、出前授業報告 |                |
| 一、講評ならびに挨拶               | 村上清 岩手大学学長特別補佐 |
| 一、閉会宣言                   | 中川学園長          |

### ◆ 【講評】 村上清 岩手大学学長特別補

本日は素晴らしいプレゼンテーションありがとうございました。

午前中から各クラスのディベートやポスターセッション、SDGs ゲームをしている様子を見させていただきました。今年で3年目のSGH、初年度から創価高校にかかわっていますが、3年経って、ただ単に英語を学ぶだけではなく、世界の問題に対して学校全体で良く取り組んでいる様子が伝わってきます。また、世界の諸問題に対する意識が命の中に隅々まで入り込んでいる状況になっているのではないかと感じています。

言語技術とは、言い換えると global communication のスキルをつけていることにつながると思います。どのような場所でも、相手に話をどのように伝え、理解をさせ、納得をさせ、相手に行動を促せるかが、世界で必要なコミュニケーションスキルです。これを培っていくことが大切であると感じます。

GLP の授業は様々な手法を用いて問題分析を行っています。高校生のうちに学習や分析の手法を身につけ、実際に自分たちがそれを体験していくことが将来に向けても大切になってきます。

FPでも話が上がっていましたが、世界規模課題 SDGs に関して調べていく、SDGs を中心に物事を考えていくことは非常に重要なものの捉えかたです。企業も SDGs を中心に様々な取り組みをしています。高校生たちが SDGs に関する取り組みを展開していくことは非常に大切なことであり、これから大学や社会にでたときにも必要な力だと思えます。

サンフランシスコにあるローザパークス elementary school では日本語、スペイン語、英語で教育をしています。日本語の授業は日本語で行っていますが、習っている人に日本人はほとんどいません。どんな人種であっても同じ教育をしていく、一人も差別せず置き去りにしない、まさに SDGs が目指している教育をしている学校です。差別をなくす運動、それを学んでいくことも世界規模課題の解決には大切なことです。今回の創価高校のリサーチや活動の中にも同じような理念が根ざしているなと感じました。

最後の英語でのプレゼンも素晴らしかったです。nuclear deterrence と言われますが、核を取り巻く問題に対して世界は今まさに動いています。軍縮の話題として、ロボットによる兵器をどのようにしてなくしていくかも今話題になっていることの一つです。技術の発展はひとりでも進んでいってしまっていますが、その技術の発展が人を殺す開発につながってしまうこともあります。AI を駆使して作られた兵器や、電子的な攻撃をどのように抑えていくかも考える必要が出てきています。robotic weapons に関しても学んでもら

えたらと思います。

SGH の取り組みが 3 年経過して、一人ひとりが世界の問題を自分のものとしてよくとらえられるようになってきていると思います。一番大事なのは、教員が一生懸命頑張っているということです。その上で、生徒一人ひとりが、学園から卒業した後、SGH の取り組みで学んだ「ひとりで何でもやっていく力」「社会にでも挑戦していく力」をずっと持てるかどうかが問われています。一人ひとりが、サポートがなくても、新しい道を切り拓いていく、すなわち、「負けじ魂」を胸にどう自分の道を切り拓いていくかを、今後考えていく良いタイミングなのではないかと思っています。

これかれも、私自身も、皆さんと一緒に新しい人材を育てていきたいと思っています。この先の 2 年間も SGH としてぜひ頑張ってもらえたらと思います。本日はありがとうございました。

アンケートより

1 , 言語技術の取組みについて

- ・ GCP のプログラムと教科が連動している、教科横断型の取組みが出来ていることが見事だと感じた

2 , GCP の取組み、生徒発表について

(1 年 SDGs カードゲーム)

- ・ SDGs 実現のためには国際的な協力が必要であるということを楽しく学べる良い機会だと思った
- ・ 生徒がリーダーとなって全て進行しクラスも積極的に楽しんで取り組む姿に感銘を受けた

(2 年人権ディベート)

- ・ 全員がみな良い顔をして発表していたのが印象的だった
- ・ 生徒の姿を通して、物事に対して単純に感覚的に議論するのではなく、多方面に見て考え自分としての意見を持つことの大切さを実感しているようだった

(3 年ポスターセッション)

- ・ 全員参加のポスターセッションで生徒一人一人が物怖じせず英語で堂々と発表する姿に頼もしさを感じた
- ・ ポスターや発表内容の進歩を目の当たりにし感心した。世界的な問題をテーマに主体的に考えるとともに、意見を交え多様な視点での捉え方を身につけている取組みであると感じた。

## C) 運営指導委員会

第一回運営指導委員会

■ 日時:2018 年 11 月 24 日

■ 参加者:飯田 順三 創価大学法学部教授/佐藤 悟 外務省参与

■ 中西、中川、塩田、久保、谷(記録:今野)

――SGH というものも、看板というよりは、様々なことに挑戦できるつばさをいただいたようなきもちでいる。SGH もいよいよ折り返しとなった。これまで積み上げて来た学びの手法は続けていきたい。それを、今後学校にどのように残していくかが課題。

(飯田教授) 以前、GLP の授業で世界人権宣言について 4 回ほど行った。正直高校生と思って、かなり初歩的なことを用意していったら、レベルが高くておどろいた。高いレベルのものを教えていけばさらに吸収していけると実感した。プログラムに関係している部分、特に GLP については、高校で学んだ分を大学で単位にふりかえられるようにしたらどうか。そうすれば、生徒のモチベーションにもなる。早く単位を取っていけば、自由に使える時間がふえるはず。実際、今の創価大学で、GCP をやっている生徒



は、夜遅くまで授業をしているので、アルバイトも何もできない。シームレスに高大の教育をつなぐ何かをしなければいけないと思う。

――与えたものをどんどん吸収するというのはよく分かる。SGHの取り組みの中で知ったのは生徒の可能性の大きさ。ここまで高校生にできるのかと強く感じた。3年ほど前から、中学校、小学校でもALなど、授業の形態が変わってきた。本校のSGHの取り組みも探究的で、基本的に生徒主体。与える分だけ吸収するので、その中で学べる可能性の大きさが計り知れない。どこまでやっていてあげたらいいのか。

（飯田教授）やはり体力が違う。大学生でもこうはいかない。一週間海外に行って帰ってくると言うのは、大学生でもかなりつかれる。高校生だからできることかもしれない。

――海外から帰ってきた翌日の授業でプレゼンをやっていた生徒がいたことにびっくりした。

――今日の午前中はGCP企画だったが、GCPリーダーが説明し運営。教員は主導しない。生徒が、各クラスの特徴に合わせて運営を考えている。生徒主体の形で学び合いをさせている。

（飯田教授）上手いクラスは、YouTubeでSDGsのショートムービーを見せているクラスもあった。最終的な落とし方が、先生方のやり方とともに、生徒に任されている印象があった。

――生徒主体のやり方は、関西校から学んだ手法。初めて関西校でみたときはおどろいた

――教師よりも生徒のほうが、なんでも吸収できる。関西校はGRITという代表生徒を集めてやってもらうようにした。すると、生徒のやる気も吸収力も高く、そういった困難を乗り越えていく。周囲の生徒もそれをみているので、食いつきもちがうことを実感した。東京校では、1年生からリーダーになってやっているのに感心した。

（佐藤参与）今日、生徒さんのプレゼンをみて、大変よくできていると思ったが、頭だけで考えていて、現実との乖離している部分を感じた。そういった点についてコメントすることは可能かもしれない

――FWでは、現地で発表することなどもしているが、大事なことは、何を学んだか、よりも何を体験したか、ということ。実感する場を提供していただけるならありがたい。

――これまでも外交官の方にお話しいただく機会があり、世界に目を向ける機会となった。多くの先輩方も来てくださっている。そういったお話をしていただければありがたい。

――今日のプレゼンを聞いていても、向学心、吸収力がどこまでのびるのだろうと思った。生徒の可能性の大きさを考えたとき、高校教員の知識の範囲をこえる部分を学びたがっている。そういった部分を、外交官の方や大学教授といった外部の識者の方々の話をきけるチャンスをあたえれば、突き抜けた生徒が出てくるのでは。外部の識者の方を積極的に受け入れられるシステムがつくられればすごい学校になるのでは。

（飯田教授）高校と大学の学びの連続性を考えても非常に重要な点だろうと思う。ロースクールも5年構想になってきている。在学中に司法試験を受けられるようになる。そうなると、言語技術を受けていることを前提として授業できたら、論理的思考力をもった前提でカリキュラムを組むことができる。法学教育に最適なことを高校でやってくださっている。高校、大学、職業への連続性ができていく。文部科学省の第9回有識者会議でのコメントのなかに、教えている教員の先生方の変化をどう見るか、どう評価するかが大事との言葉があった。それをどう客観的に評価するのか、できたら良いのではないか。この指標を問うてくるのではないか。突き抜ける生徒が出てくることで、教員も変わらなくてはならなくなる。

どのように教員が変わったか、客観的評価が大事かと思う。

――構想調書に教員の変化を書かなければならなかったのに、英検2級以上の取得者数だけ入れた。これ以外に評価できるものがあればお示しいただければありがたい。

（飯田教授）参加する教員のモチベーション、教員が参加したことでどう意識が変わったかをもう少し丁寧にみていきたい。普段の授業にどう生かされているのかといったルーブリックを先生方にお配りして、定期的に処理し、統計処理してはどうか。そうすると、教える側・教えられる側の両方を評価していることがわかってよいのでは。先生方自身が、取り組みの成果をかんじられるルーブリックをつくれたら良いのでは。そうすると方向性もわかり、先生方もより積極的になるのでは。

――現在、各担任が、言語技術の授業に入っている。それを各教科に活かし、AL、ディスカッションなどでより高い質の教育活動ができるようにという方針。実際各教科のどのような場面で活用できたのか、事例を集めている。

（飯田教授）共有の場は設定されているのか

――アンケートで集約している段階。

全先生方が言語技術の授業を受けていることは画期的だと考えている。創価大学学士課程 佐藤ひろこ先生からも、こんなに先生方が協力的に、一緒に入って勉強されているのはすごいとのコメントをいただいた。

――現在、小学校・中学校で言語教育を行なっている。現在高校で行なっている授業を中学校に落とせる。そうすれば、高校ではより高度なことをできるのではないかと考えている。

中学校でも言語技術を教えられる生徒が4～5名いる。大きな流れになるだろう。

――技術的なことは中学までにおわらせて、高校では、文学、哲学、社会問題などについて議論できるようにしたい

（佐藤参与）英語でも行うのか

――中学校でもやっているが、母国語で獲得することがまず大事といわれているので、小学校では日本語でやって、中学校で英語でも同じ様にやっている。そういったことが、英検のライティングやリスニングに活用されている。この小中高の流れで言語運用能力を高め、日本語、ひいては英語でもディスカッションができるようにしていきたい。

――英語のライティングも変わってきている。英語の作文についてはネイティブにもチェックしてもらっている。今までは日本語でもパラグラフをかけない、パラグラフの構造も知らなかった。現在は、日本語でパラグラフの書き方を徹底的にやっているのだから、そこからTSやCSなどの構造を、気をつけて書けるようになったとネイティブが話している。英語ができないのか、論理的に考えられないのかが、明確に分けて指導できるようになったというフィードバックがきている。

（佐藤参与）大変にすばらしい。GLP,GCPに取り組んだ結果、進路に結びついた実績はあるのか

――GLP4年目になるが、中心に核問題をすえている。核関係のことを突破口に、いろんなことを学んでいる生徒も多い。現在、SUA中心に国内外の学校に進学している。

――GLPは先駆的な授業を行い、学校全体に広めることが使命だった。言語技術も、GLPで先に実施し、その後カリキュラムに取り入れた流れがある。現在の流れについてはどうか。

――現在は、核を軸にしながら、多面的な内容を研究、発表している。

基礎的なものを1学期に学んだ。被爆地でどのような教育が行われているかをフィールドワーク調査した上で、12月に中学生に授業を行ってもらう予定。もっとも学習効果が高いのは「人に教えること」を実践するため、自分たちが学んだことをまとめ、ALの手法も取り入れながら授業を組み立てている段

階。GLP は 2、3 年生希望者の選抜授業。年によって学年バランスは違うが、異学年が混ざること、互いに刺激があり魅力的だと感じる。

（飯田教授）テーマが核兵器という、日本の立場からすると大変に難しい課題。さまざまな国の立場など抱えるジレンマについて考えさせるとしては良いテーマだと思うが、どこまでをゴールに設定するかが難しい。

――実は今日ポスターセッションをやったのは FW 参加者で、夏に 3 回程度単発で勉強しただけの生徒たちだった。GLP 生は 1 学期間を通して学習しているので、持っている情報量の差は歴然。この情報量の格差をどう埋めるかが課題。

（飯田教授）カリフォルニア FW のポスターをみていると、理想を追い求めている様な印象を受けた。逆に、もっと現実を知らせてあげれば、生徒たちもさらに高いところまで昇華して考えるだろう。現実を伝えていくことも、難しいが、大事なのでは。

――GLP をやっていて面白いのは、生徒たちも最初は核廃絶ありきで始まる。それが 2-3 ヶ月経つと、核抑止論っていいんじゃないかという議論になる。そこからなぜ核兵器はだめなのか、という思索を深めていくのが恒例となっている。その部分では狙い通りだと感じている。

ただ、この内容を FW といった短期的な学習させ、発表させようとする、知識不足、現実をしらない、英語力不足等で苦しくなってしまう子がいる。それをどこから解いていくか、グローバルな問題をテーマとして設定するときの難しさを感じている。

（飯田教授）進路の話で行くと、GLP1 期生の子では看護学部に行った子もいる。世界にいくだけでなく、自分の適性を考える思考力を身につけていると感じる。自分で考え、興味をみつける能力が高くなっている。

――進路でも、SUA だけを考えていた生徒が、核廃絶問題について学ぶ中で、「この国を本当に変えるためにはどうしたらいいのか」と本気で悩み、東京大学に進学した生徒もいる。また、FW で海外大学の生徒、教授と交流する中で多様なオプションを知ることができ、「なぜ SUA がいいのか」を客観的に考え直す機会となっている。

――GCP の全体企画担当の教員からも一言お願いします。

――学期に 2 回程度実施している。生徒主体のため、その程度が限界。いろんなテーマでディスカッションしたり、ロールプレイをしたりなどしている。3 年生は模擬国連を中心に実施している。

（佐藤先生）SDGs カードゲームを、国連を通じて、世界のさまざまな学校でやってもらってはどうか。さまざまな場面で活用してもらえと思う。

（飯田教授）第二回の有識者会議でも「SGH で大事なものは外に開かれていくことだ」とある。たとえば他校や企業と連携して、SDGs カードゲームを外に展開するのは手ではないか。クローズだった高校が外に開いていくことも一つの成果になるのでは。

――今、地元の小中学校にも広めていくことができないか、市の教育委員会等に働きかけている。まずは一貫校内で連携し、より良い形にしていきたい。

創価大学では、外部への発信とともに、海外大学との連携はどのように進められてきたのか。

（飯田教授）草創期だと、基本は、教職員の個人的な人脈で広がってきた。各学部にも主導権を渡して広がっていった。しかし最近は広げすぎて、収集がつかなくなってきた。現在は、グローバルコアセンターに集約し、ここを通さないと実施できなくなっている。広げた人脈を整理整頓している現状。

――相互のメリットがないと成り立たないのでは。創価大学の提供しているメリットは何か。

（飯田教授）授業料免除、宿泊費免除など、ギブアンドテイクの関係で行なっている。ただ、そういった関係が成立していないところも多い。実際、アメリカにいきたい大学生は多いが、あちらから来た生徒が少ないなどの理由でギブアンドテイクがうまく成立せず、受け入れてくれる大学がすくないのが実情。もしやるなら、生徒をうけいれるということは、こちらからも人を出せるということ。高校としては可能なのか。

――やっていきたい気持ちはやまやまだが、なかなか難しい。外に開いていくという道は、生徒にとってはプラスだろう。こちらのかかえるリスクと、創価学園のもつ特殊性が一般の海外の生徒にどう受け入れられるかが心配。

（飯田教授）ゼミにも中国からの留学生が多くいるが、彼らは静かに聞いている。ただ、あまりこちら側の立場で話すと引いてしまうだろうから、中立の立場で話すことを心がけている。大学は学問の自由が保障されているのである程度自由に話すことができるが、高校はカリキュラムがあり、ある程度話すことのできる制限がある難しさがある。一方で異質なものをうけいれることはリスクが大きいですが、18歳くらいになると思考ができるので、かなり良い刺激になっているだろう。難しい問題も乗り越えられる。

――関西創価校の運営指導委員会で、「異質なものと交わせることの重要性」が話題となった。高校という画一的な世界の中で、多様な価値観を持つ生徒同士が交流することで現実を見つめ、自分らしさをどう構築していくかが重要だろう。もうひとつは、外国のメンバーと出会った時の語学の問題がある。実際、海外から来たメンバーはイベント型では対応できるだろうが、日常に入った時に、英語で他教科の授業を受けられるのか。それをフォローするだけの学校の力がないので、そこが躊躇するところ。うけいれた生徒をどうケアするのか、システム化していかないといけない。

――本来なら、今日のGCP企画に留学生がいるだけでさまざまな考え方が出てくるはず。生徒にとってもきっと大きな学びになるだろう。別科生にきてもらうという企画は今もある。

（飯田教授）別科生で1年間やっている学生はなんとか日本語の授業についていけている。バックグラウンドで日本語が出来ている学生をターゲットにしていくのも手では。小学校から日本語をやっている国もある。

――中国、上海の甘泉外国語学校との交流も行っている。日本語教育を重視してやっているのだから、受け入れることはできるだろうが、今度はこちらから生徒を送ることは課題がある。異質と交わる、というのは勇気がいること。

――関西創価校での留学生交流はどのようになっているか。

――留学生40名程度来てもらう。留学生に母国のプレゼンテーションをしたあと、生徒たちが学んだことをプレゼンする。その上でひとつのテーマについて英語でディスカッションする。高校1年生の希望者が参加する。最初中学校1年生で簡単な交流をはじめた。その後、小学校、高校もやり始めた。今は2日間がかりで留学生に来てもらってやっている。その中で生徒も大きく変わって来た。留学生交流をやった瞬間は、英語学習への意識が高まるが、忙しい中でだんだん下がってってしまう。そのタイミングでカンフル剤を入れられればと思っている。

――今年、初めて別科生交流を2年生が学年全体で実施。SDGsカードゲームや模擬国連を一緒に実施できたら面白いのではないかと思った。

## 第二回運営指導委員会

■ 日時:2019年2月16日

- 参加者：村上 清 岩手大学学長特別補佐／佐藤 悟 外務省参与／飯田 順  
三 創大法学部教授
- 狩野、中川、塩田、久保、谷、佐々木、石野、永嶋、江添（記録：吉澤）

（飯田教授）中間評価では、プログラムの連続性、評価をどのように客観的に測るのかの2点が課題にあがっていた。文科省が見ている視点に、①学習させた評価をどのように見える化していくか、②学習後どれだけの成果が上がっているかの2点があげられる。探求型の学習は、どの視点で評価をすれば良いかわかりづらいのが現状であり、英検などの資格試験の合格者数などを評価の基準として提出している状況がある。生徒がつけた力をどう評価するか、探求型学習の連続性をどう持たせるかを課題と考え、本日のGCP企画を振り返った時、国際問題の探究学習をテーマにしている一方で2年次の人権ディベートの論題が国内の実名報道について取り上げているところに、テーマの一貫性が見えにくいのではないかと。

――探求に関しては、今後は探求科の設定を通して、普通の授業の中で行っていきたいと思っている。

（飯田教授）創価高校のSGHのユニークさはどこにあるのか。

（村上指導委員）広島や長崎を軸にした平和学の追求だとありきたりになってしまう感が否めない。一方で核兵器廃絶のテーマは一般的な議論に埋まりかねない。

（飯田教授）はっきり申し上げてしまうと今のプログラムにユニークさを感じられない。ハイブリッド型の国際法など、核兵器の問題は新しい段階に入っている。現状、正当論・人道論で回答しているところを見るとgeneralになっていると言わざるを得ない。創価高校のユニークさをどこにもっていくかというのは今後の課題になるのでは。

――GLP生は核廃絶について詳しく学んだプロセスがあり、発表にあったような結論にたどり着いている。今までの「学び」の問題は、このプロセス自体を学んでこれなかったこと。GLPの取り組みでは、核廃絶までのプロセスを詳しく学べたことがよかったと思っている。

（佐藤参与）言語技術をもう少し拡大して、村上指導委員の講評にもあったとおり、Global Communication Skillの学習を取りいれたらどうか。（案：GCP、GLP、Global Communication Skillで3つのGなど）言語技術とは論理的にどう説得するかの視点のみに偏る。たとえば、世の中ではイスラム原理主義などいくら論理的な話をして話を通じない人たちもいる。違った価値観をもった人とどのように対話をしていくかのスキルが大切になってくる。Global Communication Skillの視点で言語技術を発展させていければ良いのではないかと。たとえば、創価大学に留学している異文化バックグラウンドを持つ人たちとのコミュニケーションを経験する場面を作ってあげられたら良いのでは。

（村上指導委員）アメリカ文化的なコミュニケーションスタイルや中東やヨーロッパのスタイルなど、コミュニケーションにも様々な形態がある。それぞれの文化によってコミュニケーションのスキルは違ってくる。多種多様な文化にどう対応するか、適応ができるかどうか。国際社会や国連でもその力が問われている。どうnegotiateしていくかを学んでいかなければいけない。

（佐藤参与）多様性が今世界ではテーマになっている。多様性の中でいかにコミュニケーションをとっていくかが重要である。

（村上指導委員）言語技術をGlobal Communication Skillと名称を変え、多種多様な文化を知ること、文化の違いの探求することにも視点をおいていければ、経済格差の学習になどにも持って行くことができ、一貫性をもった流れもできるのでは。異文化の違いを学び、異文化交流の摩擦を乗り越えた

社会をどうつくるのか、などの探究性があっても良いのではと感じる。

（飯田教授）言語技術という単語は残しても良いのではと思う。コミュニケーションは伝達能力であるが、言葉は技術であるという発想がある。技術的な側面での言語なのだということと推していくことは、特色があるのでは。

（村上指導委員）言語のスキルを重要視していくことは大切。コミュニケーションをとるための手段である言語というのは変わらない。次の段階として、その「言語」を手段としてどう展開していくかというのを考えたい。異質なものに会ったときに、言語技術をもとにどのように対応できるかが大切。

――技術はあっても問いを深めるクリティカルに考え能力がないと厳しい。技術としての問いの立て方の力も必要。海外の global communication において言語と論理的思考以外に大切なことはなにか？

（佐藤参与）異文化理解、人間力を磨くこと、忍耐強く聞く力が重要。

（村上指導委員）聴く力を培うことは大切。聞いてあげることはどの国でも大切。つまり相手から考えを引き出してあげる力を身につけたい。

（飯田教授）mono-culture 的な日本文化であるので、異質な違った価値観に対して同調してしまう、反論できない。文化の違いをどう具体的な場面で生徒に理解させるか。もしイスラムだったらどうしますか、など、生徒に「違い」に気づかせるアプローチが必要。

――違いに対する免疫、違いを経験することを高校時代にできたら良いと思う。

（飯田教授）通信教育を例にあげると、世代の中での違いを感じる場面もたくさんある。スクーリングで高校生を入れる先行単位認定が可能か？

――通教生向けに生徒が発表できる機会を設けたら良い交流になるのでは

（村上指導委員）創価大学の GCP 最終プレゼン、大学生のプレゼンの中にも高校生がはいっていかれば良いなと感じた。高校生の部という形で大学生と共に学ぶ機会も作っていかれたら、可能性を探っていかれたらと思う。

――SPACe で学園生が学びの発信をしていかれたらという構想は当初からあった。

（村上指導委員）それを実行できたら、お互いの刺激になるのではないか、高大接続にもつながる。少しでも純粋培養ではない形、環境にいさせてあげることが大事。もう少し外の風を入れて、そこに対応できるくらいの力をつけることが大事。

――ポスト SGH を考えた時、海外との交流が条件にあるが、学園にとっては課題となっている。

（飯田教授）海外との交流に関しては慎重にいかないといけない。海外交流は青年期にとってはいろんな意味で大きな刺激になっていく。

（村上指導委員）もう少し flexible な考えを取り入れた方が良い。高校生にいろんな経験を積ませたほうがもっと大きく成長できると思う。

――GCP で創価大学からの留学生との交流を行った。皆、平和を希求している中で、同質の集まりの中での学びの深まりに課題を感じることもある。どうしたら異質なものと交流できるのか。場のセッティングで高校生にできることのアイディアがあれば。

（佐藤参与）自分がある条件におかれた場合どうなるのだろうと想像することは大切。SDGs の課題をたくさん抱えた国をピックアップして、あなたがその国の高校生だとしたらどう行動しますか？などの課題設定を行ってみても面白いのでは。各大使館を訪ねて話を聞いたりすることもできるのでは。若手の外交官に話をしてみるなども良い。3～4 人でひとつの国を研究して大使館を訪ねて交流してみるなど。

――実際にわれわれの考えを大使館にぶつけてくるのも高校生として大切なのでは。

（飯田教授）international school との交流もできないか。地域密着型の中心的な存在になるのでは。所沢やICUなどのinternational school があげられると思う。

――言葉は技術なのだという視点は良いのではないかという話があったが、技術獲得が目的化してはいけない、いかに活用していくかというところが重要だと感じている。創価高校では既存の言語技術のプログラムを学校カリキュラムを考慮して再編しているが、技術の精選やプログラムの再編が必要だと感じている。異質なものと対話となったときにどのように言語技術で対応していくかを考えたい。小中との連携を通して、高校では技術を生かしたディスカッションなどに力をいれていきたい。学園生内でも、いろんな意見が飛び交うディスカッションなどを通じた経験をもっと積めたらと感じている。

（佐藤参与）目標はコミュニケーション。その中にはロジックもあればエモーションもある。ロジカルにものをいうのはコミュニケーションの基本なので大切にしていかれたら良いのでは。

（村上指導委員）まずはロジック、その上で応用として違うコミュニケーションの取り方があるのだよということを読んでいかれたらよいのでは。異文化コミュニケーションは実体験の中で身につく。まずはベース、話し方の技術をしっかり覚える。本来は小さい頃から学んでいくべき。その上で、高校生での展開として違うバックグラウンドを持つ人とコミュニケーションをとらせることから学びがあるのでは。

（佐藤参与）各種言語構造によって考え方やコミュニケーション技術の違いがある。

――言語技術の先にある何かを身につけさせたい。技術は使えることに意味がある。言語技術を使えるような場面を設定していかれたら良いと感じているが、高校の授業の時間内ですべてを行うのは難しい。逆算して言語教育に早期から取り組んでいくことが必要だと感じる。学園での対話は、決まった答えの中でのみんなの意見交換という側面がある。その場でも言語技術を活用しながら、よりレベルの高いコミュニケーションを図れる場が作れたら良いなと思う。

（村上指導委員）外の世界の人と話すことで自分の力を試すことができるのでは。一般社会のなかにはいっていくことが大事。いろんな社会の同じ世代のひとと話したときに自分を再認識できるだろう。

（飯田教授）グローバル人材とは何か。最終的に決議をしないといけない場面で何かを作り上げられる力をもっている人のこと。具体的な解答をまで、身近なテーマでも、最終的な案を提示できる会話の流れを鍛えられたら良い。「書く」に関しては司法試験の解答などの完成系の文章を見せることでロジックの通った文章はどうなっているのかを学することができるのでは。

# 10. 関係資料

## ① 2018年度カリキュラム表

教科	科目	標準単位	1年 (51期)	2年(50期)			3年(49期)		
				総合	文系	理系	総合	文系	理系
国語	国語総合	4	4						
	国語表現	3							
	現代文A	2							
	現代文B	4		3	2	2	3	2	2
	古典A	2							
地理歴史	古典B	4		2	3	3	2	3	2
	世界史A	2							
	世界史B	4		5	4				
	日本史A	2							
	日本史B	4				3		4	3 ■
公民	地理A	2							
	地理B	4	3						3 ■
	現代社会	2					2		
数学	倫理	2						2	2
	政治・経済	2						2	2
	数学I	3	3						
	数学II	4		4	4	4		2	
	数学III	5							7
理科	数学A	2	2						
	数学B	2			3	3	3		
	数学活用	2							
	科学と人間生活	2							
	物理基礎	2				2	2		
	物理	4				3 ▲			3 △
	化学基礎	2	2						
	化学	4				2			4
芸術	生物基礎	2	2						
	生物	4				3 ▲			3 △
	地学基礎	2		2	2				
	地学	4							
保健	理科課題研究	1							
	体育	7~8	2	2	2	2	3	3	3
芸術	保健	2	1	1	1	1			
	音楽I	2	2 ●						
	音楽II	2							
	音楽III	2							
	美術I	2	2 ●						
	美術II	2							
	美術III	2							
	工芸I	2							
	工芸II	2							
外国語	工芸III	2							
	書道I	2	2 ●						
	書道II	2							
	書道III	2							
家庭	コミュニケーション基礎	2							
	コミュニケーション英語I	3	3						
	コミュニケーション英語II	4		4	4	4			
	コミュニケーション英語III	4					4	4	4
	英語表現I	2	2						
情報	英語表現II	4		2	2	2	2	2	2
	英語会話	2							
	家庭基礎	2		2	2	2			
総合	家庭総合	4							
	生活デザイン	4							
学校設定	社会と情報	2	2						
	情報の科学	2							
計	総合的な学習	3-6	1	1	1	1	1	1	1
LHRL	学校設定科目		1~5	2~6	0~4	0~4	4~8	8~10	0~4
	計		30~34	30~34	33~37	33~37	30~34	32~34	32~36
	L H R L		3	1	1	1	1	1	1

(注) ●、▲、△、■は各々から1科目を選択することを示す。  
 ※2年次理系物理選択者は物理基礎が終了してから物理を履修する。  
 国語基礎演習、国語表現、国語演習、日本文学、外国文学、中国文学、世界史演習  
 国際理解、環境と開発、平和と人権、宇宙と生命、総合数学、基礎数学、文系数学、総合解析  
 総合代数、総合幾何、情報基礎、教養数学、現代物理、現代生物、現代地学、理科実習  
 総合英語、リーディング応用、英語演習、中級英語、上級英語、リスニング中級、リスニング上級  
 スピーキング中級、スピーキング上級、総合体育、生活と文化  
 総合音楽、総合書道、総合美術、上級音楽、上級書道、上級美術  
 公民演習、地歴演習、理科基礎演習  
 言語表現Ⅰ、言語表現Ⅱ、言語表現Ⅲ  
 世界市民探求Ⅰ、世界市民探求Ⅱ、世界市民探求Ⅲ  
 ※3年文系の世界市民探求Ⅲは2単位までとする。



② 目標設定シート

ふりがな	がっこうほうじんそうかがくえん そうかこうとうがっこう	指定期間	28～32
学校名	学校法人創価学園 創価高等学校		

平成28年度指定スーパーグローバルハイスクール 目標設定シート

1. 本構想において実現する成果目標の設定（アウトカム）								
	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	目標値(32年度)
自主的に社会貢献活動や自己研鑽活動に取り組む生徒数								
a	SGH対象生徒:		296人	322人	694人	人	人	700人
	SGH対象生徒以外:		250人	250人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 本校においては、他者への貢献に喜びを見いだすという価値観がある。このため自主的な地域清掃や、ボランティア活動への意識は高い。そこで自主的な社会奉仕ができる生徒を6年間で一層拡大していきたい。								
自主的に留学又は海外研修に行く生徒数								
b	SGH対象生徒:		28人	47人	50人	人	人	70人
	SGH対象生徒以外:		25人	25人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在、学校が主催しているマレーシア公開大学への短期研修をはじめ、SGHA事業への取り組みによって海外への意識が向上している。さらに、グローバルな視野を広げるために自らすすんで海外での研修体験を希望する生徒が増加することが十分期待できる。								
将来留学したり、仕事で国際的に活躍したいと考える生徒の割合								
c	SGH対象生徒:		61%	61%	60%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:		25%	30%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 元来海外志向の強い生徒が多いが、SGHAのプログラムを通じ、より具体的な進路設計が行われ、将来海外に進出したいと考える生徒が増加している。また70%の生徒が進学する創価大学はスーパーグローバルユニバーシティであり、大学在学中の留学経験者が増加し、その後の海外進出者数も増加すると見込まれる。								
公的機関から表彰された生徒数、又はグローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における入賞者数								
d	SGH対象生徒:		40人	54人	36人	人	人	40人
	SGH対象生徒以外:		15人	15人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在は日本語ディベート、英語ディベートが中心であるが、今後文系・理系の各種オリンピック、さらには各種言語のスピーチコンテスト・国連などで公募されている論文に積極的に参加することを奨励して拡大を図る。								
卒業時における生徒の4技能の総合的な英語力としてCEFRのB1～B2レベルの生徒の割合								
e	SGH対象生徒:		45%	47%	68%	%	%	80%
	SGH対象生徒以外:		25%	25%	%	%	%	%
目標設定の考え方: 3年生355人に対して、現在100名程度の該当生徒がおり、今後英検に加えてTOEIC、TOEFL、SATを受験することを積極的に推進し、英語力の向上を目指す。								
英語以外の外国語に取り組む生徒数								
f	SGH対象生徒:		87人	89人	101人	人	人	100人
	SGH対象生徒以外:		80人	80人	人	人	人	人
目標設定の考え方: 現在3年生対象にスペイン語、ドイツ語、ハンガール、中国語、フランス語、ロシア語の授業を選択科目として提供している。世界への興味が具体化するにつれて、英語以外の言語に対する関心がさらに高まると考えられる。								

2. グローバル・リーダーを育成する高校としての活動指標（アウトプット）								
	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	目標値(32年度)
課題研究に関する国外の研修参加者数								
a	6人	8人	18人	32人	24人	人	人	40人
目標設定の考え方: SGHプログラムの効果により、国外の研修に参加する生徒数は増加すると思われる。学校責任の下で行われるプログラムとして現在マレーシア公開大学への研修があるが、今後もアメリカ・カリフォルニア研修をはじめ、さらに拡大していく予定である。								
課題研究に関する国内の研修参加者数								
b	100人	100人	110人	130人	192人	人	人	500人
目標設定の考え方: SGHAで今年度実施したフィールドワークを更に拡大・増強し、創価大学をはじめ近隣大学や博物館等の研究機関との連携をすすめ、研修にも参加することを推奨していく。								
課題研究に関する連携を行う海外大学・高校等の数								
c	2校	3校	5校	6校	8校	校	校	8校
目標設定の考え方: 現在、本校と連携を行っている海外大学は、アメリカ創価大学とマレーシア公開大学の2大学であるが、今年度インド・ブルーベルインターナショナル高校と連携を開始した。今後は、これまでも交流実績のある中国、韓国等の国際交流連携校を増やしていく予定である。								
課題研究に関して大学教員及び学生等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
d	100人	125人	142人	140人	294人	人	人	300人
目標設定の考え方: 学校設定科目「平和と人権」等で大学教員による講義が提供されている。また、イングリッシュキャンプでは多くの留学生と交流している。今後はスカイプを活用しての英語による連続講座等、外部人材参画の機会を増やす。								
課題研究に関して企業又は国際機関等の外部人材が参画した延べ回数(人数×回数)								
e	50人	60人	76人	89人	85人	人	人	100人
目標設定の考え方: 年に1度のキャリアガイダンスおよび不定期に開催されるOBOG懇談会により現在50名程度の参加がある。今年はSGHAの取り組みの一つとして映像制作のために外部講師を招聘した。今後は、企業で活躍する卒業生などによるガイダンスおよび講演を定期的に行うなど、拡大・拡充を進める。								
グローバルな社会又はビジネス課題に関する公益性の高い国内外の大会における参加者数								
f	150人	150人	155人	196人	250人	人	人	200人
目標設定の考え方: 現在は日本語ディベート、英語ディベートが中心に、今後文系・理系の各種オリンピック、さらには各種言語のスピーチコンテスト・国連などに公募されている論文に積極的に参加していく。								
帰国・外国人生徒の受入れ者数(留学生も含む。)								
g	2人	3人	7人	4人	9人	人	人	12人
目標設定の考え方: 本校として、帰国・外国人生徒の受け入れを昨年より募集要項に明記した。これにより毎年数名程度の海外現地校出身者が入学している。SGHプログラムの導入に伴い、現地校に滞在経験のある子女の受験者数がさらに増加することが期待できる。								
先進校としての研究発表回数								
h	回	1回	3回	4回	6回	回	回	3回
目標設定の考え方: 年2回を基本として、SGHプログラムの研究成果を順次発表していく。								
外国語によるホームページの整備状況								
○整備されている △一部整備されている ×整備されていない								
i		○	△	△	△			○
目標設定の考え方: 外国語によるホームページは、英語・韓国語・中国語で整備されており、日本語版と共に随時更新している。								
CEFRのB1～B2レベルの教職員の割合								
j	25%	25%	42%	42%	45%	%	%	70%
目標設定の考え方: 自己研鑽の意識の高い教員が多く、グローバル人材育成のための環境整備を目指し、学校として語学検定の受検を強く推進し資金面でも補助する制度を開始した。								

<調査の概要について>

1. 生徒を対象とした調査について

	26年度	27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度
全校生徒数(人)	1,077	1,063	1,056	1,047	1,046		
SGH対象生徒数			1,056	1,047	1,046		
SGH対象外生徒数			0	0	0	0	0



# SOKA GAKUEN TIMES

Special Edition

March 2019

## Nuclear threat class by students for students

創価学園初の試み:高校生から中学生へ核廃絶に向けての出前授業

On Dec. 20, the Global Leaders Program (GLP) members taught a class about nuclear issues to first year students at Soka Junior High School. GLP members had prepared for the class for five months. It was the first time for GLP to have a class about abolition of nuclear weapons.

The purpose of this class was to enable students to logically explain why nuclear weapons are harmful and why they should not hold or use nuclear weapons by learning about the limit of nuclear deterrence theory and the inhumanity of nuclear weapons empirically.

GLP consists of 16 members selected from second- and third-year students of the high school. Every Tuesday and Friday after school, they learn about nuclear abolition for about two hours.

They taught juniors the situation surrounding nuclear weap-

ons by using the video GLP made. It showed opinions on nuclear deterrence theory of both nuclear-holding states and non-nuclear holding states. Additionally, they did a simulation game, which was based on the incident that took place between the Soviet Union and the U.S. in the past. The GLP then told students the danger of nuclear weapons, giving five questions about damages that nuclear weapons truly cause. At the end of the class, they asked the students, "What can we do?" The aim of this class was for participants to think what they can do to solve nuclear issues by themselves. However, the lesson didn't yield direct solutions, and thus each student would need to analyze it. GLP members also want to seek out strategies and contributions to the abolition of nuclear weapons.



SOKA GAKUEN PHOTO

Junior high school students exchanged opinions on the reason why North Korea possesses nuclear weapons with fact sheets on the country's internal affairs, military affairs and diplomacy.

After the class, one of the GLP members said, "Through this experience, I realized that I need to study more about not only nuclear issues, but also various international problems." Another GLP student mentioned that at first, this effort was to make the content understandable for junior high school students, but at the same time he could organize his knowledge of nuclear issues.

Soka Gakuen Times also asked junior high school students about

their impressions of the class.

One of them said, "These issues seemed very difficult to learn. However, today's class was well arranged, so I was able to think about these issues deeply." Additionally, some participants mentioned that this class has changed their mind. "Before taking this class, I was thinking that nuclear deterrence is reliable. But through this class, I realized the vulnerability that nuclear deterrence possesses."

## Field work broadens students' international horizons

世界に視野を広げるフィールドワーク

This year, Soka Senior High School held fieldworks in five locations — Iwate, Hiroshima, Nagasaki, Okinawa and California — as part of the Super Global High School activities, an educational project of the government.

Twelve students took part in the California fieldwork. Masayoshi Ishino, the teacher in charge of the California field work at the school, said, "I wanted students to interact with foreign students attending top colleges and high schools in California."

During the California fieldwork, the group visited prestigious universities and Soka University of America (SUA), our sister school. They observed the universities, attended lectures by the professors there and had dis-

cussions with Daniel Habuki, the president of SUA. They also visited The Broad museum, the J. Paul Getty Museum and Santa Monica beach to rest from the long journey. Among these activities, the exchange with local high school and university students led to students' growth.

They researched nuclear abo-



SOKA GAKUEN PHOTO

The California fieldwork participants visited Soka University of America.

lition and poverty issues, and summarized the findings that they found out beforehand. They then conducted poster presentations at Dr. Olga Mohan High School, University of California Irvine and SUA, discussing solutions of those issues with local students. Miho Kanda, who participated in the fieldwork, said, "I was surprised that local students were brilliant and had a good foundation of knowledge even though they were the same age as ours." Soka Senior High School students seemed impressed by local

students' academic eagerness. Through these discussions, they were able to look at the issues with new points of view.

The students were keenly aware of the difficulties of expression using English and learned their own weaknesses. However, as well as improving English proficiency, they were able to experience the pleasure of communicating in English and cultivated a multilateral perspective on global issues. They found something that would be their strengths and recognized the world as their own stage. While further extending their strengths, they are determined to make their senior high school lives more meaningful and overcome their own weaknesses.

## UNIQUE ACTIVITIES

## With the soul in one kick 強化クラブ・サッカー部の強さの秘訣

The soccer club reached the best eight at the tournament joined by high school students in Tokyo held in November. Soka Senior High School supports the club to secure enough practice time for the 31 members to keep practicing hard every day.

Let's take a closer look at the key strengths of Soka Senior High School soccer club. Firstly, practice time is longer than other clubs. While other clubs practice from 4 p.m. to 5:30 p.m. on weekdays and 3 hours on weekends, the soccer club practices from 4 p.m. to 8 p.m. on weekdays and from 8 a.m. to 7 p.m. on weekends. They improve their physical and mental strength by practicing for a long time. Also, it has a training camp during summer and winter vacations every year. The club members stay at school for a long time. The

camp was 14 days long during the last winter vacation. During this time, they can develop team spirit by living under the same roof.

One of the most important projects for the soccer club is team building. The purpose of the project is to solidify the unity and boost morale among teammates. Specifically, they have a one-to-one dialogue and write a letter to their parents. There are factors that help them grow, even aside from club activity time.

Support from the assist members makes the club stronger, too. There are two assist members who are doing all they can to support the team by preparing practice menus, analyzing the team, preparing for tournaments, planning for cheering in games and so on. With such support, the bonds within the

club are deepened and the players as well as other members can join together to face the tournament. The players can also concentrate on practice with peace of mind.

Haruki Nakajima, the captain of the club said, "We feel happy when the teammates get a goal and we win a football game." In particular, they feel greater happiness in the sense of unity at the time of victory. Club members who do not sit on a bench as registered team members are also happy to

cheer for players on the field. Dai Sato, one of the club's assist members, said that when their teammates get a goal, he feels that he contributed and his efforts were rewarded, and he was filled with happiness.

The soccer club said that they want to make their club stronger. In a strong club, all the members work hard to play soccer and everybody can enjoy the sport. They cherish their belief "all the members play."

Don't take your eyes off their future success.



Supporters cheer for teammates with all their might.

SOKA GAKUEN PHOTO

## Schola plays essential role in Soka students' learning

スコラは学園生の身近な存在

Soka Senior High School distributes Schola to every student. Schola is the name of a personal planner made by Noltly Planners Co. Soka Gakuen Times asked a teacher and some students in order to understand what the purpose of this project is and how it has changed students' daily lives. Kensaku Tani, vice principal of Soka Senior High School,

said, "We (school teachers) want each student to think deeply about effective time usage. Training their independence and time managing skills is the most important purpose. Time is equal for everyone. How we use our time relates directly to how we live our lives." He also said, "We (committee of promoting career education) started to collaborate

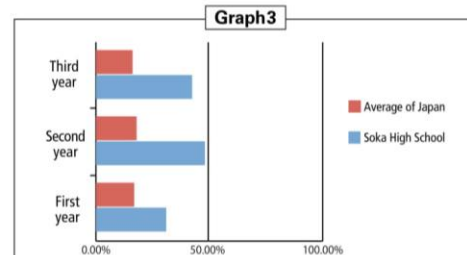
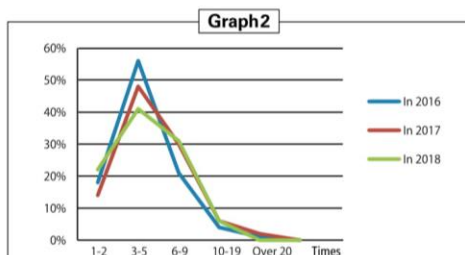
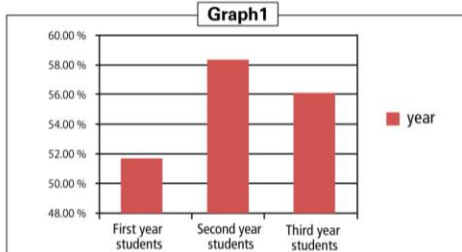
on career education with Schola from 2015."

Also, some interesting points came to light when Soka Gakuen Times analyzed the survey results. First, Soka Senior High School students tend to open their own Schola before their regular exams. One of such students said that she can make a plan for exams better than before (Refer to Graph 1). Moreover, they are apt to share their ways to use Schola. Another student said, "I write the guidance of the founder on a slip and paste it in my Schola after I learn how to use it from my friend."

Furthermore, the surveyed third year students in high school open Schola more often than

when they were younger because they think about their courses and come to realize the importance of making study plans with Schola (Shown in Graph 2). Also, more and more second year high school students come to write their schedules and results of their club activities. Perhaps, it might be because second year students often play central roles in clubs and other activities (See Graph 3).

Overall, Schola enables them to manage their daily lives. The number of people who find Schola essential is increasing. Repeatedly, time is limited. It's up to you whether you spend your time effectively with Schola.



## SCHOOL EVENTS

# Glory day makes Soka students' mind strong

## 栄光の日—学園生の精神を確認する日—

July 17 is the day that inspires Soka students to challenge any difficulties. This day is called "Glory Day." On July 17, 1969, Daisaku Ikeda, the founder of the school, hosted Glory Festival, which the first and second graduating classes attended. Ikeda gave a speech to Soka students wishing that they would be the top leaders at the front-line of society in the 21st century. Since then, July 17 has been a significant day for Soka students in making resolutions

for their future. In 1995, Glory Festival was renamed to Glory Day, when students demonstrate their pledges to be future leaders through dancing, singing and other performances to the founder.

Students not only work really hard to prepare for those performances, but also challenge their own goals such as studying, reading or club activities during the period before Glory Day. In addition, students renew their determinations for

future challenges.

Student groups are the key factors in making Glory Day successful. Soka Senior High School students are categorized into five groups: Choryukai, Eikokai, Shinseikai, Eikokai and Seikyuryo. This time, Soka Gakuen Times takes a closer look at activities that two of these groups do for Glory Day.

Eikokai is the group of girls who live in a boarding house. Eikokai places great importance on dialogue. They discuss various topics from 9 a.m. to 6 p.m. and they talk again at night, talking about what kind of feelings can be included in actions, studying speeches of the founder. They also consult their troubles with other boarding members, which is the strength for Eikokai.

Another one is Choryukai, the group of boys who go to school from their home. Choryukai has

strong solidarity although they come to school from different regions. Their dance is regarded as one of the flagship performances on July 17. One of the core members in this group said, "It was hard for us to have everyone involved, especially to practice together with those who don't like dancing or are poor at it." Another member of this group said, "At the beginning, I was worried, but I was certain that dance was successful on the day."

In other words, Soka Gakuen students learn about their founder and school history through this special day, Glory day. They can also forge strong relationships with each other regardless of age. Therefore, Soka Gakuen keeps the atmosphere where juniors can speak to senior students easily. Also, students realize the importance of working together, as it is a tradition of the school.



Choryukai students perform on a stage, showing what they learned and practiced until Glory Day.

# Jobs behind the scenes are Soka Gakuen's pride

## 学園の下の力持ち『ト・ク・セツ!』

There has been a deep history before Daisaku Ikeda established Soka Gakuen. All Soka Gakuen students know this history. Based on this background, "Glory Day" in July, "Passion Day" in October, "Wisdom Day" in November, and other commemorative events are held. These ceremonies are held for only a day, but preparation for them requires a great deal of time and many people's efforts. It is a group called Tokusetsu (special setup) that carries out preparation behind the scenes.

Tokusetsu is an abbreviation of the special setup department in Japanese. It arranges student's chairs in the gymnasium and the decorations of venues before each ceremony. Tokusetsu is a project initiated by students, and its members are mainly the boys basketball club, the soccer club and so on.

This time, Soka Gakuen Times interviewed its captain and

members regarding what they think is difficult and rewarding of their special setup, which is usually unknown to students. The captain said, "The most difficult type of work we do is tedious; it requires much attention to details. Arranging chairs requires special attention to millimeter-level details. It is thus time-consuming work and we sometimes stay at school until 9 p.m. to finish setting up. However, there is much reward, too. I learned the difficulties of managing many people and felt kindness of the students in this school through my experiences as the captain."

Furthermore, another student said, "At first, I thought this activity was hard and troublesome. One of my seniors pointed out to me that I didn't have to join Tokusetsu if I didn't take it seriously. My attitude toward Tokusetsu has then been changing gradually. As I continued to

do this work, I have come to appreciate the opportunity to help set up for ceremonies where students take pledges to the founder. Thanks to Tokusetsu, I have come to realize the importance of behind-the-scenes activities and appreciate them."

Soka Gakuen Times interviewed Shunichi Kano who is in the first graduating class of Soka Senior High School about the origin of Tokusetsu. The work of arranging the hall like Tokusetsu started from March 15, 1990 when "Ikeda Central Gymnasium" was completed. The members that arranged the hall were male students of sports clubs, those living in dormitories and day students. However, they did not go by the name of Tokusetsu. Having been taken



The members of Tokusetsu are arranging chairs for a ceremony.

over by the juniors, the behind-the-scenes work was named Tokusetsu and has grown into one of the school's traditions. Even though Tokusetsu has been changing over time, one thing never changes. It is the spirit of Tokusetsu to arrange the hall for their seniors, juniors and friends, and for inviting the founder of Soka Gakuen, Ikeda, by themselves. Until now and from now on, they continue to support the core of Soka Gakuen.

## SOKA EDUCATION

# Model U.N. makes future global citizens

模擬国連—尊重と高い知性を兼ね備えた“世界市民”へ—

The Global Citizenship Project, or GCP, is a project that all Soka Senior High School students participate in for three years. This is to train students to be global citizens; leaders having abilities to realize world peace and advancing cultural development. They can learn problems on a global scale, such as hunger and gender equality, for each lesson.

This year, third year students attended Model United Nations and chose COP 21 as a discussion topic. COP 21 — the 21st Conference of the Parties to the United Nations Framework Convention on Climate Change — is a meeting in Paris discussing Global Warming Countermeasures among 195 countries in 2015. The third year students be-

came each countries' representatives and actively discussed countermeasures for global warming.

One of the students who experienced the Model United Nations said, "It was difficult to make resolutions even though it was a model. Therefore, I felt that people who do jobs in the real United Nations were amazing."

Another student talked about his group growth through GCP lessons. "I thought about what I can do for global problems. It made me a better person."

Actually, these classes are organized by students called "GCP leaders." GCP leaders are composed of six or seven students in each class. They take preliminary classes held after school from



Students in class 3-2 had an animated discussion.

teachers and prepare for class.

One of the leaders said, "Preparation of this project was difficult. This is because its rule is complex to explain, furthermore, we have to get a deep understanding of each country because we play a role as the representative of the countries and have discussions." By these preparations, they improve how to explain things clearly for others, understanding

complex subjects through demonstrations. Thus, these advanced meetings function quite well as a key to the successful lessons on GCP.

The importance of GCP lessons is not just about looking abroad; students take a step of solving problems as "a global citizen" through GCP lessons, aiming to construct a peaceful world.

## Unique subject enhances logical expressing ability

論理的な表現力を育む言語技術の授業

Language arts is a unique subject introduced in Soka Senior High School, which educates how to deliver messages to others correctly. Speakers must explain their opinion logically in a global society while Japanese tend to expect listeners to guess what they try to say, rather than say clearly what they mean. The most important ability in this class is how to make logical sentences. By taking this class, it also enables students to improve their English skill because what they want to say will become clearer.

Language arts is systematized as a curriculum to improve speaking, listening, writing and critical thinking skills. The contents are different for each year. In the first year, students learn dialog and explanation skills and in the second year, they learn information analysis and discussion skills. Finally in the third year, students make use of these experiences to do the final project, in which each student has to make a poster presentation about global issues by combining with other subjects.

In the class of language arts, students play a "question and answer game" and learn the basics of lan-

guage arts. In the game, one student asks questions and the other answers them in a pair. They cannot skip a subject of a sentence. This game allows students to notice that a subject is often left out when they speak in Japanese. Not skipping a subject is difficult for Japanese.

Yoshihiro Tsuneoka, one of the teachers teaching language arts, said, "I want students to obtain writing abilities by learning language arts. It is important that they can write an essay logically within a designated word count. When they become a university student, they will have more opportunities to write."

Language arts is useful in the future when, for example, students

write a graduation thesis at university. Also, when they start working after graduating from a university, they will rarely work alone; even those who work from home communicate with others on the internet. Thus, students must have a lot of opportunities to communicate with a variety of people in society. Students who take the language arts class will be able to use the acquired skills.

One student who took this class said, "I have improved my reading ability gradually. Especially, I was able to build good structure of paragraphs. In learning paragraphs, I learned how to understand the part an author wants to stress on, and what a writer wants to say. This ability allowed me to

get higher scores on many exams, such as Eiken, TOEFL and SAT. Therefore, reading skills help me improve my Japanese and English skills."

Why don't you learn language arts with us?



Students work on a worksheet that improves logical expression in cooperation with each other.

### SOKA GAKUEN TIMES

The Soka Gakuen Times was created by a group of 41 volunteer first-, second- and third-year senior high school students, and published by Soka Senior High School in Kodaira City, Tokyo, in cooperation with The Japan Times, Ltd.

Publisher: Seichiro Shioda, Principal, Soka Senior High School

Project Supervisors: Suguru Matsumoto, Takanobu Tsuji and Masayoshi Ishino (Soka Gakuen)

Project Coordinators: Kenichi Koyama and Hiroshi Mishima (The Japan Times)

Contributing Editors: Sayuri Daimon, Toshiyuki Takahashi, Minoru Matsutani, Dana Macalanda, Jasmin Pendon and Yosuke Naito (The Japan Times)

Editor: Emi Hashimoto

Vice Editor: Teruaki Sasaki

Staff Writers: Emi Ikeda, Masayuki Uchida, Honoka Kameo, Mone Tagami, Yukako Abe, Momoka Saito, Ryo Isogai, Yuna Sato, Mana Mikuriya, Kobayashi Yui, Riko Ichikawa, Mikoto Kikuchi, Hiroki Fukushima, Kana Sato, Aika Takahashi, Takako Fujii, Daiki Mai, Yoko Suzuki, Kuki Tatezaki, Honoka Ishii, Urara Sagi, Akane Miyamoto, Hiroaki Kamiguri, Miwa Nagaiishi, Yuma Yamamoto, Yuki Nakanowatari, Himeno Gokan, Yuki Suzuki, Yui Adachi, Minako Yamanauchi, Keiko Nakahira, Sachie Ueda, Naonori Hara, Sachie Ueda, Junko Haga, Yuda Sasaki, Miyuki Sato, Marin Arai, Mayumi Sakamoto

Contact: 2-1 Takanodai, Kodaira-Shi, Tokyo

〒 187-0024 Japan

Web site: <http://www.soka.ed.jp>

平成 29 年度指定 スーパーグローバルハイスクール 第 3 年次

## 研究報告書

平成 31 年 3 月 30 日

発行 学校法人 創価学園 創価高等学校

〒187-0024 東京都小平市たかの台 2-1

電話 : 042-342-2611(代表)

印刷 株式会社 コモダ印刷

〒185-0002 東京都国分寺市東戸倉 2-36-12

電話 : 042-321-0721



**SOKA Senior High School**